生活構造からみる地域施設の利用構造に関する研究

－余暇を過ごす場所に着目して－

平成19年度

三重大学大学院工学研究科
博士前期課程 建築学専攻

矢　部　　亮

平成19年度

修士論文

生活構造からみる地域施設の利用構造に関する研究
－余暇を過ごす場所に着目して－

三重大学大学院
受
20. 2. 5
付
工学研究科

指導教員　高井宏之　准教授
木下誠一　助教

三重大学大学院工学研究科
建築学専攻

矢部亮
Ryo YABE

第１章　研究の背景　p.1
1-1　はじめに　p. 1
1-2　生活構造論の概念　p. 2
1-3　社会調査にみる余暇時間の実態　p. 4
1-3-1　余暇時間の増加傾向
1-3-2　１日の時間配分
1-3-3　属性で異なる余暇時間
1-3-4　余暇時間に行う行動
1-3-5　余暇時間に一緒に過ごす相手
1-3-6　多角的視点でみる必要性
1-4　余暇活動の定義　p. 11
1-5　余暇活動要求と自宅以外の場所の需要　p. 12
1-5-1　潜在的な余暇活動要求
1-5-2　余暇を過ごす場所
1-5-3　余暇を過ごす場所の選択パターン
1-5-4　地域施設整備の必要性

第２章　研究の目的と方法　p.16
2-1　研究の目的　p. 16
2-2　研究の方法　p. 16
2-3　研究の位置づけ　p. 18
2-3-1　建築計画学における位置づけ
2-3-2　今井研究室における位置づけ
2-4　調査概要　p. 21
2-4-1　調査対象地域の選定
2-4-2　調査手法の概要
2-5　分析の視点　p. 23
2-5-1　ライフサイクルの設定
2-5-2　ライフスタイルタイプの設定
2-6　用語の定義　p. 28

第３章　生涯を通じての個人的な余暇活動実態　p.29
3-1　LC にみる生活背景と活動要求　p. 29
3-1-1　各段階の生活背景
3-1-2　各段階の充実感と潜在的活動要求
3-2　LC にみる余暇を過ごす場所の選択特性　p. 35
3-2-1　各段階の余暇を過ごす場所の選択パターン
3-2-2　各段階の余暇を過ごす場所の選択割合
3-2-3　各段階の利用する地域施設の内訳
3-2-4　LC にみる生活構造の変化
3-3　LC にみる地域施設の利用形態　p. 46
3-3-1　施設種別の地域施設の利用形態
3-3-2　各段階の地域施設の利用形態
3-3-3　LC にみる地域施設の利用形態の特徴
3-4　LS にみる地域施設の利用構造　p. 61

第４章　生活様式に応じた余暇の施設利用　p.65
4-1　LS にみる生活背景と活動要求　p. 67
4-1-1　各タイプの生活背景
4-1-2　各タイプの潜在的活動要求
4-2　LS にみる余暇を過ごす場所の選択特性　p. 70
4-2-1　各タイプの余暇を過ごす場所の選択パターン
4-2-2　各タイプの余暇を過ごす場所の選択割合
4-2-3　各タイプの利用する地域施設の内訳
4-2-4　LS にみる生活構造の変化
4-3　LS にみる地域施設の利用形態　p. 76
4-3-1　各タイプの地域施設の利用形態
4-3-2　LS にみる地域施設の利用形態の特徴
4-4　LS にみる地域施設の利用構造　p. 82

第５章　同伴形態にみる余暇の施設利用　p.84
5-1　同伴形態別の地域住民の構成割合　p. 85
5-2　同伴形態にみる余暇を過ごす場所の選択特性　p. 87
5-3　同伴形態にみる地域施設の利用形態　p. 89
5-3-1　同伴形態別の利用形態
5-3-2　地域施設への要求
5-4　余暇を過ごす場所の整備要件　p. 98

第６章　組織活動実績にみる地域施設の必要性　p.106
6-1　組織活動の参加実態　p. 106
6-1-1　組織活動団体の概要
6-1-2　LC・LS にみる参加実態
6-2　組織活動に対する活動意識　p. 112
6-2-1　団体として重視すること
6-2-2　メンバーの活動意識
6-3　団体の結成と展開の過程　p. 115
6-3-1　団体の結成契機
6-3-2　団体のメンバー増減
6-3-3　メンバーの参入契機
6-3-4　団体の結成と展開
6-4　団体活動で利用する地域施設　p. 120
6-4-1　活動の目的と利用する施設の実態
6-4-2　拠点施設の有無と利用する施設の実態
6-4-3　施設に対する不満と要望
6-5　活動場所としての地域施設の必要性　p. 129

第７章　組織活動への参加促進要件
7-1　参加有無にみる余暇を過ごす場所の相違　p.130　p. 130
7-2　公共施設利用と組織活動の関連　p. 133
7-3　組織活動の参加を阻害する要因　p. 135
7-3-1　活動を阻害する要因
7-3-2　LC・LS にみる活動を阻害する要因
7-4　組織活動の促進要件　p. 140

第８章　余暇を過ごす場所としての地域施設　p.141
8-1　前章までのまとめ　P. 141
8-2　余暇を過ごす場所としての地域施設の必要性　P. 142
8-3　地域施設の整備方針　P. 143
8-3-1　余暇活動を行う地域施設
8-3-2　組織活動を促進するための施設整備
8-4　余暇を過ごす場所としての地域公共施設整備　P. 146
8-5　今後の課題　P. 150

付録
おわりに
謝辞
参考文献
アンケート調査票
修士論文梗概

第１章　研究の背景

1-1　はじめに
1-2　生活構造論の概念
1-3　社会調査にみる余暇時間の実態
1-4　余暇活動の定義
1-5　余暇活動要求と
　　自宅以外の場所の需要

1-1　はじめに

人の生活は大きく分けて［労働］［休養］［余暇］に分類される（生活構造論）。

そのうち、「余暇」に該当する時間は近年増大されているが、それがイコール人の幸せ、社会の福祉につながるとは言い難い面がある。

『余暇は人間の現実の第２次的要素ではないし、もはやそうではなくなっている。自由時間の使い方は、人生の試金石である（J.フラスチェ）』は、如何に余暇の時間を過ごすかが、人の生活の在り方への本質的認識への課題であることを提示しているといえよう。

これは同時に、余暇時間を過ごす受け皿となる場所への課題でもある。

余暇時間は生活のなかで最も自己裁量性が高く、趣味や娯楽を始めとした、人々が豊かな時間を過ごす事項の多くがここに分類される。

余暇時間を過ごす場所としては、自宅や職場・学校が有力と考えられるが、それらと同様に地域にある様々な施設もその役割を担っているであろう。

また、余暇に行う活動（余暇活動）は様々であるが、本研究ではその場所としての、地域に存在する施設群の在り方に着目したい。

一方、余暇活動を行う人々はそれぞれが異なる属性をもち、施設の使い方、ニーズも一様ではない。そのため、人生過程（ライフサイクル）や、生活様式（ライフスタイル）といった多角的な観点から余暇を過ごす場所としての地域施設の利用構造を捉える必要がある。

本研究はそれらの観点から、地域の幅広い人々の余暇活動を行う場への要求を整理し、それぞれに対しての受け皿としての地域施設の在り方を探るものである。

本章の以降の節では、以上の確認及び余暇活動の定義を行う。

1-2　生活構造論の概念

次に、生活構造論の代表的概念の紹介と、本研究の位置づけを確認しておく。

日本における『生活構造』の概念はきわめて多様であるが、一般には次の三つの領域、[1] 社会政策的領域、[2] 生活体系論的領域、[3] 都市社会学的領域、に分類ができる。

[1] 社会政策的領域

この領域における『生活構造』概念の成立は最も古い。名付け親ともいうべき篭山京（1943）は、1日24時間の生活が構造をなすとし、1日を［労働］［休養］［余暇］の3つの時間体系に分類した。

図 1-1 は篭山がその著『国民生活の構造』で示した“生活構造の基本状態”であり、生活の3区分とエネルギーの消費、補給の関係から3つの基本状態及びその定式化が提示されている。端的にいうと、消費と補給の［労働］［休養］［余暇］の総和をそれぞれ（A+B+C）及び（a+b+c）とし、消費の総和が補給の総和を下回る状態（第三基本状態と呼ばれる）を望ましいとする、3者の関係の適正化を提唱している。

[2] 生活体系論的領域

この領域においては、副田義也（1971）の生活構造の循環式というアイデアがある。生活を生命の生産であるとし、「生命の生産→生命の消費→生活手段の生産→生活手段の消費→再び、生命の生産→……」という循環式を『生活構造』と規定した。

図 1-2 は副田による“生活構造－あらゆる社会形態に関わらない場合”として提示された循環式モデルである。この循環式を応用することで、歴史と社会を越えて不変の生活構造を示しているとされる。

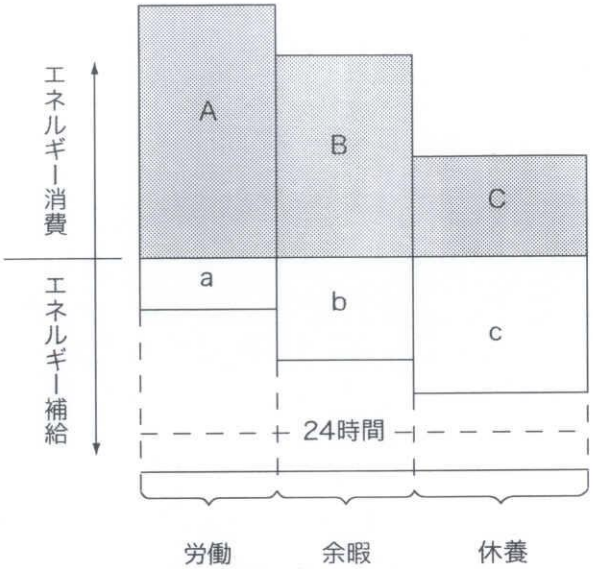


図 1-1　生活構造の基本状態（篭山モデル）

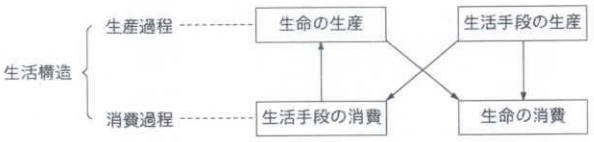


図 1-2　生活構造の循環式（副田モデル）

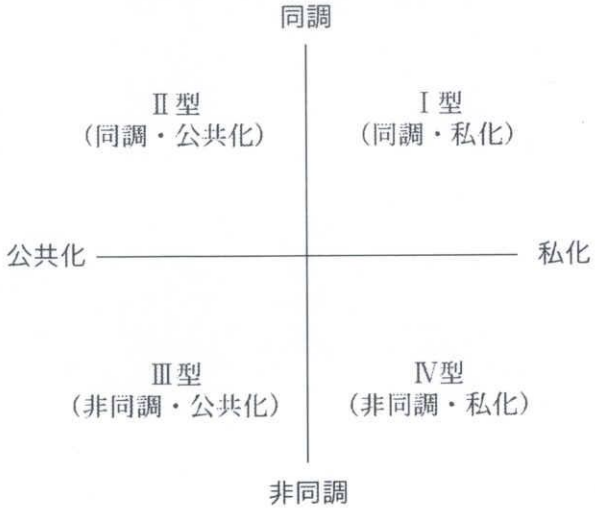


図 1-3　生活主体のあり方類型（鈴木モデル）

［3］都市社会学的領域

この領域における鈴木広（1976）は、個人や家族を生活主体に位置づけ、「生活主体が文化体系および社会構造に接する、相対的に持続的なパターンである」としている。

図 1-3 は鈴木による標準的な生活主体のあり方に関する４つの類型モデルである。鈴木は「（生活主体、すなわち個人は）私生活場面に自閉して生活の“私化（privatization）”を志向するか、逆に私生活を社会化していく方向に目標の焦点を設定し、主体自身の“社会化（totalization）”を志向するか、という志向の分界がみられる」とし、標準的な生活主体のあり方に関する４つの類型を設定している。

参考までに図中の４類型は以下のように性格づけられている。

Ⅰ型（同調・私化）
：典型的な私生活主義者
Ⅱ型（同調・公共化）
：上層の土着者を典型とし、体制維持的な積極的なオピニオン・リーダー層で、伝統文化や地域主義の個別価値をも破壊する過同調に転じる可能性をもつもの
Ⅲ型（非同調・公共化）
：自閉的な欲求不満者で、下位諸階層であり、アンビバレンドな意識をもち、内容的に“私的”次元に終始する。
Ⅳ型（非同調・私化）
：対抗行動派で、対抗イデオロギーによって生活を再編しようとする。

本研究は主に、鈴木らの提唱する［3］都市社会学的領域の視点に立脚している。

つまり、生活主体である個人を基本単位としながら、余暇の生活実態を把握しようという立場である。その過程として、個人を多角的な観点から捉える。

1-3　社会調査にみる余暇時間の実態

ここでは『国民生活時間調査』と『社会生活基本調査』から生活時間の変化、特に余暇時間の変化を捉える。前述の［労働］［休養］［余暇］はそれぞれの調査で別の呼称をつけられているが、内容としては同様のものとみなす（図 1-4）。

また、それぞれの定義については『国民生活時間調査』に準拠し、以下に示すものとする。

［休養］

個体を維持向上させるために必要不可欠性の高い生活行為。

『国民生活時間調査』：必需行動

『社会生活基本調査』：１次行動

［労働］

家庭や社会を維持向上させるために行う、義務性・拘束性の高い生活行為。

『国民生活時間調査』：拘束行動

『社会生活基本調査』：２次行動

［余暇］

人間性を維持向上させるために行う、自己裁量性の高い生活行為。

『国民生活時間調査』：自由行動

『社会生活基本調査』：３次行動

図 1-4　生活構造の３要素

1-3-1　余暇時間の増加傾向

図1-5は［労働］［休養］［余暇］にかける時間の時代的な推移である（『国民生活時間調査』より）。

［余暇］に該当する「自由行動」は、国民全体でみると［労働］に該当する「拘束時間」と反比例の関係で長期的に増加傾向を示している。

［休養］に該当する「必需行動」は、1980年以降、概ね各曜日とも緩やかな減少傾向を示している（但し、2005年には若干増加している）。

特に［余暇］に該当する「自由行動」に着目すると、2000年までは一定の増加傾向を示している（2005年は「必需行動」が増加したため、若干減少している）。

これらを概観すると、1995年頃までは余暇時間が増え続けてきたが、ここ15年程度の間で、ある程度増加に歯止めがかかった格好である。

言い換えると、現在のバランスが今後も維持されると考えることができ、現在の実態に応じて余暇時間の過ごし方を捉えることが中長期的な余暇生活論に結びつくと考えられる。

1-3-2　1日の時間配分

前項では［休養］［労働］［余暇］にかける時間の長期的な推移をみたが、ここでは1日の時間配分の違いを曜日別にみる。

図1-6は、『国民生活時間調査』および『社会生活基本調査』から抜粋した、過去15年ないし20年間の1日の時間配分である。

特に［余暇］にかける時間に着目すると、曜日による割合は、日曜日＞土曜日＞平日となっている。当然であるが、休日ほど余暇時間は多くなっている。

また、平日でもある程度の余暇時間がもたれていることが分かる。［余暇］にかける時間は生活の中で欠かすことのできないものであり、相対的に余暇時間の多い休日だけでなく、平日における余暇時間を如何に充実して過ごすかを考える必要がある。

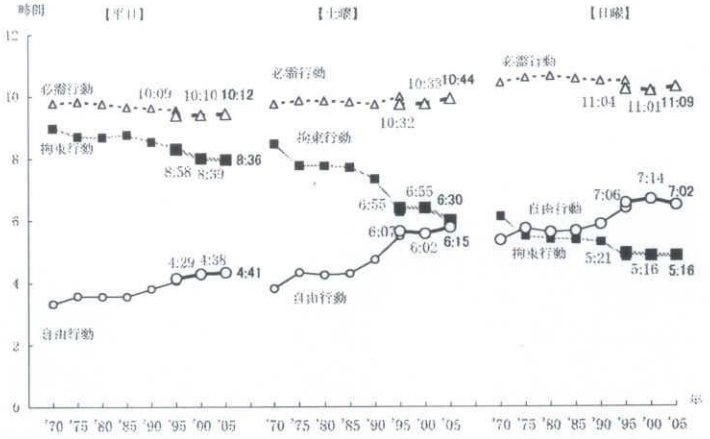


図 1-5　余暇時間の増加傾向

出典：『国民生活時間調査報告書』，NHK 放送文化研究所，2006 年

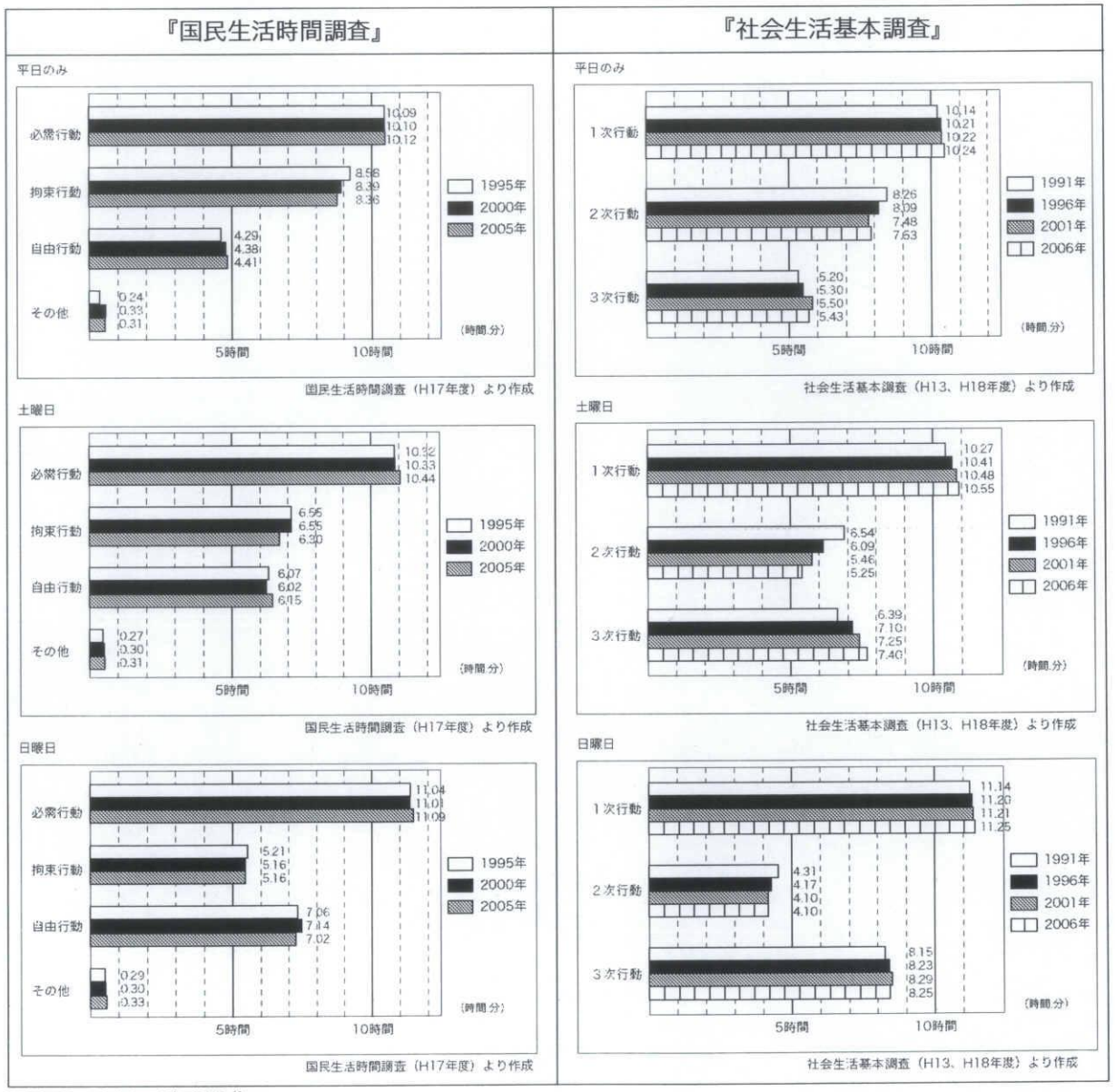


図 1-6　１日の時間配分

1-3-3　属性で異なる余暇時間

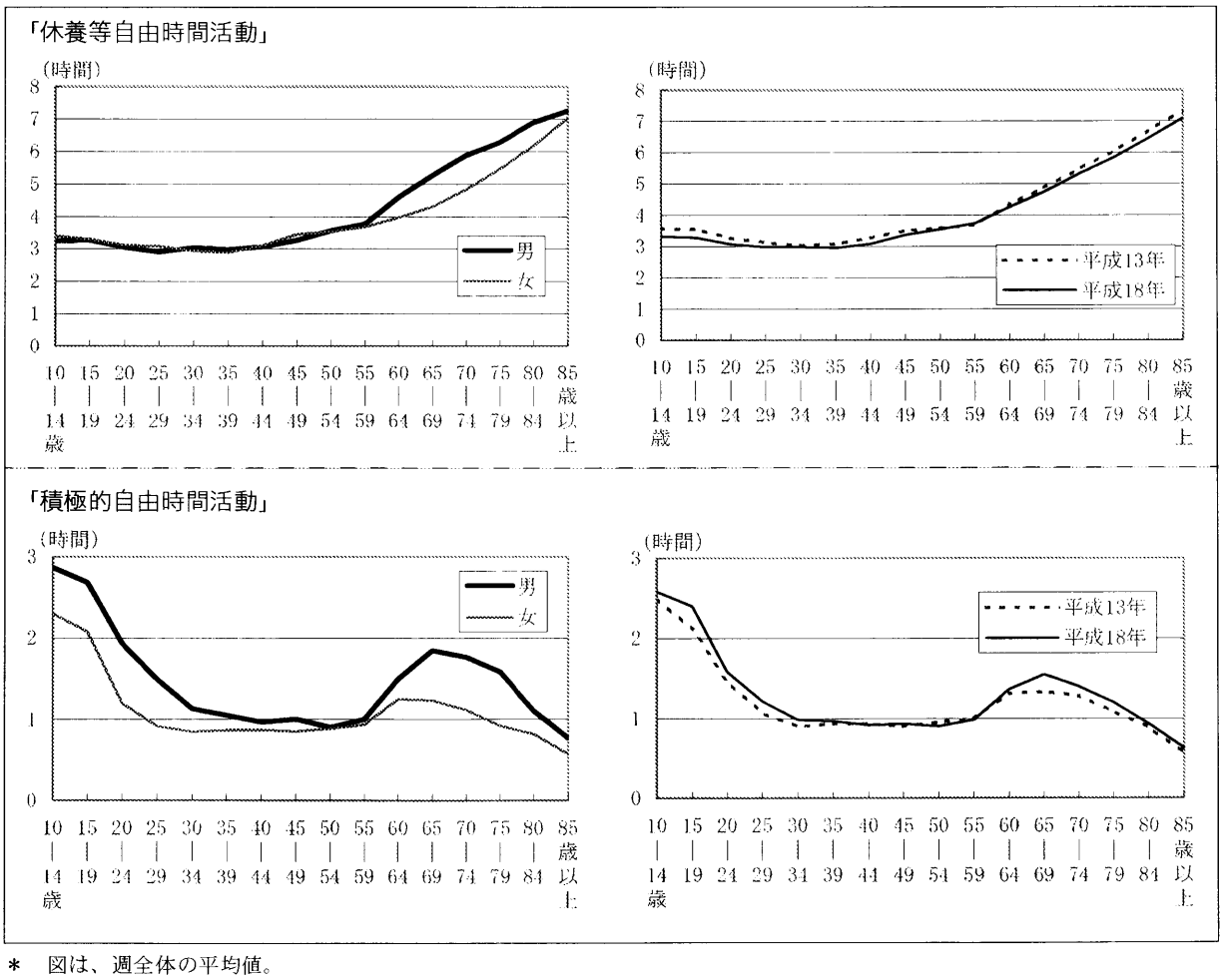
前項では１日の［休養］［労働］［余暇］の時間配分をみたが、ここでは属性による相違をみる。

まず［年齢別］と［性別］による相違をみる。

図 1-7 は『社会生活基本調査』から抜粋した年齢階級別・性別の「休養等自由時間活動（上図）」と「積極的自由時間活動（下図）」である（いづれも【余暇】に該当）。内訳については図 1-4 及び表 1-1（後述）参照。

「休養等自由時間活動」は男女・年齢階級別にみると、60 歳未満では男女に大きな差は見られない。しかし、60 歳以上 85 歳未満の年齢階級では男性が長く、女性と大きな差が見られる。

「積極的自由時間活動」は男女別にみると、どの年齢も男性の方が長い。また、年齢別にみると、男性は 40 ～ 44 歳、50~54 歳及び 85 歳以上、女性は 25 歳以上 60 歳未満及び 75 歳以上の年齢階級で１時間未満と短くなっている。



＊　図は、週全体の平均値。
＊　「休養等自由時間活動」
　　:「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」及び「休養・くつろぎ」
　　「積極的自由時間活動」
　　:「学習・研究（学業以外）」「趣味・娯楽」「スポーツ」及び「ボランティア活動・社会参加活動」

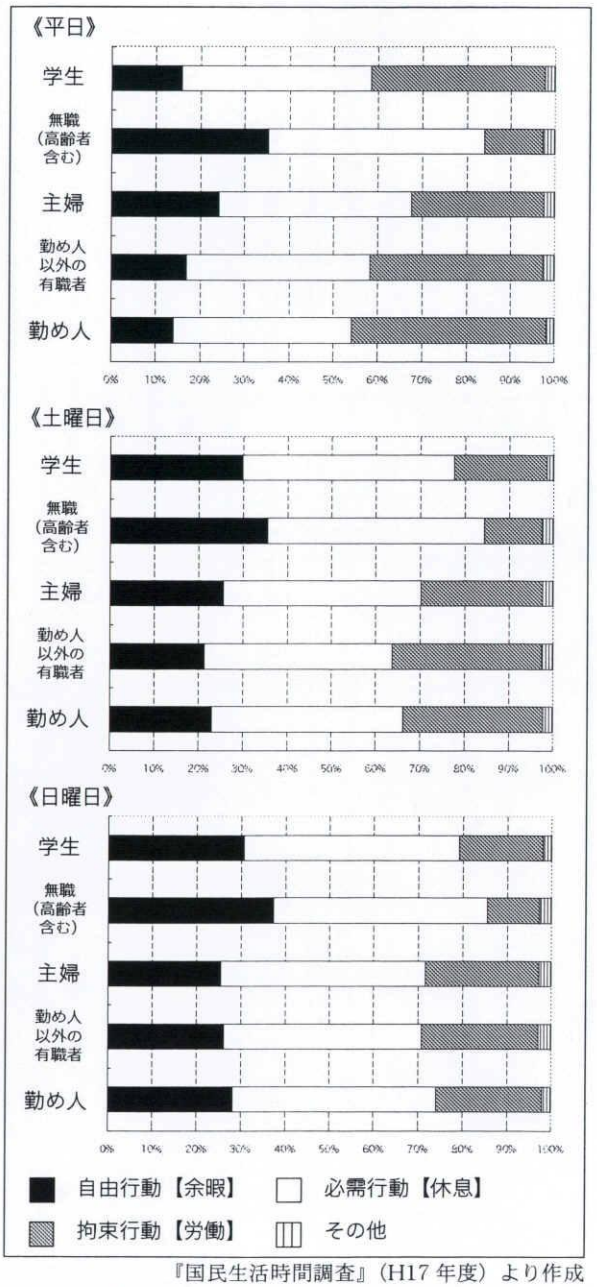
出典：『社会生活基本調査』, http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/index.htm , 2006 年

図 1-7　性別・年齢にみる余暇時間の相違

次に［職業］による相違をみる。図 1-8 は『国民生活時間調査』から作成した職業別の生活時間の配分（曜日別）である。

「勤め人」は、平日、土曜、日曜の違いが明確で、土曜、日曜になるほど「拘束時間」が短くなり、「自由時間」が長くなる。「学生」及び「勤め人以外の有職者」も、「勤め人」ほどではないが同様の傾向がみられる。一方、「主婦」と「無職」は、平日、土曜、日曜の差があまり大きくない。

これらから、当然であるが余暇時間の長さは属性、ひいては個人がおかれる環境によって異なることが確認された。



『国民生活時間調査』（H17 年度）より作成

図 1-8　職業にみる余暇時間の相違

1-3-4　余暇時間に行う行動

次に［余暇］に行う行動の内訳をみる。

表 1-1 は『社会生活基本調査（2006)』から抜粋した、行動の種類別生活時間（男女・週全体）である。

男性の方が女性よりも若干「３次行動」にかける総時間は多い（「趣味・娯楽」にかける時間が男性の方が 10 ～ 15 分程度多く、それが総時間に差を与えている)。

とはいえ、男女とも「趣味・娯楽」以外にかける時間には大きな差はみられず、『休養等自由時間活動』と『積極的自由時間活動』が大半を占めている。特に『休養等自由時間活動』である「テレビ・ラジオ・新聞・雑誌」と「休養・くつろぎ」は余暇時間の中で特に多く行われている行動である。

1-3-5　余暇時間に一緒に過ごす相手

ここでは余暇時間に誰と過ごしているのかをみる。

表 1-2 は『社会生活基本調査（2006)』から作成した、行動時間別に一緒に過ごす相手とその時間配分である（表中の時間は全体の平均時間であるが、各属性で必ずしも合計が 24 時間とはなっていない)。

一緒に過ごす相手は、「ひとり」「家族」「その他」が同程度であり、一緒に過ごす相手が多様であることが窺える（「学校・職場の人」も少なくない)。その傾向は性別でみても大きな違いはない。

但し、女性は職の有無で大きな違いがみられる。特に「無職女性」は［余暇］を「ひとり」と「家族」で過ごしやすい。

表 1-1　余暇時間に行う行動

（時間. 分）

	総　数			男			女		
	平成13年	平成18年	増減	平成13年	平成18年	増減	平成13年	平成18年	増減
1 次活動	10.36	10.37	0.01	10.30	10.31	0.01	10.42	10.42	0.00
睡眠	7.45	7.42	-0.03	7.52	7.49	-0.03	7.38	7.35	-0.03
身の回りの用事	1.13	1.15	0.02	1.02	1.06	0.04	1.23	1.25	0.02
食事	1.38	1.39	0.01	1.36	1.36	0.00	1.41	1.42	0.01
2 次活動	6.56	7.00	0.04	6.51	6.58	0.07	7.01	7.03	0.02
通勤・通学	0.31	0.31	0.00	0.41	0.41	0.00	0.22	0.22	0.00
仕事	3.39	3.44	0.05	4.56	4.59	0.03	2.27	2.32	0.05
学業	0.40	0.37	-0.03	0.43	0.40	-0.03	0.37	0.35	-0.02
家事	1.25	1.27	0.02	0.13	0.17	0.04	2.34	2.34	0.00
介護・看護	0.03	0.03	0.00	0.01	0.02	0.01	0.05	0.05	0.00
育児	0.13	0.14	0.01	0.03	0.04	0.01	0.22	0.22	0.00
買い物	0.24	0.24	0.00	0.14	0.15	0.01	0.33	0.34	0.01
3 次活動	6.28	6.23	-0.05	6.39	6.31	-0.08	6.17	6.15	-0.02
移動（通勤・通学を除く）	0.32	0.30	-0.02	0.32	0.29	-0.03	0.33	0.32	-0.01
テレビ・ラジオ・新聞・雑誌	2.32	2.24	-0.08	2.38	2.28	-0.10	2.26	2.21	-0.05
休養・くつろぎ	1.20	1.25	0.05	1.19	1.23	0.04	1.21	1.26	0.05
学習・研究（学業以外）	0.14	0.12	-0.02	0.14	0.13	-0.01	0.13	0.12	-0.01
趣味・娯楽	0.42	0.45	0.03	0.50	0.51	0.01	0.35	0.38	0.03
スポーツ	0.13	0.15	0.02	0.16	0.19	0.03	0.10	0.11	0.01
ボランティア活動・社会参加活動	0.04	0.05	0.01	0.04	0.05	0.01	0.05	0.05	0.00
交際・付き合い	0.26	0.22	-0.04	0.25	0.20	-0.05	0.27	0.24	-0.03
受診・療養	0.08	0.09	0.01	0.07	0.07	0.00	0.10	0.10	0.00
その他	0.16	0.16	0.00	0.14	0.14	0.00	0.18	0.17	-0.01
（再掲）									
家事関連 1)	2.05	2.08	0.03	0.31	0.38	0.07	3.34	3.35	0.01
休養等自由時間活動 2)	3.52	3.49	-0.03	3.57	3.51	-0.06	3.47	3.47	0.00
積極的自由時間活動 3)	1.13	1.17	0.04	1.24	1.28	0.04	1.03	1.06	0.03

＊　表中の行動にかける時間は、週全体の平均値。

＊　表下部の「1）家事関連」「2）休養等自由時間活動」「3）積極的自由時間活動」はそれぞれ、

1) 家事，介護・看護，育児及び買い物

2) テレビ・ラジオ・新聞・雑誌及び休養・くつろぎ

3) 学習・研究（学業以外），趣味・娯楽，スポーツ及びボランティア活動・社会参加活動

出典：『社会生活基本調査』，http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/index.htm ，2006 年

さらに65歳以上の人の生活は特徴的であり、同調査から抜粋した詳細なデータを下部に示す。

65歳以上の人は睡眠を除く生活時間に占める割合として「ひとり」と「家族」がそれぞれ４割以上である。65歳以上の多くの人が職をもたないので「学校・職場の人」が少ないのは当然であるが、それにしても「ひとり」が多い。

その理由は65歳以上の単身者によることが分かる。高齢単身者は睡眠を除く生活時間の７割以上をひとりで過ごしており、１日の大半をひとりで過ごしていることになる。

一緒に過ごす相手によって余暇時間の過ごし方も変わるのは必然と考えられるため、余暇施設整備にためには考慮すべき事項である。

1-3-6　多角的視点でみる必要性

以上から、属性による余暇時間の量、行動等の相違がみられた。これらは余暇活動自体、さらに余暇活動を行う場への要求にもつながると考えられ、幅広い属性をもつ地域住民の余暇活動を捉えるためには、各個人がおかれる環境別に考察を行う必要が再確認された。

よって本研究では、年齢・性別・職業等からみる［ライフサイクル］と、行動に影響するであろう個人の価値観を反映した［ライフスタイル］を視点とし、各個人の余暇を考察する（両視点の詳細は後述）。

表 1-2　行動時間別に一緒に過ごす相手

分類	サンプル数	1次行動				2次行動				3次行動			
		ひとり	家族	学校・職場の人	その他の人	ひとり	家族	学校・職場の人	その他の人	ひとり	家族	学校・職場の人	その他の人
総数	351,202	8.41	1.53	0.46	1.10	2.45	3.13	7.48	2.47	3.43	3.48	2.06	3.29
男性総数	166,519	8.40	1.47	0.47	1.08	2.31	2.24	8.21	3.19	3.53	4.00	2.09	3.44
女性総数	184,683	8.43	1.59	0.46	1.11	2.58	3.34	7.03	2.25	3.33	3.38	2.02	3.19
有職女性	92,417	8.22	1.50	0.46	1.12	2.47	3.22	7.13	2.50	2.46	3.03	1.24	3.13
無職女性	82,490	8.04	2.10	0.49	1.11	3.18	3.58	5.53	1.51	4.25	4.11	3.03	3.23
65歳以上	89,539	9.41	2.20	0.48	1.15	3.12	3.09	6.08	2.18	4.53	4.54	1.22	3.34

65歳以上の層にフォーカスすると・・・　　＊　すべて平均時間。表中の表記は（時間．分）

	時間（時間．分）					睡眠を除く生活時間に占める割合（%）			
	総数	一人で	家族	学校・職場の人	その他の人	一人で	家族	学校・職場の人	その他の人
65歳以上	15.36	6.33	6.47	0.31	1.17	42.0	43.5	3.3	8.2
うち単身世帯	15.40	12.02	0.50	0.25	1.42	76.8	5.3	2.7	10.9
（子の有無・居住地）									
子はいない	15.53	12.47	0.09	0.19	2.00	80.5	0.9	2.0	12.6
子がいる	15.37	11.50	1.01	0.27	1.38	75.8	6.5	2.9	10.5
同一敷地内	15.20	10.28	2.28	0.30	1.28	68.3	16.1	3.3	9.6
近所	15.38	11.36	1.19	0.32	1.19	74.2	8.4	3.4	8.4
同一市町村	15.41	12.08	0.50	0.29	1.38	77.4	5.3	3.1	10.4
他の地域	15.39	12.15	0.34	0.22	1.45	78.3	3.6	2.3	11.2

出典：『社会生活基本調査』, http://www.stat.go.jp/data/shakai/2006/index.htm ，2006年

1-4　余暇活動の定義

松原治郎によると、余暇活動は以下のように集約できる。

・自由時間の活動
・生計のために必要な金銭を生まない活動
・必要（必需）性や義務を伴わない活動
・自らの満足を得るために自由になされる活動であり、その活動を行うこと自体が目的となるもの
・すすんで自己拡充や創造力の発揮を随意に行うことを可能にさせるもの

前節にて社会調査による余暇に行う行動をみたが、本研究は地域施設における余暇活動を対象とするため、上記を受けて余暇活動の定義と枠組を以下のように設定する。

[余暇活動の定義]

本研究が地域施設における余暇活動に着目していることから、以下のように定義する。行われる個別具体的に行う活動の詳細は多種多様でありアンケート調査では把握できていないが、地域住民が“自由な時間に行っている”ものである。

余暇活動とは、自宅での休養・団らん、及び自宅で一人で行う趣味活動を除く、地域住民が自由な時間に行う全ての活動。

[余暇活動の枠組]

以上のように余暇活動を定義したが、これはさらに２つに大別できる。
つまり、個人的に行う余暇活動と組織化して行う余暇活動であるが、もちろん両者は相互独立ではなく、図 1-9 のように整理できる。
・個人的余暇活動は人の数だけ存在する、余暇活動のベースである。
・組織活動はある目的・意識を共有する団体(association) であり、個人活動と両立して（もしくは、それ自体として）行われる。

それぞれに対して、個人の余暇活動に関する調査（調査１）と、組織活動団体に関する調査（調査２）を行っている（団体としての母体をもっているもの）。

但し、上記の性格上、個人的な余暇活動には組織活動自体が含まれる場合もあるが、その厳密な分類は困難なため、調査１にて得られた個人が行う活動を個人的余暇活動、調査２にて得られた団体として行う活動を組織活動としている。

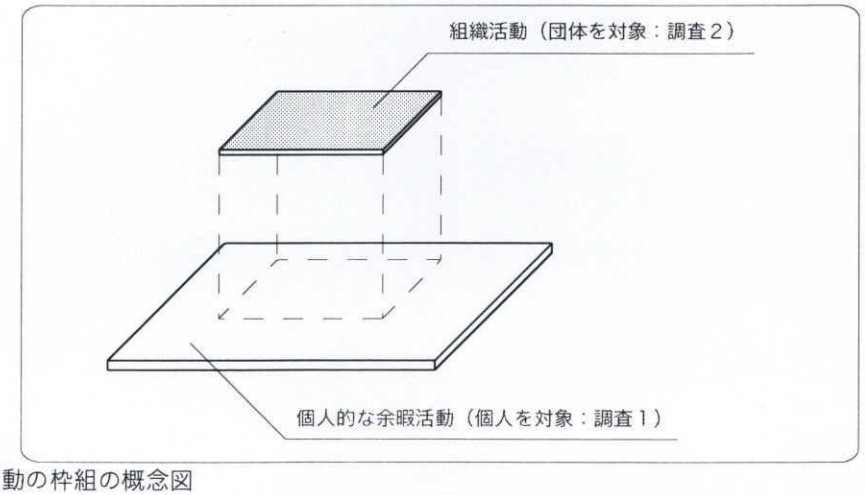


図 1-9　余暇活動の枠組の概念図

1-5　余暇活動要求と自宅以外の場所の需要

人々が潜在的にもつ余暇活動への参加要求と地域住民が余暇活動を行う場所（余暇を過ごす場所）から、地域施設の需要を確認する。

ここでは、本研究で行った調査により得られたデータを本論に先んじて用いる（調査概要は第２章にて後述：調査１に該当）。

1-5-1　潜在的な余暇活動要求

まず、人々の生活における余暇活動の位置づけをみる。

人々が生活に充実する行動を10種挙げ、地域住民に最大２種回答してもらった。個人の回答パターンから、生活を充実するための行動から人々がもつ要求を探る（充実感の内訳の分析は本論にて行う）。

回答の選択肢のうち、「仕事・勉強」「家事・育児」以外を余暇時間に行う選択性（自己裁量性）が高い行動であり『選択行動』とする。

以上を図1-10のように整理し、選択行動の有無と目的意識の高低により、「非選択行動のみ」、「選択行動あり／目的意識低のみ」「選択行動あり／目的意識高＋低」「選択行動あり／目的意識高のみ」と「その他のみ」に分類する。ここでの高い目的意識をもった行動とは、既に顕在化している活動（団体活動等）のほかに、潜在的に有している要求（友人との雑談等）が挙げられるが、非選択行動と違い、自宅以外の場所で行うことが多い内容である。従って、生活を充実する為には、個人の行う活動の受け皿となる場所が必要となる。

表1-3をみると、地区によらず「非選択行動のみ」の割合は低い。９割以上の人が、なんらかの選択行動を行っている。生活を充実するために、余暇に選択制のある行動をしているのだ。さらに、７割以上の人が目的意識の高い選択行動を行っている。

逆に言うと、人が生活を充実するためには、余暇に目的意識の高い選択行動を行うことが必要といえる。これは地区によらず、地域住民が元来的に有しているといえ、余暇活動を行うことが生活を充実するためには重要であることを示している。

行動の種類	目的意識	充実を感じるとき
非選択行動	-	1. 仕事・勉強
		2. 家事・育児
選択行動	低い	3. ひとりで休養
		4. 家族と団らん・旅行
	高い	5. 友人と雑談・旅行
		6. 趣味
		7. 習い事
		8. グループ・団体活動
		9. 自主的な勉強
10. その他		

生活の充実度の回答パターン	
①非選択重視	1+2
②非選択必要	1or2（+10）
③両方必要／低	1or2+3or4
④両方必要／高	1or2+5-9
⑤選択必要／低	3or4（+10）
⑥選択重視／低	3+4
⑦選択重視／高＋低	3or4+5~9
⑧選択必要／高	5~9（+10）
⑨選択重視／高	5~9+5~9
⑩その他	10

分類			回答パターン
非選択行動のみ			①②
選択行動あり	目的意識低のみ		③⑤⑥
	目的意識高あり	目的意識高＋低	⑦
		目的意識高のみ	④⑧⑨
その他			⑩

[潜在的な余暇活動要求の整理]

図1-10　日常の充実感の回答パターンによる潜在的な余暇活動要求の整理

表1-3　潜在的な余暇活動要求

		津		四日市		志摩		大紀		総計	
総数		1245		1148		579		350		3322	
活動要求不明		105		78		39		28		250	
回答数		1140		1070		540		322		3072	
非選択行動のみ（①②）		4%		3%		3%		4%		4%	
目的意識低のみ（③⑤⑥）		21%		25%		22%		23%		23%	
目的高必要	高＋低（⑦）	34%	74%	35%	70%	33%	74%	24%	70%	33%	72%
	高のみ（④⑧⑨）	39%		36%		41%		46%		39%	
選択行動あり		95%		95%		96%		93%		95%	
その他のみ		1%		1%		1%		3%		1%	
総計		100%		100%		100%		100%		100%	

1-5　自宅以外の場所の需要

1-5-2　余暇を過ごす場所

次に、地域住民が属性によらず、どのような場所で余暇時間を過ごしているかを概観する。

表1-4は「あなたは生活の中で自由な時間をどのような場所で過ごしていますか？」という問に対する選択結果である。表中の１５種類の選択肢のうち、一人当り最大４件回答してもらっている（調査１より得られた個人票3,322名を対象としている）。

余暇時間を過ごす場所として、当然多いのが「自宅」であるが（89%）、逆に捉えると１割程度の人は余暇時間を「自宅」で過ごしていない。自宅で有意義に過ごせないとも解釈でき、この現象自体が大きな問題を孕んでおり、どのような人々が該当するかについては本論の分析で後述する。

表1-4　余暇を過ごす場所（全体・最大４件選択）

総数		3322		
本問未回答者数		271		
回答総数		3051		
自宅		2715	89%	
職場・学校		380	12%	
友人・知人宅		969	32%	
社会教育系（公共）	図書館	380	12%	37%
	コミュニティ施設	392	13%	
	地方文化施設	162	5%	
	美術館・博物館	96	3%	
	スポーツ施設	433	14%	
	教育施設	48	2%	
商業娯楽系（民間）	商業施設	1161	38%	76%
	娯楽施設	502	16%	
	飲食店	657	22%	
自然系	公園	326	11%	31%
	自然（海や山）	614	20%	
その他		407	13%	
総計		9242	303%	

「社会教育系」「商業娯楽系」「自然系」「その他」を纏めて「地域施設（系）」とする。その総計は170%となる。

「職場・学校」、「友人・知人宅」といった個人の所属先や人間関係に伴う場所を選択する人も少なくない。但し、当然退職者や専業主婦といった所属先をもたない人々もおり、「社会教育系」「商業娯楽系」「自然系」「その他」からなる「地域施設（系）」がこの人々にとっては、余暇を過ごす場所として重宝されている。

「社会教育系」では〈図書館〉〈コミュニティ施設〉〈スポーツ施設〉といった量的整備が整いつつある施設種の選択が多い。誰と一緒に過ごすか等、利用形態に関する考察は本論にて行うが、特に〈コミュニティ施設〉〈スポーツ施設〉といった個人だけでなく、団体で利用するような施設種が多く選択されていることは特徴的といえる。

それでも選択の多さでは「商業娯楽系」、特に〈商業施設〉が遥かに上である。具体的には『イオン』『ジャスコ』『サティ』を始めとした大規模SCが多く挙げられる。様々な店舗・施設が集中している利便性の高さだけでなく、無料で長時間滞在できるという点に魅力を感じている、多くの人が「公的」な場所として集まっている姿はおそらく多くの店舗でみることが出来るだろう。

「自然系」では〈自然（海や山）〉が多い。回答をみると『釣り』や『ハイキング』といったレジャーに加え、『ドライブ』や『自宅近く』といった少人数でいられる、落ち着ける場所を求めていることが窺える。

1-5-3　余暇を過ごす場所の選択パターン

前項から地域住民が余暇時間を過ごす場所は「自宅」、「職場・学校」、「友人・知人宅」、そして「地域施設」の大きく分けて４つの系統であることが確認された。

ここではそれらを踏まえ、「自宅」の選択有無と「地域施設（図中では「地域」と略記）」の選択有無による４つの大分類、さらに個人の所属や人間関係に伴う場所である「職場・学校（同じく「職場」）」、「友人・知人宅（同じく「友人宅」）」の選択の有無を含めた 15 の小分類（［余暇施設なし］は除く）による余暇施設の選び方を考察する（図 1-11）。

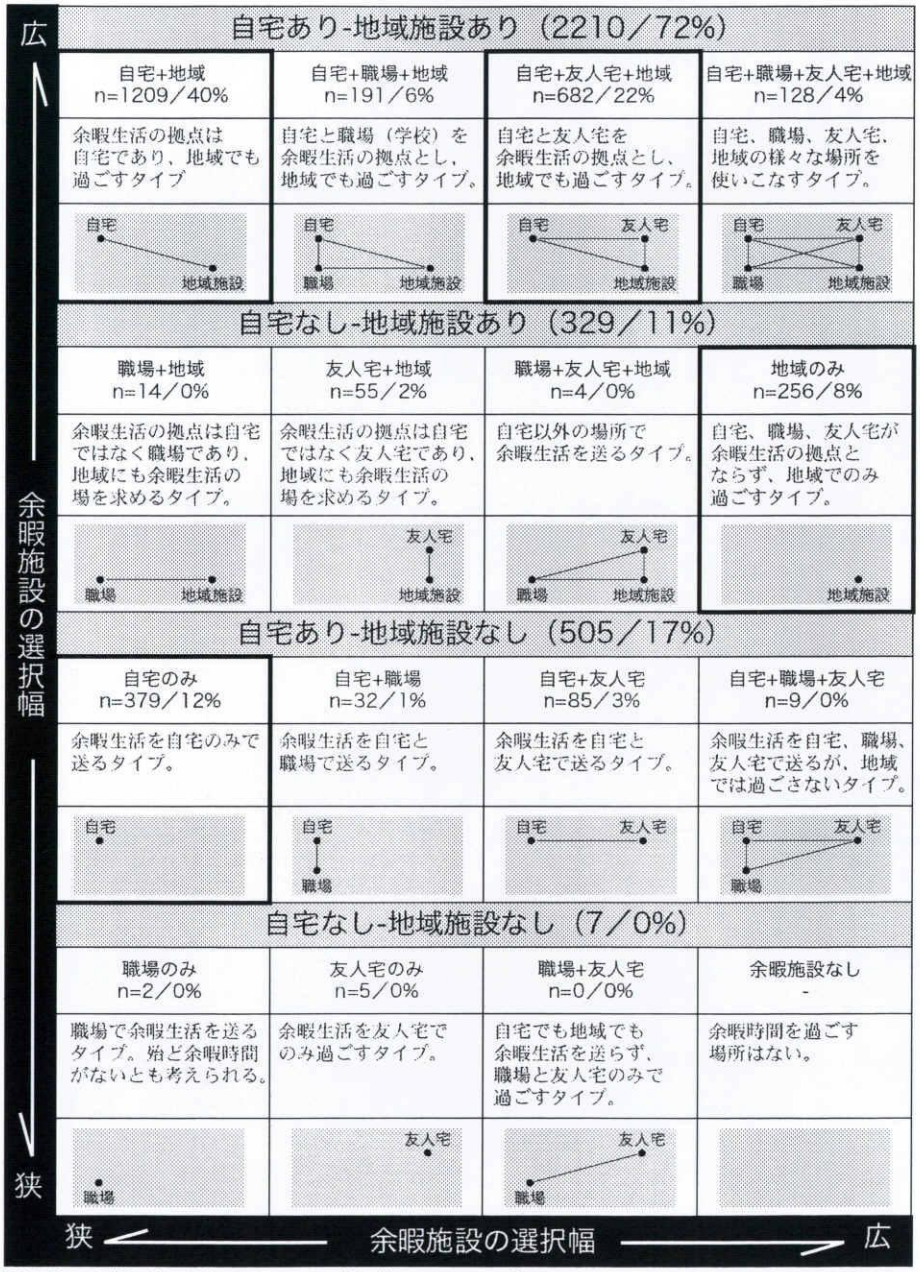


図 1-11　余暇を過ごす場所の選択パターン（全体：n=3051）

同図をみると、全体のなかで多いのは［自宅＋地域］(40%)、［自宅＋友人宅＋地域］(22%)、［地域のみ］(8%)、［自宅のみ］(12%)の４タイプである。

［自宅＋地域］［自宅＋友人宅＋地域］のように自宅（及び友人宅）と、地域施設を使い分けて利用するといった人が多く、４つの大分類タイプの内最多である。(［自宅あり－地域施設あり］は72%)。

［自宅なし－地域施設あり（10%)］は自宅で余暇を過ごさない大分類タイプである。活発に外部との関係を持っているようにもみえるが、前項で指摘したように、自宅を拠り所と出来ていない問題も抱えている。この大分類タイプで多いのは［地域のみ（8%)］のみであり、他は少数である。

余暇を過ごす場所を地域に求めない［自宅あり－地域施設なし（16%)］は比較的狭い範囲、限られた人間関係の中で余暇生活を送る大分類タイプといえる。また、個人の有する人間関係の中で帰属意識をもっていると解釈できる。この中では［自宅のみ(12%)］が多く、外出自体が多くないとも捉えることができる。

自宅も地域も選択しない［自宅なし－地域施設なし（0%)］は非常に少数派で、極めて特殊な例とみることができる。

1-5-4　地域施設整備の必要性

以上、地域住民にとって余暇活動を行うことが生活を充実するために必要であることをみてきた。また、地域住民がどこで余暇を過ごしているか、また、どのような選び方をしているかをみることによって、地域住民の多くが余暇を過ごす場所として地域施設を選択していることが明らかとなった。

従って、余暇生活の受け皿として地域施設を整備を考える必要性が見出された。

本論では、地域住民の属性による相違をみながら、余暇を過ごす場所の選択特性、地域施設の利用構造を捉える。

第２章　研究の目的と方法

2-1　研究の目的
2-2　研究の方法
2-3　研究の位置づけ
2-4　調査概要
2-5　分析の視点
2-6　用語の定義

2-1　研究の目的

研究の背景である前章を受けて、余暇を過ごす場所としての地域施設の整備要件を得ることが研究の目標である。

背景に加えて、余暇活動を行う地域施設に関しては、個別の活動に対し、個々の施設がどうあるべきかという研究が多くなされてきた。一方、余暇活動を行う人々はそれぞれが異なる属性をもち、施設の使い方、要求も一様ではない。今後、地域の幅広い層に対して、自宅や学校・職場以外で過ごせる場所を地域全体で提供していく必要があるだろう。特に、地域公共施設は従来の施設固有の機能的サービスによる、個人の目的達成の場としての整備だけでなく、地域住民が安心して余暇を過ごせる場所として整備する必要があると考える。

また、余暇活動は生涯を通じて連続的に行われる活動であるが、生涯の各段階で個人を取り巻く生活背景は変化するため、余暇のあり方も変化する。人々の生活様式によっても、それは同様である。そのため、地域の幅広い層が余暇活動を行う場としての地域施設は、それら変化する要求への対応が求められる。

本研究では、民間施設を含む地域施設を横断的に捉え、人々の場所選択や施設の利用構造から、余暇活動を行う場への要求、及び余暇を過ごす場所としての地域（公共）施設の整備要件を得ることを目的とする。

2-2　研究の方法

余暇活動には個人的な余暇活動と組織的な余暇活動があるため、その２つを対象とする。本研究では、余暇を過ごす場所としての地域（公共）施設の整備要件を得るため、以下に示す方法で研究を進めていく（研究のフロー及び枠組はそれぞれ図 2-1、図 2-2）。

[個人的な余暇活動に関して]

[1] ライフサイクル（LC）とライフスタイル（LS）の視点から、個人的な余暇活動実態を把握する。地域施設の利用構造として、余暇を過ごす場所の選択特性と地域施設の利用形態を捉える（第３章、第４章）。

[2] 以上の分析から、ライフサイクルの進展を通じて、また、ライフスタイルによって『余暇をともに過ごす相手』が特徴的に異なるという知見を得た。同伴形態を切り口に、地域施設の利用構造と余暇を過ごす場所への要求の相違を捉える（第５章）。
また、個人的な余暇活動を行う場としての地域施設の整備要件を得る。

[組織活動に関して]

[3] 組織活動の活動実績から、活動と地域施設の関わりを捉える（第６章）。また、組織活動を行う場としての地域施設の必要性と課題を見いだす。

[4] 組織活動と地域施設（特に公共施設）の利用の関連を捉え、施設の利用促進の観点から組織活動への参加を阻害する要因を明らかにする（第７章）。

[まとめ]

[5] 以上から、個人的な余暇活動を行う場と組織活動の場を連続的に整備するための地域施設整備指針の提案を試みる。

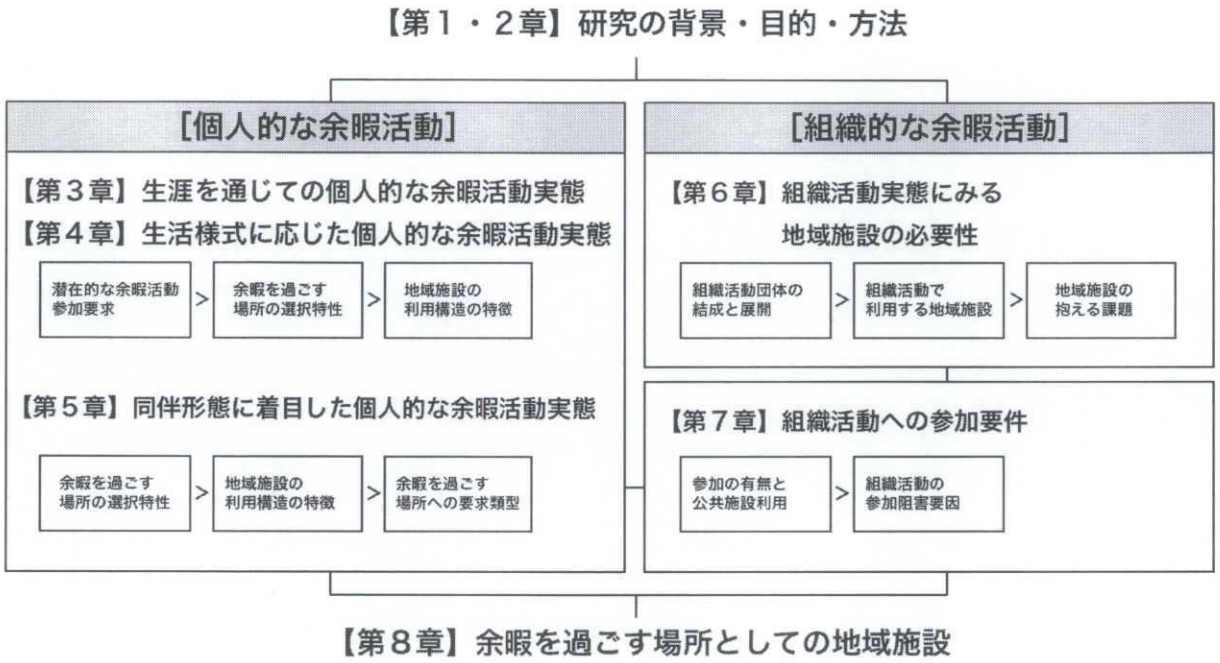


図 2-1　研究のフロー

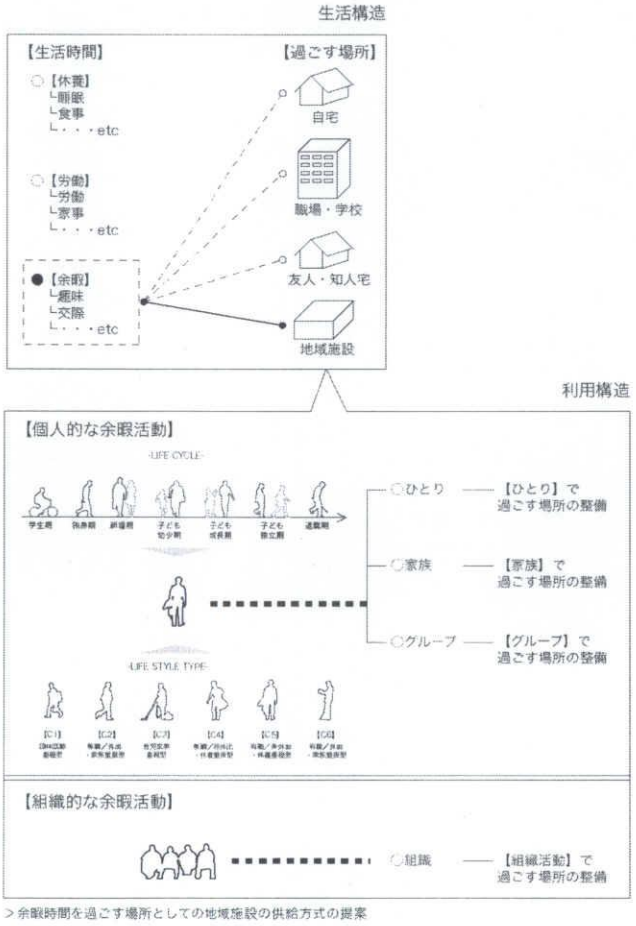


図 2-2　研究の枠組

2-3　研究の位置づけ

2-3-1　建築計画学における位置づけ

次に本研究を建築計画学のなかでの位置づけるため、既往研究の整理を行う。

本研究で取り上げている余暇を過ごす場所としての施設利用については、様々な呼称のもと研究がなされている。それらの多くは個別の活動に対して個々の施設がどうあるべきかという視点で研究が行われている。

本研究は地域施設を施設種に囚われずに、余暇施設としての整備要件を考えるものであるが、当然地域施設計画に関連する一連の研究である。

従って、地域施設計画論のうち、本研究と同様に、利用者側から地域施設の計画論を試みている研究を以下に載せる。

[公共施設の配置論に関するもの]

○渡辺光雄：『地域計画における公共施設の設置計画に関する研究「S.B. 現象」について その１、その２』、論文報告集 NO.326　P.126　1983 年４月、同 NO.334　P.148　1983 年 12 月

[余暇を過ごす施設の需要に関するもの]

○桜井康宏：『余暇生活のグループ化傾向からみた集会関連施設需要の構造－集会関連施設の設置計画に関する研究その１－』、論文報告集 NO.334　P.128　1983 年 12 月

○桜井康宏：『生活時間と階層的視点からみた余暇性向とグループ活動参加の動向－集会関連施設の設置計画に関する研究その２－』、計画系論文報告集 NO.349　P.32　1985 年３月

○桜井康宏：

『階層構成の類似性からみたグループ活動の類型化とその動向－集会関連施設の設置計画に関する研究その３－』、計画系論文報告集　NO.356　P.41　1985 年 10 月

[余暇活動を行う施設整備に関するもの]

○桜井 康宏：『集会関連施設の段階構成と室構成－集会関連施設の施設供給論に関する基礎的研究・その１－』、計画系論文報告集　NO.398　P.75　1989 年４月

○桜井 康宏：『集会関連施設の面積構成－集会関連施設の施設供給論に関する基礎的研究・その２－』、計画系論文報告集　NO.404　P.59　1989 年 10 月

○桜井 康宏：『集会関連施設の空間構成－集会関連施設の施設供給論に関する基礎的研究・その３－』、計画系論文報告集　NO.411　P.57　1990 年５月

○川岸梅和，北野幸樹：『時間的・空間的側面からみた余暇活動の動向と特性について－近隣余暇関連施設に関する研究その１－』、計画系論文集　NO.487　P.167　1996 年９月

○川岸梅和，北野幸樹：『近隣空間における余暇活動の動向と特性について－近隣余暇関連施設に関する研究その２－』、

計画系論文集　NO.498　P.153　1997 年８月

○藍澤　宏，鈴木麻衣子，斎尾直子：『住民の地域社会活動の形成とその展開方法に関する研究』、計画系論文集　NO.533　P.89　2000 年７月

[組織活動に関するもの]

○藍澤　宏，鈴木直子，林　宏規：『市町村における地域生涯学習活動支援の整備水準とその誘導要件に関する研究』、計画系論文集　NO.498　P.139　1997 年８月

○斎尾直子，藍澤　宏，西口有紀：『市町村の生涯学習推進におけるネットワーク形成とその効果に関する研究』、計画系論文集　NO.520　P.173　1999 年６月

○斎尾直子，藍澤　宏，川崎佳代子，東條敦子：『居住地域における住民の生涯学習活動状況と地域施設の活動機会提供に関する研究』、計画系論文集　NO.530　P.127　2000 年４月

2-3-2　今井研究室における位置づけ

次に今井研究室における関連研究を整理する（修士論文のみ）。

以下に掲載したのは、施設種によらず、生活構造、利用者意識を主な着眼点とした利用者側からの需要論である（図 2-3）。

また、疎住地における施設計画を考える上で参考にした、研究室で行われた研究活動である報告書についても掲載する。

[研究室内の関連研究]

○ 高木直子：『利用者意識からみた図書館機能の再構築に関する研究』、1998 年度修士論文

○ 山田剛：『高齢者の生活構造の地域差からみた地域施設整備に関する研究』、1999 年度修士論文

○ 三輪恭子：『生活における居場所としての地域施設―疎住地において住民の利用を促す施設計画に関する研究』、2001 年度修士論文

○ 池谷辰仁：『中高生の居場所としての地域施設に関する研究』、2005 年度修士論文

[報告書関連]

○ 三重大学工学部建築学科今井研究室、津市市民生活部市民交流課：『津市コミュニティ施設整備計画調査研究報告書』、1998 年 3 月

○ 三重大学工学部建築学科今井研究室、津地区広域行政事務組合：『津地区広域圏における公共施設等の利活用に関する研究報告書』、2000 年 3 月

○ 三重大学工学部建築学科今井研究室、芸濃町：『「芸濃町まちづくり調査研究」報告書』、2002 年 3 月
三重大学大学院工学研究科今井研究室・高井研究室、（財）三重県建設技術センター：『市町村合併に伴う公共施設の有効利用に関する研究』、2006 年 9 月

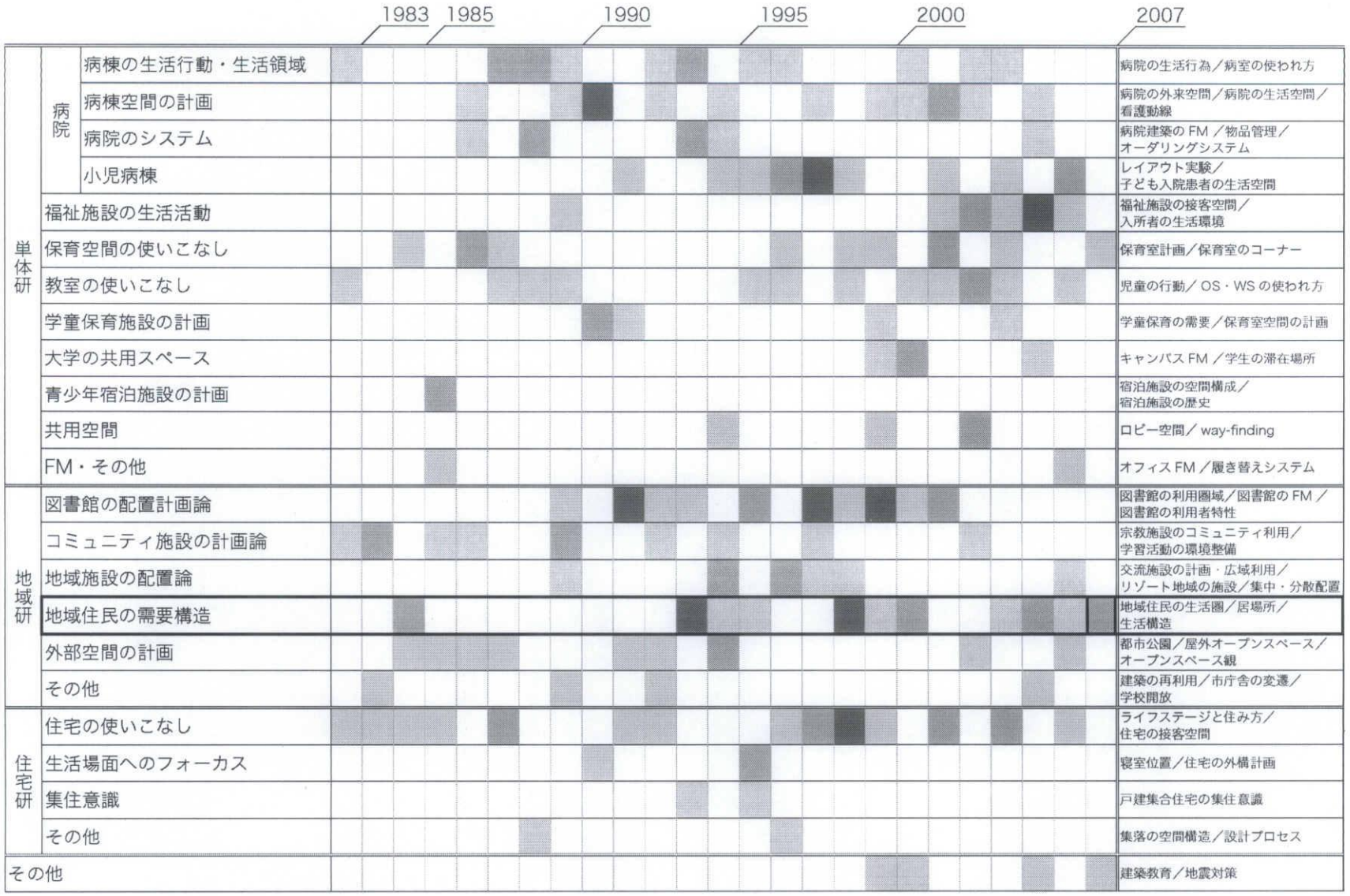


図 2-3　今井研究室の既往論文

2-4　調査概要

2-4-1　調査対象地域の選定

本研究では、生活する上で普遍的な課題である、余暇を過ごす場所の整備を目指すため、地方都市である複数の地域（つまり、その地域住民）を選定する。

調査１では以下に示す、三重県内の地域性の異なる４地区を選定する（図 2-4）。

① 県庁所在地で大合併を行った、独立した都市生活圏をもつ津地区、
② 三重県最大の都市であり、名古屋大都市圏の一部でもある四日市地区、
③ 独立した生活圏をもつ、農村漁村地域である志摩地区、
④ 過疎化が進行する、中山間地域である大紀地区

ちなみに各地区の特徴として国勢調査から得た基本情報を表 2-1 に示す。

調査２では DID（人口集中地区）を含む旧津市及び旧久居市、過疎地である旧美杉村など、様々な地域が合併した（新）津市において組織活動を行う団体を対象とする（図 2-5）。

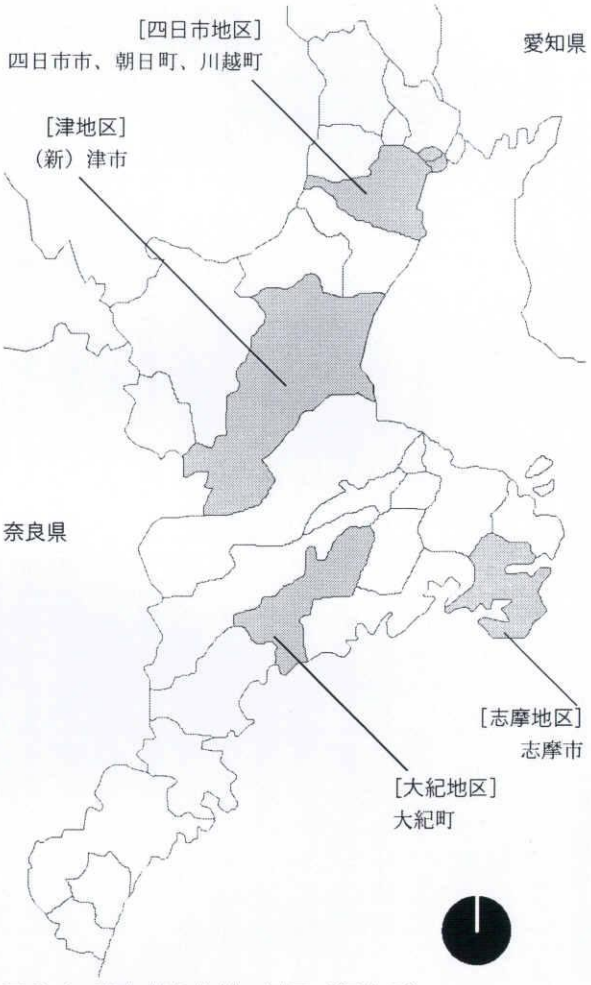


図 2-4　調査対象地域の地図（調査１）

図 2-5　調査対象地域の地図（調査 2）

表 2-1　調査対象地区の基本情報（調査１）

調査対象地区	四日市	津	志摩	大紀
総人口（人）	320,600	286,521	61,628	11,334
総面積（k㎡）	220	711	180	234
人口密度（人／k㎡）	1,458	403	343	49
総世帯数（戸）	113,523	102,795	20,950	4,141
生産年齢人口比	218,770	1,894,446	38,194	6,480
	68.2%	66.1%	62.0%	57.2%
老年人口比	51,051	54,869	9,000	3,477
	16.0%	19.2%	23.4%	30.7%

＊　いずれも H12 年国勢調査による。

2-4-2　調査手法の概要

1）地域住民アンケート（調査１）

2005年７月～８月に、前述の４地区を対象に、15歳以上の住民に対して地域住民アンケートを実施した。

調査対象者を無作為に選定するため、地図上（ゼンリン住宅地図を使用）に東西南北に線を引き、メッシュを作成した。各メッシュの中心付近で10世帯を抽出し、直接配布・郵送回収を行った。メッシュ間隔は津地区で3.0km × 3.0km四方または1.5km × 1.5km四方、四日市地区・志摩地区・大紀地区では全て1.5km × 1.5km四方の大きさを採用した。アンケートは一世帯に１枚の世帯票と一人１枚の個人票であり、調査結果は表2-2に示す。

2）組織活動実績調査（調査２）

2007年９月～11月に、『津市生涯学習バンク』及び旧市町村ごとの文化協会に登録している団体に郵送配布（一部文化協会会長による手渡し）・郵送回収によるアンケート調査を実施した。

調査票は団体用と個人用に分かれており、団体用は各団体の代表者が、個人用は所属メンバーに依頼している。

調査結果は表2-3に示す。

表2-2　回収状況（調査１）

調査対象地区		津	四日市	志摩	大紀	総計
世帯票	世帯票配布数	1,381	1,389	877	532	4,179
	世帯票回収数	597	602	356	181	1,736
	世帯票回収率	43%	43%	41%	34%	42%
個人票	個人票配布数	3,425	3,307	2,246	1,291	10,269
	個人票回収数	1,245	1,148	579	350	3,322
	個人票回収率	36%	35%	26%	27%	32%

表2-3　回収状況（調査２）

	生涯学習バンク	文化協会	総計
配布数（A）	251	146	397
住所不明（B）	33	6	39
有効配布数（A-B）	218	140	358
返信数（C）	146	66	212
回収率（C/A）	58%	45%	53%
有効回収率（C/A-B）	67%	47%	59%
個人票数	946	174	1120

＊　個人票は各団体に10部づつ配布しているので、個人票回答率は計上していない。

表2-4　調査概要

調査１：地域住民アンケート	
調査期間	H17年７月～８月
調査対象	四日市市・朝日町・川越町、津市、志摩市、大紀町に住む15歳以上の住民
調査概要	地域住民の生活実態、施設利用実態に関するアンケートを、メッシュサンプリングで抽出した世帯ごとに直接配布・郵送回収にて行った。
質問項目	世帯票：家族形態など、個人票：各種施設の３ヶ月以内利用実態、地域活動、余暇施設の利用形態など
回収率	世帯票：1,736/4,179=42%、個人票：3,322/10269=32%
調査２：組織活動実績調査	
調査期間	H19年９月～11月
調査対象	『津市生涯学習バンク』及び文化協会の登録団体
調査概要	組織活動実態を捉えるアンケートを、上記の登録団体に対し、郵送配布・郵送回収にて行った。
質問項目	団体票：団体の活動実績など、個人票：メンバーの参加契機、活動意識など（個人票は各団体当り最大10名分）
回収率	団体票：212/358=59%（有効数）、個人票：1120名

2-5　分析の視点

2-5-1　ライフサイクルの設定

図2-6に示すように、本研究では生活者を多角的に捉える視点としてライフサイクルを設定する（第3章で分析）。

調査1では対象が15歳以上のため最初の段階を｛学生期｝とし、人生過程の進展によって男女とも7つの段階に分類した。さらに、女性については結婚後の職の有無が生活に大きな違いを与えることが先進研究及び書籍から言及されており、｛新婚期｝から｛子ども独身期｝を分割する。

調査1における該当数と分類基準を表2-5に示す。分析では「性別不明」及び「分類不可」「LS（ライフステージ）不明」は扱わない。

表2-5　ライフサイクルの分類

略式	ライフサイクル	男性	女性				性別不明	総計	分類基準
				有職	無職	職不明			
学	学生期	64	77				0	141	職業が「学生」
独	独身期	147	137				1	285	職業が「有職」、かつ続柄上独身と判断可能
新	新婚期	48	59	29	22	8	0	107	続柄上既婚、かつ子どもなし（妻が39歳以下）
幼	子ども幼少期	172	202	112	89	1	0	374	長子誕生から末子が12歳以下の既婚者
成	子ども成長期	91	112	80	25	7	0	203	末子が13歳以上18歳以下の既婚者
立	子ども独立期	370	462	253	160	49	2	834	末子が19歳以上、又は妻が40歳以上の夫婦
高	高齢期	617	558				3	1178	65歳以上、又は60歳以上の「無職」
-	分類不可（無職独身）	12	7				0	19	
-	LS不明	55	72				54	181	
-	累計	1576	1686	474	296	65	60	3322	

＊「有職」は、職業が「勤労者」、「自営業」、「農林水産業」、「パート・アルバイト」、「その他」
「無職」は、「専業主婦」、「無職」

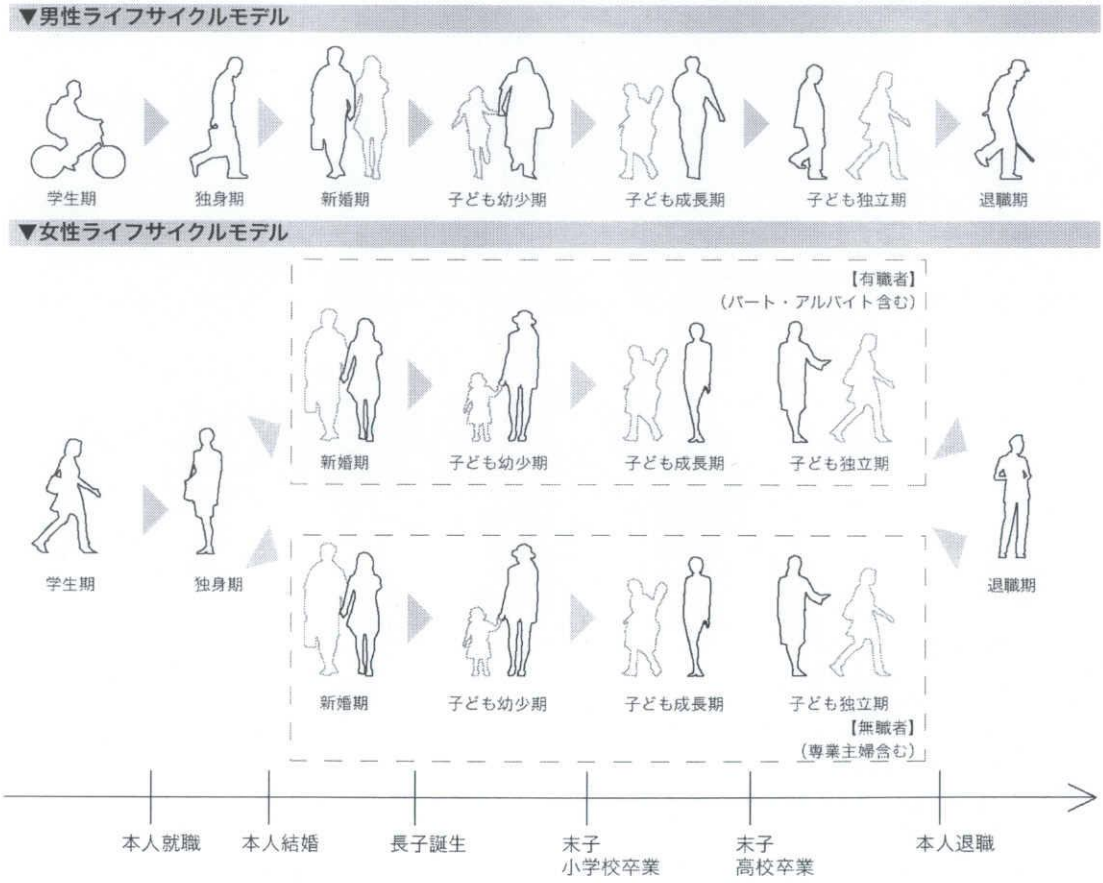


図2-6　ライフサイクルモデルの設定

[LCで分析する必要性]

多くの書籍や既往研究から、生活に変化を与えるのは就職、結婚、子どもの誕生、子どもの成長、退職といった諸々のライフイベントであることが提示されている。さらに、女性の社会進出により同じ女性でも職をもつか否かでは生活の余暇時間の量は大きく異なる。また、結婚して家庭をもち、さらに子どもの年齢の相違によっては、同じ年齢でも相当に異なる生活をしていることが推測される。

生活構造の変化は生活者個人の生活背景に起因する為、個人を取り巻く環境を考慮し、本研究ではLCを生活者分析の視点とする。

＊設定上、{独身期}については65歳未満の単身者が全て含まれてしまうが（ある程度年齢が高い人は離婚もしくは単身赴任等、何らかの理由で単身世帯となっている可能性が高い。また、世帯票に本人のみしか記載されていない場合もあり得るが、当方では判断できず。)、子どもを含む、家族のある段階との相違をみることを見込んでいるため、分類では許容する。

ちなみに表2-6はLCの各段階の基本属性である。

年齢をみると、各段階とも主となる年齢層は順当に加齢している。但し、各段階とも複数の年齢層にまたがっており、取り巻く環境は同様でも個人単位でみると10歳以上の年齢差が発生していることが珍しくない。

表2-6　ライフサイクルの基本属性

		男性							女性										
		学生期	独身期	新婚期	子ども幼少期	子ども成長期	子ども独立期	高齢期	学生期	独身期	有職・新婚期	無職・新婚期	有職・子ども幼少期	無職・子ども幼少期	有職・子ども成長期	無職・子ども成長期	有職・子ども独立期	無職・子ども独立期	高齢期
性別	総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	性別不明	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
	回答数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	男性	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	女性	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
年齢	総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	年齢不詳	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	2
	回答数	64	147	48	171	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	158	556
	10代	75%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	71%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	20代	25%	37%	10%	5%	0%	0%	0%	29%	55%	17%	27%	6%	7%	0%	0%	0%	0%	0%
	30代	0%	25%	63%	37%	4%	0%	0%	0%	20%	83%	73%	49%	74%	6%	4%	0%	0%	0%
	40代	0%	13%	27%	52%	63%	10%	0%	0%	4%	0%	0%	44%	17%	84%	84%	23%	11%	0%
	50代	0%	16%	0%	5%	32%	65%	0%	0%	15%	0%	0%	1%	1%	10%	12%	60%	88%	0%
	60代	0%	7%	0%	0%	1%	25%	46%	0%	4%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	17%	1%	51%
	70代	0%	0%	0%	0%	0%	0%	44%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	35%
	80代以上	0%	0%	0%	0%	0%	0%	11%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	14%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

[余暇時間の推移]

また、第１章に加えて、生涯を通じての余暇時間の増減をみる（図 2-7）。ここでは参考として、年齢層による違いをみる。

まず男女別でみると、生涯を通じて、いずれも 30 代、40 代で余暇時間が一旦減少した後、加齢に伴って余暇時間が増加する。但し、増加の仕方には相違がある。

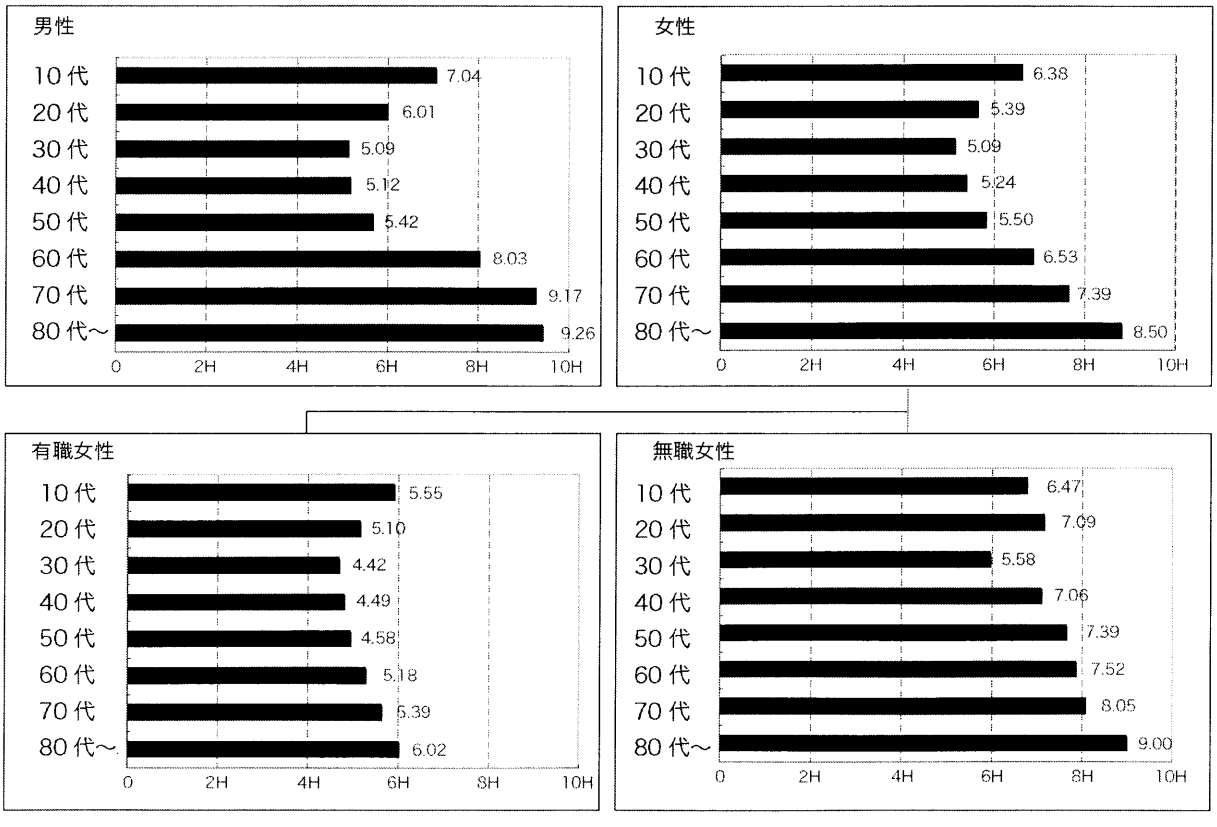
男性は職に就いている期間である 30 代から 50 代までは大きな変化はないが、退職に伴って 60 代で急激に余暇時間が増加する。

一方、女性は 30 代から小刻みに余暇時間が増加する。男性と比較すると、50 代までは、子育ての負担が徐々に軽減されることもあり、男性よりも余暇時間が長いが、60 代以降も家事を続けるため、女性の方が男性よりも若干余暇時間は少なくなる。

また、本研究では女性を職の有無によっても分類しているので、その違いもみる（分類しているのは結婚後から退職までなので、図中の 20 代から 50 代のみをみる）。

いずれも徐々に余暇時間が増加しているが、その絶対量は圧倒的に無職女性の方が多い。特に無職女性は、子育てが一段落したと考えられる（子ども幼少期が過ぎ、子ども成長期が多い）、40 代で余暇時間が急激に増えはじめる。

以上のように、余暇時間は性別・職の有無によって大きく異なる。



社会生活基本調査（2006 年）より筆者作成。
男性は総数のまま、女性は有職・無職に分け、年齢別の平均より作成している。

図 2-7　余暇時間の推移（性別＋年齢別＋職の有無）／週全体

2-5-2　ライフスタイルタイプの設定

前項で設定したライフサイクルに加え、ライフスタイルタイプ（図 2-8）を設定する。

同じ性別、同じライフサイクルの段階でも異なる余暇の過ごし方がありえるため、生活における個人の活動状況や価値観を反映した別の切り口が必要だからである（第４章で分析）。

本研究では生活者のライフスタイルを６タイプに類型化する。その指標として、施設利用に影響を与えると考えられる以下の４つを取り上げる。

① 地域との関わりや活動状況を示す「地域活動の参加有無（２項目）」
（サークル活動、ボランティア活動など、

② 何らかの形で地域と関わりを持つ活動。自宅での個人的な趣味活動は含まない。）
時間的拘束の多寡に影響する「職の有無（２項目）」

③ 個人の生活上の趣向、価値観を示す「充実感を感じるときの内容（９項目）」

④ 外出の積極性を示す「余暇時間を過ごす場所の多さ（２項目）」
（最大４箇所選択する、余暇時間を過ごす場所の選択数による。１～２箇所を「場所少」、３箇所以上を「場所多」。これは「自宅」「職場・学校」以外に過ごす場所を有しているか否かの指標ともとれる。）

これらの指標をもとに数量化Ⅲ類及びクラスター分析（Ward 法）を用いて生活者のライフスタイルを類型化した。各タイプの割合及び指標とした項目との指標別割合、過程表を表 2-7 ～ 11 に示す。

［クラスター分析］

前述の４指標を用いて数量化Ⅲ類を行い、表 2-14 に示す５軸が得られた（サンプルスコアは割愛）。累積寄与率は 56.4%。

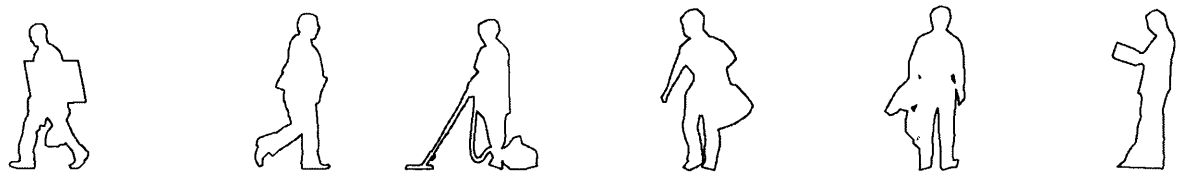
１軸は「余暇活動の積極性（＋団体活動：－休養）」、２軸は「拘束の多寡（＋外出多：－仕事）」、３軸は「自宅での滞在性（＋家事：－団体活動）」、４軸は「習い事（＋習い事）」、５軸は「自主学習（＋自主学習）」と各軸を解釈した。さらに、クラスター分析（Ward 法）を行い、６タイプに類型化できた。

表 2-7　ライフスタイルタイプの指標別割合

タイプ		割合	母数
C1	団体活動重視型	25%	633
C2	無職／外出・家族重視型	15%	391
C3	育児家事重視型	6%	144
C4	無職／非外出・休養重視型	11%	290
C5	有職／非外出・休養重視型	13%	332
C6	有職／外出・家族重視型	29%	749

表 2-8　ライフスタイルタイプ別の特徴

タイプ	特徴・備考
C1	地域活動に積極的な有職者が多い
C2	家族との付合を重視しながら、外出はする無職者
C3	職の有無に関わらず、家事を重視するが外出は多い
C4	無職者が多く、休養、趣味を重視
C5	仕事、休養を重視する、外出先の少ない有職者
C6	外出先は多い、地域活動に不参加な有職者



【C1】団体活動重視型　【C2】無職／外出・家族重視型　【C3】育児家事重視型　【C4】無職／非外出・休養重視型　【C5】有職／非外出・休養重視型　【C6】有職／外出・家族重視型

図 2-8　ライフスタイルタイプの設定

表 2-9　ライフスタイルタイプ別反応割合

	割合	母数	職の有無		地域活動		充実感									場所選択	
			有職	無職	参加	不参加	仕事	家事	家族	友人	休養	趣味	習い事	団体活動	自主学習	外出少	外出多
C1	25%	633	73%	27%	91%	9%	33%	0%	30%	23%	8%	52%	5%	34%	3%	23%	77%
C2	15%	391	9%	91%	35%	65%	7%	1%	55%	22%	21%	55%	8%	0%	16%	1%	99%
C3	6%	144	47%	53%	31%	69%	15%	100%	43%	4%	10%	17%	0%	2%	2%	19%	81%
C4	11%	290	1%	99%	26%	74%	0%	0%	29%	22%	47%	47%	2%	1%	10%	91%	9%
C5	13%	332	96%	4%	4%	96%	35%	0%	26%	20%	46%	38%	0%	0%	1%	100%	0%
C6	29%	749	100%	0%	0%	100%	39%	0%	47%	29%	26%	46%	0%	0%	0%	5%	95%
累計	100%	2,539	65%	35%	33%	67%	26%	6%	39%	23%	25%	46%	3%	9%	5%	32%	68%

表 2-10　累積寄与率

軸 No.	固有値	寄与率	累積%	相関係数
1	0.3037	14.5%	14.5%	0.5511
2	0.2573	12.3%	26.8%	0.5072
3	0.2198	10.5%	37.3%	0.4688
4	0.2044	9.8%	47.0%	0.4521
5	0.1975	9.4%	56.4%	0.4444

表 2-11　カテゴリスコア

1軸		2軸		3軸		4軸		5軸	
休養	-1.08	仕事	-1.40	団体活動	-2.93	家事	-2.90	家事	-3.20
活動不参加	-1.00	有職	-0.89	外出多	-1.26	団体活動	-2.37	習い事	-2.54
仕事	-0.98	外出少	-0.87	仕事	-0.82	自主学習	-1.31	団体活動	-1.37
有職	-0.73	活動参加	-0.48	活動参加	-0.64	仕事	-0.65	外出多	-0.84
外出多	-0.72	団体活動	-0.38	休養	-0.43	外出多	-0.43	仕事	-0.53
家族	-0.07	家族	-0.34	有職	-0.41	活動参加	-0.36	活動参加	-0.39
友人	0.01	習い事	-0.32	友人	-0.35	家族	-0.18	家族	-0.24
外出少	0.31	友人	-0.23	趣味	-0.14	有職	-0.14	無職	-0.16
趣味	0.38	趣味	-0.05	習い事	0.26	休養	0.08	休養	-0.16
家事	0.45	家事	0.29	活動不参加	0.30	趣味	0.14	有職	0.07
無職	1.27	活動不参加	0.31	外出少	0.56	活動不参加	0.18	活動不参加	0.17
自主学習	1.41	休養	1.51	無職	0.71	外出少	0.20	友人	0.35
活動参加	1.93	自主学習	1.61	自主学習	0.75	無職	0.26	外出少	0.37
習い事	2.32	無職	1.75	家族	0.93	友人	1.31	趣味	0.45
団体活動	3.22	外出多	2.01	家事	6.25	習い事	10.52	自主学習	8.18

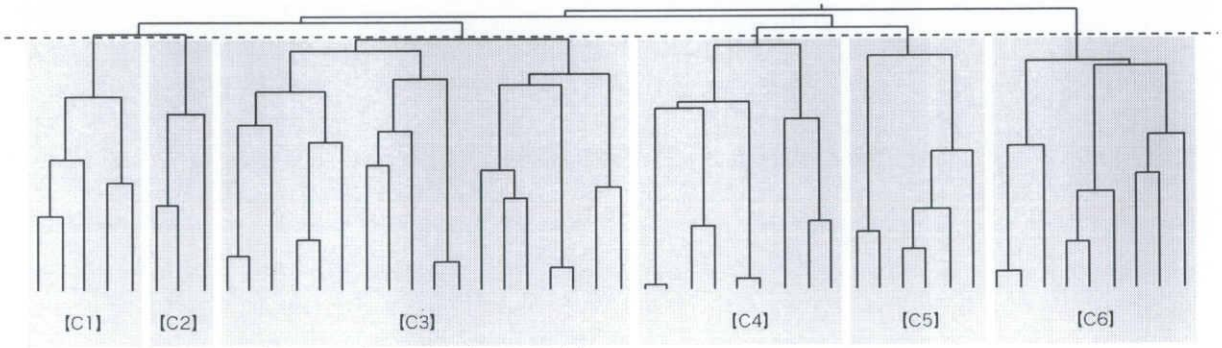


図 2-9　クラスター分析樹形図（ライフスタイル設定）

2-6　用語の定義

［余暇時間］

余暇時間とは、休養（睡眠・食事等）や労働（仕事・通勤等）の時間を除く、自己裁量性の高い生活行為をする時間を指す。

［余暇活動］

自宅での休養・団らん、及び自宅で一人で行う趣味活動を除く、地域住民が自由な時間に行う全ての活動。

特に本研究では、調査１にて得られた、各個人が余暇を過ごす場所（アンケートでは「自由な時間を過ごす場所」と聞いている）にて行う活動を［個人的な余暇活動］、調査２にて得られた、団体として行う活動を組織活動とする。

［地域施設］

地域住民が生活上利用する、「自宅」「職場・学校」「友人・知人宅」以外の建築的空間を含む場所。本研究では、居住地域に立地する、余暇生活に関連深い施設として、以下の施設種を対象としている。但し、地域施設の利用形態の分析においては自然系は除いている。

『公共施設』：

図書館、コミュニティ施設（公民館・集会所・市民センター）、地方文化施設、美術館（博物館含む）、スポーツ施設、教育施設

『民間施設』：

商業施設、娯楽施設、飲食店

『自然系』：

公園、海や山

第３章　生涯を通じての個人的な余暇活動実態

3-1　LCにみる生活背景と活動要求
3-2　LCにみる余暇を過ごす場所の選択特性
3-3　LCにみる地域施設の利用形態
3-4　LCにみる地域施設の利用構造

3-0　本章の目的

本章では、地域住民の個人的な余暇活動について、生涯を通じての生活の変化を捉えながら考察する。特に、それらを行う場である、余暇を過ごす場所としての地域施設の利用構造（地域施設の選択特性と利用形態）を、性別・年齢・職の有無・子どもの成長過程により設定したライフサイクル（以下、LC）を切り口に、各段階ごとに把握する。

3-1　LC にみる生活背景と活動要求

ここでは、LC の各段階における、余暇を過ごす場所としての地域施設の利用構造を捉える前段として、生活背景・活動要求を把握する。

3-1-1　各段階の生活背景

ここでは、生活背景として各段階に属する人々の、職業や家族型といった生活の背景をみる（表 3-1）。

まず［職業］をみる。

男性では｛独身期｝から｛子ども独立期｝にかけて、殆どの人が有職である。特に｛新婚期｝から｛子ども成長期｝にかけては９割近くが「勤労者」である。いわゆる“働き盛り”の時期であるが、同時に時間的拘束を最も受ける時期でもある（余談であるが、｛独身期｝は職種の選択が比較的ばらけており、近年の若年層の生活の多様性を表しているとも捉えられる）。次の段階である｛子ども独立期｝については、「勤労者」の割合が減少し、「自営業」や「農林水産業」の割合が増加している。年齢的には 50 歳代の中年層であるが、生活における仕事に位置づけの変化やそれに伴う余暇時間の変化が考えられる（脱サラしての家業の継承などが背景として挙げられる）。｛高齢期｝になると、有職者の割合は急激に減少するが、それでも３割以上の人が何かしらの職を有し働き続けている。自分で退職を決める「自営業」「農林水産業」が殆どであるが、高齢者が仕事をもたず余暇時間ばかりというわけではない。とはいえ、｛高齢期｝の６割以上は無職であり、退職以前と比べて急激に増えた余暇時間を如何に過ごすかは重要な課題である。

一方女性は、同じ段階でも職の有無によって生活における拘束時間に大きな違いがみられそうである（設定上職の有無で分類しているため、内訳だけみていく）。

有職女性は、{有職・子ども幼少期} と {有職・子ども成長期} にかけて、「勤労者」が一定の割合で減少していることから、子育てのために仕事を辞める人が確認される。また、{有職・新婚期} から {有職・子ども成長期} まで「パート・アルバイト」の割合が５割程度と高く、家事と仕事の両立のため（「勤労者」と比べたら）時間的拘束が少ない職に就く人々が多い（調査では収入を聞けていないが、あるいは家計のため）。{有職・子ども独立期} で「自営業」が増加するのは、夫の転職に伴うものと考えられる。{高齢期} については、男性よりも有職率は低く（男性 36% に対し女性 16%）、女性の方が老後の余暇時間が確保できていると考えれる。

無職女性については {無職・子ども成長期} までは「専業主婦」が殆どであるが、{無職・子ども独立期} 以降は回答が「無職」とされることが多くなる。主婦として家事をすることがなくなるわけではないだろうが、子どもの独立を契機として自分自身の主婦としての役割から（意識の上でも）ある程度解放され、個人のため時間を増やすことに起因すると考えられる。

次に［家族型］をみる。

男女とも {新婚期} を除き「核家族」が最も多い。調査対象の地域に寮制の高校や大学等も少ないため、{学生期} の「単身世帯」は少なく、{独身期} でも（特に女性は）実家（親元）から通勤しているのが地方都市の実態である。着目したいのは {高齢層} であり、男女とも 13% が「単身世帯」、つまり高齢単身者である。さらに「夫婦のみ」も加えると {高齢期} の半数以上は高齢者だけで暮らしている。

次に［居住年数］をみる。

{新婚期} 以降、居住年数が短い人の割合が多く、結婚に伴う転居で新たな土地で生活を始めていることが分かる。特に女性は「１年未満」及び「１～３年未満」が職の有無によらず４割以上である。新たな土地での生活は同時に、近所付き合いを含む新たな知り合いづくりの課題をもたらす。但し {新婚期} について、「５～10 年未満」以上を職の有無で比較すると男性 68%、有職女性 51% に比べて無職女性は 38% である。男性及び有職女性の方が馴染んだ土地に住み続ける者が多い（回答数は多くないが）。

それ以外の段階では男女とも比較的居住年数は長く、{子ども独立期} までに知り合いをつくるだけの十分な期間はあるといえる（実際は男性は仕事の関係上、女性ほど容易ではないが）。

次に［自宅形式］をみる。

段階に関わらず殆どの人が「一戸建て」に住んでいる（「単身世帯」が多い段階でも、その割合に「一戸建て」以外が達せず不可解であるが、アンケート形式のため計上した。一戸建ての借家の可能性もある）。

最後に「自動車利用」をみる。

アンケートでは、[1] 運転免許の有無（①免許を持っている、②免許はあるがあまり運転しない、③免許を持っていない）と、[2] 日常生活の自動車利用頻度（①ほぼ毎日、②週５日程度、③週２日程度、④殆どなし、⑤全くなし）について、別々に聞いている。

しかし地域住民のなかには、自分は運転しないが、家族・知人に載せてもらえるといった場合もあるので、両アンケート項目を組み合わせることで、①車を自分の自由に使用できる「車自由」、②自分では運転しないが家族・

知人に乗せてもらえる「乗合可」、③自分で運転しないうえ、日常生活で自動車を使用しない「交通弱者」に３分類する。

男女とも｛新婚期｝以降は「自由に使用」できる人が殆どである。男女とも｛学生期｝と｛高齢期｝は「自由に使用」が少ないが、家族あるいは知人に乗合を頼める環境にいる人も少なくない（「乗合可」）。

それでも男女の｛学生期｝と女性の｛高齢期｝は自分で運転できず、かつ乗合を頼むことも簡単ではない人が３割程度存在する。これが日常生活における移動で大きな負担となっていることは明らかである。

免許の有無	免許を持っている				免許はあるが、あまり運転しない				免許は持っていない			
自動車使用頻度	ほぼ毎日	週５日程度	週２日程度	ほとんどない	ほぼ毎日	週５日程度	週２日程度	ほとんどない	ほぼ毎日	週５日程度	週２日程度	ほとんどない
類型	自由利用				乗合可			交通弱者	乗合可			交通弱者

表 3-1　LC にみる生活背景

		男性							女性										
		学生期	独身期	新婚期	子ども幼少期	子ども成長期	子ども独立期	高齢期	学生期	独身期	有職・新婚期	無職・新婚期	有職・子ども幼少期	無職・子ども幼少期	有職・子ども成長期	無職・子ども成長期	有職・子ども独立期	無職・子ども独立期	高齢期
職業	総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	職業不明	0	1	2	1	3	12	60	0	1	2	0	0	0	1	0	0	0	120
	回答数	64	146	46	171	88	358	557	77	136	27	22	112	89	79	25	253	160	438
	学生	100%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	100%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	有職 勤労者	0%	75%	89%	85%	89%	64%	3%	0%	70%	48%	0%	43%	0%	34%	0%	35%	0%	1%
	有職 自営業	0%	12%	7%	11%	8%	20%	11%	0%	6%	11%	0%	5%	0%	10%	0%	19%	0%	5%
	有職 農林水産業	0%	5%	0%	2%	3%	7%	17%	0%	1%	0%	0%	1%	0%	3%	0%	6%	0%	6%
	有職 パート・アルバイト	0%	5%	2%	1%	0%	4%	4%	0%	18%	41%	0%	50%	0%	52%	0%	38%	0%	2%
	有職 その他	0%	3%	2%	0%	0%	2%	2%	0%	4%	0%	0%	1%	0%	1%	0%	2%	0%	1%
	有職率	0%	100%	100%	99%	100%	97%	36%	0%	100%	100%	0%	100%	0%	100%	0%	100%	0%	16%
	無職 専業主婦	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	95%	0%	90%	0%	96%	0%	79%	27%
	無職 無職	0%	0%	0%	1%	0%	3%	64%	0%	0%	0%	5%	0%	10%	0%	4%	0%	21%	58%
	無職 無職率	0%	0%	0%	1%	0%	3%	64%	0%	0%	0%	100%	0%	100%	0%	100%	0%	100%	84%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
家族型	総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	家族型不明	0	3	1	0	0	2	8	0	0	2	1	0	0	0	0	0	0	5
	回答数	64	144	47	172	91	368	609	77	137	27	21	112	89	80	25	253	160	553
	単身世帯	2%	24%	0%	0%	0%	0%	13%	3%	12%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	13%
	夫婦のみ	0%	1%	62%	0%	0%	30%	45%	0%	0%	67%	52%	0%	0%	0%	0%	26%	28%	39%
	核家族	47%	56%	0%	63%	57%	33%	16%	51%	55%	0%	0%	53%	63%	48%	76%	36%	36%	14%
	２世帯以上	50%	18%	38%	37%	43%	37%	25%	47%	30%	33%	48%	47%	37%	53%	24%	38%	34%	32%
	その他	2%	1%	0%	0%	0%	1%	1%	0%	3%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	2%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
居住年数	総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	居住年数不明	1	3	1	1	0	4	16	1	0	0	1	0	2	0	0	2	0	7
	回答数	63	144	47	171	91	366	601	76	137	29	21	112	87	80	25	251	160	551
	１年未満	0%	3%	6%	3%	0%	1%	1%	0%	5%	10%	14%	4%	5%	1%	0%	1%	2%	1%
	１～３年未満	5%	6%	17%	11%	5%	2%	2%	5%	5%	31%	24%	8%	20%	3%	12%	2%	5%	1%
	３～５年未満	5%	1%	9%	12%	3%	2%	2%	3%	4%	7%	24%	12%	11%	3%	4%	1%	3%	3%
	５～10 年未満	17%	6%	23%	25%	14%	7%	3%	12%	8%	24%	24%	21%	33%	14%	8%	5%	6%	3%
	10～15 年未満	17%	6%	11%	13%	20%	6%	5%	12%	4%	17%	14%	29%	15%	18%	20%	7%	9%	4%
	15～20 年未満	40%	11%	2%	5%	16%	9%	5%	50%	14%	0%	0%	13%	5%	25%	28%	7%	12%	5%
	20 年以上	16%	67%	32%	32%	41%	73%	81%	18%	59%	10%	0%	13%	11%	38%	28%	78%	64%	82%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
自宅形式	総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	自宅形式不明	0	1	2	2	4	14	38	2	1	0	0	1	0	0	1	1	3	41
	回答数	64	146	46	170	87	356	579	75	136	29	22	111	89	80	24	252	157	517
	一戸建て	92%	93%	83%	96%	94%	94%	95%	95%	96%	79%	73%	96%	92%	93%	100%	93%	96%	95%
	連続住宅（長屋など）	5%	2%	2%	2%	6%	4%	4%	3%	1%	7%	9%	2%	2%	6%	0%	5%	3%	4%
	２階建て共同（アパートなど）	2%	1%	11%	1%	0%	0%	0%	3%	1%	7%	14%	1%	2%	0%	0%	0%	0%	0%
	3~5 階建て共同	2%	3%	4%	1%	0%	1%	0%	0%	1%	7%	0%	0%	3%	1%	0%	2%	1%	0%
	６階以上郷土	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	その他	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	5%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
自動車利用	総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	自動車利用不明	7	3	1	1	0	5	45	8	1	0	1	0	2	0	2	7	12	160
	回答数	57	144	47	171	91	365	572	69	136	29	21	112	87	80	23	246	148	398
	車自由	26%	94%	100%	100%	99%	98%	88%	30%	93%	97%	95%	100%	95%	100%	83%	88%	80%	41%
	乗合可	28%	2%	0%	0%	0%	1%	3%	38%	1%	0%	0%	0%	2%	0%	9%	8%	12%	30%
	交通弱者	46%	4%	0%	0%	1%	1%	9%	32%	6%	3%	5%	0%	2%	0%	9%	4%	8%	29%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

3-1-2　各段階の充実感と潜在的活動要求

ここではLCの各段階における、日常生活の充実感をみる。

男女とも生涯を通じて「趣味」「休養」に充実を感じる人が多い。また、働き盛りの段階では男性と有職女性は「仕事」、無職女性は「育児・家事」の選択が多く、各段階には特徴がある。また、結婚までは「友人と一緒」、結婚後は「家族と一緒」が多いなど、段階によって生活の充実感は大きく変化する。これらは地域施設の選択状況や利用の際の価値観にも影響すると考えられる。

次に、充実感２種の回答の仕方により、生活者個人が生活を充実していると感じる行動と要求を探る。次頁上段に示すように、充実を感じる行動の組み合わせから回答パターンを10に類型し、さらに余暇時間に行う選択行動があるかないか、選択行動の目的意識が高いか低いかにより４類型する（「非選択行動のみ」、目的意識が「低のみ」「低＋高」「高のみ」の４種と「その他」）。これらを潜在的活動要求と呼ぶ。

LCの各段階の**潜在的活動要求**をみる（図3-1）。

仕事あるいは家事に充実を感じる「非選択行動」は有職女性の｛子ども成長期｝で１割程度の回答がみられる他は、他の段階では殆どみられない。逆に言うと、目的意識の高低はあるが、生活者は余暇を充実する為の選択行動を必要としている。

上記に加え、ひとりでの休養、家族との団らん・旅行といった、余暇時間に他者との交流をしない（つまりは、自宅で済ませられる）行動に充実を感じる人を「目的意識低のみ」とする。この選択は、特に女性の結婚後から子どもが幼い頃までは高く、自宅で家族で過ごせることに充実を感じている。

一方、友人と過ごすこと、趣味や習い事、団体活動や自主勉強といった、ある種の交流や高い目的意識をもった行動に充実を感じる人を「目的意識高あり」とする（分類上は「目的意識低＋高」「目的意識高のみ」に分けている）。いずれの段階でも半数あるいはそれ以上の人がこれらの行動に充実を感じている。逆に言うと、個人が生活を充実したものにするためには、余暇時間に高い目的意識をもった行動を行うことが必要といえる。

ここでの高い目的意識をもった行動とは、既に顕在化している活動（団体活動等）のほかに、潜在的に有している要求（友人との雑談等）が挙げられるが、非選択行動と違い、自宅以外の場所で行うことが多い内容である。従って、生活を充実する為には、個人の行う活動の受け皿となる場所が必要となる。

以上から、段階によらず、人々が余暇活動を行うことが生活を充実させるために必要であり、それらの（自宅でだけでは済ませられない）活動の受け皿も必要となる。

行動の種類	目的意識	充実を感じるとき
非選択行動	-	1. 仕事・勉強
		2. 家事・育児
選択行動	低い	3. ひとりで休養
		4. 家族と団らん・旅行
	高い	5. 友人と雑談・旅行
		6. 趣味
		7. 習い事
		8. グループ・団体活動
		9. 自主的な勉強
10. その他		

生活の充実度の回答パターン	
①非選択重視	1+2
②非選択必要	1or2 (+10)
③両方必要 / 低	1or2+3or4
④両方必要 / 高	1or2+5-9
⑤選択必要 / 低	3or4 (+10)
⑥選択重視 / 低	3+4
⑦選択重視 / 高＋低	3or4+5~9
⑧選択必要 / 高	5~9 (+10)
⑨選択重視 / 高	5~9+5~9
⑩その他	10

分類			回答パターン
非選択行動のみ			①②
選択行動あり	目的意識低のみ		③⑤⑥
	目的意識高あり	目的意識高＋低	⑦
		目的意識高のみ	④⑧⑨
その他			⑩

[潜在的活動要求の整理]

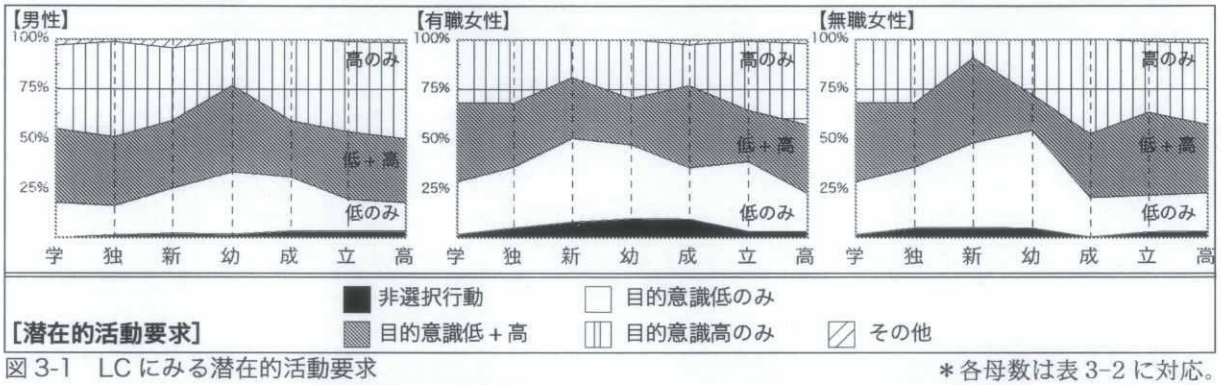


図 3-1　LC にみる潜在的活動要求　　＊各母数は表 3-2 に対応。

表 3-2　LC にみる生活の充実感と潜在的活動要求

		男性							女性										
		学生期	独身期	新婚期	子ども幼少期	子ども成長期	子ども独立期	高齢期	学生期	独身期	有職・新婚期	無職・新婚期	有職・子ども幼少期	無職・子ども幼少期	有職・子ども成長期	無職・子ども成長期	有職・子ども独立期	無職・子ども独立期	高齢期
	総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	職業不明	2	11	4	6	6	25	62	2	10	3	1	5	0	3	0	17	9	58
	回答数	62	136	44	166	85	345	555	75	127	26	21	107	89	77	25	236	151	500
生活の充実感	仕事・勉強	21%	24%	34%	30%	49%	38%	21%	24%	36%	38%	5%	38%	8%	36%	12%	41%	9%	14%
	育児・家事	0%	1%	7%	5%	0%	1%	1%	1%	3%	19%	24%	23%	45%	10%	4%	3%	7%	5%
	家族と一緒	8%	18%	52%	70%	54%	40%	34%	17%	19%	62%	67%	52%	62%	45%	40%	40%	42%	30%
	友人と一緒	50%	33%	9%	8%	4%	10%	17%	57%	49%	15%	38%	17%	19%	29%	24%	28%	27%	28%
	休養	21%	29%	14%	22%	25%	24%	25%	29%	24%	27%	19%	31%	17%	26%	40%	26%	23%	28%
	趣味	56%	67%	61%	45%	47%	56%	52%	44%	37%	27%	24%	21%	24%	32%	48%	31%	49%	42%
	習い事	3%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	4%	6%	4%	5%	2%	1%	3%	0%	4%	5%	7%
	団体活動	8%	5%	9%	4%	7%	6%	13%	4%	5%	0%	5%	7%	10%	3%	8%	6%	11%	13%
	自主学習	11%	4%	0%	1%	2%	3%	8%	5%	4%	4%	5%	0%	1%	3%	12%	4%	11%	4%
	その他	3%	1%	5%	2%	0%	2%	5%	3%	4%	0%	0%	2%	3%	3%	4%	3%	5%	6%
	総計	182%	182%	191%	188%	188%	182%	178%	189%	187%	196%	190%	193%	190%	190%	192%	186%	188%	176%
潜在的活動要求	総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	活動要求不明	2	11	4	6	6	25	62	2	10	3	1	5	0	3	0	17	9	58
	回答数	62	136	44	166	85	345	555	75	127	26	21	107	89	77	25	236	151	500
	非選択行動のみ	0%	1%	2%	2%	4%	3%	3%	1%	5%	8%	5%	9%	4%	9%	0%	3%	3%	3%
	選択行動あり 目的意識低のみ	18%	15%	23%	31%	27%	16%	14%	27%	31%	42%	43%	37%	49%	26%	20%	35%	19%	19%
	選択行動あり 目的意識高＋低	37%	35%	34%	43%	28%	34%	32%	40%	32%	31%	43%	23%	18%	42%	32%	26%	42%	35%
	選択行動あり 目的意識高のみ	42%	48%	36%	23%	41%	46%	48%	32%	32%	19%	10%	30%	28%	21%	48%	35%	36%	41%
	選択行動あり 目的意識高あり	79%	82%	70%	66%	69%	79%	80%	72%	65%	50%	52%	53%	46%	62%	80%	61%	77%	76%
	選択行動あり 小計	97%	97%	93%	98%	96%	95%	95%	99%	95%	92%	95%	91%	96%	88%	100%	96%	96%	95%
	その他のみ	3%	1%	5%	1%	0%	1%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	3%	0%	1%	1%	2%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

3-2　LC にみる余暇を過ごす場所の選択特性

次に、LC の各段階の人が、どのような場所で余暇を過ごしているかをみる。

アンケート（調査１）から、各個人に余暇を過ごす場所を最大４件選択してもらっている。これらを用いて、余暇を過ごす場所の選択パターンと、選択割合をみる。

＊　アンケートにおける選択肢は「自宅」「職場・学校」「友人宅」「コミュニティ施設（公民館、集会所、市民センター）」「地方文化施設」「美術館」「スポーツ施設」「教育施設」「商業施設」「娯楽施設」「飲食店」「公園」「自然（海や山）」「その他」の 15 項目。「コミュニティ施設」以下を「地域施設」とする。

3-2-1　各段階の余暇を過ごす場所の選択パターン

ここでは各段階の選択パターンをみる。

選択パターンは「自宅」「職場・学校」「友人・知人宅」、及び「地域施設」の組合せであり、「自宅」の選択有無と「地域施設」の選択有無により４つの大分類、15 の小分類とする（図 3-2：第１章参照）。

まずは男性をみる。

「自宅」と「地域施設」の有無による４つの大分類をみると（15% 以上の回答は灰色で色付け）、どの段階でも［自宅あり－地域施設あり］が最多であり、地域施設が余暇を過ごす上で悠揚されている。但し、{高齢期}だけは［自宅あり－地域施設あり］のほか、［自宅なし－地域施設あり］と［自宅あり－地域施設なし］も選択が多い。

小分類をみると（15% 以上の回答は黒塗）、各段階で余暇を過ごす場所の選択の仕方が明確に異なっていることが分かる。

{学生期} では「自宅＋友人宅＋地域施設」が最も多い。それに「学校」を加えた組み合わせまで含めると半数以上が、性格の違う多くの場所を使い分けている。

{独身期} と {新婚期} は選び方が似ており、「自宅＋地域施設」と「自宅＋友人宅＋地域施設」が多い。この段階までは「友人宅」を含めた組み合わせが 15% を越えているが、LC の段階進展に伴い徐々に割合は減少していく。仕事を始め、家庭をもつにつれ、友人とはなかなか会えなくなる現象を示している。これは {子ども成長期} まで続く。

{子ども幼少期} と {子ども成長期} も似ており、15% 以上は「自宅＋地域施設」だけになる。また、徐々に「自宅のみ」の選択も増え始める。

変化が表れるのは {子ども独立期} である。「自宅＋地域施設」は依然多いが、それまで減少傾向にあった「自宅＋友人宅＋地域施設」

が再び増加する。［職業］に変動がある段階とも一致し、余暇時間が増えることに起因すると考えられる。

そして、男性の一生を通じて最も主な選択肢が多様化するのが｛高齢期｝である。｛子ども独立期｝の選択肢に加え、この段階では「地域施設のみ」と「自宅のみ」も15%以上となる。自宅で余暇時間を過ごさず地域施設を求める人と、自宅に引きこもる人といった両極端なパターンがみられる。

次に女性をみる。

４つの大分類は男性と傾向が似ており、どの段階でも［自宅あり－地域施設あり］が最多である。｛高齢期｝が［自宅あり－地域施設あり］のほか、［自宅なし－地域施設あり］と［自宅あり－地域施設なし］も選択が多いことも共通しているが、｛有職・子ども独立期｝のみ「自宅あり－地域施設なし」も少なくない。

小分類をみると、｛子ども独立期｝までは職の有無によらず「自宅＋地域施設」と「自宅＋友人宅＋地域施設」の２パターンが筆頭であり続ける。仕事による拘束時間の長い「勤労者」が職業として多くの割合を占める男性よりも、時間的余裕があることが大きな背景であろう。さらに、子育て中などに、子どもの知り合いの親同士で意気投合して知り合いをつくるなど、友人を増やせる機会も格段に多いことが利点である。｛高齢期｝の選択肢も男性に近い。

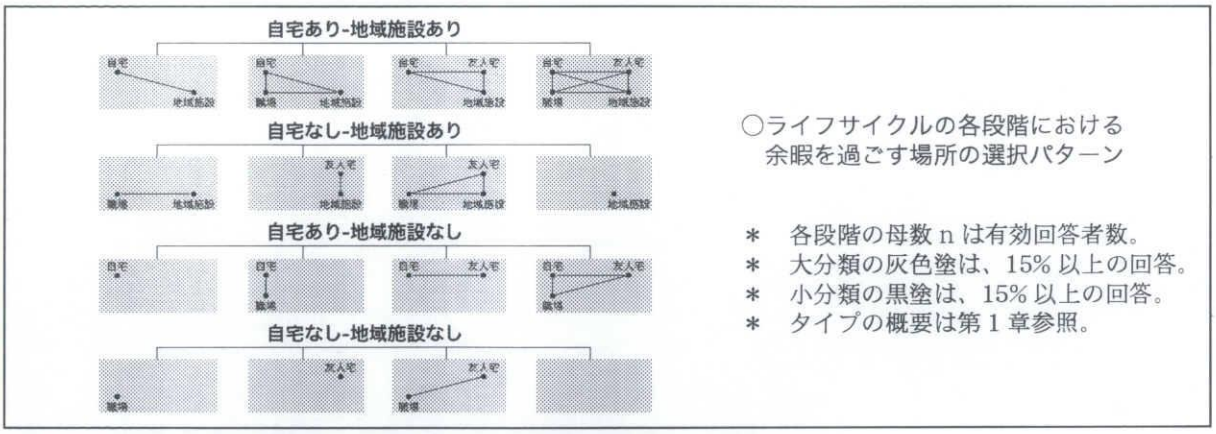
余暇時間を過ごす場所の選択パターンの特徴を以下に示す。

○ 男女ともに［自宅あり－地域施設あり］、ひいては「自宅＋地域施設」のタイプが最も多く選択されており、どの段階の人々にとっても地域施設が余暇を過ごす場所となっており、余暇を過ごす自宅以外の場所への需要が高いことが窺える。

○ 男女間の大きな違いとしては、「友人宅」の選択が“働き盛り”の段階を中心にして継続されるか否かである。特に、男性については「友人宅」が選択肢から少なくなるが、その分「地域施設」が代替としての位置づけになり得ると考えられる。

○ 最も選択肢が多様化する｛高齢期｝については、自宅で余暇時間を過ごさない「地域施設のみ」のタイプと、自宅に引きこもる「自宅のみ」のタイプといった両極端なタイプがみられる。

○ 上記に補足すると、“自宅で余暇時間を過ごさない人”の一部は高齢者が多いことも明らかになった。これは前節でみたように、高齢者は単身世帯の割合が他の段階より高く、自宅にひとりでいることを望まないためと推察できる。こういった、自宅で過ごすことに充実できない人たちにとっても、その代替となる地域施設の整備は重要であろう。



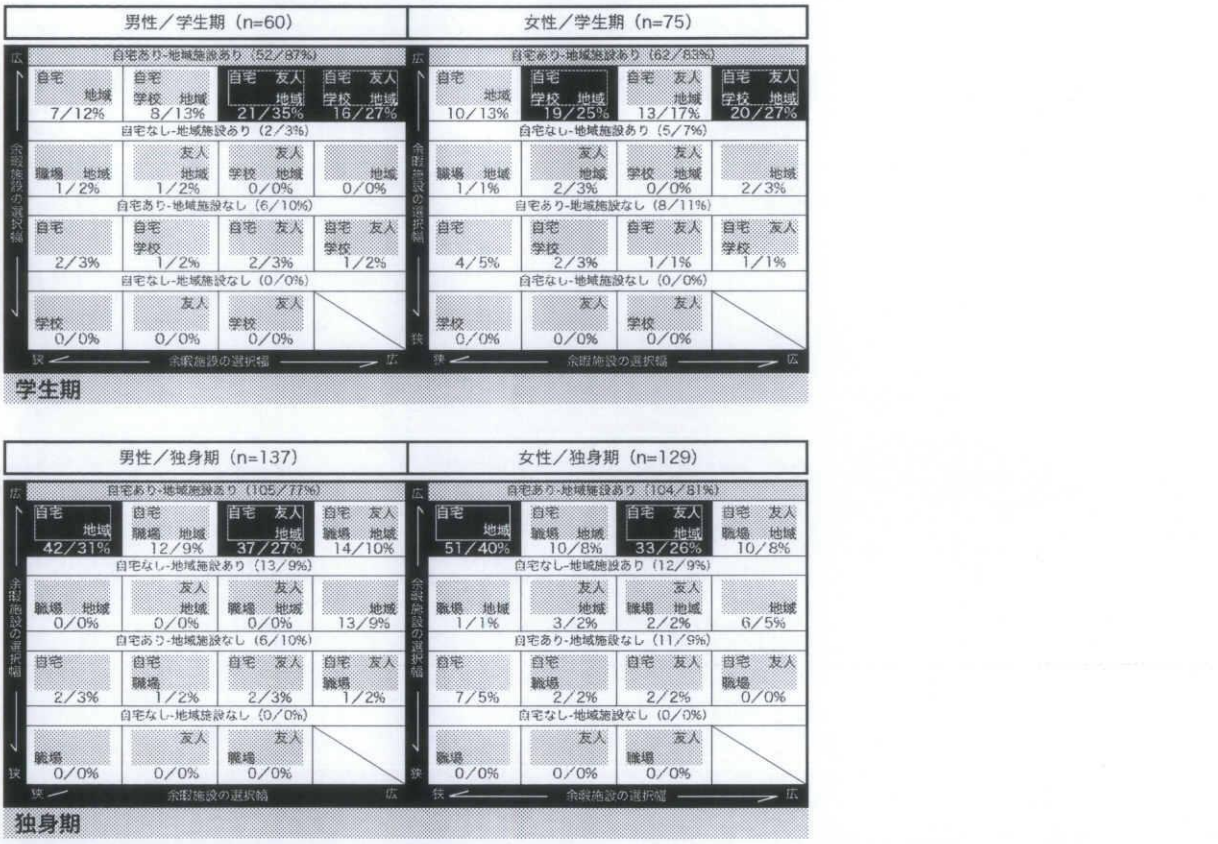


図 3-2　各段階の余暇を過ごす場所の選択パターン　1/2

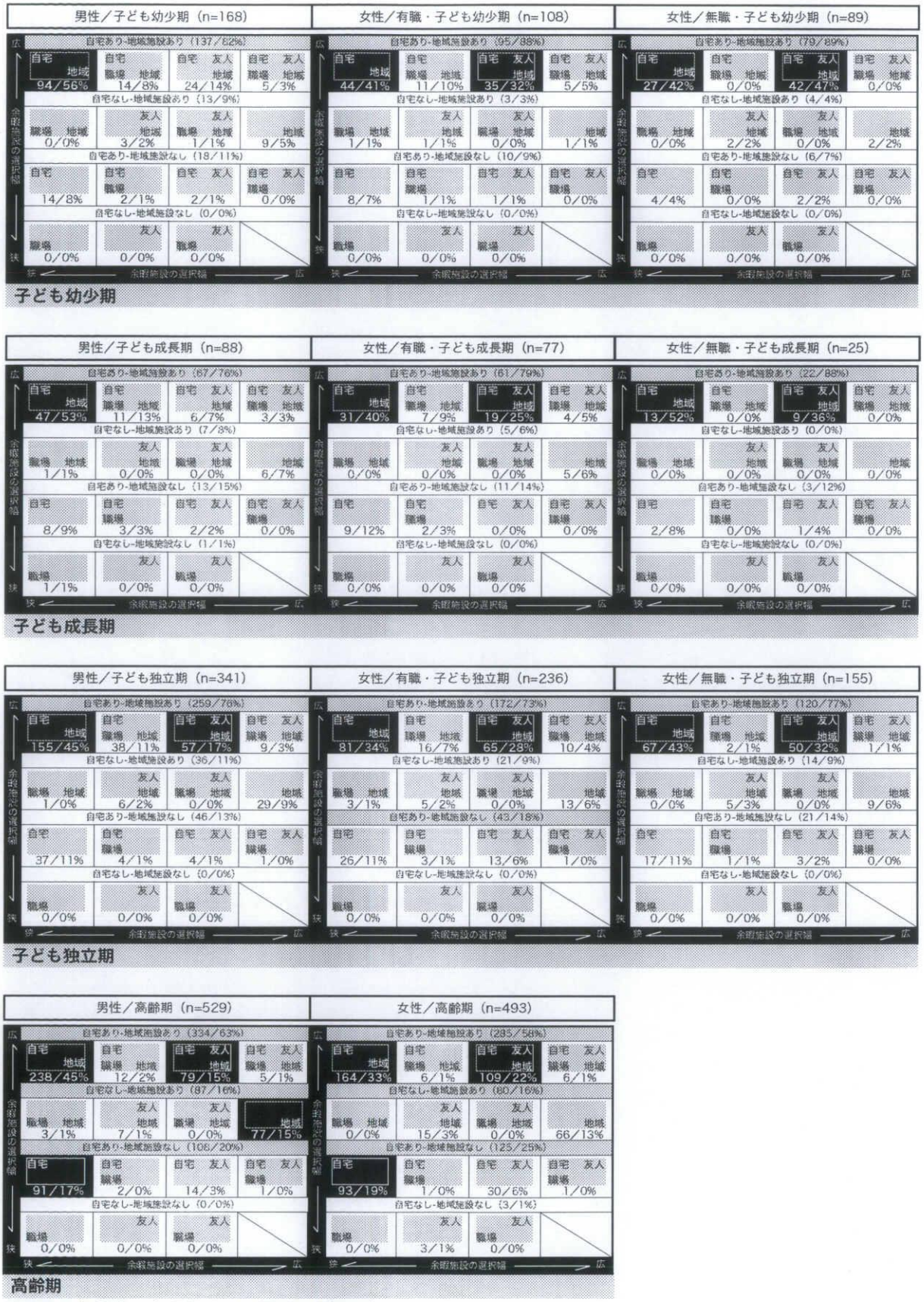


図 3-2　各段階の余暇を過ごす場所の選択パターン　2/2

3-2-2　各段階の余暇を過ごす場所の選択割合

次に、各段階の「自宅」「職場･学校」「友人･知人宅」及び「地域施設」の選択割合の推移をみる（図 3-3）。

前項にて選択パターンから選び方の傾向をみたので、ここでは余暇を過ごす場所の選択の幅、つまり最大４件選択に対する平均選択箇所数（図中の７項目の合計：一番上の線）に着目する。図の見方は横軸の左端を｛学生期:図中では略記｝とし、次の目盛が｛独身期｝と続き、LC の各段階を示す（以降の同形式の図も同様）。

図 3-3 から、男女とも｛学生期｝から｛独身期｝にかけて、つまり就職を機に平均選択箇所数が減少している。減少しているのは「職場・学校」と「友人・知人宅」である（前述のタイプの変遷とも合致）。前者は生活者個人にとっては同様に所属先であるが、「学校」（同世代の友人と一緒に過ごす場所）と「職場」（仕事上の関わりが主。仕事仲間は異なる段階の人であることもしばしばある）の違いが大きい。後者は仕事による時間的拘束の発生に加え、就職に伴う転居により馴染みの友人に会いにくくなることが背景にある。

｛新婚期｝以降は職の有無によって異なる傾向を示す。

職をもつ男性と有職女性は、結婚を機に「地域施設」の選択が増加するが、以降は（程度の違いはあれ）徐々に平均選択箇所数は減少していく。

一方、無職女性は「職場」の選択肢がなくなる分｛新婚期｝では平均選択箇所数は落ち込むが｛子ども幼少期｝｛子ども成長期｝では再び増加する（以降は減少）。子育て期間の真っ最中であり、子育ての場として、また、子どもを介してできた知り合いと過ごすなど理由は様々であろうが、「地域施設」の利用が増加する。

男性と有職女性の傾向が似通っていることを含め、職の有無による違いは相当にみられる。

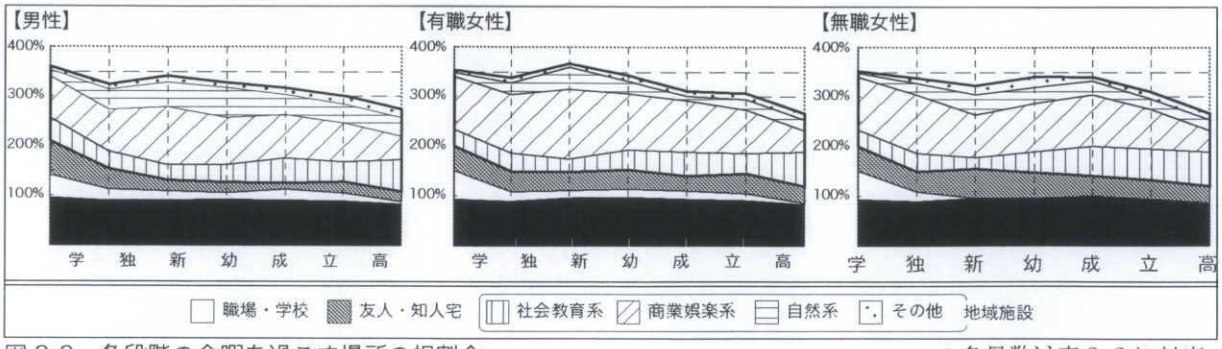


図 3-3　各段階の余暇を過ごす場所の択割合　　＊各母数は表 3-3 に対応。

3-2-3　利用する地域施設の内訳

前項では、地域住民の余暇を過ごす場所の選択割合は、LC の各段階によって特徴的に異なっていることが明らかとなった。本項では「地域施設」に着目し、その内訳をみる。図 3-4 は前項でみた図 3-3 の「地域施設」を取り出したものである（詳細は表 3-2）。

まず「地域施設」全体の傾向をみる。

男女とも｛学生期｝から｛独身期｝にかけて、つまり就職を機に「地域施設」は増加しており、「自宅」等も含めた前述の考察とは逆の傾向を示す（自動車を自由に使用できる者が飛躍的に増加し、生活の範囲が拡大するため）。

｛新婚期｝以降は前述と同様、職の有無によって異なる傾向を示す。男性と有職女性は｛新婚期｝まで増加した後、減少する傾向である。一方無職女性は｛新婚期｝で一旦「市域施設」の選択が落ち込んだ後、｛子ども幼少期｝｛子ども成長期｝では再び増加する（以降は減少）。無職の新婚女性は大抵、結婚による転居により地域の施設を知らない状況に陥ることが背景にあると考えられる。

また、「社会教育系」「商業娯楽系」「自然系」「その他」の分類でみると、男女とも無職女性の｛新婚期｝を除き、｛子ども独立期｝までは「商業娯楽系」の割合が多い。民間のサービス・商品の多様性に公共施設が押されている格好である。しかし｛高齢期｝のみ「社会教育系」の割合が最大となる。言い換えると、LC の進展のなかで「社会教育系」への需要は｛新婚期｝を除き、加齢とともに増加しているといえる。

さらに各段階の施設種別の選択割合を図 3-5 に示す。

図中の縦軸は 12 の施設種であり、20% 以上の回答は黒塗している。

「商業娯楽系」の選択は段階によらず多いが、ここでは〈図書館〉〈コミュニティ施設〉〈地方文化施設〉〈美術館・博物館〉〈スポーツ施設〉〈教育施設〉からなる「社会教育系（公的施設）」に着目する。

20% 以上の選択は〈図書館〉が｛男性／学生期｝、｛女性／無職の子ども幼少期・子ども成長期｝のみであり、学生と（働いていない）主婦層といった比較的時間に余裕のある人々が多い。〈コミュニティ施設〉は男女とも｛高齢期｝のみが多く、〈スポーツ施設〉は男性の｛独身期・子ども成長期・子ども独立期｝が多いといったように、施設種によって利用者の偏りがみられる。

これらから、一人当たりの選択箇所数は加齢とともに減少するが、公共施設に限っては加齢とともに利用が増えること傾向であることが分かった。また、施設種単位でみると、ある程度決まった層が利用していることが窺える。

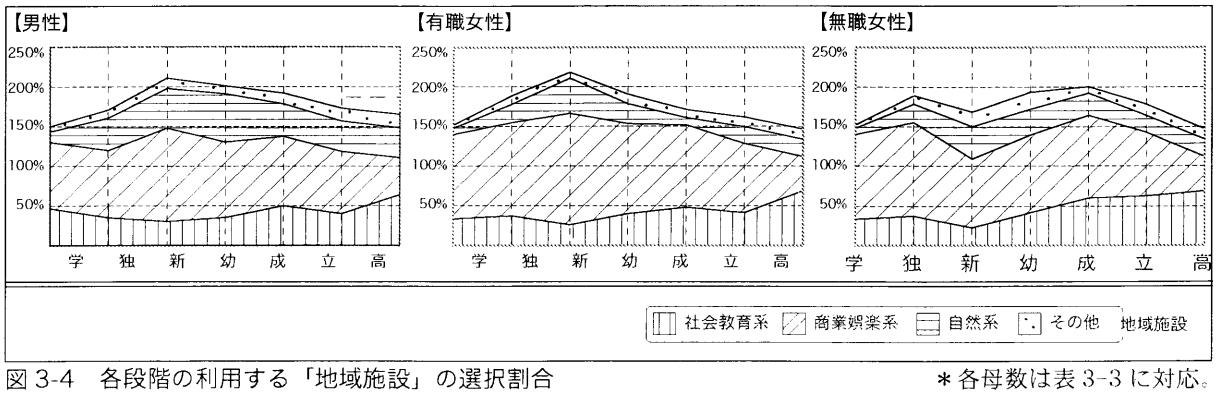
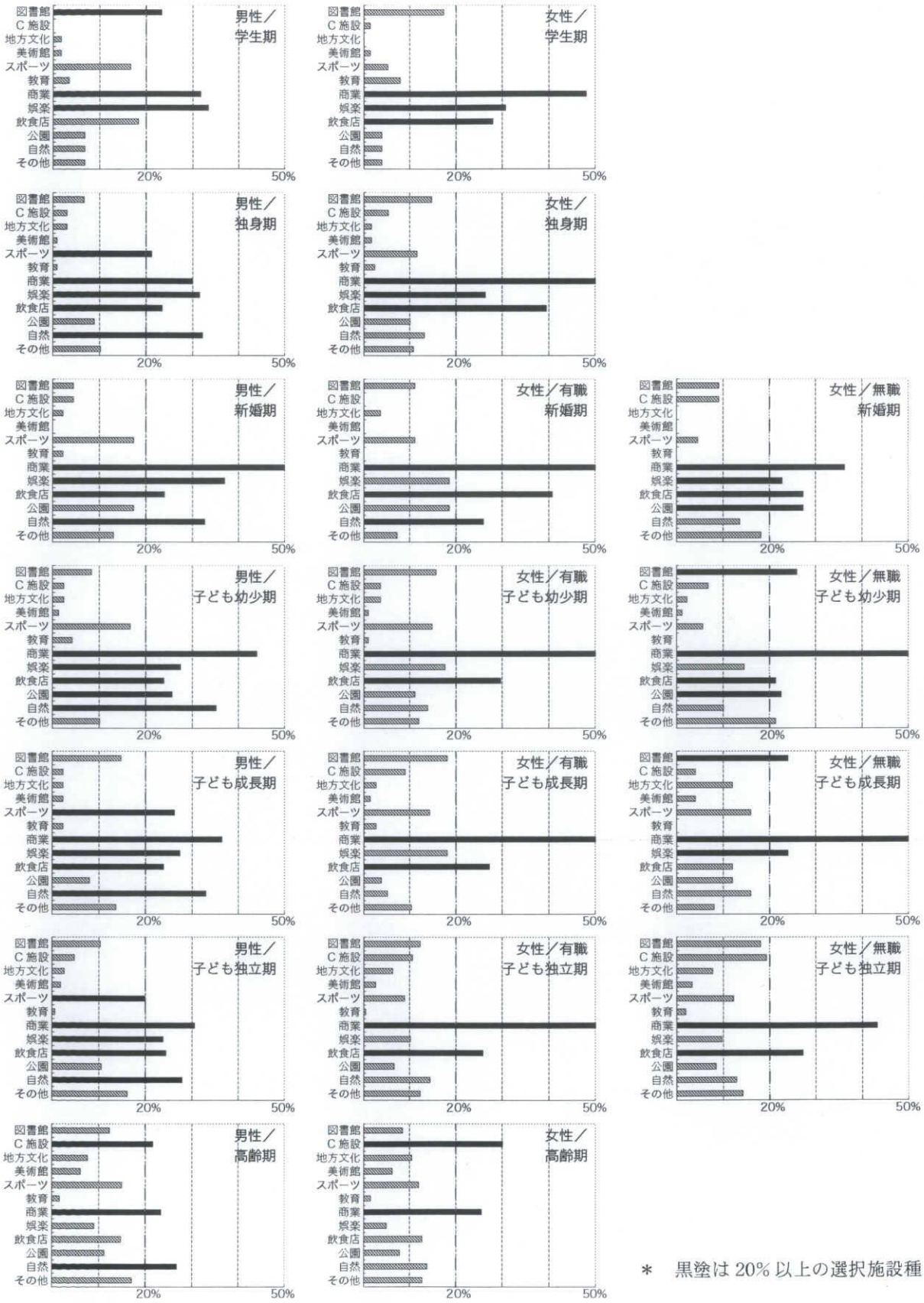


図 3-4　各段階の利用する「地域施設」の選択割合　　＊各母数は表 3-3 に対応。



＊　黒塗は 20% 以上の選択施設種

図 3-5　各段階の「地域施設」選択割合の内訳

＊各母数は表 3-3 に対応。

{利用する地域施設の所在地}

次に、利用する「地域施設」の所在地を施設種別に比較した図3-6をみる（具体的な施設名が不詳、もしくは未記入の場合が多く、回答数は少ないが）。利用する「地域施設」が旧市町村の内外かで分類し、施設種による圏域の違いがみられた（表3-5）。

自市町村内の利用が多い施設種は、〈図書館（66%）〉、〈コミュニティ施設（89%）〉、〈地方文化施設（69%）〉、〈スポーツ施設（65%）〉といった「社会教育系」が多く挙げられる。

LCの段階によらず利用が多い「商業娯楽系」は〈飲食店〉を除き他市町村が多い。利用形態の節で後述するが、多少足を伸ばすことも厭わない。

余暇を過ごす「地域施設」を横断的に捉え、LCの各段階の相違をみたのが図3-7である。［自動車利用］で「交通弱者」の割合が多い女性の｛高齢期｝は自市町村の施設利用が多く、近場に立地する「社会教育系」（特にコミュニティ施設）が重宝されている。一方同じく「交通弱者」の多い男女の｛学生期｝は別段市町村の域に縛られておらず、公共交通等を使いながら余暇の生活圏を広げている。

＊各母数は表3-5に対応。

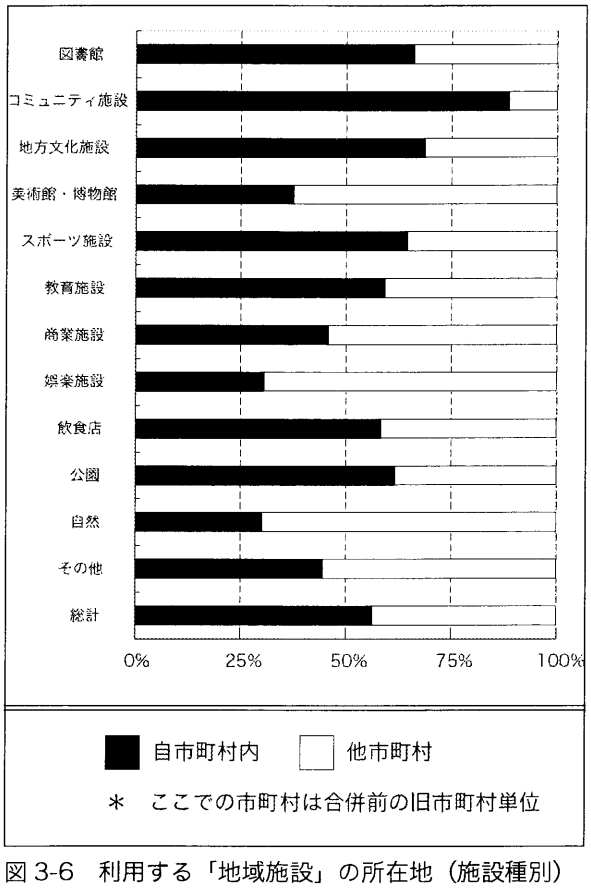


図3-6　利用する「地域施設」の所在地（施設種別）

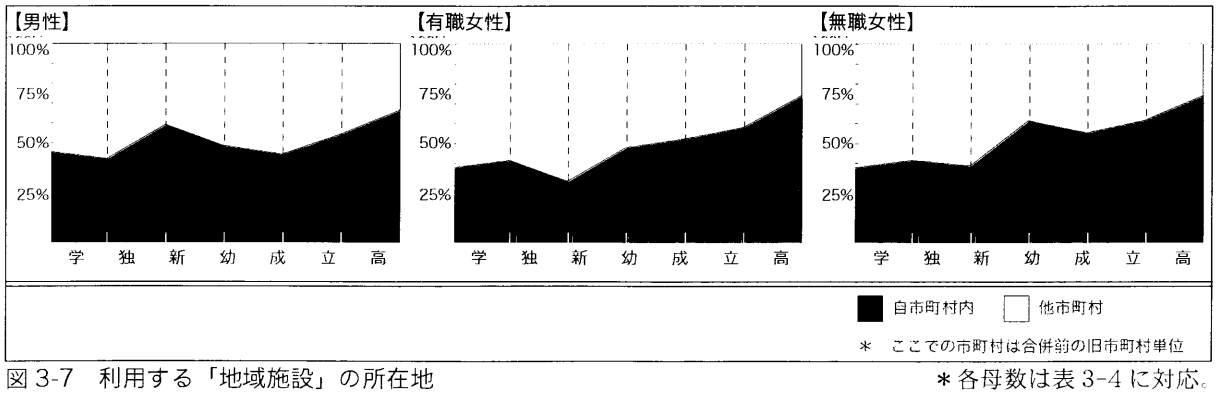


図3-7　利用する「地域施設」の所在地

＊各母数は表3-4に対応。

表 3-3　LC にみる余暇を過ごす場所の選び先（最大４件選択）

			男性							女性										
			学生期	独身期	新婚期	子ども幼少期	子ども成長期	子ども独立期	高齢期	学生期	独身期	有職・新婚期	無職・新婚期	有職・子ども幼少期	無職・子ども幼少期	有職・子ども成長期	無職・子ども成長期	有職・子ども独立期	無職・子ども独立期	高齢期
			64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
			4	10	2	4	3	29	88	2	8	2	0	4	0	3	0	17	5	65
			60	137	46	168	88	341	529	75	129	27	22	108	89	77	25	236	155	493
自宅			97%	91%	91%	92%	91%	89%	84%	93%	89%	96%	95%	97%	96%	94%	100%	91%	91%	83%
職場・学校			45%	22%	17%	13%	22%	16%	4%	57%	19%	15%	0%	17%	0%	17%	0%	14%	3%	3%
友人・知人宅			68%	41%	22%	21%	13%	23%	20%	49%	40%	37%	59%	39%	52%	30%	40%	40%	38%	33%
地域施設	社会教育系	図書館	23%	7%	4%	8%	15%	10%	12%	17%	15%	11%	9%	16%	26%	18%	24%	12%	18%	9%
		コミュニティ施設	0%	3%	4%	2%	2%	5%	22%	1%	5%	0%	9%	4%	7%	9%	4%	11%	19%	30%
		地方文化施設	2%	3%	2%	2%	2%	3%	8%	0%	2%	4%	0%	4%	2%	3%	12%	6%	8%	11%
		美術館・博物館	2%	1%	0%	1%	2%	2%	6%	1%	2%	0%	0%	1%	1%	1%	4%	3%	3%	6%
		スポーツ施設	17%	21%	17%	17%	26%	20%	15%	5%	12%	11%	5%	15%	6%	14%	16%	9%	12%	12%
		教育施設	3%	1%	2%	4%	2%	1%	2%	8%	2%	0%	0%	1%	0%	3%	0%	0%	2%	1%
	商業娯楽系	商業施設	32%	30%	57%	44%	36%	30%	23%	48%	52%	81%	36%	67%	62%	58%	68%	51%	43%	26%
		娯楽施設	33%	31%	37%	27%	27%	24%	9%	31%	26%	19%	23%	18%	15%	18%	24%	10%	10%	5%
		飲食店	18%	23%	24%	24%	24%	24%	15%	28%	40%	41%	27%	30%	21%	27%	12%	26%	27%	13%
	自然系	公園	7%	9%	17%	26%	8%	11%	11%	4%	10%	19%	27%	11%	22%	4%	12%	7%	8%	8%
		自然	7%	32%	33%	35%	33%	28%	27%	4%	13%	26%	14%	14%	10%	5%	16%	14%	13%	14%
	その他		7%	10%	13%	10%	14%	16%	17%	4%	11%	7%	18%	12%	21%	10%	8%	12%	14%	13%
総計			360%	324%	341%	327%	317%	301%	274%	352%	338%	367%	323%	344%	340%	312%	340%	307%	310%	266%

表 3-4　LC にみる利用する「地域施設」の所在地

	男性							女性										
	学生期	独身期	新婚期	子ども幼少期	子ども成長期	子ども独立期	高齢期	学生期	独身期	有職・新婚期	無職・新婚期	有職・子ども幼少期	無職・子ども幼少期	有職・子ども成長期	無職・子ども成長期	有職・子ども独立期	無職・子ども独立期	高齢期
総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
4 箇所選択	256	588	192	688	364	1480	2468	308	548	116	88	448	356	320	100	1012	640	2232
未回答・不明	210	495	153	535	278	1281	2103	260	432	90	75	339	263	249	71	832	474	1862
回答数	46	93	39	153	86	199	365	48	116	26	13	109	93	71	29	180	166	370
自市町村内	46%	42%	59%	48%	44%	54%	66%	38%	41%	31%	38%	48%	61%	52%	55%	58%	61%	74%
他市町村	54%	58%	41%	52%	56%	46%	34%	63%	59%	69%	62%	52%	39%	48%	45%	42%	39%	26%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表 3-5　利用する地域施設の所在地（最大４件選択／施設種別）

	社会教育系（公共）						商業娯楽系（民間）			自然系		その他	総計
	図書館	コミュニティ施設	地方文化施設	美術館・博物館	スポーツ施設	教育施設	商業施設	娯楽施設	飲食店	公園	自然		
選択総数	380	392	162	96	433	48	1161	502	657	326	614	407	5178
未回答・不明	50	155	44	19	153	16	514	326	515	135	360	360	2802
回答数	330	237	118	77	280	32	647	176	142	191	99	47	2376
自市町村内	66%	89%	69%	38%	65%	59%	46%	31%	58%	62%	30%	45%	56%
他市町村	34%	11%	31%	62%	35%	41%	54%	69%	42%	38%	70%	55%	44%
計	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

3-2-4　LC にみる生活構造の変化

ここまで、LC の各段階について、生活背景と余暇を過ごす場所の選択特性をみてきた。これらを生活構造と位置づけ、地域施設の利用に大きな影響を及ぼす、①潜在的活動要求の推移、②施設を過ごす場所の選択パターンの推移を、それぞれ生活背景の変化との関係をみながら整理する。

潜在的活動要求の推移をみると（図 3-8)、余暇を充実するために必要な選択行動を行う人の割合は生涯を通じて高い。そのうち、自宅以外で行う場合が多い、高い目的意識をもつ選択行動は男女ともに結婚後から子どもがある程度成長するまで減少する傾向にある。男性と有職女性は仕事に加え、家庭をもち、家族との時間が増えるため、個人としての活動要求は若干減少するのだ。無職女性はこの傾向がさらに顕著であるが、職を有することによる減少はないため、子どもがある程度成長してからは、個人としての活動要求は再び元の水準に戻る。つまり、職による阻害を受けないため、自分自身の要求を実現しようという意識が強いといえる。また、子どもが独立し、退職するにつれて男女ともに高い目的意識をもつ選択行動への要求は高まる。

余暇を過ごす場所の選択の推移をみると（図 3-9)、男性は自宅を選択しない人は加齢とともに増え、退職期で比較的多い。高齢単身世帯および高齢夫婦の割合が増え、自宅で過ごすことに楽しみを見出せなくなることが懸念される。そのような人々に向けて、その代替となる場所の整備が求められる。また、女性は結婚後は自宅で過ごすことが多くなるため、子育てが終わるまでは自宅で過ごす場合が男性より多い。

地域施設の選択については、男女とも新婚期までは増え、それ以降徐々に減少していく。新婚期に増えるのは仕事にもある程度慣れた頃であり、また、子育て前であるため、他の段階に比べて生活に余裕があるためと考えられる。一方、退職してからの地域施設の選択は男女とも急激に減少する。これは個人の健康上の都合だけでなく、高齢になって自動車の利用を控えるようになり、遠方の施設には行きにくくなる事によると考えられる。特に高い目的意識をもちながら、活動の場がなく、要求を持て余している高齢者には、身近で余暇を過ごせる場所としての地域施設の整備が急務といえる。

以上から、地域住民は生涯を通じて余暇を充実して過ごす為の潜在的な余暇活動への要求を有しており、同時に余暇活動を行う、自宅以外の場所に対してもニーズを有していることが明らかとなった。但し、高齢者を始めとして、要求は有していても実際にはその要求を持て余し、地域施設を余暇を過ごす場所として使いこなせていない人がいることも懸念される。彼らがどのように地域施設を利用しているかを把握し、余暇活動を行いやすい場所の整備を行う必要がある。

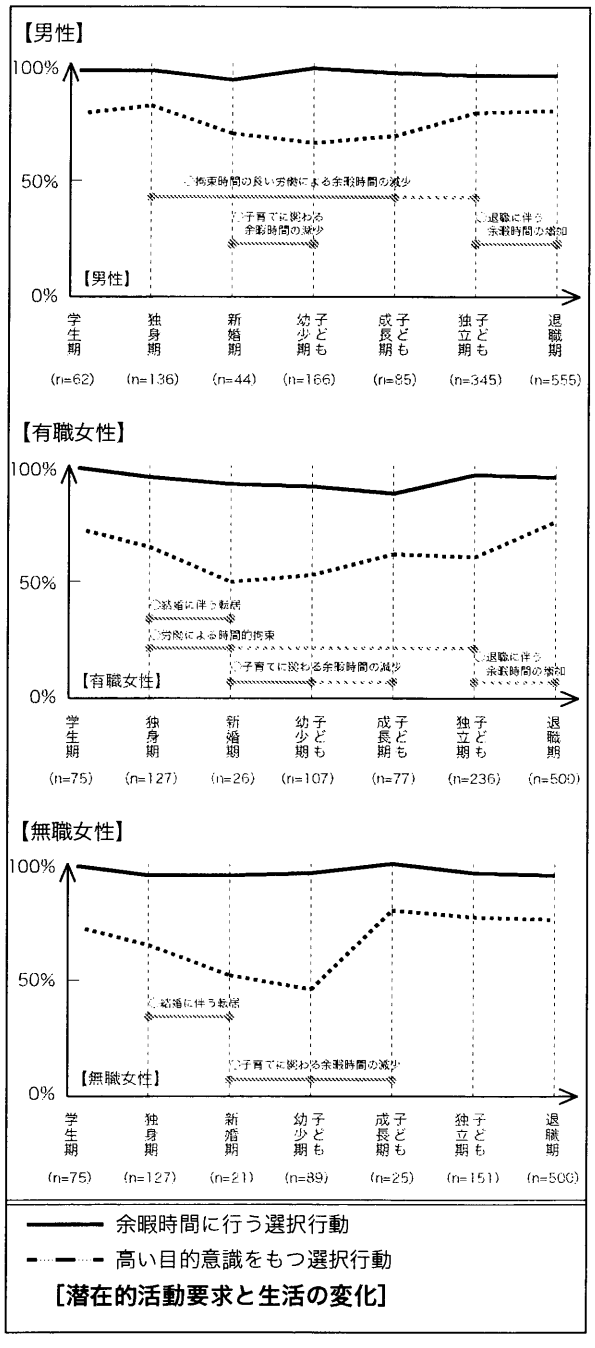


図 3-8　LC にみる潜在的活動要求の推移

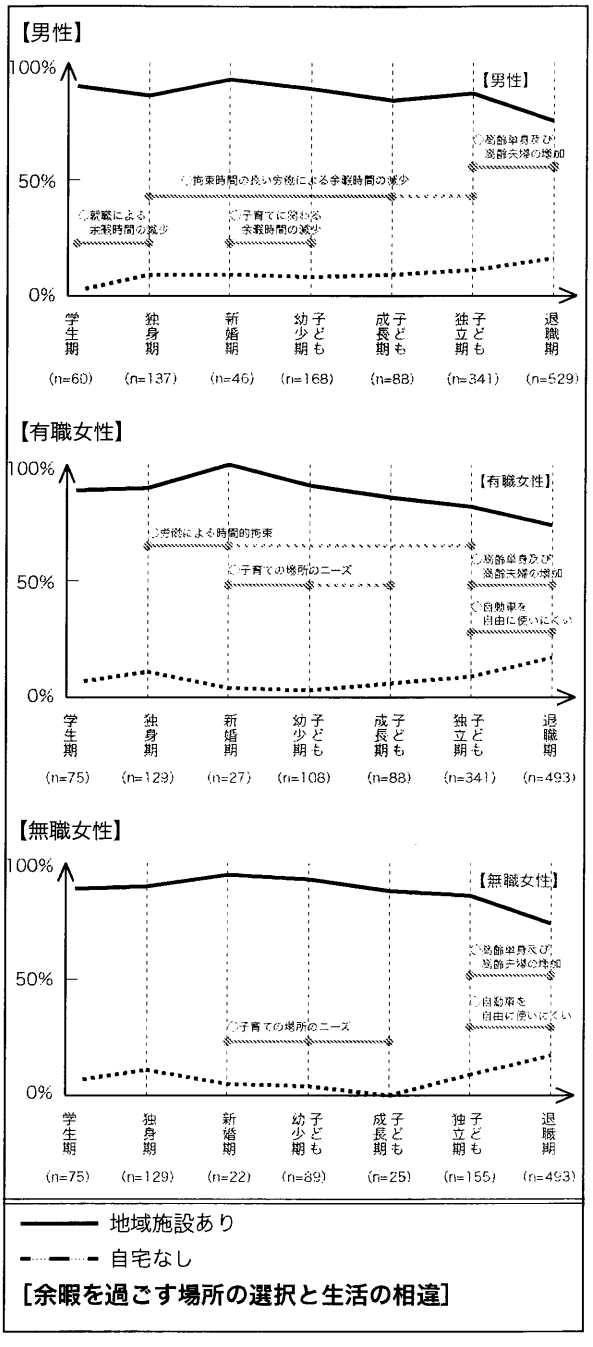


図 3-9　LC にみる余暇を過ごす場所選択の推移

3-3　LC にみる地域施設の利用形態

前章までに、地域住民が生涯を通じて余暇活動への要求をもち、実際に地域施設を利用していることをみてきた。但し、高齢者を始めとして、要求は有していても実際にはその要求を持て余し、地域施設を余暇を過ごす場所として使いこなせていない人がいることも明らかとなった。ここでは、地域住民が自宅や職場・学校以外で余暇を過ごす場所を選択する際の要因を捉えるため、余暇を過ごす場所のうち、最もよく利用する地域施設について、その利用形態を把握する。

ここでの利用形態とは［利用頻度］［交通手段］［同伴形態］［選択理由］といった基本的な項目に加え、生活者が地域施設を「どのような場所と捉えているか」を［施設像］としている。特に［施設像］は利用者側からみた、地域施設の選択要因として重要な項目と位置づける。

また、本節では生活者の地域施設への根底的なニーズを捉えるため、施設種によらず、利用する施設を横断的に「地域施設」として分析する。

また、それに先んじて、施設種別の分析も併せて行う。

3-3-1　施設種別の地域施設の利用形態

LC の段階ごとの地域施設の利用形態を捉えるに当り、施設種別の利用形態を把握しておく必要がある。ここでは、施設種別の利用形態をみる（表 3-6）。施設種別の回答割合は〈商業施設〉が全体の４割程度と多いが、「社会教育系（公共施設）」の施設群も少なくない。

［利用頻度］

利用頻度を『日常的』『定期的』『不定期』に分類して施設種を比較する（単一回答）。

〈地方文化施設〉〈美術館〉以外の施設種は半数ないし、それ以上の人々が『定期的』に施設を訪れており、生活者にとって身近な場所となっている。

特に〈スポーツ施設〉〈教育施設〉〈飲食店〉、施設ではないが〈自然〉は４人に１人が１週間に１回以上の頻度で訪れており、常連といえる人々が多く存在する施設種といえる。

［交通手段］

交通手段を、生活者が（比較的近い距離を、簡単に）自力で施設まで移動できる『徒歩＋自転車』、モータリゼーションにおいて必然である「自動車」を含む『自動車＋バイク』、さらに『公共交通』とタクシー等による『その他』の大分類４つで捉える（単一回答）。

〈コミュニティ施設〉と〈教育施設〉こそ６割程度であるが、施設までの交通手段としては、やはり『自動車＋バイク』が圧倒的に多い。

一方、『徒歩＋自転車』が多いのは〈コミュニティ施設〉と「自然系」である。特に前項でみた［施設の所在地］でも自市町村内、つまり近場の施設の利用が多い〈C 施設〉とも合致する。

また、「公共交通」を使っての利用者は、利用頻度が低く、規模的にも大型の〈美術館〉が多い一方、利用頻度の高い〈商業施設〉等の施設群では少ない。

[同伴形態]

同伴形態を『ひとり』『家族』『グループ』の３分類で捉える（単一回答）。

（この分類は第５章での主な切り口とする）。

利用単位として『ひとり』が多いのは〈図書館〉であるが、〈コミュニティ施設〉を除くどの施設種でもある程度存在する。

『家族』が多いのは〈商業施設〉と〈公園〉である。〈図書館〉や〈地方文化施設〉など一定の割合の利用者がいる施設もあるが、同伴形態が『家族』の利用者が１割未満の公共施設も少なくない。

一方、（小分類での選択肢の多さから絶対数が多いが、）『グループ』が主な利用単位なのは〈コミュニティ施設〉、〈スポーツ施設〉、〈教育施設〉といった公共施設が多く、前述の『家族』での利用が少ない施設種に該当する。また、特定余暇施設として選択の多い〈商業施設〉も『グループ』での利用は少ない。

[滞在時間]

調査２からの内容であるが、施設種別の滞在時間をみる（単一回答）。

（調査２は組織活動参加者のみ）。

各施設種とも「１～２時間」のやや長めの滞在をする人が多く、滞在時間の単位となっている。但し〈図書館〉や〈商業施設〉〈飲食店〉のように、「30分未満」及び「30～１時間未満」の、用事を済ませる場合や立ち寄り程度の滞在者も存在する。

一方、〈コミュニティ施設〉や〈教育施設〉のように、「２時間以上」の利用が半数を超える施設種もある（施設で習い事や催し物を行う場合が多いだろうが）。特に表中に２つの選択肢にまたがった破線部分は、傾向として「１～２時間」を基本としながらも、滞在時間の長さに明確な違いがあることを示している。

[選択理由]

施設の選択理由について、一緒に過ごす相手とその環境に関するものを『人的要因』、施設が提供するサービス水準、外部の環境、内部の環境をそれぞれ『施設のサービス』、『施設の立地』、『施設の内部』として４分類で捉える（最大２種回答）。

『人的要因』は施設種によらず大きな選択理由である。但し、『グループ』が主な利用単位である〈コミュニティ施設〉、〈スポーツ施設〉及び「商業娯楽系」などでは「家族友人と一緒に」が大きな理由である一方、『ひとり』が主な利用単位である〈図書館〉では「誰にも邪魔されない」が多いといった施設種による相違がみられる。前者は同伴者が施設の選択時に重大な要因となっていることを示し、現状の施設の利用者の住み分けに示唆を与えている。また、後者の場合、やや飛躍して捉えると、“誰と一緒に利用するか”といった同伴形態に応じて個室化・分節化できる空間のニーズにもつながると捉えられる。

『施設のサービス』は４分類のなかでは比較的重視されていない施設種が多い（“余暇を過ごす場所”であるという前提条件によるところが大きいだろうが）。公共施設のなかでは〈図書館〉が２割程度ある以外は、１割程度の選択である施設種が多い。但し〈商業施設〉については商品の質的・量的な魅力である「サービス内容が充実」の選択は少なくない。これは他の施設種よりも「ついで利用できる」（買い物のついでに立ち寄る、など）場合が多いことによるだろう。

『施設の立地』は施設の選択理由として大きな要因である場合が多い。「家や学校から近い」と「交通が便利」は施設へのアクセスの容易さにつながり、施設種によらず主要な選択理由となっている。また、前述したように「ついで利用できる」は〈商業施設〉で多く、「周

辺環境が良い（周辺に自然が多い等）」は〈公園〉で多いなど、施設種により固有の選択理由がみられる。

『施設の内部』についてみると、〈娯楽施設〉で少数選択がある以外は「施設内がにぎやか」を選択理由としている施設種はなく、特に公共施設では施設の静かさが好まれる。

［施設像］

生活者が“施設に抱くイメージ”を［施設像］とし、施設をどのような場所と捉えているかをみる。『人間関係を形成する場所』、『目的に取り組む場所』、『雰囲気を享受する場所』の３分類で捉える（最大２種回答）。

『人間関係を形成する場所』は、誰かと一緒に過ごすことを前提とした分類である為、当然『ひとり』が主な利用単位となる〈図書館〉等では意識されない。一方、『グループ』が主な利用単位となる〈コミュニティ施設〉等では半数近くの人々が、人間関係形成の場所として意識されている。

『目的に取り組む場所』は、利用者個人が個人の目的に取り組むことに重きが置かれ、施設種による相違が大きい。〈図書館〉では読書などで「自分の時間を過ごす」場所として、〈商業施設〉では買い物をして「用事仕事を済ませる」、〈娯楽施設〉では「遊ぶ」といったように、施設サービスと密接に関係している。

『雰囲気を享受する場所』は施設種によらず「気分転換」の割合が多く、自宅以外の場所を訪れる事自体が、日常生活から気分を一新する役目も担っている。一方、〈商業施設〉は滞在時間も長くなく「ふらっと立ち寄る」場所として、〈公園〉は「居心地よい」場所として意識されている。

また、公共施設に限定してみると、（従来の機能的なサービス提供による部分が大きいと考えられるが、）その全てで『目的に取り組む場所』の選択が『人間関係を形成する場所』及び『雰囲気を享受する場所』の選択よりも多い。一方、民間施設は『雰囲気を享受する場所』の選択が多く、地域住民の意識の上では明確に異なる位置づけとなっている。

以上、施設種別に生活者の利用形態をみてきたが、主な特徴を以下に整理する。

[利用頻度]

殆どの施設種で半数以上の人々が定期的に施設を訪れており、生活者にとって身近な場所となっている。また、施設を日常生活の一部として利用する人々、いわゆる“常連者”がみられる施設はある程度決まっている。

[交通手段]

モータリゼーションの必然であるが、生活者は施設までは自動車で訪れている場合が多い。それでも量的整備が進む〈コミュニティ施設〉などは、徒歩や自転車での利用もみられる。

[同伴形態]

施設種間での『ひとり』『家族』『グループ』の住み分けがされているようにもみえるが、実際は『家族』で過ごせる公共施設は多くない。これは言い換えれば、公共施設に家族で過ごす場所としての整備がなされていないために、〈商業施設〉をはじめとした民間施設へ利用者が移行せざるを得ない状況であることを示していると捉えられる。

[滞在時間]

各施設種とも「１～２時間」のやや長めの滞在をする人が多く、滞在時間の単位となっている。それを基本としながら、滞在時間の長さは施設種によって異なる（長く滞在する施設と、立ち寄るだけの施設に分かれる）。

[選択理由]

施設種によらず“誰と一緒に利用するか”が施設選択の重要な要因となっている。また、施設へのアクセスの容易さも肝心。余暇を過ごす為の場所であるには、施設のサービス水準への執着は薄い。多くに人は施設のにぎやかさ（騒がしさ）は好まず、静かな場所を求める。

[施設像]

余暇を過ごす施設として、個人的な目的を満たせる環境であることは重要であるが、同様に日常生活から気分を一新する場所であることも、施設種によらない施設のイメージである。これらは余暇を過ごす場所に対するニーズと言い換えてもいい。

また、公共施設は『目的に取り組む場所』の選択が多いが、民間施設は『雰囲気を享受する場所』の選択が多いといったように、地域住民の意識の上で両者は異なる位置づけとなっている。

これら施設種による利用形態の特徴を考慮しつつ、次項ではLCの各段階の利用形態をみていく。

表 3-6　最もよく利用する地域施設の利用形態　1/2（施設種別）

			社会教育系（公共）						商業娯楽系（民間）			自然系		その他	総計
			図書館	コミュニティ施設	地方文化施設	美術館・博物館	スポーツ施設	教育施設	商業施設	娯楽施設	飲食店	公園	自然		
利用頻度	選択総数		181	238	54	12	215	43	827	139	122	54	20	170	2075
	頻度不明		1	12	3	1	4	0	20	7	3	0	1	14	66
	回答数		180	226	51	11	211	43	807	132	119	54	19	156	2009
	日常的	ほぼ毎日	0%	1%	0%	0%	4%	14%	5%	2%	13%	7%	26%	19%	6%
		週に３回以上	6%	8%	2%	0%	20%	21%	15%	5%	13%	9%	5%	13%	12%
		小計	6%	9%	2%	0%	24%	35%	20%	6%	26%	17%	32%	31%	18%
	定期的	週に１回程度	22%	38%	18%	27%	45%	44%	36%	36%	24%	37%	32%	33%	35%
		月に２回程度	46%	27%	20%	9%	21%	12%	26%	29%	24%	22%	26%	17%	26%
		小計	68%	65%	37%	36%	66%	56%	61%	64%	48%	59%	58%	51%	61%
	不定期	月に１回程度	19%	21%	35%	9%	5%	2%	14%	20%	19%	17%	11%	12%	15%
		月に１回未満	8%	4%	25%	55%	5%	7%	5%	9%	7%	7%	0%	6%	6%
		小計	27%	26%	61%	64%	10%	9%	18%	30%	26%	24%	11%	18%	21%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
交通手段	選択総数		181	238	54	12	215	43	827	139	122	54	20	170	2075
	交通手段不明		1	9	2	1	4	0	18	4	3	0	0	15	57
	回答数		180	229	52	11	211	43	809	135	119	54	20	155	2018
	徒歩＋自転車	徒歩	6%	26%	4%	0%	2%	7%	2%	1%	7%	24%	30%	10%	7%
		自転車	7%	13%	12%	0%	5%	12%	4%	4%	3%	2%	0%	11%	6%
		小計	13%	39%	15%	0%	7%	19%	7%	4%	10%	26%	30%	21%	13%
	自動車＋バイク	バイク	4%	5%	4%	0%	3%	7%	1%	1%	0%	0%	5%	3%	2%
		自家用車	79%	53%	67%	82%	87%	53%	88%	84%	73%	74%	60%	63%	78%
		小計	83%	58%	71%	82%	90%	60%	89%	85%	73%	74%	65%	66%	80%
	公共交通		4%	3%	13%	18%	2%	19%	4%	10%	10%	0%	0%	6%	5%
	その他		0%	0%	0%	0%	1%	2%	0%	0%	7%	0%	5%	7%	1%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
同伴形態	選択総数		181	238	54	12	215	43	827	139	122	54	20	170	2075
	同伴形態不明		2	14	2	1	5	1	31	6	3	3	2	17	87
	回答数		179	224	52	11	210	42	796	133	119	51	18	153	1988
	ひとり		73%	6%	23%	27%	21%	12%	31%	37%	18%	27%	39%	24%	29%
	家族		23%	2%	23%	27%	7%	5%	60%	17%	33%	49%	11%	27%	35%
	グループ	隣近所の人	1%	23%	4%	9%	6%	7%	1%	0%	6%	0%	0%	8%	5%
		学生時代の友人	1%	0%	2%	9%	5%	2%	2%	11%	8%	0%	0%	3%	3%
		家族を通じての友人	0%	2%	0%	0%	2%	5%	1%	1%	5%	2%	0%	1%	1%
		趣味を通じての友人	1%	61%	42%	0%	50%	36%	2%	23%	13%	16%	39%	27%	20%
		職場や学校の人	2%	1%	0%	9%	6%	21%	3%	8%	13%	4%	6%	5%	4%
		その他	0%	5%	6%	18%	3%	12%	2%	2%	4%	2%	6%	5%	3%
		小計	4%	92%	54%	45%	72%	83%	9%	46%	50%	24%	50%	49%	36%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
*滞在時間	選択総数		131	447	68	37	88	12	45	27	13	24	2	10	904
	滞在時間不明		7	12	2	3	5	0	1	1	0	2	0	0	33
	回答数		124	435	66	34	83	12	44	26	13	22	2	10	871
	30 分未満		12%	3%	3%	0%	0%	0%	5%	4%	0%	14%	50%	0%	4%
	30 分～１時間		35%	1%	3%	26%	7%	8%	25%	4%	31%	23%	0%	10%	10%
	１～２時間		43%	41%	48%	47%	67%	33%	55%	50%	62%	23%	0%	50%	45%
	２時間以上		10%	55%	45%	26%	25%	58%	16%	42%	8%	41%	50%	40%	40%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

＊　［滞在時間］のみ調査２から。

表 3-6　最もよく利用する地域施設の利用形態　2/2（施設種別）

			社会教育系（公共）						商業娯楽系（民間）			自然系		その他	総計
			図書館	コミュニティ施設	地方文化施設	美術館・博物館	スポーツ施設	教育施設	商業施設	娯楽施設	飲食店	公園	自然		
選択理由	選択総数		181	238	54	12	215	43	827	139	122	54	20	170	2075
	選択理由不明		4	19	2	2	6	0	42	5	4	2	5	20	111
	回答数		177	219	52	10	209	43	785	134	118	52	15	150	1964
	人的要因	家族友人と一緒に	16%	35%	27%	20%	36%	37%	37%	36%	58%	29%	20%	33%	35%
		誰にも邪魔されず	43%	19%	17%	40%	20%	19%	14%	34%	25%	21%	27%	23%	21%
		小計	59%	54%	44%	60%	56%	56%	51%	70%	83%	50%	47%	55%	56%
	施設のサービス	サービス内容充実	11%	1%	2%	10%	10%	2%	21%	9%	17%	2%	7%	12%	13%
		職員の対応がよい	10%	6%	8%	0%	5%	5%	5%	4%	15%	0%	0%	5%	6%
		小計	21%	7%	10%	10%	15%	7%	26%	13%	32%	2%	7%	17%	19%
	施設の立地	家や学校から近い	21%	16%	12%	0%	22%	23%	23%	7%	13%	17%	13%	16%	19%
		ついで利用できる	7%	1%	10%	0%	4%	2%	27%	14%	3%	4%	0%	7%	14%
		交通が便利	8%	17%	12%	0%	13%	12%	20%	13%	11%	6%	7%	15%	16%
		周辺環境がよい	10%	7%	8%	20%	12%	5%	4%	5%	0%	46%	13%	8%	7%
		小計	47%	41%	40%	20%	51%	42%	75%	40%	26%	73%	33%	47%	56%
	施設の内部	内部の雰囲気がよい	11%	22%	27%	10%	24%	9%	11%	16%	16%	23%	0%	19%	15%
		施設内がにぎやか	0%	4%	0%	0%	0%	0%	4%	13%	3%	0%	0%	1%	3%
		施設内が静か	30%	8%	19%	20%	4%	2%	1%	2%	3%	13%	20%	3%	6%
		小計	41%	33%	46%	30%	28%	12%	16%	31%	22%	37%	20%	23%	25%
	その他		13%	19%	19%	30%	20%	37%	10%	10%	10%	4%	27%	22%	14%
	総計		181%	155%	160%	150%	170%	153%	176%	164%	174%	165%	133%	165%	170%
施設像（施設に抱くイメージ）	選択総数		181	238	54	12	215	43	827	139	122	54	20	170	2075
	施設像不明		6	12	3	1	9	0	36	9	6	1	1	15	99
	回答数		175	226	51	11	206	43	791	130	116	53	19	155	1976
	人間関係を形成する場所	人が集まる	0%	13%	6%	0%	2%	2%	0%	1%	0%	2%	0%	3%	2%
		家族友人と過ごす	6%	11%	14%	9%	14%	16%	19%	15%	42%	21%	16%	19%	17%
		知人に会える	1%	24%	8%	0%	13%	28%	2%	5%	13%	4%	5%	10%	8%
		小計	7%	47%	27%	9%	29%	47%	21%	20%	55%	26%	21%	33%	27%
	目的に取り組む場所	自分の時間を過ごす	59%	14%	33%	18%	27%	9%	12%	23%	18%	17%	26%	14%	20%
		用事仕事を済ませる	6%	7%	8%	0%	1%	9%	33%	2%	2%	0%	0%	10%	16%
		新しい発見をする	28%	11%	12%	45%	3%	7%	5%	1%	3%	4%	11%	10%	8%
		遊ぶ	1%	4%	6%	0%	12%	2%	6%	42%	4%	8%	26%	4%	8%
		好きな活動をする	13%	51%	31%	18%	41%	47%	3%	12%	2%	21%	32%	30%	19%
		小計	107%	87%	90%	82%	84%	74%	59%	78%	29%	49%	95%	68%	71%
	雰囲気を享受する場所	習慣的に行く	10%	6%	4%	0%	8%	7%	13%	2%	9%	15%	21%	12%	10%
		ふらっと立ち寄る	14%	5%	4%	0%	1%	5%	30%	7%	11%	9%	0%	7%	16%
		居心地よい	12%	5%	12%	9%	6%	16%	3%	12%	17%	25%	11%	15%	8%
		暇をつぶす	11%	3%	6%	0%	1%	7%	17%	9%	5%	8%	5%	4%	10%
		気分転換	25%	27%	43%	45%	50%	21%	28%	50%	37%	38%	32%	24%	32%
		休憩	2%	1%	2%	9%	0%	0%	1%	6%	14%	13%	0%	8%	3%
		小計	75%	47%	71%	64%	67%	56%	93%	86%	94%	108%	68%	70%	80%
	その他		1%	3%	2%	18%	9%	16%	8%	2%	7%	6%	0%	10%	7%
	総計		190%	184%	190%	173%	188%	193%	181%	187%	185%	189%	184%	180%	184%

3-3-2　各段階の地域施設の利用形態

前項では余暇を過ごす場所としての地域施設の利用形態を施設種別にみてきた。本項では、LC の各段階の利用形態の特徴を捉える。地域住民が最もよく利用する地域施設は表 3-7 の通りであるが、ここでは施設種によらず横断的に捉えて分析する。

最もよく利用する地域施設として地域住民が選択する施設は表 3-7 に示した通りであり、段階によっては「商業娯楽系」が非常に多い。それでも｛高齢期｝を始め「社会教育系」の選択も少なくない。「商業娯楽系」の選択が多いのは男女とも結婚後から子育て期の段階の人々であり、（以降の分析で後述するが）夫婦あるいは幼い子どもと一緒に過ごす場所としての公共施設のキャパシティの低さを示しているともいえる。

表 3-7　LC にみ最もよく利用する地域施設

		男性							女性										
		学生期	独身期	新婚期	子ども幼少期	子ども成長期	子ども独立期	高齢期	学生期	独身期	有職・新婚期	無職・新婚期	有職・子ども幼少期	無職・子ども幼少期	有職・子ども成長期	無職・子ども成長期	有職・子ども独立期	無職・子ども独立期	高齢期
総数		64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
未回答者		15	65	12	57	29	179	301	14	40	6	6	26	15	22	6	96	47	267
回答者数		49	82	36	115	62	191	316	63	97	23	16	86	74	58	19	157	113	291
（公共）社会教育系	図書館	14%	5%	0%	5%	13%	9%	11%	13%	9%	0%	6%	12%	12%	14%	16%	8%	12%	5%
	コミュニティ施設	0%	2%	3%	3%	2%	6%	21%	0%	5%	0%	6%	1%	4%	2%	5%	9%	12%	36%
	地方文化施設	2%	0%	0%	0%	3%	3%	3%	2%	0%	0%	0%	1%	1%	0%	11%	4%	2%	4%
	美術館・博物館	0%	2%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	1%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	1%	0%
	スポーツ施設	10%	24%	11%	9%	15%	23%	13%	0%	10%	4%	0%	7%	4%	7%	11%	5%	11%	9%
	教育施設	4%	1%	6%	4%	5%	2%	1%	13%	0%	4%	0%	1%	0%	3%	0%	1%	2%	2%
	小計	31%	35%	19%	22%	37%	42%	50%	27%	26%	9%	13%	22%	22%	26%	42%	29%	39%	56%
（民間）商業娯楽系	商業施設	29%	30%	61%	54%	35%	31%	24%	54%	46%	74%	75%	70%	72%	57%	53%	56%	47%	23%
	娯楽施設	20%	17%	17%	10%	15%	10%	7%	14%	8%	0%	6%	1%	1%	7%	5%	3%	2%	2%
	飲食店	6%	9%	3%	6%	10%	8%	5%	2%	14%	9%	6%	1%	4%	7%	0%	5%	4%	5%
	小計	55%	56%	81%	70%	60%	50%	36%	70%	69%	83%	88%	72%	77%	71%	58%	64%	53%	31%
その他		14%	9%	0%	8%	3%	8%	14%	3%	5%	9%	0%	6%	1%	3%	0%	7%	8%	13%
総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

[利用頻度]

利用頻度を『日常的』『定期的』『不定期』に大分類する（単一回答)、(図 3-10:以下同)。

前項でみた通り、いずれの施設種でも『定期的』の利用頻度が多いこともあり、各段階とも半数以上が『定期的』に施設を訪れている。但し、特に男性の｛新婚期｝から｛子ども成長期｝といった、結婚・子育ての期間は『日常的』の割合は少なくなる。この段階は、時間的拘束の大きい「勤労者」を職業とする人々が多く、仕事に時間をとられるのが大きな原因である。また、家庭を構え、子どもをもつため、そちらに時間をかけるようになるため、生涯を通じて最も施設利用から遠ざかる時期となる。

それでも、女性の有職者は男性ほど利用頻度が低くなく、パートなどの拘束時間の短い仕事をした後、地域施設を訪れることは可能といえる。これらは、施設自体の開館時間によるところが大きいと考えられ、開館時間の拡張（夜間開館の延長）により、若干ではあるが、勤労者男性の施設利用を促せる可能性はあるだろう。

一方、男性の｛高齢期｝や女性の｛学生期｝｛無職・子ども独立期｝のように、利用頻度が高く、日常生活の一部として地域施設で余暇を過ごす“常連”も存在する。

[交通手段]

交通手段を『徒歩＋自転車』『自動車＋バイク』『公共交通』『その他』に大分類する（単一回答)。

生活背景の［自動車利用］の項目と同様、男女とも｛学生期｝と女性の｛高齢期｝は『自動車＋バイク』の割合が少ない。その他の段階は殆どが『自動車＋バイク』である（安全を意識して運転を控えるため、男性の｛高齢期｝も若干少ない)。

『自動車＋バイク』以外の交通手段としては、男子学生は自転車を、女子学生は公共交通を利用する。一方、同じく自動車利用が少ない｛高齢期｝は公共交通をあまり利用していない（女性でも１割未満)。この時期は男女とも、量的整備がされている近距離型の〈コミュニティ施設〉を多く選択しているため、「徒歩」の割合が高いのだが、逆に捉えると、交通弱者の多い高齢者は遠くの施設を利用できない為に近場の施設を利用しているとも捉えることができる。

[同伴形態]

同伴形態を『ひとり』『家族』『グループ』に大分類する（単一回答)。

“誰と一緒に利用するか”は各段階でかなりの相違がある。

『ひとり』は生涯を通じて、常にある程度の割合で存在するが、特に男性の｛新婚期｝｛子ども成長期｝｛子ども独立期｝で多い。子育てが一段落した父親が、ひとりで施設利用している場合が多いといえる。

『家族』は男女とも｛独身期｝までは少ないが、以降増え始める。但し、増え始めの時期は同じだが、そこからの推移は異なる。男性は結婚後から子どもが幼い期間では半数以上であるが、｛子ども成長期｝以降は急激に減少する（ひとりでの利用が増え始める)。

一方、女性は職によらず末子の子育て終了まで家族との利用が高い割合を占める。男性よりも子育ての場として、子どもを伴って施設を利用する期間が長いことが分かる。余談であるが、この男女の相違から、女性の『家族』との利用の多くは子どもと出かけることと考えられ、男性が子育てを女性任せにしていることも露見している。

『グループ』はLCの段階でいうと上記に該当しない期間、つまり結婚するまでと、子育ての為の利用から離れた後に多くなる。その内訳は｛学生期｝では「学校の友人」、つまり同世代の友達が多い。所属先における人間関係であるが、これは他ではあまりみられず、学生の特徴いえる。このことは、就職して｛独身期｝になると、「職場の人」とはあまり一緒にいないことからも分かる（もちろんゼロではないが）。［余暇を過ごす場所の選択パターン］の項でも述べたように、職場の人間関係は異なる段階の人々で構成されている為、生活背景が異なる人同士で一緒に施設利用することはなかなか難しい。加えて、転居により古くからの友人とも会いにくくなる。

一方、｛高齢期｝の人々は「趣味を通じての友人」とともに施設を利用するようになる（男女とも｛子ども成長期｝あたりから増え始める）。これらの人々は共通の趣味をもつ友人と考えられ、多くの場合、何らかのサークル活動等で知り合う仲間と見なせるだろう。ちなみに、男性の方が女性よりも『グループ』の割合は少なく（代わりに『ひとり』が多い）、“組織化”しやすい女性とそうでない男性という構図が見られる。これは女性の方が時間的拘束が少なく、地域に友人をつくりやすいことによるところが大きい。また、男女ともに『グループ』での利用自体が子育て期を“谷底”に見なす、生涯を通じて“V字型”の構造となっている。

［選択理由］

施設の選択理由を『人的要因』『施設のサービス』『施設の立地』『施設の内部』に大分類する（最大２種回答）。

『人的要因』については、｛子ども幼少期｝を中心とした子育て期において、「家族友人と一緒に」が多い。幼い子どもと一緒に、子育ての場として利用できる施設を求めている回答が目立つ。

『施設のサービス』では、男女とも｛学生期｝から｛独身期｝にかけて「サービス内容充実」の回答が多くなる。生活者の圏域が自動車を自由に使えるようになることで広がり、より良いサービス水準を求めると考えられる。また、有職女性の｛子ども成長期｝も同項目の選択が多いが、仕事に拘束されながら自由時間を捻出するため、高いサービス水準を求めるのだろう。一方で男性は、特に結婚後は、サービス水準はあまり求めていない。むしろ『施設の立地』の回答が多く、時間をかけないで利用できるよう、アクセスの容易さを気にするようだ。

『施設の立地』について、特徴的なのが「家や学校から近い」の選択が男女とも｛子ども独立期｝以降で減少傾向にあることだ。［生活背景］から得られたように、この段階から生活の余暇時間が増加することも影響しているだろうが、むしろ常連として施設を利用する人々が少なくないことから、『施設の内部』の雰囲気など、施設の質的な側面を意識していることが窺える。

[施設像]

地域住民が“施設に抱くイメージ”を［施設像］とし、施設をどのような場所と捉えているかをみる。『人間関係を形成する場所』『目的に取り組む場所』『雰囲気を享受する場所』に大分類する（最大２種回答）。

『人間関係を形成する場所』の選択は３分類のなかでは総じて少ないが、男女とも｛高齢期｝では多い。特に「知人に会える」の回答が多く、高齢単身世帯が増える段階の人々にとって、他者とのつながりを確保する場所として位置づけ、重宝していると考えられる。

『目的に取り組む場所』は各段階で総じて多い。男性では｛学生期｝が最多で、子育て期になるにつれ減少・停滞し、子どもが独立してから再度増加する。子育て期は、『家族』との利用が増える時期でもあり、子育てを女性に任せやすい男性でも、個人的な目的よりも、子どもと一緒に利用できる、気分転換の場所を利用しているといえる。

一方、女性は結婚後の施設像に大きな相違がみられる。職を有する｛新婚期｝の女性は「用事仕事を済ませる」場所として地域施設を位置づけている（同時期、女性の施設の選択箇所数は生涯を通じて最も多い、図 3-3 参照）。但し、以降は仕事と家事・子育ての両立による多忙さからか、以降、退職までは地域施設の選択箇所数も、『目的に取り組む場所』の選択も減少し、代わりに『雰囲気を享受する場所』を求めるようになる（特に、「ふらっと立ち寄る」と「気分転換」が増え、短い時間に気軽に立ち寄ることができ、気分転換できる場所を求めるようになる）。

また、無職女性は｛子ども成長期｝を境に『目的に取り組む場所』の選択が増えている。ちょうど『家族』での利用が減少し、『ひとり』と『グループ』が増え始める時期である。子育てが一段落付き、自分の楽しみのために何らかの活動を始める、転機となる段階といえる。

＊　女性の｛学生期｝｛独身期｝｛高齢期｝は同値。

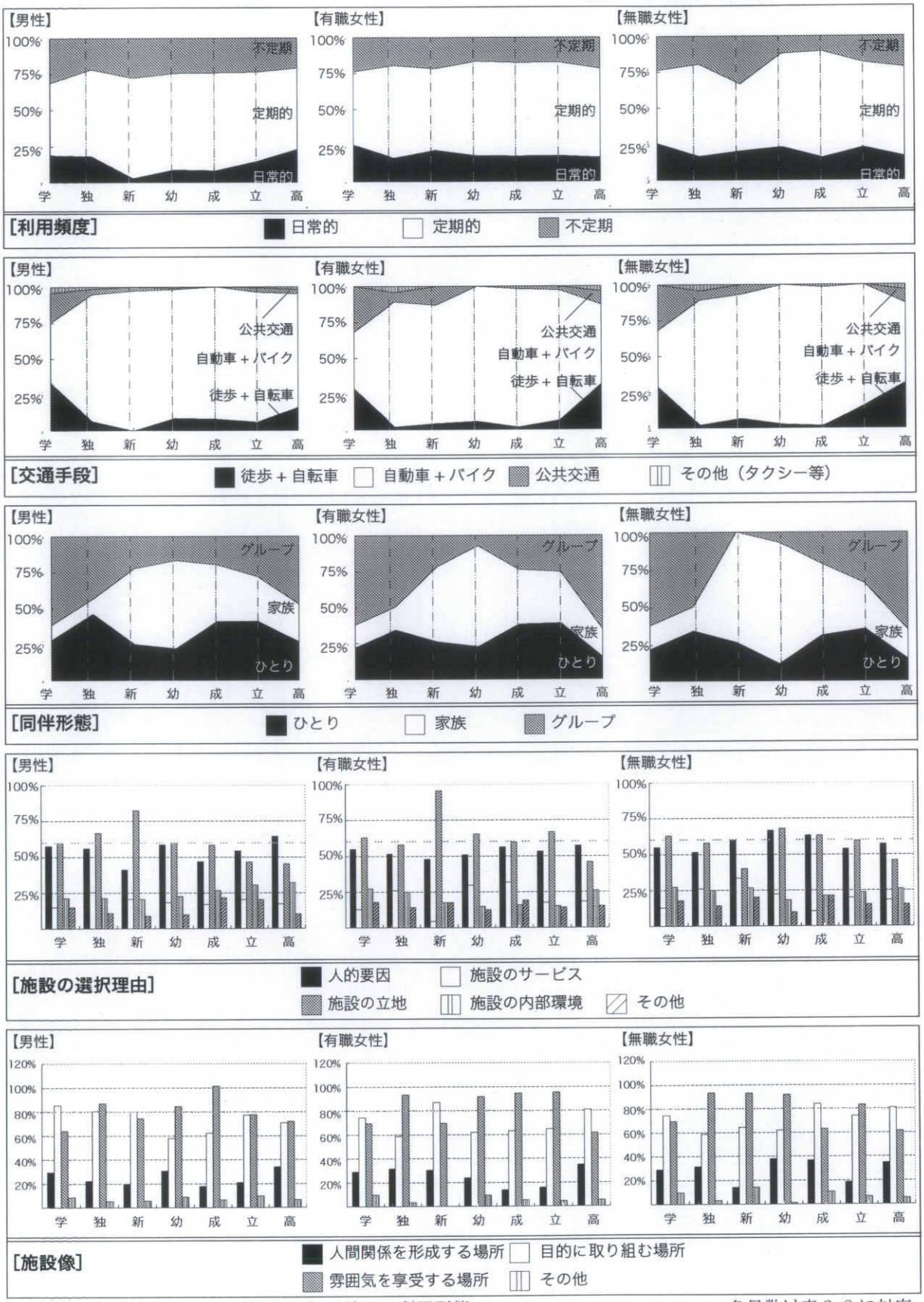


図 3-10　各段階の最もよく利用する知己施設の利用形態　　＊各母数は表 3-8 に対応。

表 3-8　各段階の最もよく利用する地域施設の利用形態　1/2

			男性							女性										
			学生期	独身期	新婚期	子ども幼少期	子ども成長期	子ども独立期	高齢期	学生期	独身期	有職・新婚期	無職・新婚期	有職・子ども幼少期	無職・子ども幼少期	有職・子ども成長期	無職・子ども成長期	有職・子ども独立期	無職・子ども独立期	高齢期
利用頻度	利用総数		49	82	36	115	62	191	316	63	97	23	16	86	74	58	19	157	113	291
	頻度不明		1	4	0	1	0	1	21	0	5	0	1	2	0	1	0	6	4	14
	回答数		48	78	36	114	62	190	295	63	92	23	15	84	74	57	19	151	109	277
	日常的	ほぼ毎日	8%	6%	0%	3%	2%	5%	7%	14%	9%	0%	7%	4%	3%	4%	5%	6%	3%	4%
		週に３回以上	10%	12%	3%	6%	6%	9%	15%	11%	8%	22%	13%	14%	20%	14%	11%	12%	20%	13%
		小計	19%	18%	3%	9%	8%	14%	23%	25%	16%	22%	20%	18%	23%	18%	16%	18%	23%	17%
	定期的	週に１回程度	29%	37%	36%	34%	40%	33%	32%	24%	37%	30%	33%	36%	42%	35%	47%	42%	39%	36%
		月に２回程度	21%	23%	33%	32%	27%	29%	25%	27%	27%	26%	13%	30%	23%	30%	26%	23%	20%	26%
		小計	50%	60%	69%	67%	68%	62%	56%	51%	64%	57%	47%	65%	65%	65%	74%	65%	59%	62%
	不定期	月に１回程度	19%	14%	17%	19%	21%	17%	13%	17%	13%	0%	33%	15%	12%	9%	5%	11%	14%	17%
		月に１回未満	13%	8%	11%	5%	3%	7%	8%	6%	7%	22%	0%	1%	0%	9%	5%	6%	5%	5%
		小計	31%	22%	28%	25%	24%	24%	21%	24%	20%	22%	33%	17%	12%	18%	11%	17%	18%	22%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
交通手段	利用総数		49	82	36	115	62	191	316	63	97	23	16	86	74	58	19	157	113	291
	交通手段不明		1	5	0	1	0	3	18	0	3	0	1	1	0	1	0	5	4	10
	回答数		48	77	36	114	62	188	298	63	94	23	15	85	74	57	19	152	109	281
	徒歩＋自転車	徒歩	2%	1%	0%	4%	6%	5%	10%	6%	2%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	4%	4%	17%
		自転車	31%	5%	0%	4%	2%	1%	6%	22%	0%	4%	7%	4%	3%	2%	16%	3%	5%	15%
		小計	33%	6%	0%	9%	8%	6%	16%	29%	2%	4%	7%	6%	3%	2%	16%	7%	8%	32%
	自動車＋バイク	バイク	4%	1%	0%	0%	0%	2%	4%	2%	2%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	2%	4%	5%
		自家用車	38%	87%	97%	89%	92%	88%	76%	38%	85%	83%	87%	94%	97%	96%	84%	89%	86%	51%
		小計	42%	88%	97%	89%	92%	90%	79%	40%	87%	83%	87%	94%	97%	96%	84%	91%	90%	56%
	公共交通		21%	4%	3%	1%	0%	3%	3%	32%	6%	13%	7%	0%	0%	2%	0%	3%	1%	9%
	その他		4%	1%	0%	1%	0%	1%	2%	0%	4%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	4%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
同伴形態	利用総数		49	82	36	115	62	191	316	63	97	23	16	86	74	58	19	157	113	291
	交通手段不明		2	6	0	1	1	2	23	0	4	0	1	2	2	3	0	6	7	14
	回答数		47	76	36	114	61	189	293	63	93	23	15	84	72	55	19	151	106	277
	ひとり		28%	46%	25%	22%	41%	41%	27%	22%	34%	26%	27%	23%	13%	38%	32%	39%	36%	16%
	家族		11%	11%	53%	61%	39%	31%	26%	16%	16%	52%	73%	70%	81%	38%	47%	36%	30%	19%
	グループ	隣近所の人	0%	0%	0%	0%	0%	2%	9%	2%	1%	0%	0%	0%	1%	0%	0%	4%	11%	15%
		学生時代の友人	13%	13%	3%	1%	0%	1%	2%	13%	15%	0%	0%	0%	0%	2%	0%	0%	0%	2%
		家族を通じての友人	0%	0%	0%	2%	0%	1%	3%	0%	0%	4%	0%	2%	3%	4%	0%	1%	1%	1%
		趣味を通じての友人	17%	17%	14%	10%	15%	18%	29%	5%	16%	9%	0%	5%	3%	15%	21%	17%	20%	42%
		職場や学校の人	28%	11%	3%	3%	3%	3%	1%	37%	11%	9%	0%	0%	0%	0%	0%	1%	0%	1%
		その他	4%	3%	3%	2%	2%	4%	4%	6%	6%	0%	0%	0%	0%	4%	0%	2%	2%	4%
		小計	62%	43%	22%	17%	20%	28%	47%	62%	49%	22%	0%	7%	7%	24%	21%	25%	34%	65%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表 3-8　各段階の最もよく利用する地域施設の利用形態　2/2

			男性							女性										
			学生期	独身期	新婚期	子ども幼少期	子ども成長期	子ども独立期	高齢期	学生期	独身期	有職・新婚期	無職・新婚期	有職・子ども幼少期	無職・子ども幼少期	有職・子ども成長期	無職・子ども成長期	有職・子ども独立期	無職・子ども独立期	高齢期
選択理由	利用総数		49	82	36	115	62	191	316	63	97	23	16	86	74	58	19	157	113	291
	選択利用不明		2	7	2	4	2	3	28	1	4	0	1	5	2	1	0	7	7	22
	回答数		47	75	34	111	60	188	288	62	93	23	15	81	72	57	19	150	106	269
	人的要因	家族友人と一緒に	38%	25%	26%	41%	28%	26%	31%	44%	38%	43%	40%	44%	58%	46%	53%	32%	34%	36%
		誰にも邪魔されず	19%	31%	15%	17%	18%	29%	34%	11%	14%	4%	20%	6%	8%	11%	11%	21%	20%	21%
		小計	57%	56%	41%	59%	47%	54%	64%	55%	52%	48%	60%	51%	67%	56%	63%	53%	54%	57%
	施設のサービス	サービス内容充実	11%	20%	12%	14%	15%	12%	10%	11%	18%	4%	20%	25%	13%	23%	11%	12%	14%	12%
		職員の対応がよい	4%	5%	9%	5%	2%	8%	7%	2%	8%	0%	13%	5%	10%	9%	0%	5%	6%	7%
		小計	15%	25%	21%	18%	17%	20%	17%	13%	26%	4%	33%	30%	22%	32%	11%	17%	20%	18%
	施設の立地	家や学校から近い	30%	24%	32%	22%	18%	13%	11%	37%	22%	22%	7%	22%	29%	21%	26%	25%	17%	15%
		ついで利用できる	9%	16%	24%	17%	15%	10%	8%	15%	18%	30%	13%	21%	25%	21%	32%	22%	18%	9%
		交通が便利	17%	20%	24%	15%	17%	20%	15%	8%	14%	39%	7%	19%	8%	14%	0%	14%	19%	17%
		周辺環境がよい	4%	7%	3%	5%	8%	4%	12%	3%	4%	4%	13%	4%	6%	4%	5%	6%	6%	5%
		小計	60%	67%	82%	59%	58%	46%	45%	63%	58%	96%	40%	65%	68%	60%	63%	67%	59%	46%
	施設の内部	内部の雰囲気がよい	9%	9%	9%	15%	17%	19%	18%	13%	18%	13%	27%	7%	14%	9%	16%	11%	13%	20%
		施設内がにぎやか	4%	5%	6%	6%	3%	2%	4%	8%	3%	4%	0%	6%	0%	4%	0%	1%	4%	1%
		施設内が静か	9%	7%	6%	1%	7%	9%	10%	6%	3%	0%	0%	1%	4%	4%	5%	4%	7%	5%
		小計	21%	21%	21%	23%	27%	30%	32%	27%	25%	17%	27%	15%	18%	16%	21%	15%	24%	26%
	その他		15%	11%	9%	10%	22%	20%	10%	18%	14%	17%	20%	12%	10%	19%	21%	14%	15%	15%
	総計		168%	180%	174%	168%	170%	171%	168%	176%	174%	183%	180%	173%	185%	182%	179%	167%	172%	162%
施設像（施設のイメージ）	利用総数		49	82	36	115	62	191	316	63	97	23	16	86	74	58	19	157	113	291
	施設像不明		2	6	1	4	1	7	23	1	5	0	2	2	3	1	0	6	5	19
	回答数		47	76	35	111	61	184	293	62	92	23	14	84	71	57	19	151	108	272
	人間関係を形成する場所	人の集まり	2%	1%	3%	1%	2%	2%	4%	2%	1%	0%	0%	1%	0%	2%	0%	1%	2%	6%
		家族友人と過ごす	21%	18%	14%	26%	13%	15%	16%	18%	21%	30%	14%	20%	35%	12%	37%	13%	13%	11%
		知人に会える	6%	3%	3%	4%	3%	5%	14%	10%	10%	0%	0%	2%	3%	0%	0%	2%	4%	18%
		小計	30%	22%	20%	31%	18%	21%	34%	29%	32%	30%	14%	24%	38%	14%	37%	16%	19%	35%
	目的に取り組む場所	自分の時間を過ごす	21%	20%	9%	8%	26%	28%	26%	13%	17%	13%	14%	7%	17%	19%	32%	19%	24%	19%
		用事仕事を済ませる	15%	12%	23%	17%	8%	10%	11%	16%	16%	35%	29%	33%	34%	21%	16%	23%	24%	13%
		新しい発見	4%	13%	6%	7%	5%	9%	9%	8%	5%	13%	14%	5%	3%	5%	11%	5%	10%	12%
		遊ぶ	21%	16%	23%	14%	7%	11%	5%	27%	9%	13%	7%	7%	4%	2%	5%	1%	1%	2%
		好きな活動	23%	20%	20%	11%	16%	18%	21%	10%	11%	13%	0%	10%	4%	16%	21%	17%	15%	35%
		小計	85%	80%	80%	58%	62%	77%	71%	74%	59%	87%	64%	62%	62%	63%	84%	65%	74%	81%
	雰囲気を享受する場所	習慣的に行く	9%	8%	9%	7%	5%	10%	9%	3%	13%	9%	21%	15%	8%	7%	26%	13%	11%	10%
		立ち寄り	9%	18%	23%	15%	23%	13%	12%	18%	29%	26%	29%	26%	23%	25%	11%	25%	17%	7%
		居心地よい	4%	9%	0%	5%	8%	4%	9%	10%	8%	9%	7%	2%	8%	11%	5%	7%	11%	8%
		暇をつぶす	17%	17%	11%	22%	21%	9%	8%	19%	9%	9%	14%	13%	17%	11%	0%	7%	10%	2%
		気分転換	19%	30%	31%	32%	39%	40%	30%	15%	32%	13%	21%	32%	32%	35%	21%	40%	32%	33%
		休憩	6%	4%	0%	4%	5%	2%	4%	5%	3%	4%	0%	2%	3%	7%	0%	3%	2%	2%
		小計	64%	87%	74%	85%	102%	78%	72%	69%	93%	70%	93%	92%	92%	95%	63%	95%	83%	61%
	その他		9%	5%	6%	9%	7%	10%	6%	10%	3%	0%	14%	10%	1%	5%	11%	5%	6%	5%
	総計		187%	195%	180%	182%	189%	186%	184%	182%	187%	187%	186%	187%	193%	177%	195%	181%	182%	182%

3-3-3　LC にみる地域施設の利用形態の特徴

以上、LC の各段階別に、最もよく利用する地域施設の利用形態をみてきたが、主な特徴を以下に整理する。

[利用頻度]

各段階とも半数以上が定期的に余暇を地域施設で過ごしている。但し、特に男性の結婚・子育ての期間は時間的拘束の大きい勤労者が多いこともあり、日常生活の一部として地域施設を利用するものは極端に少ない。この件に関しては、開館時間の拡張（夜間開館の延長）により、勤労者男性の施設利用を促せる可能性はある。一方、“常連”として日常生活の一部を地域施設を利用する段階も存在する。

[交通手段]

交通弱者の多い段階では当然自動車によるアクセスは少ないが、男子学生が自転車を多用するのに比べて、女子学生は公共交通を多用する。段階が同じでも性別によって交通手段、ひいては施設利用の圏域が異なることが分かる。

また、高齢者は徒歩や自転車で行ける近距離の施設を選択する傾向にあるが（コミュニティ施設の選択が多いことも関係するが）、量的整備が進む近距離の施設（特にコミュニティ施設）はグループでの利用が想定される施設種であり、一緒に過ごす相手はグループでの利用ばかりではないため、身近にひとり、家族でも利用できる場所の整備が必要である。

[同伴形態]

ひとりでの施設利用は段階によらずみられ、普遍的な過ごし方と捉えられる。また、子育て期においては、男女ともに家族との利用が増えるが、女性の方が（職によらず）長く子どもと一緒に施設を利用する。グループでの利用は子育て期の前後で多くみられるが、一緒に過ごす相手はそれぞれ特徴がみられる（LC の後期ほど、趣味を通じての友人が多くなる）。

さらに、男性の方が女性よりもグループでの利用の割合は少なく（代わりにひとりが多い）、“組織化”しやすい女性とそうでない男性という構図が見られる。

[選択理由]

子育て期では、幼い子どもと一緒に利用できる、子育ての場として利用できる施設を求めている。施設を訪れる頻度の低い段階ほど施設へのアクセス面を、頻度の高い段階ほど内部空間の充実を求めている（頻度の高い人ほど長い時間施設にいやすいと推測できる）。

[施設像]

施設像は総じて、『人間関係を形成する場所』として一定の割合で意識がみられるが、それ以上に『目的に取り組む場所』と『雰囲気を享受する場所』の選択が多い。但し、性別・年齢別によってかなりの推移がみられる。

男性は子育て期には家族で利用でき、気分転換のできる施設と位置づけている。子育てが一段落ついた後もしばらくは、個人の目的とは異なる場所として地域施設を利用しており、子どもが独立してから（この時期は勤労者の割合が減少し、比較的自由になる時間が増え始める）、個人の目的のために利用するようになる。それまでの期間は、職による時間的拘束を始め、様々な阻害から個人としての目的に取り組んでこれなかったともいえる。有職女性もこれと似た傾向を示している。

一方、無職女性は子育てが一段落付くと、『目的に取り組む場所』が増え始め、自分の楽しみのために何らかの活動を始めるといった、余暇生活の転機が有職者より早めに訪れる。

特に、LCの段階による相違として大きな変化がみられたのは同伴形態と施設像であり、章まとめにて再度整理する。

上記に関連して、高齢者の状況を端的に示しているのが、図書館で見かける、ほぼ一日中滞在する退職後とおぼしき男性と、幾人かのグループでサークル活動を行う女性である(データ上では高齢男性も『ひとり』は1/4程度であるが)。

女性は積極的に組織活動に参加し、余暇生活を充実させているが、男性はそういった活動に属さず、急激に増えた余暇時間を過ごす場所を地域に求めていると思われる。そのような人々が過ごせるをもっと地域につくっていく必要がある。

3-4　LC にみる地域施設の利用構造

これまで、地域住民の個人的な余暇活動を行う地域施設について考察してきた。
地域施設の利用構造として、地域施設の選択特性と利用形態の考察より得られた知見を以下に整理する。

○余暇を過ごす場所の選択特性

一人当たりの選択箇所数は加齢とともに減少するが、公共施設に限っては加齢とともに利用が増える傾向がある。また、段階によって利用が多い施設種と利用が少ない施設種が相当に異なる。

→また、子育て期は家族と一緒に過ごすための自宅以外の場所を求めているが、現状では多くの公共施設はそれにふさわしい場所として認識されていない。家族、特に子どもを安心して遊ばせることのできるスペースの補充が公共施設の課題といえる。

○余暇活動の場としての整備の必要性

地域住民は生涯を通じて余暇を充実して過ごす為の、潜在的な余暇活動への要求を有しており、同時に余暇活動を行う、自宅以外の場所に対する需要もを有している。但し、高齢者を始めとして、要求は有していても実際にはその要求を持て余し、地域施設を余暇を過ごす場所として使いこなせていない人も存在する。

→生涯を通じて、継続的に余暇活動を行える地域施設を整備する必要がある。

○公共施設の施設像

施設に抱くイメージ（施設像）として、公共施設は『目的に取り組む場所』の選択が多いが、民間施設は『雰囲気を享受する場所』の選択が多いといったように、地域住民の意識の上で両者は異なる位置づけとなっている。

→世代間交流の期待も込めて、施設機能の再構築を考える必要がある（以下の項目にも関連）。

○余暇を過ごす相手の変化

余暇を共に過ごす相手は特徴的に推移するが（図 3-10）、男女とも段階によらず、ひとりで過ごす人が一定の割合で存在する。また、子育て期は家族と、その前後はグループでの利用が多い（学生期は学校の友人と、高齢期は趣味を通じての友人と）。

→誰と過ごすかによって、地域施設の利用の仕方には相違があることが推測されるため、改めて分析する必要がある（第５章にて）。

○余暇活動の展開を促す

施設に抱くイメージ（施設像）の推移も特徴がみられる（図3-11）。

最も大きな転機として、無職女性は子育てが一段落すると（子ども成長期）、雰囲気を享受する場所から個人の目的に取り組む場所に施設像が変化している。これは、（家族で過ごしてはいても、）子どもの付き添いのための利用から、自分のための利用と地域施設を利用する意味合いが変化すると捉えられる。一方、男性と有職女性は、その転換の時期が、子どもが親元を離れる時期（子ども独立期）と若干遅れている。

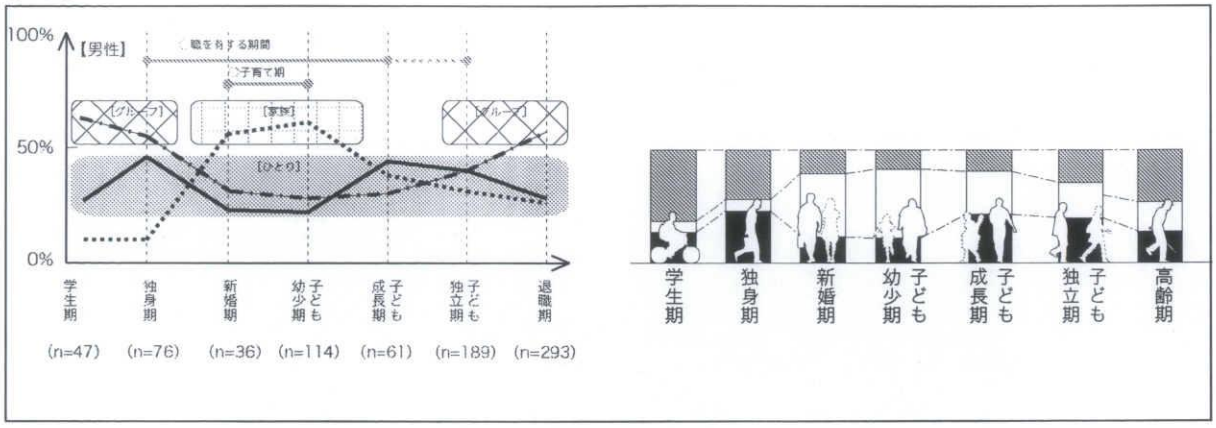
また、この転換の時期は、グループで余暇を過ごすことが多くなる時期とも関連しており、余暇活動の要求を同じくする仲間形成がされていると考えられる。

→余暇活動を継続的に行うための施設整備のため、LCの進展に伴い、子どもの付き添いのための利用から、自分自身のための要求を促す必要がある。

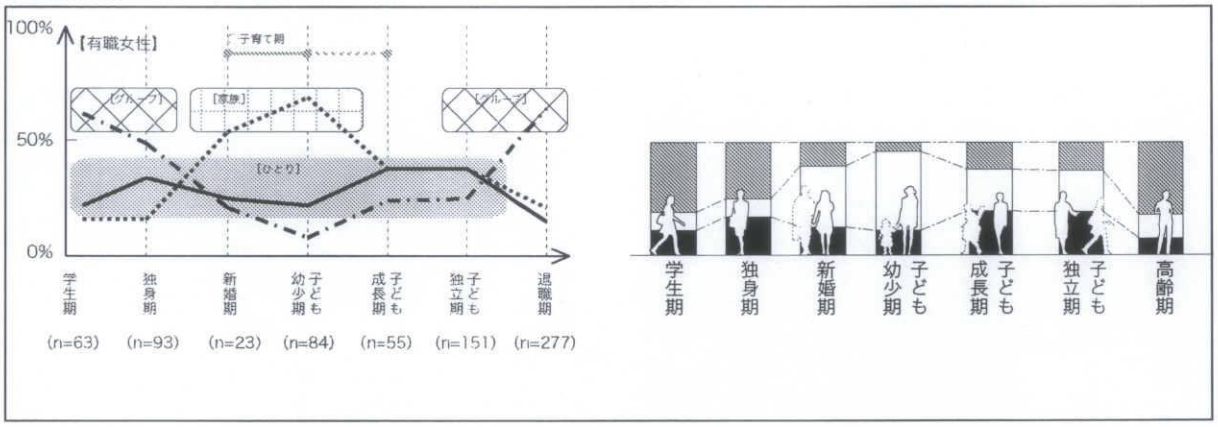
特に、親を子どもの付き添いだけにさせないよう、子どものスペースの近くに大人が滞在できる仕掛けを考える必要がある。親世代がその後、グループとしての利用が増えることを考えれば、子どもを見守りやすい位置に、自分のやってみたいサークル活動等の情報を掲示することも有効であろう。これらにより、子育ての場としての利用の後、親が自分自身の為に継続的に地域施設を利用することにもつながる可能性がある。

本章でみてきたように、段階別の生活特性、利用特性に配慮した施設計画が必要である。それらに対応するため、地域施設の改善が必要であり、そのためには既存の施設種の枠に囚われない施設機能の再構築が必要と考えられる。上記に加え、段階別に大きな特徴のみられた同伴形態別にそれぞれが地域施設に求める要求を整理し、個人的な余暇活動を行う地域施設の整備要件を得たい。

【男性】



【有職女性】



【無職女性】

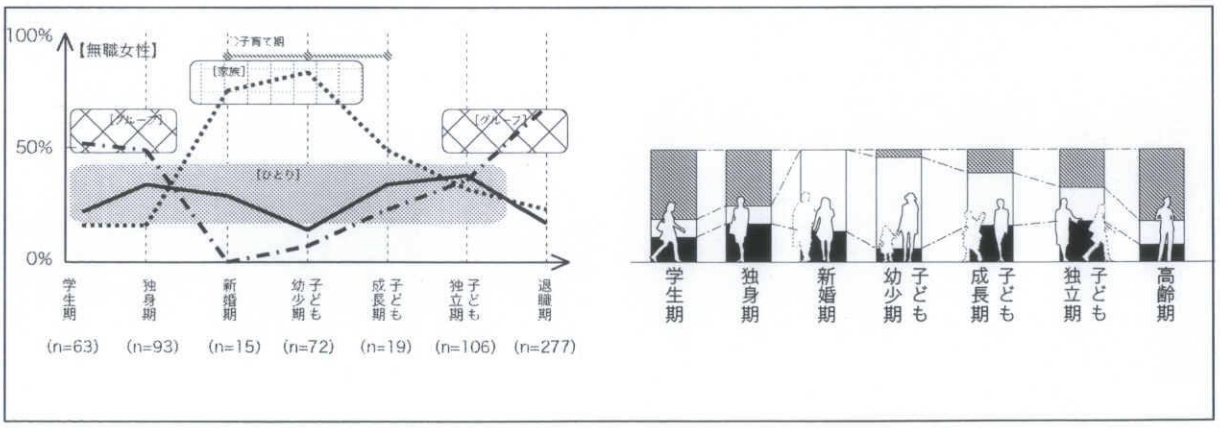
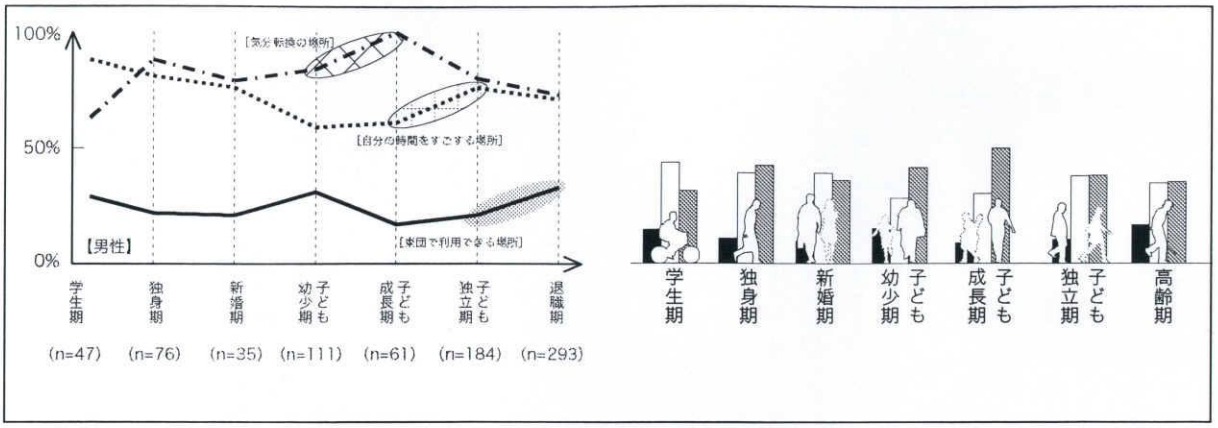
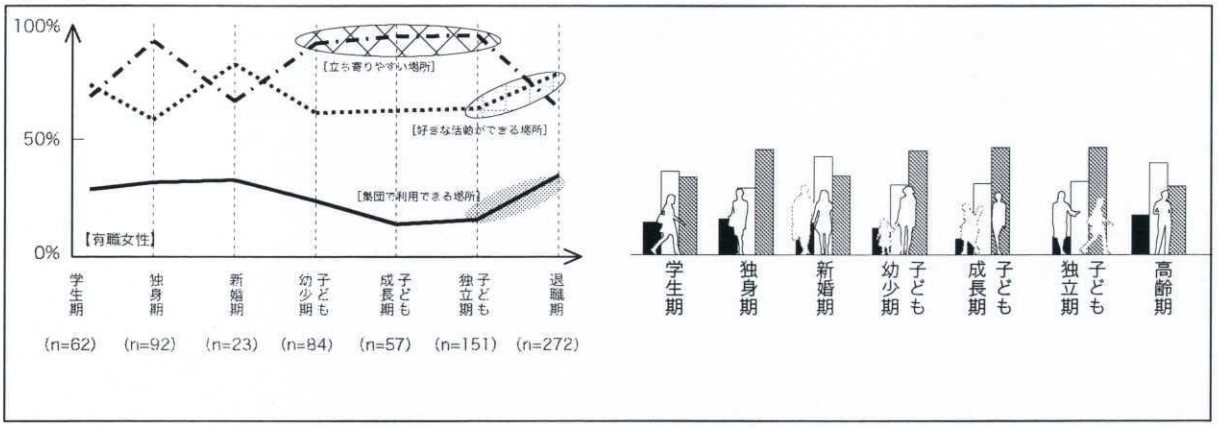


図 3-11　生涯を通じての地域施設の同伴形態

【男性】



【有職女性】



【無職女性】

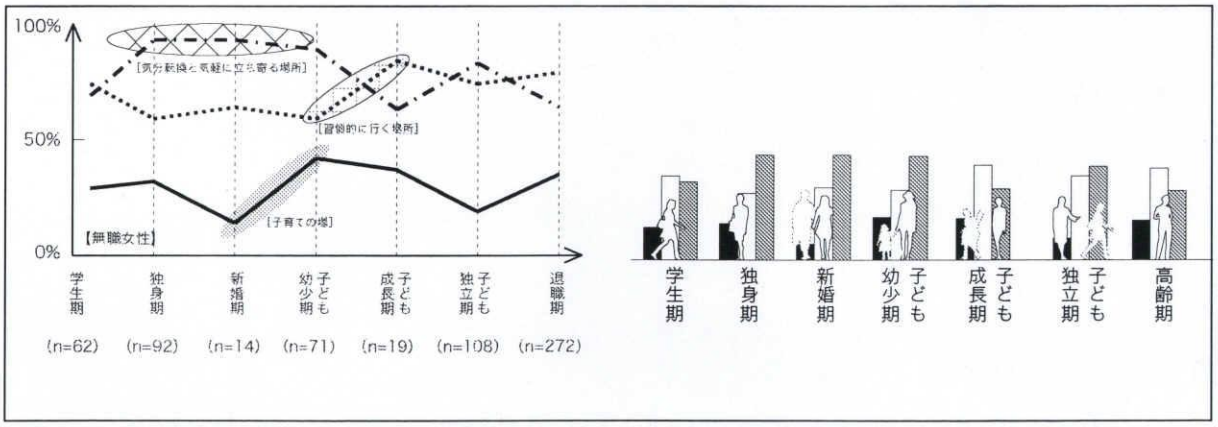


図 3-12　生涯を通じての地域施設の施設像

第４章　生活様式に応じた個人的な余暇活動実態

4-1　LSにみる生活背景と活動要求
4-2　LSにみる余暇を過ごす場所の選択特性
4-3　LSにみる地域施設の利用形態
4-4　LSにみる地域施設の利用構造

4-0　本章の目的

前章では、地域住民の生涯を通じての個人的な余暇活動を行う地域施設の利用構造を捉え、各段階に固有の生活背景や施設利用形態の特徴をみることができた。しかし同時に、同じLCの段階でも異なる場所を選び、地域施設の利用形態も異なることも確認された。

そこで本章では、生活における個人の価値観や組織活動への参加状況（言い換えれば、地域との関わりを持つか否か）を反映した生活様式の観点から、第３章と同様に生活背景、地域施設の利用構造を捉える。

第２章でも触れたが、生活様式の類型化については、４つの指標（13項目）をもとに、数量化Ⅲ類及びクラスター分析（Ward法）を用いて生活者の生活様式を６タイプに分類した（この分類をライフスタイル（LS）タイプと呼ぶ）。

表 4-1　各タイプの指標別割合（再掲）

		C1	C2	C3	C4	C5	C6
		団体活動志向型	無職／外出・家族重視型	育児家事重視型	無職／非外出・休養志向型	有職／非外出・休養志向型	有職／外出・家族重視型
割合		25%	15%	6%	11%	13%	29%
母数		633	391	144	290	332	749
職の有無	有職	73%	9%	47%	1%	96%	100%
	無職	27%	91%	53%	99%	4%	0%
地域活動	参加	91%	35%	31%	26%	4%	0%
	不参加	9%	65%	69%	74%	96%	100%
充実感	仕事	33%	7%	15%	0%	35%	39%
	家事	0%	1%	100%	0%	0%	0%
	家族	30%	55%	43%	29%	26%	47%
	友人	23%	22%	4%	22%	20%	29%
	休養	8%	21%	10%	47%	46%	26%
	趣味	52%	55%	17%	47%	38%	46%
	習い事	5%	8%	0%	2%	0%	0%
	団体活動	34%	0%	2%	1%	0%	0%
	自主学習	3%	16%	2%	10%	1%	0%
場所選択	外出少	23%	1%	19%	91%	100%	5%
	外出多	77%	99%	81%	9%	0%	95%

４つの指標とは、①地域との関わりや活動状況を示す「地域活動の参加有無（２項目）」、②時間的拘束に影響する「職の有無（２項目）」、③個人の生活上の趣向、価値観を示す「充実感を感じるときの内容（９項目）」、④外出の積極性を示す「余暇時間を過ごす場所の多さ（２項目）」である。

各タイプ（各タイプはC1、C2、…と略記する）の特徴を、各評価項目の指標別割合、基本属性及びLCとの対応をみながら整理する（表4-1～4-3）。

【C1】に属するものは地域活動に参加している有職者が多い。「趣味」「団体活動」に充実を感じるが、余暇時間の外出先は多くない。つまり、ある程度決まった場所を、決まった人（団体活動の仲間）と利用している層である。ここでは「団体活動志向型」とする。
属性としては男女構成は半々、中間層以降が多い。また、有職の{子ども独立期}と{高齢期}が多い。

【C2】に属するものは外出先の多い、無職者が多い。「家族」と「趣味」に充実を感じる、外出先も多い。地域の人々との関わりよりも家族や友人との付き合いを重視し、団体活動よりも個人の趣味的活動を重視している層といえる。ここでは「無職／非外出・家族重視型」とする。属性としては壮年期以降の人が多く、{高齢期}と無職女性の{子ども独立期}が多い。

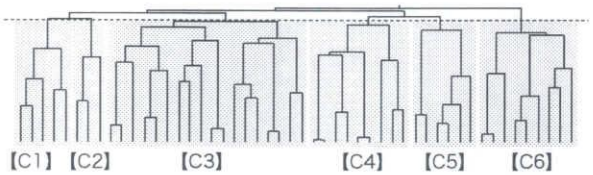
【C3】に属するものは職の有無によらず、「家事」に充実を感じるものである。属性としては女性が多く、{子ども幼少期}が多い。幼い子どもの育児を重視する層であり、「育児重視型」とする。

【C4】は外出先の少ない無職者が多く、「休養」と「趣味」に充実を感じている。団体活動よりも個人の趣味的活動を重視している点では【C2】と似ているが、地域に趣味と休養の場を求めていない層である。ここでは「無職／非外出・休養志向型」とする。属性では{高齢期}が多い。

【C5】は地域活動には参加しない、外出先の少ない有職者が多い。有職者が多いだけあり、仕事」に充実を感じる人が多い。また、その他の特徴は【C4】に似ているが、職の有無が両者を隔てている。「有職／非外出・休養志向型」とする。属性としては男性が多く、{子ども独立期}が多い。

【C6】は地域活動に参加しない、外出先の多い有職者が多い。「家族」と「趣味」に充実を感じている。【C2】と同様、地域の人々との関わりよりも家族や友人との付き合いを重視し、団体活動よりも個人の趣味的活動を重視している層といえる。ここでも職の有無が両者を隔てている。「有職／外出・家族重視型」とする。属性としてはどの段階でもある程度存在する。

設定した各タイプは職の有無による差が大きくみられるものもあるが、これは前章にて確認できたことと一致する。上記の６タイプを対象とし、本章ではタイプ別に余暇の施設利用の特徴を捉えていく。



【C1】　団体活動志向型
【C2】　無職／外出・家族重視型
【C3】　育児家事重視型
【C4】　無職／非外出・休養志向型
【C5】　有職／非外出・休養志向型
【C6】　有職／外出・家族重視型

図 4-1　LS タイプ／クラスター樹形図（再掲）

表 4-2　LS タイプの基本属性

		C1	C2	C3	C4	C5	C6
性別	総数	633	391	144	290	332	749
	未回答者	0	0	0	0	0	0
	回答者数	633	391	144	290	332	749
	男性	51%	40%	12%	40%	61%	59%
	女性	49%	60%	88%	60%	39%	41%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%
年齢層別	総数	633	391	144	290	332	749
	年齢不明	0	0	0	1	0	1
	回答者数	633	391	144	289	332	748
	10代	3%	2%	1%	0%	4%	8%
	20代	6%	4%	6%	1%	7%	14%
	30代	9%	9%	47%	5%	7%	16%
	40代	19%	8%	17%	5%	17%	22%
	50代	22%	19%	13%	16%	30%	25%
	60代	23%	35%	9%	29%	20%	10%
	70代	14%	20%	6%	30%	11%	4%
	80代以上	3%	4%	1%	13%	3%	1%
	総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

表 4-3　LS タイプと LC 構成割合

		C1	C2	C3	C4	C5	C6
総数		633	391	144	290	332	749
LC 不明		8	10	5	8	5	9
回答数		625	381	139	282	327	740
男性	学生期	2%	2%	0%	0%	2%	5%
	独身期	4%	1%	1%	1%	7%	10%
	新婚期	2%	0%	1%	0%	2%	3%
	子ども幼少期	7%	1%	6%	0%	8%	11%
	子ども成長期	4%	1%	0%	0%	4%	5%
	子ども独立期	13%	2%	1%	2%	22%	19%
	高齢期	18%	34%	1%	37%	17%	6%
女性	学生期	2%	1%	1%	0%	3%	7%
	独身期	4%	2%	3%	0%	6%	9%
	有職・新婚期	0%	1%	4%	0%	0%	2%
	無職・新婚期	0%	3%	4%	1%	0%	0%
	有職・子ども幼少期	6%	1%	17%	0%	3%	4%
	無職・子ども幼少期	1%	7%	29%	5%	0%	0%
	有職・子ども成長期	3%	0%	6%	0%	5%	4%
	無職・子ども成長期	0%	4%	1%	3%	0%	0%
	有職・子ども独立期	11%	1%	5%	0%	13%	13%
	無職・子ども独立期	5%	17%	6%	14%	1%	0%
	高齢期	16%	26%	14%	37%	8%	1%
総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%

4-1　LSにみる生活背景と活動要求

ここでは、各タイプの余暇を過ごす場所としての地域施設の利用構造を捉える前段として、生活背景・活動要求を把握する。

4-1-1　各タイプの生活背景

ここでは、生活背景として各タイプに属する人々の、職業や家族型といった生活の背景をみる（表4-4）。

［職業］についてみる。

職業はクラスター分析指標のひとつであり、タイプ間の有職率は大きく異なる。有職率が高いのは【C1】【C5】【C6】であるが、いずれも「勤労者」が多いほか（特に【C6】は半数以上）、他の職種もおり、明確な相違はみられない。一方、無職率の高い【C2】【C4】では、LCの｛高齢期｝が多いこともあり、「無職」の割合が高い。育児に関心の高い【C3】は「専業主婦」が４割と多いが、「勤労者」も少なくない。

次に［家族型］についてみる。

【C1】【C5】は「２世帯以上」、【C2】【C4】は「夫婦のみ」と「単身世帯」、【C3】【C6】は「核家族」がそれぞれ多い。LCでは｛新婚期｝以外の段階でも「核家族」が主だったことを考えると、生活様式と家族型には密接な関係があると考えられる。

次に［居住年数］についてみる。

幼い子どものいる層が多い【C3】では、その地域に住み始めてから10年未満の人が比較的多い。それ以外のタイプは20年以上の居住年数の人が半数以上である。とはいえ、それ以外はタイプによる明確な相違はみられない。

表4-4　LSタイプにみる生活背景

			C1	C2	C3	C4	C5	C6
職業	総数		633	391	144	290	332	749
	職業不明		0	0	0	0	0	0
	回答者数		633	391	144	290	332	749
	学生		4%	2%	1%	0%	4%	11%
	有職	勤労者	33%	3%	27%	1%	48%	55%
		自営業	12%	1%	6%	0%	17%	12%
		農林水産業	10%	0%	1%	0%	10%	5%
		パート・アルバイト	12%	2%	12%	0%	14%	15%
		その他	2%	0%	0%	0%	3%	1%
		有職率	73%	9%	47%	1%	96%	100%
	無職	専業主婦	9%	36%	41%	30%	1%	0%
		無職	17%	54%	13%	69%	3%	0%
		無職率	27%	91%	53%	99%	4%	0%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%
家族型	総数		633	391	144	290	332	749
	家族型不明		2	1	0	2	3	2
	回答者数		631	390	144	288	329	747
	単身世帯		6%	10%	1%	12%	4%	4%
	夫婦のみ		23%	35%	10%	33%	22%	14%
	核家族		31%	26%	51%	23%	33%	47%
	２世帯以上		40%	28%	38%	31%	40%	33%
	その他		0%	1%	1%	1%	0%	1%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%
居住年数	総数		633	391	144	290	332	749
	居住年数不明		4	1	3	8	7	3
	回答数		629	390	141	282	325	746
	１年未満		1%	2%	3%	2%	2%	3%
	１～３年未満		3%	8%	9%	4%	3%	6%
	３～５年未満		3%	4%	13%	3%	2%	4%
	５～10年未満		8%	9%	21%	6%	7%	12%
	10～15年未満		8%	9%	11%	7%	11%	11%
	15～20年未満		12%	9%	8%	6%	10%	12%
	20年以上		64%	59%	35%	71%	65%	52%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%
自宅形式	総数		633	391	144	290	332	749
	自宅形式不明		4	3	1	1	2	4
	回答数		629	388	143	289	330	745
	一戸建て		95%	97%	93%	95%	94%	93%
	連続住宅（長屋など）		3%	2%	2%	3%	5%	3%
	２階建て共同（アパートなど）		0%	1%	3%	1%	0%	2%
	３～５階建て共同		0%	0%	2%	1%	0%	2%
	６階以上郷土		0%	0%	0%	0%	0%	0%
	その他		0%	0%	0%	0%	0%	0%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%
自動車利用	総数		633	391	144	290	332	749
	自動車利用不明		26	29	6	51	23	10
	回答数		607	362	138	239	309	739
	車自由		86%	78%	81%	62%	88%	89%
	乗合可		7%	11%	11%	14%	5%	5%
	交通弱者		6%	12%	8%	23%	8%	6%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%

次に［自宅形式］についてみる。

タイプによらず「一戸建て」が殆どであり、相違はみられない。

最後に「自動車利用」をみる（組み合わせの詳細は第３章の同項目参照）。

【C4】以外のタイプは「車自由」の割合が８割程度かそれ以上で高いといえる。一方、【C4】は比較的自由に自動車を利用できない人が多い（といっても、６割以上）。１割程度は乗合を頼める場合もあるが、交通弱者も２割以上とかなり多い。同タイプは外出先の少ない休養志向であるが、交通手段に満足していないが為に外出の意欲が弱くなっているとも考えられる。ある程度長い距離を、自動車を使って自由に移動しにくいという環境が外出先の少なさに結びついている。

一方、同じく外出先の少ない【C5】については、自由に車利用ができる人は９割近くいる。このタイプは外出の積極性と自動車利用ができるか否かには関連がみられない。個人の意思・趣向によって外出先が少ない人といえる。彼らが地域施設を利用しているかどうかは、［余暇を過ごす場所の選択パターン］で確認する。

各タイプは多少の傾向はあるものの、属性によらずグループ分けされているため、生活背景に強い因果関係はみられにくい。それでも生活様式と家族型には一定の関連がみられること、交通手段の拘束など、生活を方向付ける要素はありそうである。

4-1-2　各タイプの潜在的活動要求

次に生活の充実感の選択パターンから得られる潜在的活動要求をみる。

生活の充実感についてはクラスター分析の指標の一つなので割愛する。充実感から潜在的な活動要求をもとめる整理は第３章と同様。

各タイプの潜在的活動要求をみる（表 4-5、図 4-2）。

育児や家事に充実を感じる【C3】は「非選択行動のみ」の選択が２割以上と、他のタイプより高い。「家事」を 100% 選択している同タイプであるが、やはりそれだけではなく、余暇を充実する為の選択行動も必要としている。他のタイプはそれ以上の回答があり、タイプによらず、余暇を充実する為の選択行動を要求していることが分かる。

また、目的意識が「高」を含む割合は【C3】は格段に低いが、【C5】【C6】も比較的低い。これらのタイプは他者と一緒に何らかの目的をもった集団活動に取り組むことには消極的と考えられ、実際に地域活動への参加率も低い。

余暇を充実するため、自宅以外の場所で行う活動への要求の程度はタイプによって大きく異なることが確認された。それでも、余暇を充実する選択行動の要求、つまり余暇活動を行う要求は、どのタイプも有しているといえる。

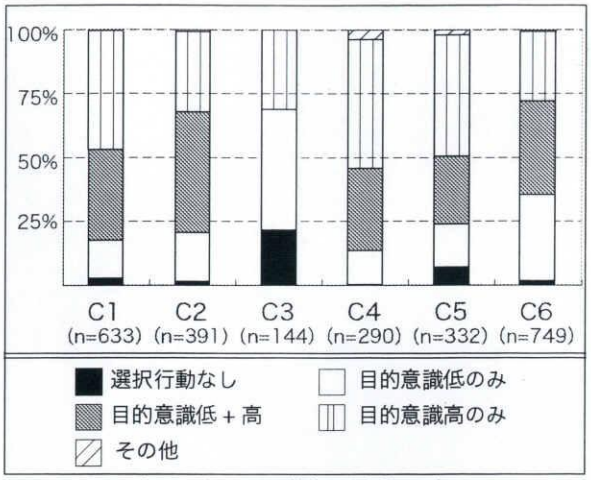


図 4-2　LS タイプにみる潜在的活動要求

表 4-5　LS タイプにみる潜在的活動要求

		C1	C2	C3	C4	C5	C6
総数		633	391	144	290	332	749
活動要求不明		0	0	0	0	0	0
回答数		633	391	144	290	332	749
非選択行動のみ（①②）		3%	1%	22%	0%	7%	2%
選択行動あり	目的意識低のみ（③⑤⑥）	15%	19%	47%	13%	17%	34%
	目的意識高＋低（⑦）	35%	47%	0%	32%	27%	37%
	目的意識高のみ（④⑧⑨）	47%	31%	31%	51%	48%	28%
	目的高あり	82%	79%	31%	83%	74%	64%
	選択行動あり	97%	98%	78%	96%	91%	98%
その他のみ（⑩）		0%	1%	0%	4%	2%	0%
総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%

行動の種類	目的意識	充実を感じるとき
非選択行動	-	1. 仕事・勉強
		2. 家事・育児
選択行動	低い	3. ひとりで休養
		4. 家族と団らん・旅行
	高い	5. 友人と雑談・旅行
		6. 趣味
		7. 習い事
		8. グループ・団体活動
		9. 自主的な勉強
10. その他		

生活の充実度の回答パターン	
①非選択重視	1+2
②非選択必要	1or2(+10)
③両方必要 / 低	1,2+3,4
④両方必要 / 高	1,2+5~9
⑤選択必要 / 低	3or4(+10)
⑥選択重視 / 低	3+4
⑦選択重視 / 高＋低	3,4+5~9
⑧選択必要 / 高	5~9(+10)
⑨選択重視 / 高	5~9+5~9
⑩その他	10

分類			回答パターン
非選択行動のみ			①②
選択行動あり	目的意識低のみ		③⑤⑥
	目的意識高あり	目的意識高＋低	⑦
		目的意識高のみ	④⑧⑨
その他			⑩

[潜在的活動要求の整理]

4-2　LS にみる余暇を過ごす場所の選択特性

次に、LC の各段階の人が、どのような場所で余暇を過ごしているかをみる。

アンケート（調査１）から、各個人に余暇を過ごす場所を最大４件選択してもらっている。これらを用いて、余暇を過ごす場所の選択パターンと、選択割合をみる。

＊　アンケートにおける選択肢は「自宅」「職場・学校」「友人宅」「コミュニティ施設（公民館、集会所、市民センター）」「地方文化施設」「美術館」「スポーツ施設」「教育施設」「商業施設」「娯楽施設」「飲食店」「公園」「自然（海や山）」「その他」の 15 項目。「コミュニティ施設」以下を「地域施設」とする。

4-2-1　各タイプの余暇を過ごす場所の選択パターン

ここでは各段階の選択パターンをみる（図 4-3）。

選択パターンは「自宅」「職場・学校」「友人・知人宅」、及び「地域施設」の組合せであり、「自宅」の選択有無と「地域施設」の選択有無により４つの大分類、15 の小分類とする（第１章参照）。

【C1】【C2】【C3】【C6】のタイプは、［自宅あり－地域施設あり］の大分類タイプが殆どであり（【C1】は［自宅なし－地域施設あり］も多い）、余暇に地域施設を積極的に利用している。特に「自宅＋地域施設」、「自宅＋友人宅＋地域施設」が多い。「自宅＋地域施設」は LS のどのタイプでも普遍的に選択されているが、友人宅を含んでいることは特徴的といえる。友人とも良好な関係をつくりつつ、地域施設を積極的に利用できているといえる。これらのタイプは外出先が多いことが共通であるが、職の有無によらず、また、地域活動への参加有無にかかわらず地域施設への需要は高い。また、「休養」といった消極的な余暇の過ごし方ではなく、より活動的なことに充実を感じている。

一方、外出先が少なく、休養に充実を感じる【C4】【C5】は「自宅＋地域施設」の他に「地域施設のみ」と「自宅のみ」の選択が多い。両タイプとも、自宅で余暇時間を過ごさず地域施設を求める人と、自宅に引きこもる人といった両極端なタイプがみられるが、特に後者の割合は４割程度と多いといえる。

とはいえ、この両タイプも自宅で休養するだけではなく、余暇を地域で過ごす人もいることから、彼らに向けた地域施設整備も必要であろう。あるいは、休養できる、静かな場所で気軽に訪れる場所としての整備が必要ともいえる。

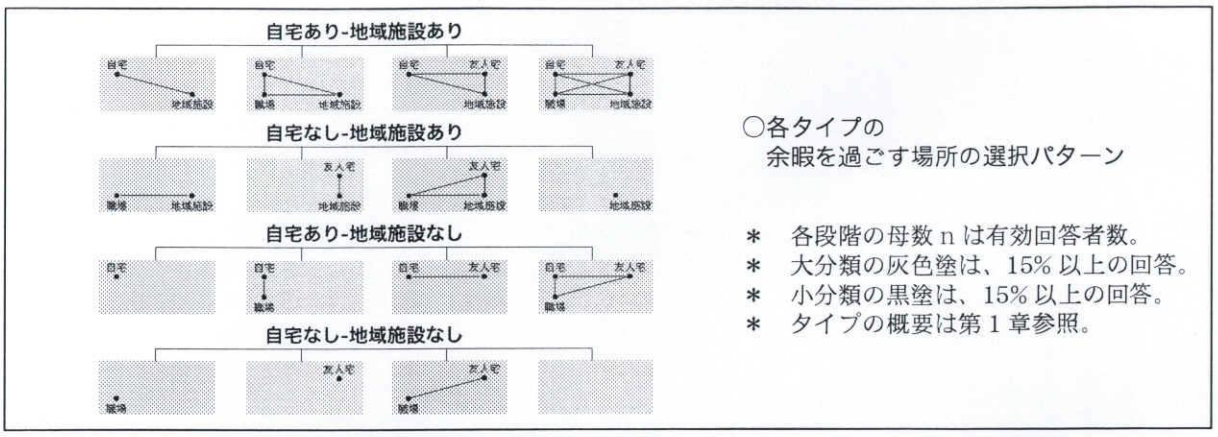


図 4-3　各タイプの余暇を過ごす場所の選択パターン

4-2-2　各タイプの余暇を過ごす場所の選択割合

次に、各タイプの「自宅」「職場・学校」「友人・知人宅」及び「地域施設」の平均選択箇所数の推移をみる（図 4-4、表 4-6）。

「自宅」の選択は各タイプとも同様に高いが、やはり【C4】【C5】は友人宅及び「地域施設」の選択は少ない。地域施設の選択が多いか少ないかはタイプによって多分に相違があるが、前述の２タイプはその背景が異なるといえる。【C4】は交通の制約によって利用が制限されている層である。一方、【C5】は自宅で休養することを重視し、外出に関心が低いといえるが、前述したように、地域施設が休養できる、静かな場所で気軽に訪れる場所としての整備が不十分だからとも考えられる。

4-2-3　各タイプの利用する地域施設の内訳

本項では「地域施設」に着目し、その内訳をみる。「地域施設」を「社会教育系（公共施設）」「商業娯楽系（民間施設）」「自然系」「その他」に分類した図 4-4、及び施設種の図 4-5 より、余暇を過ごす場所としてどのように地域施設を選択しているかをみる。図 4-5 の縦軸は 12 の施設種であり、20% 以上の回答は黒塗している。また、それらの所在地についてもみる（図 4-6）。

まず「地域施設」の選択状況をみる。

但し、前述したように【C4】【C5】は他のタイプと比べて地域施設の選択が少ない。

地域活動への参加立が高い【C1】では「社会教育系」が多い。活動場所の場として主要な施設である〈コミュニティ施設〉〈スポーツ

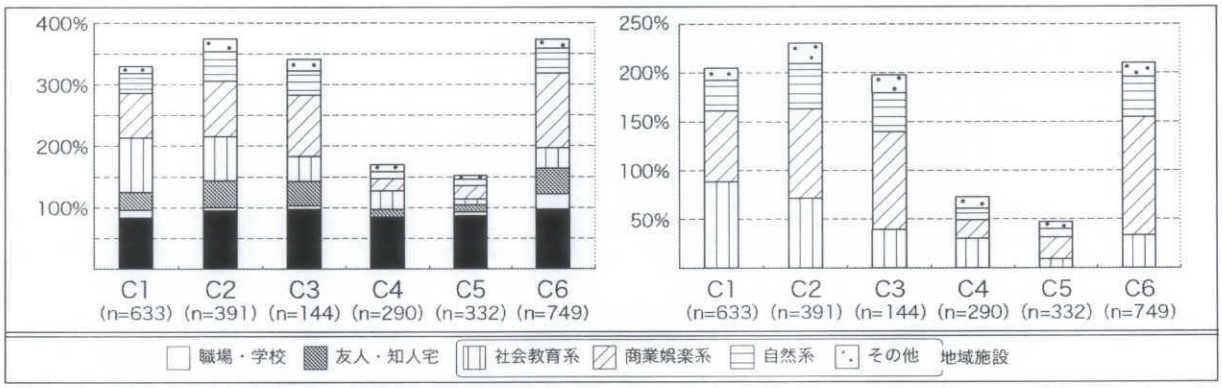


図 4-4　各タイプの余暇を過ごす場所の選択割合

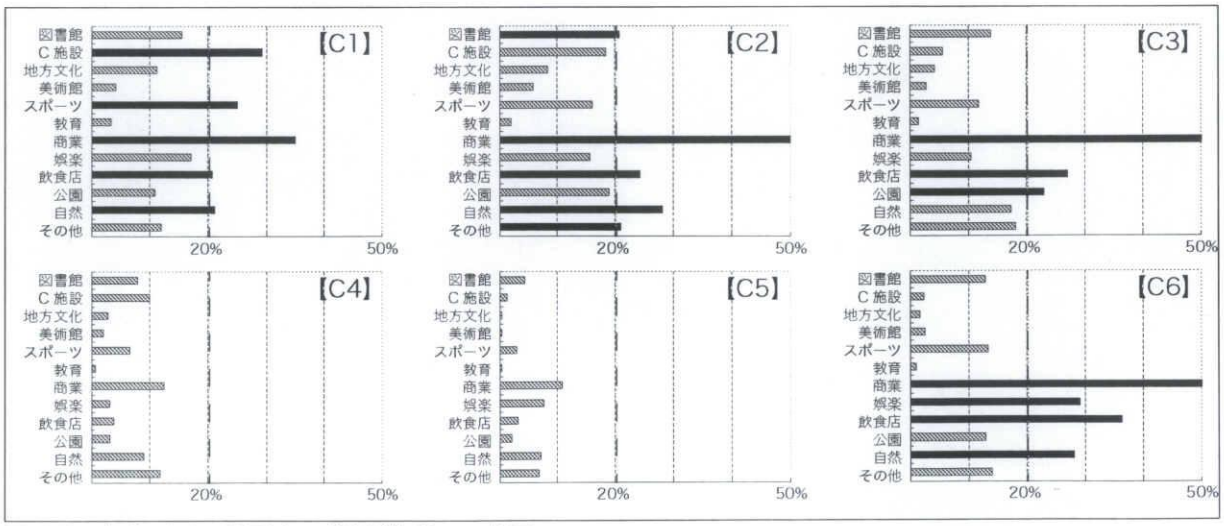


図 4-5　各タイプの利用する「地域施設」の内訳

施設〉の利用が特に多く、地域活動を行う人が如何に公共施設を利用しているかが分かる。

【C2】は選択箇所数が最も高いタイプであり、【C1】及び外出先の少ない【C4】【C5】以外に共通する特徴である、「商業娯楽系」の選択が多い。それでも【C2】は〈図書館〉の選択が多く、同施設種の特徴でもある、ひとりになれる場所へのニーズを有していると考えられる。【C3】と【C6】は選択箇所の傾向が似通っており、大半の人は「商業娯楽系」を多く選択している。この両タイプは外出先も多く、積極的に余暇を過ごす活動に充実を感じているが、公共施設の利用は多くない。民間施設にあって公共施設にない魅力を感じている層ともいえる。

つまり、公共施設が目的性の高い場所として認識されているのに対し、民間施設は雰囲気享受の場として、敷居が低く、余暇を過ごしやすい場所として認識されていることの特徴につながる。公共施設を誰もが訪れやすく、余暇を過ごす場所として整備する必要がある。

[利用する地域施設の所在地]

ちなみに各タイプが利用する「地域施設」の所在地は、【C1】【C2】【C3】【C4】では自市町村内が多く、【C5】【C6】は概ね半々であるが若干他市町村が多い。

外出先が少なく、交通事情が拘束されている【C4】が自市町村の利用が多いのは道理であるが、余暇生活における地域施設の要求が低い層である【C5】は他市町村の施設を利用していることから、余暇を過ごす場所への要求を確認し、それぞれに合わせた施設整備をする必要がある。

表 4-6　各タイプの余暇を過ごす場所の選択割合

		C1	C2	C3	C4	C5	C6
総数		633	391	144	290	332	749
未回答者		0	0	0	0	0	0
回答者数		633	391	144	290	332	749
自宅		83%	94%	96%	83%	86%	96%
職場・学校		12%	5%	7%	0%	6%	25%
友人・知人宅		29%	44%	40%	13%	11%	42%
社会教育系（公共）	図書館	15%	21%	14%	8%	5%	13%
	コミュニティ施設	29%	18%	6%	10%	1%	2%
	地方文化施設	11%	8%	4%	3%	0%	2%
	美術館・博物館	4%	6%	3%	2%	0%	3%
	スポーツ施設	25%	16%	12%	7%	3%	13%
	教育施設	3%	2%	1%	1%	0%	1%
	小計	88%	72%	40%	30%	10%	34%
商業娯楽系（民間）	商業施設	35%	51%	63%	12%	11%	56%
	娯楽施設	17%	16%	10%	3%	8%	29%
	飲食店	21%	24%	27%	4%	3%	36%
	小計	73%	91%	100%	19%	22%	121%
自然系	公園	11%	19%	23%	3%	2%	13%
	自然	21%	28%	17%	9%	7%	28%
	小計	32%	47%	40%	12%	9%	41%
その他		12%	21%	18%	12%	7%	14%
総計		329%	374%	340%	170%	152%	372%

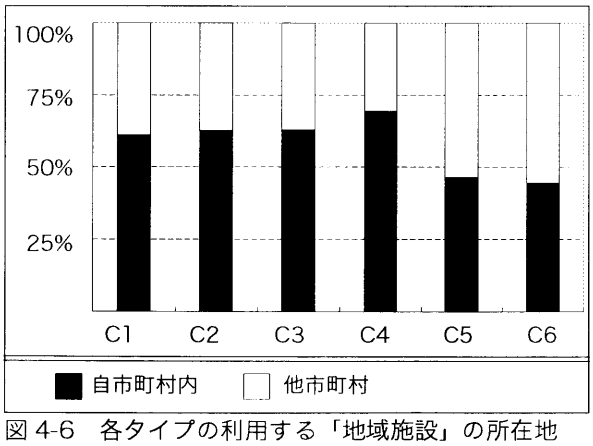


図 4-6　各タイプの利用する「地域施設」の所在地

表 4-7　各タイプの利用する「地域施設」の所在地

	C1	C2	C3	C4	C5	C6
総数	633	391	144	290	332	749
4 箇所選択	2532	1564	576	1160	1328	2996
未回答者	1837	1114	436	1062	1270	2361
回答者数	695	450	140	98	58	635
自市町村内	61%	63%	63%	69%	47%	44%
他市町村	39%	37%	37%	31%	53%	56%
総計	100%	100%	100%	100%	100%	100%

4-2-4　LS にみる生活構造の変化

ここまで、LS の各タイプについて、生活背景と余暇を過ごす場所の選択特性をみてきた。これらを生活構造と位置づけ、前章と同様に、地域施設の利用に大きな影響を及ぼす、①潜在的活動要求の推移、②施設を過ごす場所の選択パターンの推移を、それぞれ生活背景の変化との関係をみながら整理する。

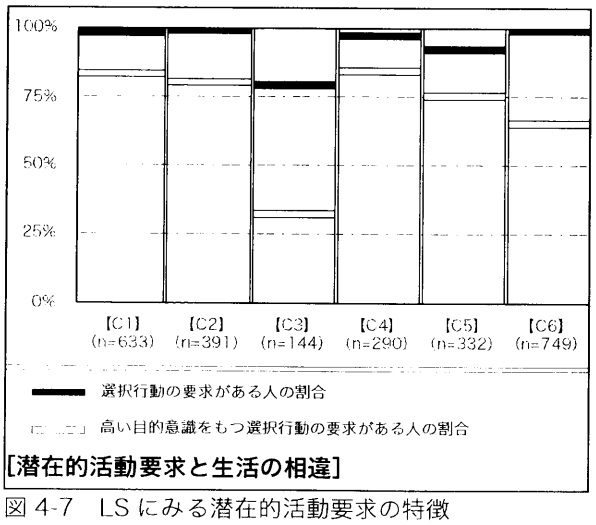
潜在的活動要求をみると（図 4-7）、どのタイプでも余暇を充実する為の選択行動の需要は高い。しかし、高い目的意識をもつ選択行動に限ってみると、【C3】は低く、育児家事への関心が高いほど余暇活動への要求は抑えられることが分かる。これは、前章でみた、結婚後から子どもがある程度成長するまで、余暇活動の要求が停滞することとも一致する。

一方、地域活動に不参加の【C5】【C6】を含め、他のタイプは高い目的意識をもった選択行動の選択は多く、特に積極的に地域活動に参加している【C1】【C2】では非常に多い。組織的な活動への参加は、高い目的意識が顕在化したものとみなすことができる。潜在的な活動要求を顕在化させることが余暇の充実につながり、余暇を過ごす地域施設においては、個人のもつ要求を刺激する仕掛けが必要ではないだろうか。

また、余暇を過ごす場所の選択の推移をみると（図 4-8）、【C1】【C2】【C3】【C6】では地域施設を殆どの人が利用しており、相応の需要があるといえる。

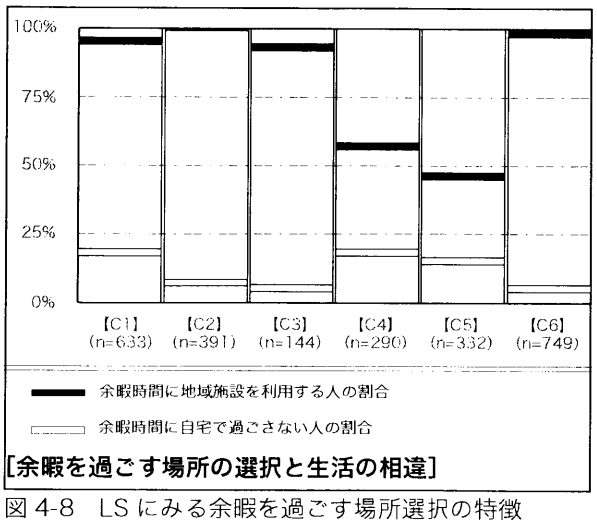
一方、前述してきたように、地域施設の利用は【C4】【C5】では少ない。両タイプとも休養志向であるが、その要因は異なる。【C4】は交通が不便であるために外出を抑制されていることに対して、【C5】は外出に対して関心が薄いといえる。とはいっても、両タイプとも、余暇を過ごす場所として地域施設を選択する人はかなりの割合で存在し、地域施設に対して一定の需要がある。また、この両タイプは自宅で余暇を過ごさない人も多い。彼らは余暇活動への要求自体はもっているが、自宅あるいは地域施設が過ごしずらく、自分の居場所を喪失している懸念もある。

地域施設の利用を増やすために、無駄な利用を促進するわけではないが、休養を重視する人の受け皿としての地域施設整備も必要ではないだろうか。彼らが地域施設の利用が少ないのは、こういった面からの整備が不十分であることの裏返しとも読める。特に、自宅で余暇を過ごさない（あるいは、過ごせない）層に対しては、地域施設がその拠り所となる場所を提供する必要があるだろう。



[潜在的活動要求と生活の相違]

図 4-7　LS にみる潜在的活動要求の特徴



[余暇を過ごす場所の選択と生活の相違]

図 4-8　LS にみる余暇を過ごす場所選択の特徴

以上から、タイプによらず、多くの人が余暇活動を行う要求を有していることが明らかとなった。しかし一方で、休養志向の人の生活の拠り所となるような施設整備がなされていないため、利用が少ない人が存在することも明らかとなった。なかには、地域施設を必要としない人ももちろんいるだろうが、地域施設の現状の整備状況によって、余暇活動を行うことに支障を来す場合があるとも考えられる。つまり、施設の作り方次第で、それらの人々の要求に合う、生活の拠り所を形成できる可能性があるともいえる。

3-3　LSにみる地域施設の利用形態

前節までに、地域住民が生涯を通じて余暇活動への要求をもち、実際に地域施設を利用していることをみてきた。但し、休養志向の人は地域施設は生活のなかであまり多用していない。これは、外出自体に関心が低いことによる部分もあるが、一方で、現状の地域施設整備が地域住民の感じる、余暇を充実させる行動と合致していないことによる場合もみられる。ここでは、地域住民が自宅や職場・学校以外で余暇を過ごす場所を選択する際の要因を捉えるため、余暇を過ごす場所のうち、最もよく利用する地域施設について、その利用形態を把握する。

ここでの利用形態とは［利用頻度］［交通手段］［同伴形態］［選択理由］といった基本的な項目に加え、生活者が地域施設を「どのような場所と捉えているか」を［施設像］としている。特に［施設像］は利用者側からみた、地域施設の選択要因として重要な項目と位置づける。

また、本節では地域住民の地域施設への根底的なニーズを捉えるため、施設種によらず、利用する施設を横断的に「地域施設」として分析する。

表 4-8　各タイプの最もよく利用する地域施設

		C1	C2	C3	C4	C5	C6
総数		633	391	144	290	332	749
未回答者		140	88	29	176	245	166
回答者数		493	303	115	114	87	583
（公共）社会教育系	図書館	9%	12%	7%	13%	9%	9%
	コミュニティ施設	22%	12%	5%	23%	5%	1%
	地方文化施設	4%	2%	2%	5%	1%	1%
	美術館・博物館	1%	1%	0%	0%	0%	1%
	スポーツ施設	13%	12%	6%	14%	9%	8%
	教育施設	5%	0%	2%	0%	1%	1%
	小計	54%	39%	22%	55%	25%	20%
（民間）商業娯楽系	商業施設	27%	43%	66%	31%	39%	54%
	娯楽施設	5%	5%	0%	2%	21%	11%
	飲食店	4%	5%	6%	1%	7%	9%
	小計	37%	53%	72%	33%	67%	74%
その他		10%	8%	6%	11%	8%	6%
総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%

各タイプの最もよく利用する地域施設に対し、利用形態をみていく（図 4-9、表 4-9）。

[利用頻度]

利用頻度を『日常的』『定期的』『不定期』に大分類する。

どのタイプも『定期的』が最も多い。LC でも同項目が主要な回答であったことから、地域施設を利用する上で最もスタンダードな利用頻度といえる。但し、施設の常連ともいえる『日常的』は、各タイプとも一定の割合でいる。そのなかで、特に家事育児への関心が高い【C3】の 1/4 程度が常連であることは特徴的である。同タイプは家族と一緒に施設を利用することが多く、子どもの教育の為に、頻度高く施設を利用していることが分かる（LC の｛子ども幼少期｝も同様）。

また、有職者である【C5】【C6】のタイプは『不定期』が他のタイプより多く、時間的拘束が大きい人々が多いことが分かる。特に、家族との時間をもつことを重視し、外出先も多いが、勤労者の割合が高い【C6】は『日常的』が最も少なく、時間的拘束が余暇の施設利用を大きく抑制していることが分かる。

[交通手段]

交通手段を『徒歩＋自転車』『自動車＋バイク』『公共交通』『その他』に大分類する。

日常生活の交通手段に不便さがみられる【C4】以外は『自動車＋バイク』の割合が高い。その【C4】は 1/4 以上が施設へのアクセスに『徒歩＋自転車』を選択している。彼らは自市町村内の施設を利用する傾向があり、交通の不便さが施設選択の幅を狭めていることが明白である。

[同伴形態]

同伴形態を『ひとり』『家族』『グループ』に大分類する。

『ひとり』はどのタイプでも一定の割合で存在し、普遍的な過ごし方であることが確認できる。特に有職者である、【C5】【C6】で多く、余暇生活に時間的拘束の影響が大きい人々が、気分転換に少し立ち寄るといった状況が多そうである（[施設像] 参照）。

『家族』もタイプによらず一定の割合で存在する。とはいえ、その割合のタイプ間の相違は大きく、育児家事を重視する【C3】では 6 割以上となっている。このタイプは、特に自宅以外の子育て・教育の場として、地域施設に期待をもっているのだろう。一方、『家族』の割合は家族と一緒に過ごすことに充実を感じている【C2】【C6】でも高く、順当な結果である。

『グループ』は地域活動に積極的に参加している【C1】で半数と多い。特に「趣味を通じての友人」が多く、地域活動に参加することで、余暇を一緒に過ごす馬鹿間を得ていることが分かる（あるいは、地域活動への参加自体が、余暇に最も行う活動であるかもしれない）。また、【C2】【C4】も【C1】ほどではないが『グループ』での利用が多い。この両タイプは地域活動への参加は多くないが、前述と同様、趣味を同じくする友人と一緒に過ごすことが多い。ちなみに両タイプとも無職であり、友人をつくる時間は有職者よりあるといえる。一方、【C5】【C6】の有職者ほど『グループ』での利用は少ない（その代わりに『ひとり』が多い）。個人単位としてはとっかかりやすい、趣味を通じての友人を確保できるか否かで施設の同伴者が決まるといっても過言ではないだろう。

[選択理由]

施設の選択理由を『人的要因』『施設のサービス』『施設の立地』『施設の内部』に大分類する。

各タイプとも共通して、『人的要因』と『施設の内部』の選択が多い。LC 視点の分析と同様、やはり施設での人間関係とアクセスを含む施設の立地が、施設利用の際の、主要な選択要因となっている。

タイプ間の大きな違いとして特徴的なのが、育児家事への関心が高い【C3】が『施設の立地』を特に気にしていることである。同タイプは「家や学校から近い」「ついで利用できる」「交通が便利」といった施設のアクセス面に特に執心しており、身近な地域に、買い物のついでなどに容易に利用できる子育ての場を求めていることが推測できる。

[施設像]

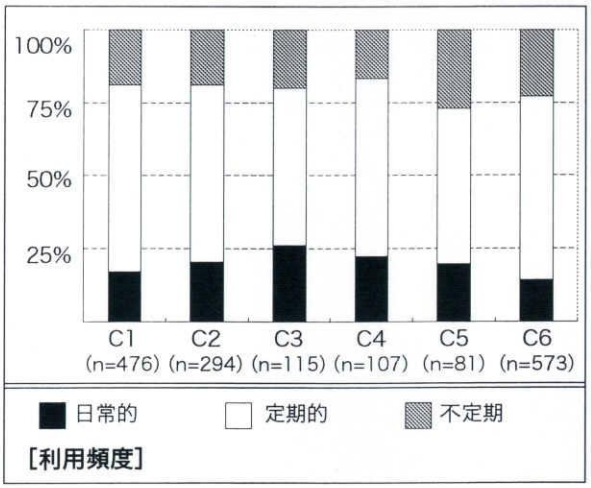
施設をどのような場所として意識し、ニーズをもっているかを施設像として捉える。『人間関係を形成する場所』『目的に取り組む場所』『雰囲気を享受する場所』に大分類する。

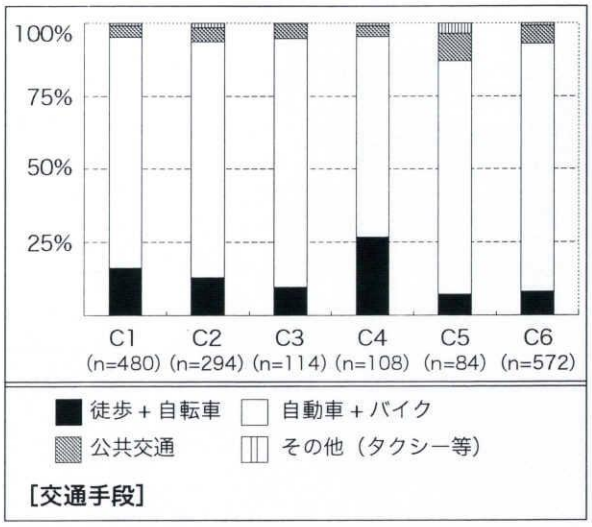
『人間関係を形成する場所』はLCと同様、３分類のなかでは総じて低い。特に有職で非外出・休養志向の【C5】は６タイプ中最も低く、他者との人間関係を形成する場所としてのニーズは高くないことが分かる。

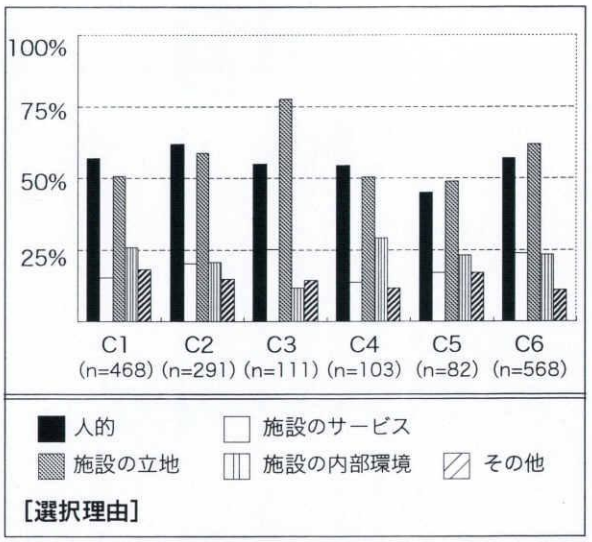
『目的に取り組む場所』は【C1】【C2】【C4】で高く、余暇を過ごす場所に目的性の高い活動（サークル活動や個人の趣味的活動）を許容することを求めている（「趣味」に充実を感じるタイプ）。

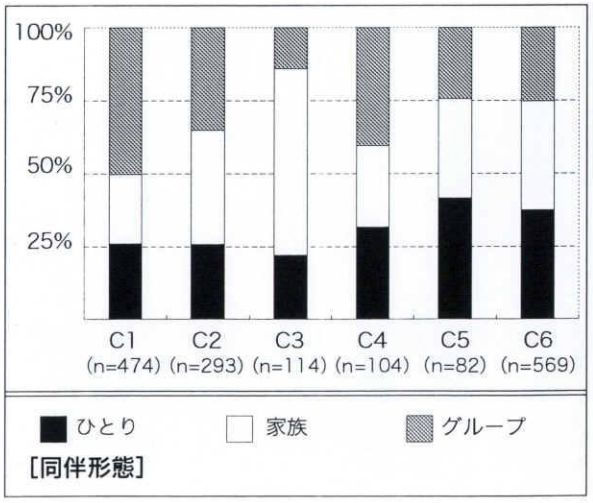
一方、『雰囲気を享受する場所』は【C3】【C5】【C6】で高い。こちらは目的性の高い活動の場へのニーズよりも、個人が気軽に立ち寄れ、思い思いの時間の過ごし方ができる場所を求めている。

とはいえ、各タイプ内の『目的』と『雰囲気』へのニーズを比較すると、【C1】【C2】で若干『目的』の方が高い他は、いずれも『雰囲気』の方が高い（程度はかなり異なるが）。特に有職者のタイプといえる【C5】【C6】では『雰囲気』がかなり大きい。この両タイプは、明確な目的をもたずとも、気分転換の為に容易に立ち寄れる“場”を求めていると捉えられる。









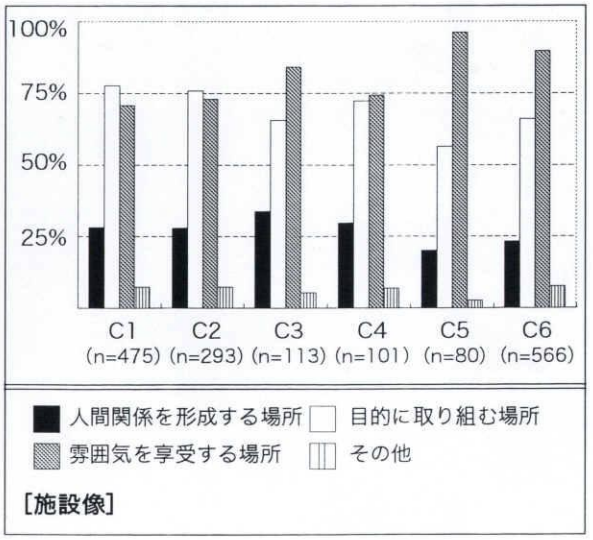


図 4-9　LS タイプにみる特定余暇施設の施設利用形態

表 4-9　各タイプの最もよく利用する地域施設の利用形態

			C1	C2	C3	C4	C5	C6
利用頻度	利用総数		493	303	115	114	87	583
	頻度不明		17	9	0	7	6	10
	回答数		476	294	115	107	81	573
	日常的	ほぼ毎日	5%	5%	8%	7%	6%	6%
		週に３回以上	12%	15%	18%	16%	14%	8%
		小計	17%	20%	26%	22%	20%	14%
	定期的	週に１回程度	39%	37%	31%	30%	30%	33%
		月に２回程度	25%	23%	23%	31%	23%	29%
		小計	64%	61%	54%	61%	53%	63%
	不定期	月に１回程度	13%	13%	15%	13%	15%	16%
		月に１回未満	6%	6%	5%	4%	12%	7%
		小計	19%	19%	20%	17%	27%	23%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%
交通手段	利用総数		493	303	115	114	87	583
	交通手段不明		13	9	1	6	3	11
	回答数		480	294	114	108	84	572
	徒歩＋自転車	徒歩	8%	6%	6%	12%	5%	3%
		自転車	8%	6%	4%	15%	2%	5%
		小計	16%	13%	10%	27%	7%	8%
	自動車＋バイク	バイク	3%	3%	2%	5%	1%	1%
		自家用車	76%	78%	83%	64%	79%	84%
		小計	79%	81%	85%	69%	80%	85%
	公共交通		4%	5%	5%	4%	10%	6%
	その他		1%	2%	0%	1%	4%	1%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%
同伴形態	利用総数		493	303	115	114	87	583
	同伴形態不明		19	10	1	10	5	14
	回答数		474	293	114	104	82	569
	ひとり		26%	26%	22%	32%	41%	37%
	家族		24%	39%	64%	28%	34%	37%
	グループ	隣近所の人	8%	5%	2%	13%	1%	1%
		学生時代の友人	2%	2%	1%	1%	6%	5%
		家族を通じての友人	2%	1%	4%	2%	2%	1%
		趣味を通じての友人	33%	22%	6%	23%	9%	7%
		職場や学校の人	3%	1%	2%	0%	5%	9%
		その他	4%	3%	0%	2%	1%	3%
		小計	50%	35%	14%	40%	24%	25%
	総計		100%	100%	100%	100%	100%	100%

			C1	C2	C3	C4	C5	C6
選択理由	利用総数		493	303	115	114	87	583
	選択理由不明		25	12	4	11	5	15
	回答数		468	291	111	103	82	568
	人的要因	家族友人と一緒に	35%	39%	43%	28%	18%	35%
		誰にも邪魔されず	22%	23%	12%	26%	27%	22%
		小計	57%	62%	55%	54%	45%	57%
	施設のサービス	サービス内容充実	9%	15%	14%	10%	13%	17%
		職員の対応がよい	7%	5%	11%	4%	4%	7%
		小計	15%	20%	25%	14%	17%	24%
	施設の立地	家や学校から近い	18%	16%	26%	15%	11%	23%
		ついで利用できる	11%	19%	25%	9%	11%	17%
		交通が便利	14%	16%	23%	17%	23%	17%
		周辺環境がよい	8%	8%	4%	10%	4%	4%
		小計	51%	59%	77%	50%	49%	62%
	施設の内部	内部の雰囲気がよい	16%	12%	10%	17%	11%	14%
		施設内がにぎやか	3%	1%	0%	4%	4%	5%
		施設内が静か	6%	8%	2%	9%	9%	4%
		小計	26%	21%	12%	29%	23%	23%
	その他		18%	15%	14%	12%	17%	11%
	総計		167%	176%	184%	159%	151%	177%
施設像（施設のイメージ）	利用総数		493	303	115	114	87	583
	施設像不明		18	10	2	13	7	17
	回答数		475	293	113	101	80	566
	人間関係を形成する場所	人の集まり	4%	1%	0%	5%	5%	0%
		家族友人と過ごす	13%	18%	30%	13%	11%	19%
		知人に会える	11%	9%	4%	12%	4%	3%
		小計	28%	28%	34%	30%	20%	23%
	目的に取り組む場所	自分の時間を過ごす	21%	23%	17%	34%	20%	18%
		用事仕事を済ませる	13%	19%	30%	9%	16%	18%
		新しい発見	9%	10%	4%	7%	5%	8%
		遊ぶ	5%	4%	5%	4%	9%	13%
		好きな活動	30%	20%	9%	19%	6%	9%
		小計	78%	76%	65%	72%	56%	66%
	雰囲気を享受する場所	習慣的に行く	7%	10%	16%	7%	13%	10%
		立ち寄り	13%	13%	21%	11%	21%	23%
		居心地よい	8%	7%	8%	12%	8%	6%
		暇をつぶす	7%	8%	12%	10%	14%	14%
		気分転換	32%	32%	23%	33%	36%	33%
		休憩	3%	2%	4%	2%	5%	4%
		小計	71%	73%	84%	74%	96%	90%
	その他		7%	7%	5%	7%	3%	7%
	総計		184%	184%	188%	183%	175%	186%

4-3-2　LSにみる地域施設の利用形態の特徴

以上、各タイプの最もよく利用する地域施設の利用形態をみてきたが、主な特徴を以下に整理する。

[利用頻度]

各タイプとも半数以上が定期的に余暇を地域施設で過ごしている。但し、施設の“常連”ともいえる『日常的』は、各タイプとも一定の割合でいる。特に家事育児への関心が高い【C3】は、子どもの教育の為に、頻度高く施設を利用している。一方、有職者は“常連”が少ない。時間的拘束により、余暇の施設利用が大きく抑制されている。

[交通手段]

基本的に自動車でもアクセスが多いが、日常生活の交通手段に不便さがみられる【C4】は徒歩や自転車でのアクセスが多い。自動車利用の自由度が、施設へのアクセスを規定している。

[同伴形態]

どのタイプも『ひとり』『家族』『グループ』のどの利用単位もみられる。但し、当然その内訳は異なる。子育て期の多い【C3】は家族との利用が多いし、地域活動に積極的な【C1】はグループが多い。
傾向としては、グループの場合、その多くは趣味を通じての友人である。一方、趣味を通じての友人をみつけられないと、ひとりを利用単位としやすい。後者は（時間的拘束の影響もあり）、有職者に多くみられる。

[選択理由]

各タイプとも共通して、『人的要因』と『施設の内部』の選択が多い。特に育児家事への関心が高い【C3】は、施設のアクセス面に特に執心しており、身近な地域に、買い物のついでなどに容易に利用できる子育ての場を求めている。

[施設像]

多くのタイプは目的性の高い活動の場としてのニーズと、固有の目的がなくても気軽に訪れることができる場としてのニーズを両方有している。但し、有職者である【C5】【C6】のように、後者へのニーズが明らかに高い層もみられる。両タイプとも公共施設を余暇を過ごす場所としてはあまり利用していない層でもある。公共施設に対し、特定の目的がなくても気軽に利用できるとしての整備が求められる。

以上みてきたように、タイプによって地域施設の利用形態は特徴がある。これらは地域施設を整備する上で、十分考慮すべき要件であり、各タイプの生活構造と併せて章まとめにて再整理する。

前章同様、次項では本章のまとめとして、LSの各タイプにおいて特に大きな変化のみられた［同伴形態］と［施設像］について、生活背景との関係をみながら再度整理する。

4-4　LSにみる地域施設の利用構造

これまで、地域住民の個人的な余暇活動を行う地域施設について考察してきた。地域施設の利用構造として、地域施設の選択特性と利用形態の考察より得られた知見を整理する。

○余暇を過ごす場所の選択特性と余暇活動の場所としての整備の必要性

地域施設の利用が少ない層（C4、C5）として、職の有無に関わらず休養をすることに充実を感じる人がいる。さらに、これらの人々のなかには、余暇時間を自宅で過ごさない人も少なくない。但し、彼らの潜在的な余暇活動要求は、目的意識をもった選択行動（自宅以外で行う場合が多い行動）の割合も多く、単に休養をするために外出を面倒がっているのではなく、現状では、彼らの要求に合う地域施設の整備がなされていないと捉えられる。

→地域施設の利用を増やすために、無駄な利用を促進するわけではないが、休養を重視する人の受け皿としての地域施設整備も必要ではないだろうか。彼らが地域施設の利用が少ないのは、こういった面からの整備が不十分であることの裏返しとも読める。特に、自宅で余暇を過ごさない（あるいは、過ごせない）層に対しては、地域施設がその拠り所となる場所を提供する必要があるだろう。

○余暇を過ごす相手の相違

地域活動に積極的に参加する層（C1）はそこで得た仲間と一緒に施設利用するため、グループでの利用が多い。また、子育てに関心の強い層（C3）は女性の｛子育て幼少期｝の割合が多く、家族、特に子どもの付き添いとしての利用が多いことが推測される。有職者で休養志向の層（C5）はひとりでの利用が多いといったように、余暇を共に過ごす相手はそれぞれ相違がみられる（図4-10）。

→同伴形態を切り口に、第５章にて改めて分析する。

○余暇活動の多様性

施設に抱くイメージ（施設像）にも特徴的な相違がみられる（図4-11）。地域活動に積極的に参加する層（C1）及び無職者の割合が高い層（C2、C4）では、特定の個人的な目的に取り組む場所として施設を位置づけている。一方、有職者の割合が高い層（C5、C6）では、特定の個人的な目的に取り組む場所としてのイメージは低く、むしろ雰囲気を享受する場所、つまり目的外利用ができる場所として位置づけている。これらは自宅以外で行う余暇活動の多様性として、特定の目的をもった活動だけでなく、目的外に施設を訪れるといった個人的な余暇活動活動（余暇の過ごし方）もあることを示唆している。

→特に、雰囲気を享受する場所、つまり目的外利用ができる場所として位置づけている層（C5、C6）は、公共施設を余暇を過ごす場所としてはあまり利用していない層でもある。

目的外利用を行う場として、公共施設が選択されないのは、公共施設が元来、目的に取り組む場所として、それに必要なサービスを提供するよう整備されてきたことによる。

これらを要求としてさらに整理し、公共施設が目的外利用をも許容する必要があることを次章で考察する。

本章でみてきたように、タイプ別の生活特性、利用特性に配慮した施設計画が必要である。それらに対応するため、地域施設の改善が必要であり、そのためには既存の施設種の枠に囚われない施設機能の再構築が必要と考えられる。上記に加え、タイプ別に大きな特徴のみられた同伴形態別にそれぞれが地域施設に求める要求を整理し、個人的な余暇活動を行う地域施設の整備要件を得たい。

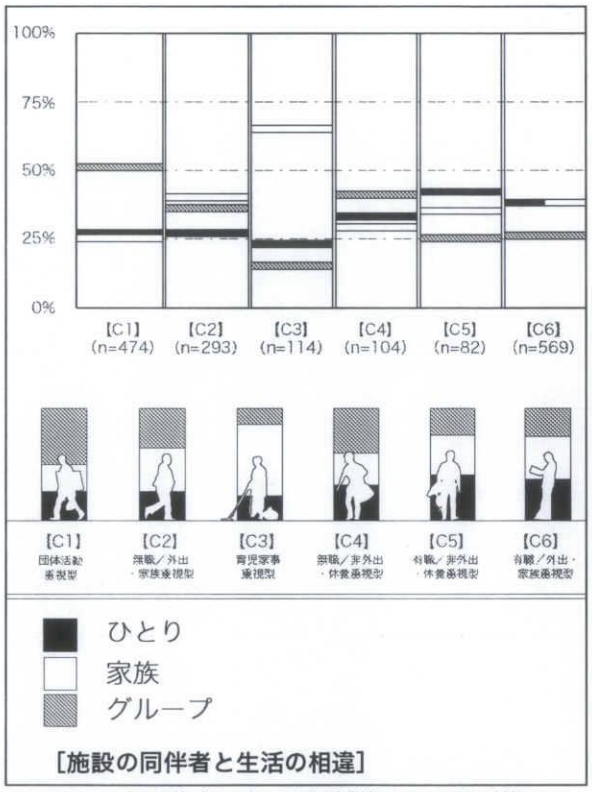


図 4-10　生活様式に応じた地域施設の同伴形態

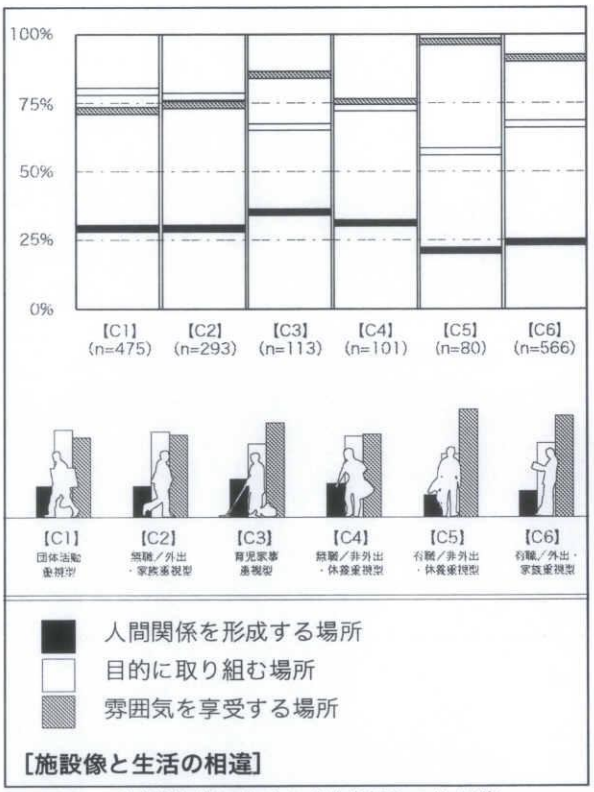


図 4-11　生活様式に応じた地域施設の施設像

第５章　同伴形態に着目した個人的な余暇活動実態

5-1　同伴形態別の地域住民の構成割合
5-2　同伴形態にみる余暇を過ごす場所の選択特性
5-3　同伴形態にみる地域施設の利用形態
5-4　余暇を過ごす場所の整備要件

5-0　本章の目的

前章までに、LC及びLSの観点から個人的な余暇活動を行う際にどの施設を、どのように利用しているかといった地域施設の利用構造を考察してきた。

そのなかで特に、生涯を通じて、また生活様式によって、『余暇を一緒に過ごす相手』に特徴がみられた。本章では、『余暇を一緒に過ごす相手』に着目して、地域施設の利用形態を捉える。

一緒に過ごす相手がひとりなのか、家族なのか、あるいは他者であるのかは余暇の過ごし方、地域施設の利用構造、ひいては余暇を過ごす場所としての地域施設への要求に大きく影響すると考えられる。本章で取り上げる［ひとり］［家族］［グループ］は、余暇を過ごす際に最も基本となる同伴形態である。

図5-1はLC・LSの各段階・タイプの利用単位の推移を示したものである（再掲）。各章末でみたように、各段階・タイプにはそれぞれ主な同伴形態がある。同伴形態別の地域施設の利用構造を捉え、それぞれの要求を明らかにすることにより、現状の課題を見出し、LC・LSの各段階・タイプの要求にも対応した地域施設整備につながるものと考える。

また、表5-1に本章で扱う同伴形態別の回答者割合を示す。［ひとり］［家族］［グループ］の割合に大きな偏りはない。［グループ］については、一緒に過ごす相手に幅広さがあるが、回答割合の偏りから、また、ひとり、家族とは明確に異なる、“他者”と過ごすという点から、一括りにする。

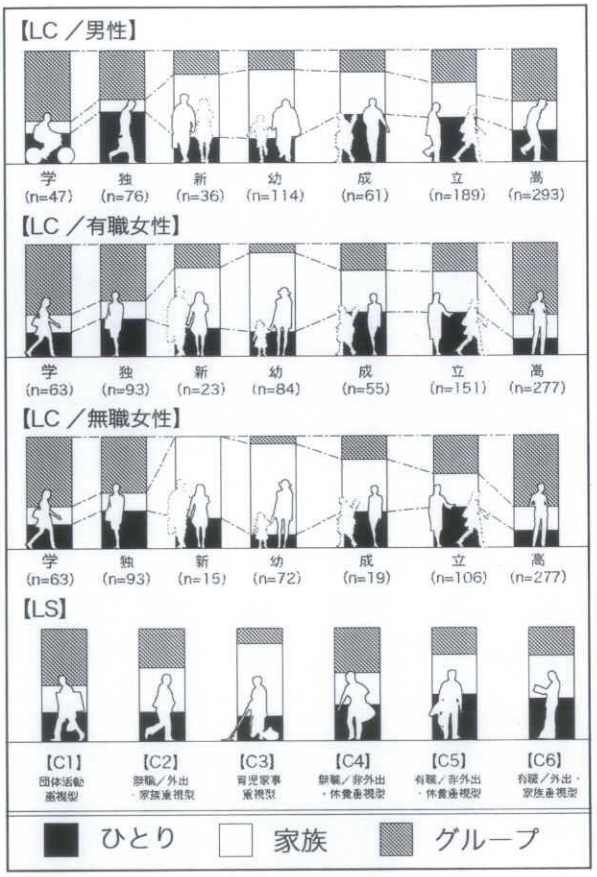


図5-1　各段階・タイプの同伴形態

図5-1　同伴形態別の回答割合

総数		3322		
未回答・同伴不明		1403		
回答数		1919		
ひとり		559		29%
家族		661		34%
グループ	隣近所の人	95	5%	36%
	学生時代の友人	56	3%	
	家族を通じての友人	26	1%	
	趣味を通じての友人	382	20%	
	職場や学校の友人	83	4%	
	その他	57	3%	
総計		1919		100%

5-1　同伴形態別の地域住民の構成割合

「ひとり」「家族」「グループ」の同伴形態別に、各段階・タイプがどの程度いるかを示したのが、表 5-2 である。

LC の段階別の同伴形態割合を模式的に示したのが図 5-2 である。

調査１においてはサンプリングの関係上、子ども独立期と高齢期に属する人が多いのは考慮しなくてはならないが、今後も社会が高齢化を続けることを考えると、無為ではない。

第３章でみた通り、全体として「ひとり」で余暇を過ごす者は｛子ども独立期｝が、「家族」で余暇を過ごす者は｛子ども幼少期｝が、「グループ」で過ごす者は｛学生期｝と｛高齢期｝がそれぞれ多い。

同じく、LS のタイプ別の同伴形態割合を模式的に示したのが図 5-3 である。

こちらも地域活動に参加しない有職者である【C6】に属する者が多いことを考慮しなくてはならないが、現実にもそれらの人々は多いといえる。

第４章でみた通り、全体として「ひとり」で余暇を過ごす者は地域に知り合いをつくりにくい【C6】が、「家族」で余暇を過ごす者は家族との時間を重視する【C2】【C3】が、「グループ」で余暇を過ごす者は積極的な地域活動への参加層であり、地域に仲間をつくりやすい【C1】がそれぞれ多い。

以上の LC、LS 別の割合を考慮しながら、本章では同伴形態による余暇を過ごす場所の選択特性、及び施設の利用形態・ニーズを捉えていく。

＊　１コマが１％を示す。

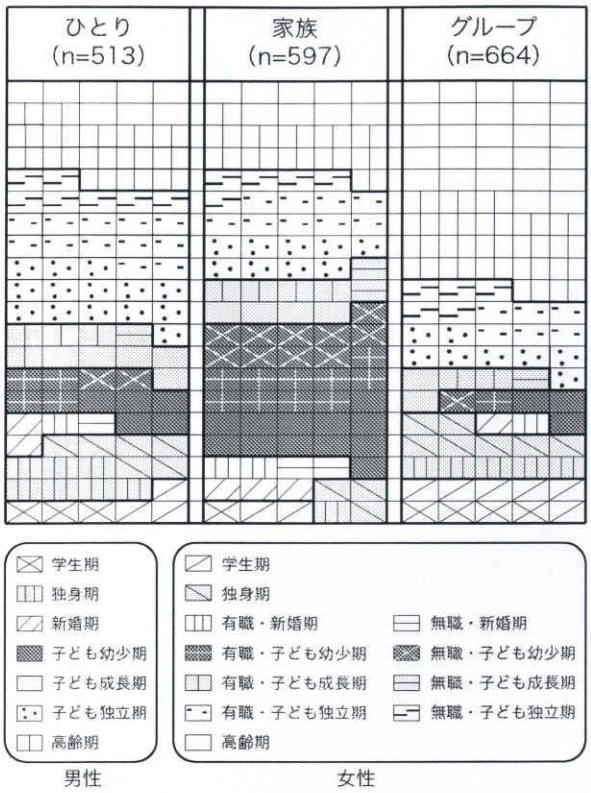


図 5-2　同伴形態の LC 構成模式図

＊　１コマが１％を示す。

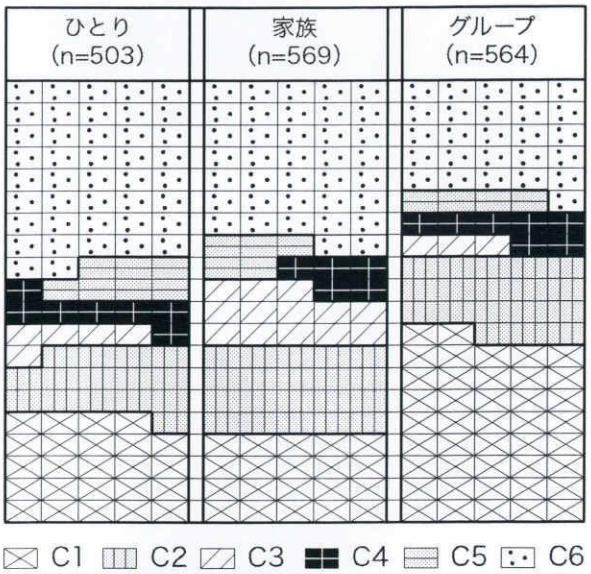


図 5-3　同伴形態の LS 構成模式図

表 5-2　同伴形態の LC・LS 構成

			(該当数)	ひとり	家族	グループ
LC構成	総数		(1919)	559	661	699
	LC 不明		(145)	46	64	35
	回答数		(1774)	513	597	664
	男性	学生期	(47)	3%	1%	4%
		独身期	(76)	7%	1%	5%
		新婚期	(36)	2%	3%	1%
		子ども幼少期	(114)	5%	12%	3%
		子ども成長期	(61)	5%	4%	2%
		子ども独立期	(189)	15%	10%	8%
		高齢期	(293)	15%	13%	21%
		男性総数	(816)	51%	44%	44%
	女性	学生期	(63)	3%	2%	6%
		独身期	(93)	6%	3%	7%
		有職・新婚期	(23)	1%	2%	1%
		無職・新婚期	(15)	1%	2%	0%
		有職・子ども幼少期	(84)	4%	10%	1%
		無職・子ども幼少期	(72)	2%	10%	1%
		有職・子ども成長期	(55)	4%	4%	2%
		無職・子ども成長期	(19)	1%	2%	1%
		有職・子ども独立期	(151)	12%	9%	6%
		無職・子ども独立期	(106)	7%	5%	5%
		高齢期	(277)	8%	9%	27%
		女性総数	(958)	49%	56%	56%
	総計		(1774)	100%	100%	100%
LS構成	総数		(1919)	559	661	699
	LS 不明		(283)	56	92	135
	回答数		(1636)	503	569	564
	C1：団体活動重視型		(474)	24%	20%	42%
	C2：無職／外出・家族重視型		(293)	15%	20%	18%
	C3：育児家事重視型		(114)	5%	13%	3%
	C4：無職／非外出・休養重視型		(104)	7%	5%	7%
	C5：有職／非外出・休養重視型		(82)	7%	5%	4%
	C6：有職／外出・家族重視型		(569)	42%	37%	26%
	総計		(1636)	100%	100%	100%

5-2　同伴形態にみる余暇を過ごす場所

まず、同伴形態別の、余暇を過ごす場所の選択特性を捉える（表5-3）。

高齢者（自宅で過ごさないのは、高齢単身者に多い）を多く含む［グループ］では「自宅」の選択が少ない。

また、「友人・知人宅」は、［ひとり］＜［家族］＜［グループ］と余暇生活における同伴形態が拡大するに従って多くなる。

「地域施設」についてみると、総計はいずれも２件／人程度と大きな相違はない。但し、「社会教育系」の選択については１件／人と余暇を過ごす場所の選択が多い［グループ］に対して、［家族］は際立って少ない。これは第３章で子育て期の人（家族で過ごすことが多い人）も同様の傾向を示していることとも合致する（〈図書館〉についてのみ無職女性で多少選択されている）。

ちなみに「地域施設」の所在地は［ひとり］［家族］では自市町村の内外が概ね半々であるが、［グループ］は自市町村内が多い（表5-4）。ある程度量的整備がなされている公共施設の選択の有無によるものといえる。

「地域施設」の内訳を模式的に示したのが図5-4である。

図中の表現は、図の右下の２種の□型コマの積み重ねで示している。また、25%以上の選択がされている施設種は黒塗している。

［ひとり］で過ごす場所としては〈図書館〉〈商業施設〉を、［家族］で過ごす場所としては〈商業施設〉を、［グループ］で過ごす場所としては〈コミュニティ施設〉〈スポーツ施設〉〈商業施設〉をそれぞれ多用している。どの同伴形態でも、やはり〈商業施設〉の選択は多いが、［ひとり］では６割程度、［家族］では８割程度、［グループ］では３割程度とその割合に大きな相違がある。

上記をまとめると、ひとりで過ごす場所としては図書館、グループで過ごす場所としてはコミュニティ施設やスポーツ施設といった団体で活動できる場所をそれぞれ選択している。同伴形態によって余暇を過ごす場所は大きく相違がみられる。

また、家族での利用の場合、公共施設の選択は少ない。これは、公共施設が家族で過ごす場所としての整備が不十分であるためであり、地域に彼らの受け皿となる場所が商業施設しかないことを示している。これは公共施設の大きな課題といえる。

＊　図中の□は 5%、▯は 1%～4% を示し、例えば 7% は□▯ と表現している。

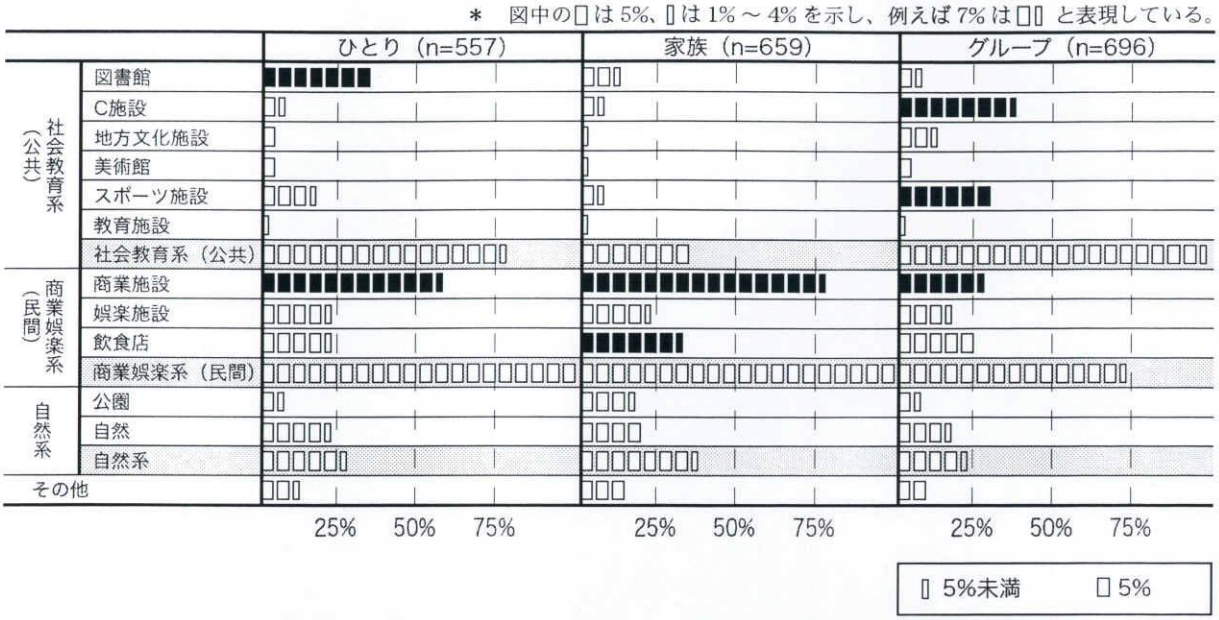


図 5-4　同伴形態別の余暇を過ごす場所

表 5-3　同伴形態別の余暇を過ごす場所

			ひとり	家族	グループ
総数			559	661	699
未回答			2	2	3
回答数			557	659	696
自宅			90%	94%	82%
職場・学校			15%	12%	14%
友人・知人宅			26%	34%	39%
地域施設	社会教育系（公共）	図書館	35%	13%	9%
		コミュニティ施設	8%	6%	38%
		地方文化施設	5%	4%	12%
		美術館・博物館	5%	2%	5%
		スポーツ施設	18%	8%	30%
		教育施設	1%	1%	4%
		小計	72%	35%	99%
	商業娯楽系（民間）	商業施設	58%	78%	27%
		娯楽施設	23%	22%	18%
		飲食店	23%	34%	25%
		小計	104%	133%	71%
	自然系	公園	6%	17%	8%
		自然	21%	20%	16%
		小計	27%	36%	24%
	その他		14%	15%	10%
	地域施設		216%	220%	205%
総計			347%	361%	339%

＊　各項目の 100% に該当する母数は、表中の「回答数」。

表 5-4　同伴形態別の余暇を過ごす地域施設の所在地

	ひとり	家族	グループ
利用総数	559	661	699
4 箇所選択	2236	2644	2796
未回答者	1590	1942	2059
回答者数	646	702	737
自市町村	55%	50%	65%
他市町村	45%	50%	35%
総計	100%	100%	100%

＊　各項目の 100% に該当する母数は、表中の「回答数」。

5-3　同伴形態にみる地域施設の利用形態

次に、「自宅」「職場・学校」「友人・知人宅」以外の余暇を過ごす場所として、生活者個人が最も利用する地域施設について、同伴形態別の施設利用形態をみる。

また、地域施設の整備要件を得るのが目標であるため、「自然系」は含まない。

それぞれが最も利用する地域施設は表 5-5 に示す。

表 5-5　最もよく利用する地域施設（同伴形態別）

			ひとり	家族	グループ
利用総数			559	661	699
交通手段			0	0	0
回答数			559	661	699
地域施設	社会教育系（公共）	図書館	23%	6%	1%
		コミュニティ施設	2%	1%	29%
		地方文化施設	2%	2%	4%
		美術館・博物館	1%	0%	1%
		スポーツ施設	8%	2%	22%
		教育施設	1%	0%	5%
		小計	37%	12%	62%
	商業娯楽系（民間）	商業施設	44%	72%	10%
		娯楽施設	9%	3%	9%
		飲食店	4%	6%	8%
		小計	56%	82%	27%
	その他		7%	6%	11%
総計			100%	100%	100%

5-3-1　同伴形態別の利用形態

同伴形態別に地域施設の利用形態をみていく（表 5-6）。

図 5-5 は地域施設の利用形態の図である。図の表現は 1% を 1 コマとし、複数の項目を併せた大分類は色付けしている。

[利用頻度]

利用頻度を『日常的』『定期的』『不定期』に大分類する。

同伴形態によらず、『定期的』、特に「週に 1 回以上」が多く、余暇を過ごす場所が身近なものとなっている。

常連層である『日常的』に着目すると、［ひとり］が他より多く、生活の一部として地域施設を利用している層であるといえる。

[交通手段]

交通手段を『徒歩＋自転車』『自動車＋バイク』『公共交通』『その他』に大分類する。同伴形態によらず、『自動車＋バイク』、特に「自家用車」が多い。

但し、その割合が［ひとり］［家族］は 8 割以上と非常に高いことに比べ、［グループ］は他の交通手段もみられる（「徒歩」と「自転車」が多い）。

［グループ］は他の同伴形態に比較して、近くの施設を利用する傾向がみられる（選択先の 3 割が近距離にある〈コミュニティ施設〉であることにもよる）。

[選択理由]

施設の選択理由を『人的要因』『施設のサービス』『施設の立地』『施設の内部』に大分類する（最大２種選択）。

同伴形態によらず、『人的要因』と『施設の立地』の選択が多い。余暇を過ごす場所における他者との関わり方と、施設へのアクセスを含めた立地が選択理由として共通して大きいことが分かる。

同伴形態別に詳しくみると、それぞれの選択理由には特徴がみられる。

［ひとり］では「邪魔されない」、「家や学校から近い」、「施設内が静か」が多い。文字通り、他者からの干渉を受けずに、静かに過ごせる場所を求めている場合が多い。

［家族］では「家族友人と一緒」、「ついで利用できる」が多い。特に家族と一緒に過ごせる場所への要望が多い。逆に捉えると、地域全体として家族で過ごせる場所が不足していることを裏打ちする要求とも捉えられる。

また、［家族］は子育て層が多く含まれているが、子どもを伴った親世代にとっては、例えば、買い物や自身の用事のついでに、容易に立ち寄れる場所への要求がみられる。

「グループ］では「家族友人と一緒」「内部の雰囲気が良い」が多い。友人と一緒に利用できることはもとより、他の同伴形態よりも施設の内部空間に関心を寄せるようになる。

[施設像]

施設をどのような場所として意識しているかを施設像として捉える。

『人間関係を形成する場所』『目的に取り組む場所』『雰囲気を享受する場所』に大分類する（最大２種選択）。

同伴形態によらず、『目的に取り組む場所』と『雰囲気を享受する場所』の選択が多い。また、『人間関係を形成する場所』としては、［ひとり］は当然少なく、［家族］［グループ］で多い。当然であるが、余暇生活の同伴形態が拡大するほど、人間関係形成の場を求めるようになる。

同伴形態別に詳しくみると、「気分転換する場所」は同伴形態によらず共通してニーズである。その他、それぞれの抱く施設像には特徴がみられる。

［ひとり］では「自分の時間を過ごす場所」「用事仕事を済ませる場所」「立ち寄る場所」が多い。自宅以外の場所で個人的な目的を果たす場所への要求がみられるが、同時に気軽に立ち寄れる場所も欲している。

［家族］では、「家族と一緒に過ごす場所」「用事仕事を済ませる場所」「立ち寄る場所」が多い。余暇を過ごす場所に対する要求は［ひとり］に近いが、個人的目的ではなく、より家族で過ごせる場所へのニーズが高い。

［グループ］では、「好きな活動をする場所」が多い。共に余暇を過ごす相手がいることを前提にしつつ、彼らと一緒に、目的性の高い活動を行うことのできる場所を求めている。

＊　図中の１コマは 1%。

		ひとり (n=559)	家族 (n=656)	グループ (n=693)
日常的	ほぼ毎日	7%	4%	5%
	週に３回以上	17%	10%	12%
	小計	24%	14%	17%
定期的	週に１回以上	35%	32%	37%
	月に２回程度	25%	29%	24%
	小計	60%	61%	61%
不定期	月に１回程度	11%	18%	15%
	月に１回未満	6%	7%	7%
	小計	17%	25%	22%

[利用頻度]

		ひとり (n=559)	家族 (n=660)	グループ (n=695)
徒歩+自転車	徒歩	4%	3%	11%
	自転車	5%	3%	11%
	小計	9%	6%	23%
自動車+バイク	バイク	3%	0%	3%
	自家用車	81%	91%	64%
	小計	84%	92%	67%
公共交通		6%	2%	8%
その他		1%	1%	2%

[交通手段]

		ひとり (n=539)	家族 (n=645)	グループ (n=683)
人的要因	家族友人と一緒	6%	52%	42%
	誰にも邪魔されない	36%	13%	16%
	小計	42%	65%	58%
施設のサービス	サービス内容充実	16%	18%	7%
	職員の対応が良い	7%	5%	6%
	小計	23%	24%	13%
施設の立地	家や学校から近い	24%	16%	18%
	ついで利用できる	17%	21%	6%
	交通が便利	18%	17%	14%
	周辺環境が良い	6%	5%	7%
	小計	65%	60%	45%
施設の内部	内部の雰囲気が良い	11%	13%	21%
	施設内がにぎやか	3%	3%	3%
	施設内が静か	12%	3%	4%
	小計	27%	19%	28%
その他		14%	9%	19%

[施設の選択理由]

		ひとり (n=546)	家族 (n=647)	グループ (n=699)
人間関係を形成する場所	人の集まる場所	1%	0%	6%
	家族友人と過ごす場所	0%	31%	17%
	知人に会える場所	2%	1%	19%
	小計	3%	32%	41%
目的に取り組む場所	自分の時間を過ごす場所	36%	12%	15%
	用事仕事を済ませる場所	20%	27%	5%
	新しい発見をする場所	11%	5%	8%
	遊ぶ場所	6%	6%	10%
	好きな活動をする場所	11%	5%	37%
	小計	83%	55%	76%
雰囲気を享受する場所	習慣的に行く場所	12%	12%	7%
	立ち寄る場所	23%	22%	6%
	居心地の良い場所	7%	5%	10%
	暇つぶしの場所	12%	15%	4%
	気分転換する場所	31%	31%	34%
	休憩する場所	3%	3%	3%
	小計	88%	88%	64%
その他		9%	7%	5%

[施設像]

図 5-5　同伴形態別の地域施設の利用形態

表 5-6　同伴形態別の地域施設の利用形態

			ひとり	家族	グループ
利用頻度	利用総数		559	661	699
	同伴形態不明		2	5	6
	回答数		557	656	693
	日常的	ほぼ毎日	7%	4%	5%
		週に３回以上	17%	10%	12%
		小計	24%	14%	17%
	定期的	週に１回程度	35%	32%	37%
		月に２回程度	25%	29%	24%
		小計	60%	61%	61%
	不定期	月に１回程度	11%	18%	15%
		月に１回未満	6%	7%	7%
		小計	17%	25%	22%
	総計		100%	100%	100%
交通手段	利用総数		559	661	699
	交通手段不明		1	1	4
	回答数		558	660	695
	徒歩＋自転車	徒歩	4%	3%	11%
		自転車	5%	3%	11%
		小計	9%	6%	23%
	自動車＋バイク	バイク	3%	0%	3%
		自家用車	81%	91%	64%
		小計	84%	92%	67%
	公共交通		6%	2%	8%
	その他		1%	1%	2%
	総計		100%	100%	100%

			ひとり	家族	グループ
選択理由	利用総数		559	661	699
	選択理由不明		20	16	16
	回答数		539	645	683
	人的要因	家族友人と一緒に	6%	52%	42%
		誰にも邪魔されず	36%	13%	16%
		小計	42%	65%	58%
	施設のサービス	サービス内容充実	16%	18%	7%
		職員の対応がよい	7%	5%	6%
		小計	23%	24%	13%
	施設の立地	家や学校から近い	24%	16%	18%
		ついで利用できる	17%	21%	6%
		交通が便利	18%	17%	14%
		周辺環境がよい	6%	5%	7%
		小計	65%	60%	45%
	施設の内部	内部の雰囲気がよい	11%	13%	21%
		施設内がにぎやか	3%	3%	3%
		施設内が静か	12%	3%	4%
		小計	27%	19%	28%
	その他		14%	9%	19%
	総計		171%	176%	164%
施設像（施設のイメージ）	利用総数		559	661	699
	施設像不明		13	14	12
	回答数		546	647	687
	人間関係を形成する場所	人の集まり	1%	0%	6%
		家族友人と過ごす	0%	31%	17%
		知人に会える	2%	1%	19%
		小計	3%	32%	41%
	目的に取り組む場所	自分の時間を過ごす	36%	12%	15%
		用事仕事を済ませる	20%	27%	5%
		新しい発見	11%	5%	8%
		遊ぶ	6%	6%	10%
		好きな活動	11%	5%	37%
		小計	83%	55%	76%
	雰囲気を享受する場所	習慣的に行く	12%	12%	7%
		立ち寄り	23%	22%	6%
		居心地よい	7%	5%	10%
		暇をつぶす	12%	15%	4%
		気分転換	31%	31%	34%
		休憩	3%	3%	3%
		小計	88%	88%	64%
	その他		9%	7%	5%
	総計		183%	182%	186%

5-3-2　地域施設への要求

前節にて、余暇を過ごす場所としての地域施設の利用形態をみてきたが、ここでは［施設像］と［選択理由］に着目する。

図 5-6 は図 5-5 の［施設像］の大分類のみを取り出し、別表現で図化したものである。大分類別の総計を左セルに、大分類の回答を 100% 換算した積み上げグラフを右セルに示している。［家族］は目的に取り組む場所としての意識が他に比べて少ないなど、同伴形態別に施設に抱くイメージは大きく異なっていることが分かる。

また、施設像は、数ある地域施設のなかから地域住民が最も余暇を過ごす場所として、（概ね肯定的に）選択している施設に対するイメージであることから、各自の余暇を過ごす場所に対する要求が反映されていると考えられる。

よって、最大２種回答であった施設像を、ここでは個人の回答パターンから分類し、余暇を過ごす場所としての地域施設への要求として整理する。回答パターンによる分類は以下に示す６種類である。

□以下はひとつのカテゴリからの選択
・『人間関係のみ』
・『目的のみ』
・『雰囲気のみ』
□以下はふたつのカテゴリからの選択
・『人間関係×目的』
・『人間関係×雰囲気』
・『目的×雰囲気』

以上の６分類を地域施設に対する、場としての要求とし、それらに対する施設選択理由を列挙したものが図 5-7 である（施設像の回答パターンの内訳、及び選択理由の割合は表 5-7 ～表 5-9）。ここからは、同伴形態別に“施設への要求”を捉えていく。

［ひとりで過ごす場所に対する要求］

LC･LS でも幅広い層に共通してみられる［ひとり］は、『人間関係』を含む回答は少なく、殆どが『目的のみ』及び『雰囲気のみ』とその組合せである『目的×雰囲気』に偏っている。つまり、ひとりで余暇を過ごす人は、個人的な目的に取り組むことができる場を求める人と、特定の目的なしに立ち寄る場所を求める人、及びその両方を求める人に大別できる。

『目的のみ』の人は、余暇を過ごす場所に対して「自分の時間を過ごす」ことを重視し、選択理由は「邪魔されない」「施設内が静か」が多い。彼らは目的達成のため、自分から進んでひとりで過ごしたい者（実態として、高齢男性に多くみられる、地域に知人が少ない為、仕方なくひとりで過ごす、というケースではない。）と位置づけられる。できるだけ他者と距離をとりたいといった意識もみられ、従って、他者との関わりを極力少なくした独立した（個室型）空間が要求に適するだろうか。

『雰囲気のみ』の人は、「立ち寄り」「気分転換」「暇つぶし」を重視し、選択理由は「家や学校から近い」「職員の対応が良い」が多い。彼らは、ひとりでいても不自然ではない、ふらっと気軽に訪れることのできる敷居の低い場所を求めていると考えられる。特定の目的はないが、自宅以外で過ごせる場所を求める典型といえるだろう。

『目的×雰囲気』の人は、「自分の時間を過ごす」と「気分転換」を重視し、選択理由は「邪魔されない」「家や学校から近い」「ついで利用できる」が多い。また、アクセスの利便性の高い、身近な場所を求めている。上記２つの組合せだが、『雰囲気のみ』よりも「立ち寄り」の気軽さは少なく、この場合はむしろ、ひとりになって日常生活から解放されたいという要求が強いと考えられる。

また、数としては少ないが、『人間関係』を含む人のように、ひとりで過ごしはするものの、（間接的ながらも）他者との関わりをもちたい、知り合いをつくりたいという要求をもった場合もみられる。

[家族で過ごす場所に対する要求]

子育て期や家事育児を重視するタイプ（C3）にみられる［家族］は、前述したように『目的』を含む回答が少なめで、一方『雰囲気』が多い。そのため主要な分類は『雰囲気のみ』『人間関係×雰囲気』『目的×雰囲気』である。つまり、家族で特定の目的をもって余暇を過ごす場合は少なく、施設を目的外利用する場合が多い。彼らは「社会教育系」の選択が多くないことはみてきたが、多くの公共施設が、目的外利用の場として家族と過ごせるよう整備されていないといえる。

また、［ひとり］に比べて人間関係を含む項目の選択割合が多くなるが、その殆どが家族と過ごせる場所を求めるものであることからも、家族で過ごせる場所を地域に補充する必要性が確認される。

『雰囲気のみ』の人は、「立ち寄り」「気分転換」「暇つぶし」「習慣的に行く」を重視し、選択理由は「家族と一緒」「職員の対応が良い」「交通便利」が多い。自宅以外の家族で過ごす場所として、距離的にも近く、気軽に訪れることのできる地域施設を求めている。

『人間関係×雰囲気』の人は、「家族で過ごす」「気分転換」を重視し、選択理由は「家族で過ごす」が非常に多く、「職員の対応が良い」「ついで利用できる」がある。なによりも家族で一緒に過ごせることに強い要求をもっており、職員の対応を含む施設運営に安心感をもてる場所を求めている。同時に、気分転換やついで利用ができる解放的で利便性の高い要素も求める。幼い子どもを伴う子育て期の層が多いことから、自宅の延長として安心感をもって滞在できる、生活必需サービスを含んだ複合施設が有用であろう。

『目的×雰囲気』の人は、「用事仕事を済ませる」を重視し、選択理由は「邪魔されない」「サービス充実」がかなり多い。家族と一緒に利用するものの、目的性の高い過ごし方をしているといえる。家族単位で取り組める催し等のサービスを充実させることが有効と考えられ、それを果たす場として、他の利用者と距離をとった室を設えることも考えられる。

以上のように、家族で過ごせる場所の絶対的な不足から、家族単位で過ごせることを重要視するが、それ以外の知り合いとの交流・親睦を全く求めていないわけではない。子どもを伴っての利用から、同様の家族と親同士が仲良くなり、子育て後の仲間発見となり得る場合もあるだろう。

[グループで過ごす場所に対する要求]

結婚前と高齢期に特に多い［グループ］は、その性格上『人間関係』と『目的』を含む回答が多い。主要な回答は『目的のみ』『人間関係×目的』『人間関係×雰囲気』『目的×雰囲気』である。

一口にグループとして捉えてきたが、その内訳は他に比べて遥かに複雑・多様であるため、施設への要求の幅も広い。また、人々が何らかのつながりをもって一緒に過ごす為、共通した目的を有する場合が多い。

『目的のみ』の人は、「自分の時間を過ごす」「好きな活動をする」を重視し、選択理由は「友人と一緒に」のほか、「邪魔されない」「施設の雰囲気が良い」が多い。ある程度長い時間施設に滞在し、目的性の高い余暇活動を行う人と考えられる。また、なんらかの趣味的活

動を行っていると考えられるが、仲間内だけで過ごすことを望む。それらの人々が好きな活動を行うため、専門性の高い室・設備を有した、受け皿としての整備がいる（アンケートの性格上、確認はできないが組織活動の一環である可能性が高い。組織活動実態は次章で考察する）。

『人間関係×目的』の人は、「知人に会える」「好きな活動」を重視し、選択理由は「友人と一緒」「施設の雰囲気が良い」が多い。グループの仲間と目的を共有するという、ある種の高い社会性を備えた要求をもち、グループ間の親密性は高いと考えられるが、閉鎖的になる恐れもある。また、「知人（グループのメンバーであると考えられる、友人ではない）」との出会いも重視しており、新たな人間関係の形成のも要求がある。これらのつながりの形成を助け、維持させるための活動場所が必要となる。

『人間関係×雰囲気』の人は、「友人と過ごす」「気分転換」を重視し、選択理由は「友人と一緒」「施設の雰囲気が良い」が多い。上記の『人間関係×目的』に近く、滞在する為に施設の雰囲気を意識しているが、こちらは特定の目的に取り組んでいないようだ。特に目的ある活動をしているわけではなく、友人と時間をつぶすといった余暇を過ごしていると考えられる。

『目的×雰囲気』の人は、「好きな活動」「気分転換」を重視し、選択理由は「友人と一緒」「家や学校から近い」が多い。グループで取り組む目的性の高い活動と、その合間に場の雰囲気を感じることの両方に要求がある。また、施設へのアクセスを重視しており、身近な施設に活動場所を求めている。

以上みてきたように、同伴形態別で施設への要求とそれに対応した選択理由には大きな相違がみられる。これらから得られる、同伴形態別の、余暇を過ごす場所の整備要件を本章のまとめとして次節に提示する。

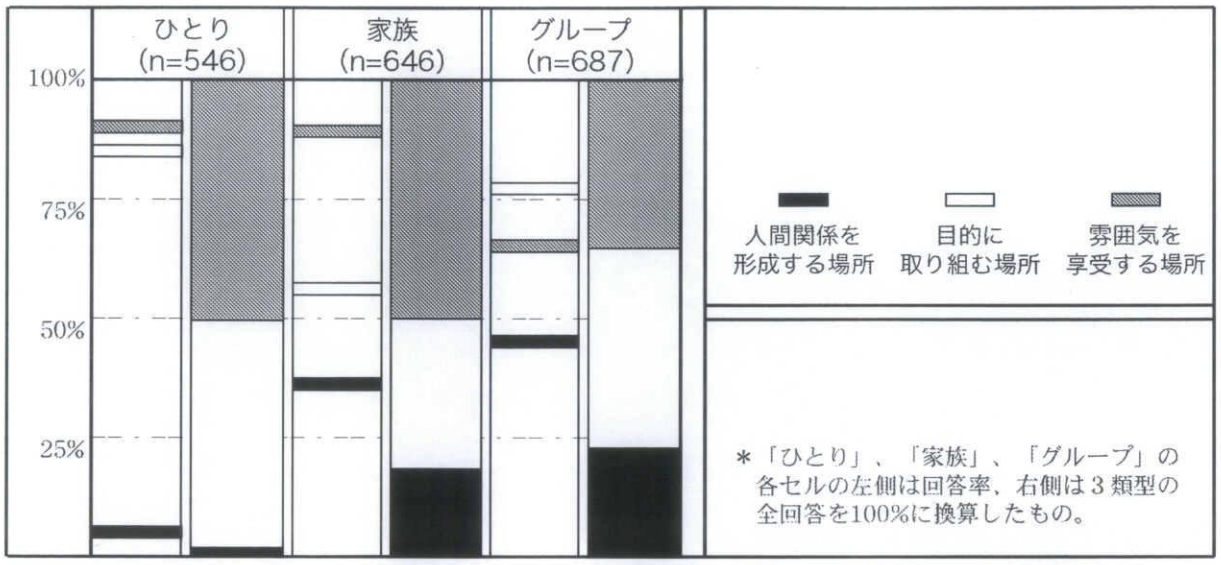
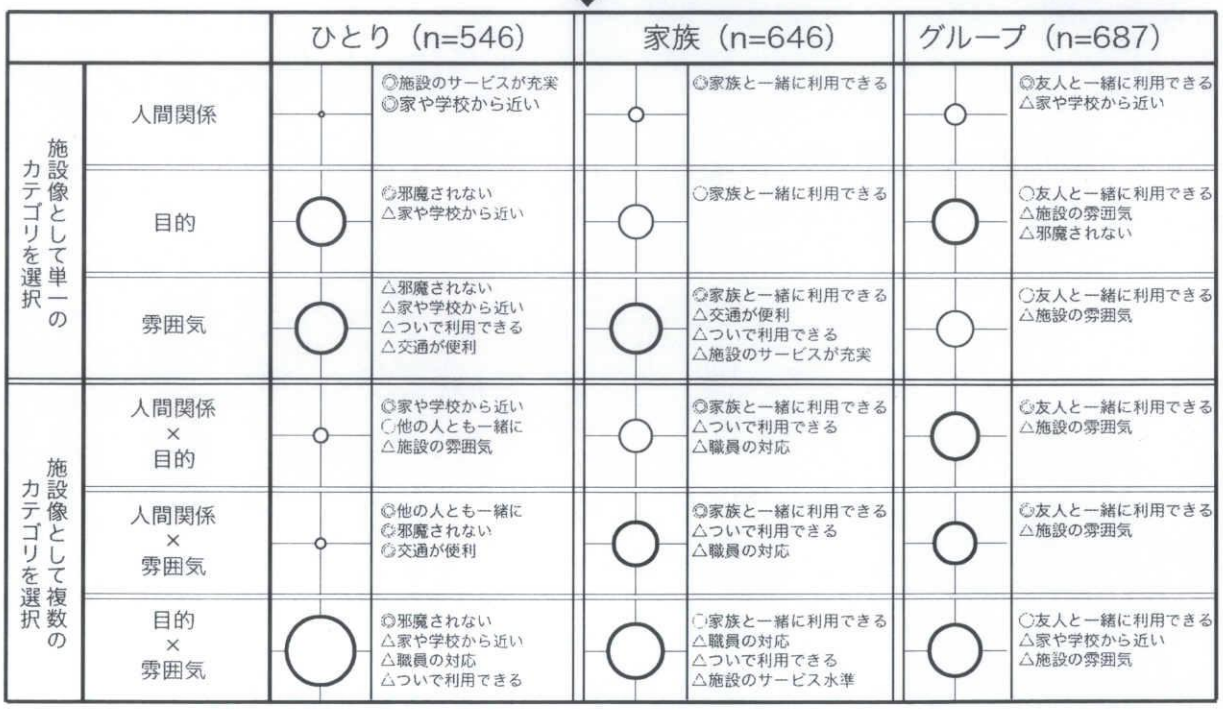


図 5-6　同伴形態別の地域施設の施設像

表 5-7　同伴形態別の地域施設の施設像組合せ

		ひとり	家族	グループ
総数		559	661	699
施設像不明		13	15	12
回答数		546	646	687
単一カテゴリから選択	人間関係のみ	0%	2%	4%
	目的のみ	21%	11%	18%
	雰囲気のみ	24%	23%	12%
複合カテゴリから選択	人間関係×目的	2%	10%	20%
	人間関係×雰囲気	1%	18%	16%
	目的×雰囲気	45%	28%	25%
その他含む		9%	7%	5%
総計		100%	100%	100%

回答パターン（最大２種）による組合せと、
それに対応する施設の選択理由。



＊　円の大きさは施設像組合せ（ニーズ）の割合に比例。縦軸で 100% とし、15% 以上の回答は外周部が太い。
＊　各セルの右側は施設の選択理由（整備要件）。◎は 40% 以上、○は 30% ～ 39%、△は 20% ～ 29%。

図 5-7　同伴形態別の地域施設に抱く施設像（個人回答の組合せ）

表 5-8　同伴形態別の施設像組合せの内訳

			単一ニーズ			複合ニーズ			その他含む
			人間関係のみ	目的のみ	雰囲気のみ	人間関係×目的	人間関係×雰囲気	目的×雰囲気	
ひとり	総数		2	112	129	9	4	243	47
	人間関係を形成する場所	人の集まり	50%	0%	0%	22%	0%	0%	2%
		家族友人と過ごす	0%	0%	0%	11%	0%	0%	0%
		知人に会える	100%	0%	0%	67%	100%	0%	2%
		小計	150%	0%	0%	100%	100%	0%	4%
	目的に取り組む場所	自分の時間を過ごす	0%	64%	0%	33%	0%	48%	6%
		用事仕事を済ませる	0%	30%	0%	33%	0%	26%	13%
		新しい発見	0%	1%	0%	11%	0%	9%	0%
		遊ぶ	0%	12%	0%	0%	0%	7%	4%
		好きな活動	0%	29%	0%	22%	0%	9%	4%
		小計	0%	137%	0%	100%	0%	100%	28%
	雰囲気を享受する場所	習慣的に行く	0%	0%	22%	0%	25%	12%	13%
		立ち寄り	0%	0%	52%	0%	0%	21%	9%
		居心地よい	0%	0%	9%	0%	25%	11%	2%
		暇をつぶす	0%	0%	29%	0%	0%	11%	4%
		気分転換	0%	0%	46%	0%	50%	42%	15%
		休憩	0%	0%	8%	0%	0%	2%	0%
		小計	0%	0%	166%	0%	100%	100%	43%
	その他		0%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
	総計		150%	137%	166%	200%	200%	200%	174%
家族	総数		16	73	148	67	118	178	46
	人間関係を形成する場所	人の集まり	0%	0%	0%	1%	0%	0%	0%
		家族友人と過ごす	94%	0%	0%	99%	99%	0%	11%
		知人に会える	19%	0%	0%	0%	1%	0%	0%
		小計	113%	0%	0%	100%	100%	0%	11%
	目的に取り組む場所	自分の時間を過ごす	0%	30%	0%	21%	0%	22%	2%
		用事仕事を済ませる	0%	60%	0%	46%	0%	54%	9%
		新しい発見	0%	18%	0%	3%	0%	11%	0%
		遊ぶ	0%	18%	0%	19%	0%	8%	2%
		好きな活動	0%	21%	0%	10%	0%	5%	0%
		小計	0%	147%	0%	100%	0%	100%	13%
	雰囲気を享受する場所	習慣的に行く	0%	0%	23%	0%	10%	13%	11%
		立ち寄り	0%	0%	53%	0%	13%	26%	7%
		居心地よい	0%	0%	11%	0%	13%	1%	0%
		暇をつぶす	0%	0%	28%	0%	16%	21%	0%
		気分転換	0%	0%	49%	0%	47%	38%	15%
		休憩	0%	0%	8%	0%	2%	1%	2%
		小計	0%	0%	172%	0%	100%	100%	35%
	その他		0%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
	総計		113%	147%	172%	200%	200%	200%	159%
グループ	総数		26	124	85	134	110	174	34
	人間関係を形成する場所	人の集まり	31%	0%	0%	16%	8%	0%	0%
		家族友人と過ごす	46%	0%	0%	37%	49%	0%	6%
		知人に会える	65%	0%	0%	47%	43%	0%	6%
		小計	142%	0%	0%	100%	100%	0%	12%
	目的に取り組む場所	自分の時間を過ごす	0%	41%	0%	11%	0%	23%	0%
		用事仕事を済ませる	0%	8%	0%	7%	0%	7%	6%
		新しい発見	0%	23%	0%	8%	0%	9%	3%
		遊ぶ	0%	13%	0%	17%	0%	17%	3%
		好きな活動	0%	79%	0%	56%	0%	44%	21%
		小計	0%	165%	0%	100%	0%	100%	32%
	雰囲気を享受する場所	習慣的に行く	0%	0%	22%	0%	6%	11%	0%
		立ち寄り	0%	0%	24%	0%	6%	7%	6%
		居心地よい	0%	0%	34%	0%	16%	11%	0%
		暇をつぶす	0%	0%	15%	0%	7%	5%	0%
		気分転換	0%	0%	74%	0%	55%	62%	9%
		休憩	0%	0%	6%	0%	8%	3%	3%
		小計	0%	0%	175%	0%	100%	100%	18%
	その他		0%	0%	0%	0%	0%	0%	100%
	総計		142%	165%	175%	200%	200%	200%	162%

表 5-9　同伴形態別の施設像組合せと施設選択理由

		単一ニーズ			複合ニーズ			その他含む
		人間関係	目的	雰囲気	人間関係×目的	人間関係×雰囲気	目的×雰囲気	
ひとり	総数	2	112	129	9	4	243	47
	不明	0	5	3	0	0	7	2
	回答数	2	107	126	9	4	236	45
	家族友人と一緒に	0%	5%	7%	33%	50%	4%	13%
	邪魔されない	0%	47%	25%	11%	50%	40%	22%
	サービス充実	50%	16%	17%	0%	0%	14%	27%
	職員の対応よい	0%	11%	20%	11%	0%	20%	16%
	家や学校から近い	50%	20%	23%	44%	0%	29%	18%
	ついで利用できる	0%	11%	20%	11%	0%	20%	16%
	交通便利	0%	13%	19%	11%	50%	19%	13%
	施設周辺の環境	0%	3%	7%	0%	0%	7%	4%
	施設の雰囲気よい	0%	7%	13%	22%	0%	12%	9%
	施設がにぎやか	0%	3%	4%	11%	0%	3%	0%
	施設が静か	0%	20%	8%	0%	0%	14%	2%
	その他	50%	16%	10%	33%	0%	11%	38%
	総計	150%	170%	172%	189%	150%	193%	178%
家族	総数	16	73	148	67	118	178	46
	不明	0	2	4	1	2	3	0
	回答数	16	71	144	66	116	175	46
	家族友人と一緒に	63%	38%	45%	71%	73%	39%	54%
	邪魔されない	19%	14%	13%	8%	11%	19%	7%
	サービス充実	19%	14%	19%	14%	15%	23%	20%
	職員の対応よい	13%	18%	21%	24%	22%	25%	17%
	家や学校から近い	6%	17%	16%	17%	11%	19%	20%
	ついで利用できる	13%	18%	21%	24%	22%	25%	17%
	交通便利	6%	11%	24%	14%	16%	16%	17%
	施設周辺の環境	0%	4%	4%	8%	7%	6%	2%
	施設の雰囲気よい	0%	17%	8%	15%	15%	15%	7%
	施設がにぎやか	0%	4%	3%	6%	4%	3%	0%
	施設が静か	0%	4%	1%	0%	3%	6%	0%
	その他	13%	10%	9%	2%	3%	8%	30%
	総計	150%	170%	183%	202%	203%	203%	191%
グループ	総数	26	124	85	134	110	174	34
	不明	0	2	1	2	3	3	0
	回答数	26	122	84	132	107	171	34
	家族友人と一緒に	50%	30%	30%	53%	60%	38%	24%
	邪魔されない	12%	20%	12%	13%	17%	19%	3%
	サービス充実	4%	8%	14%	4%	7%	8%	0%
	職員の対応よい	4%	5%	8%	5%	5%	7%	9%
	家や学校から近い	23%	11%	15%	17%	19%	25%	15%
	ついで利用できる	4%	5%	8%	5%	5%	7%	9%
	交通便利	12%	16%	11%	17%	10%	16%	6%
	施設周辺の環境	0%	7%	6%	8%	7%	8%	6%
	施設の雰囲気よい	15%	23%	27%	20%	22%	20%	9%
	施設がにぎやか	0%	3%	4%	5%	3%	2%	0%
	施設が静か	4%	4%	5%	6%	1%	4%	3%
	その他	15%	27%	21%	15%	9%	16%	59%
	総計	142%	158%	162%	169%	164%	170%	141%

5-4　余暇を過ごす場所の整備要件

本章は、生涯を通じて（第３章）、また生活様式に応じて（第４章）、特徴のみられた余暇を過ごす相手に着目してきた。同伴形態によって、余暇を過ごす場所の選択特性、及び最も良く利用する地域施設の利用形態といった地域施設の利用構造が相当に異なるという推測をもってはじめたが、さらに、同伴形態によって地域施設への要求にも大きな相違があることが分かった。

以下に要点を整理する。

本章の考察より、同伴形態別に余暇を過ごす場所は相当に異なっていることが分かった（図 5-4）。民間施設はどの同伴形態でも選択が多いが、特に家族で過ごす場合に選択が多い。公共施設に着目すると、ひとりで過ごす人は図書館、グループで過ごす人はコミュニティ施設・スポーツ施設といったように、それぞれの同伴形態別に利用する施設種に特徴がある。一方、家族で過ごす人は公共施設をあまり選択しない傾向があることが明らかとなった。これを逆に捉えると、公共施設は家族で過ごす場所として（特に、子育ての場として）の整備は不十分とも考えられる。

また、前節にて最も良く利用する地域施設の利用形態を考察してきたが、特に余暇を過ごす地域施設に抱く施設像の組合せから、地域住民の地域施設への要求を６種に整理した（図 5-7、表 5-7 参考）。

同伴形態別に、図 5-8 に示すように６角形の図に整理し直し（図 5-10 以降、要求として多いカテゴリ：表 5-7 の 15% 以上の項、は色付けしている）、それぞれの要求に対応する施設整備要件を「プログラム・運営による対応」「施設整備による対応」に分けて示す。

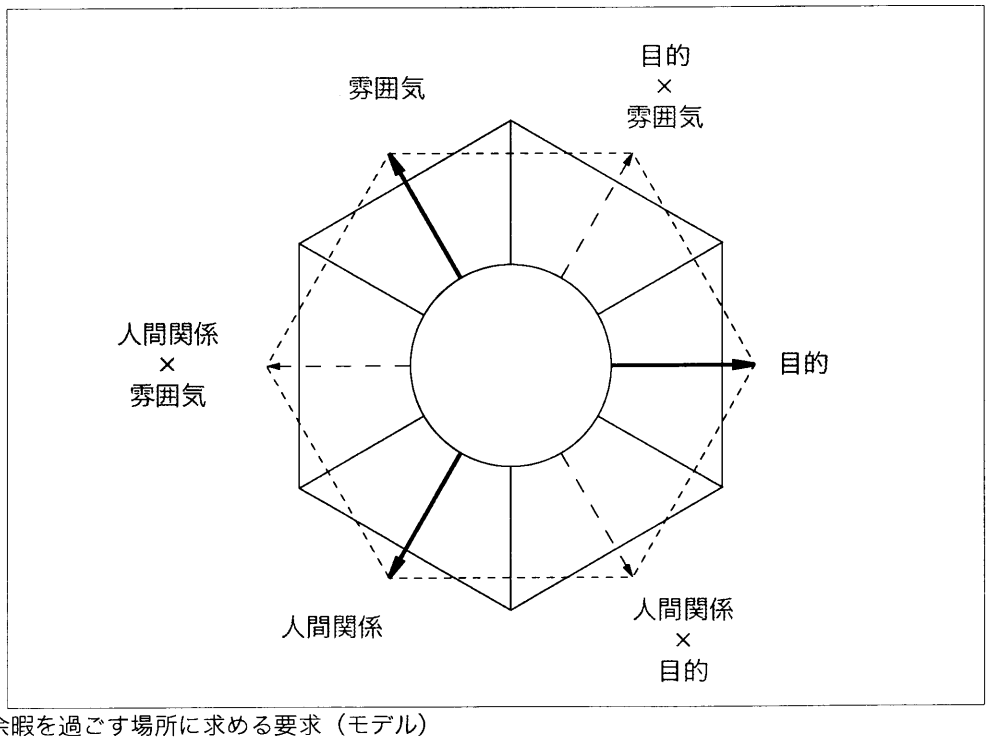


図 5-8　余暇を過ごす場所に求める要求（モデル）

[余暇をひとりで過ごす人の要求と整備要件]

余暇をひとりで過ごす人の要求とそれに対する地域施設の整備要件を図5-9に示す。また、要求として大きい以下の3種を取り上げる。

○ひとりになれる場所

（目的のみ）

純粋に個人の目的に取り組む為、誰にも邪魔されずに利用できる場所を要求する。この要求に対応するには、場の整備として、独立した個人用スペースの整備・充実が課題となる。

○気軽に訪れる場所

（雰囲気のみ）

目的がなくても気軽に立ち寄れる場所を要求する。ひとりでいても不自然でなく、気軽に訪れることのできる施設の敷居の低さの演出が重要。その際、施設への入りやすさはもちろん、この要求をもった人が滞在できる、目的外利用できるスペース（フリースペース）の整備・充実を考える必要がある。

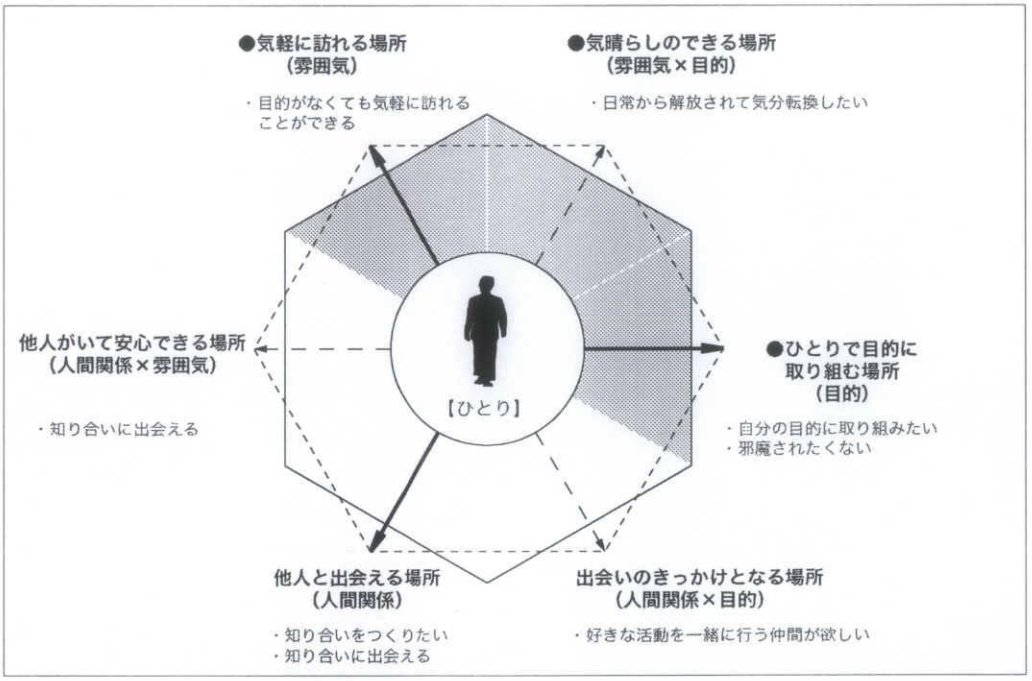
○気晴らしのできる場所

（目的×雰囲気）

日常から解放されて気分転換できる場所を要求する。自宅から近く、アクセスの利便性の高い、施設の身近さが必要。上記と同様、自分の勉強・用事をしながら、その合間に休憩できるスペース・機能といった、目的外利用できるフリースペースの整備・充実が望まれる。

上記に補足し、数としては少ないが、『人間関係』を含む人のように、ひとりで過ごしはするものの、（間接的ながらも）他者との関わりをもちたい、知り合いをつくりたいという要求をもった場合もみられるため、他者と接する機会の提供も考慮したい。そのためには地域施設におけるプログラムによる対応として、講座や催し等による知り合いづくり・仲間づくりの機会を提供することが考えられる。

一方、［ひとりになれる場所］の要求のなかには、極めて個人的に活動し、その過程・成果とも外部に発信しない、自己完結型の人々も含まれているだろう。一見すると消極的ともとられかねない要求であるが、そういった人々の要求を受け止め、活動を支援する側面も今後の地域施設の整備には不可欠となるだろう。



ひとりで過ごす場所への要求 -個人的な余暇活動-	他人と出会える場所（人間関係）	ひとりで目的に取り組む場所（目的）	気軽に訪れる場所（雰囲気）	出会いのきっかけになる場所（人間関係×目的）	他人がいて安心できる場所（人間関係×雰囲気）	気晴らしのできる場所（目的×雰囲気）
	◀・知人に会える	◀・邪魔されたくない ・自分の時間を過ごしたい	◀・立ち寄りやすい ・気分転換できる	◀・知人に会える ・家や学校から近い	◀・知人に会える	◀・自分の時間を過ごしたい ・家や学校から近い
要求への対応	▷ 利用者同士のコミュニケーションの促進	▷ ひとりで行う活動の受け皿 ▷ 他の人と一緒にいたくない	▷ 目的がなくても訪れやすい場所としての整備	▷ 利用者同士のコミュニケーションの促進	▷ 利用者同士のコミュニケーションの促進	▷ ひとりになって日常から解放される場所としての整備
対応の方向性	▷ 知り合いをつくる機会の提供	▷ ひとりで過ごせる場所の提供	▷ 施設の敷居の低さの演出	▷ 知り合いをつくる機会の提供	▷ 知り合いをつくる機会の提供	▷ 施設の敷居の低さの演出
プログラム・運営による対応	▷ 講座等による知り合いづくりの支援			▷ 講座等による知り合いづくりの支援	▷ 講座等による知り合いづくりの支援	
施設整備による対応	▷ サロン的空間の整備・充実	▷ 独立した個室的スペースの整備・充実	▷ 施設への入りやすさ ▷ フリースペースの整備	▷ サロン的空間の整備・充実	▷ サロン的空間の整備・充実	▷ 施設へのアクセス改善 ▷ フリースペースの整備

図 5-9　同伴形態別の余暇を過ごす場所への要求と整備要件（ひとり）

[余暇を家族で過ごす人の要求と整備要件]

余暇を家族で過ごす人の要求とそれに対する地域施設の整備要件を図5-10に示す。また、要求として大きい以下の３種を取り上げる。

○家族で気分転換できる場所

（雰囲気のみ）

家族で目的がなくても気軽に立ち寄れる場所への要求。施設の敷居の低さの演出が重要。その際、施設への入りやすさはもちろん、この要求をもった人が滞在できる、目的外利用できるスペース（フリースペース）の整備・充実を考える必要がある。特に、地域全体で家族で過ごせる場所が不足しているため、早急な対応が求められる。

○利便性の高さを享受できる場所

（目的×雰囲気）

家族で買い物などの用事を済ませたついでに寄りやすい場所への要求。目的外利用できるスペース（フリースペース）の整備・充実に加え、生活必需サービスを含んだ機能複合も期待される。

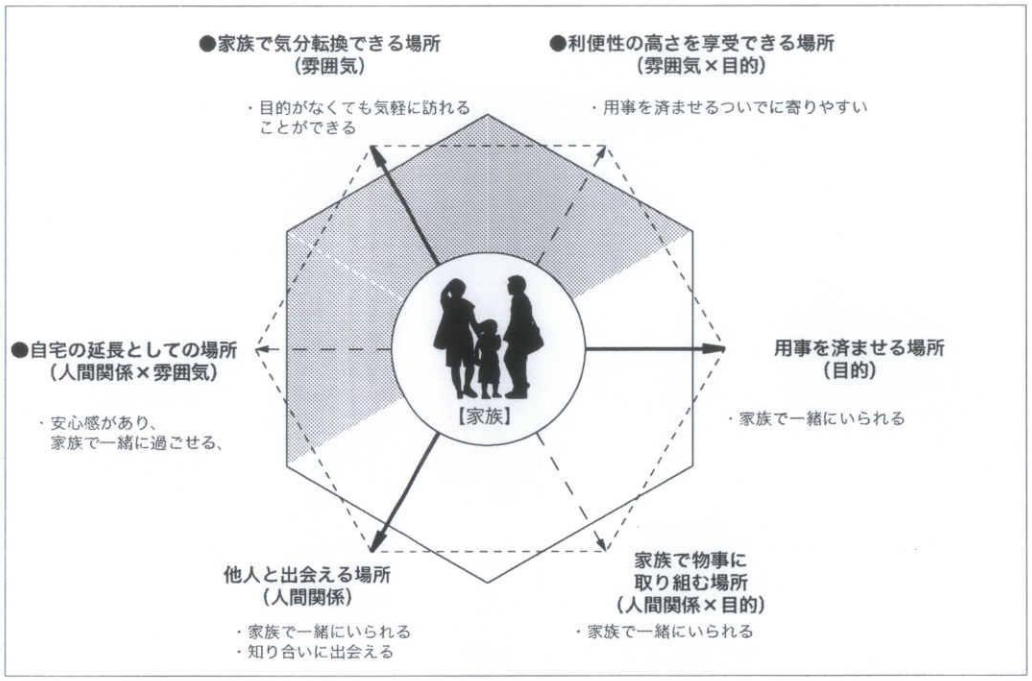
○自宅の延長（代替）としての場所

（人間関係×雰囲気）

自宅以外で家族が安心して過ごせる場所への要求。自宅の延長・代替場所として利用できる家庭的なしつらえの整備が望まれる。

地域全体の課題として、家族で過ごせる場所の絶対的な不足が挙げられ、早急に解決すべき課題といえる。その際には家族で取り組めるイベントや催しの開催も有効であろう。

また、地域住民自身も家族単位で過ごせることを重要視するが、それ以外の知り合いとの交流・親睦を求めていないわけではない。また、家族で過ごす人のなかには、幼い子どもを伴っての、子どもに付き添う為の利用である場合がある程度あると考えられる。その場合、親は付き添いだけで終わることがないよう、親自身の興味・要求を喚起する仕掛けが求められる。これらの自己実現要求を喚起するためには、特に子育てが終わった後に、自分が取り組みたい活動を想起させるのが効果的と考えられ、現在そういった活動を行っている団体等の紹介、成果発表、情報発信、あるいは講座等への勧誘を行うスペースの整備・充実が期待される。加えて、子どもの存在は、親同士の交流のきっかけとなり得る為、それを支援する体制も必要となる。



家族で過ごす場所への要求 -個人的な余暇活動-	他人と出会える場所（人間関係）	用事を済ませる場所（目的）	家族で気分転換できる場所（雰囲気）	家族で物事に取り組む場所（人間関係×目的）	自宅の延長としての場所（人間関係×雰囲気）	利便性の高さを享受できる場所（目的×雰囲気）
	◀ ・家族と過ごせる ・知人に会える	◀ ・用事を済ませる	◀ ・立ち寄りやすい ・気分転換できる ・交通が便利	◀ ・家族で過ごせる ・用事を済ませる ・ついで利用できる	◀ ・家族と過ごせる ・気分転換	◀ ・用事を済ませる ・気分転換できる ・ついで利用できる
要求への対応	▷ 利用者同士のコミュニケーションの促進	▷ 個別に過ごす場所	▷ 家族で訪れやすい気軽さの演出	▷ 家族で取り組める活動の提供	▷ 自宅以外の家族で過ごせる場所	▷ ついで利用を可能にする利便性の高さ
対応の方向性	▷ 知り合いをつくる機会の提供	▷ 個別に過ごす場所の提供	▷ 施設の敷居の低さの演出	▷ 家族で取り組める催し・講座等の提供	▷ 自宅の延長として安心して過ごせる	▷ 買い物等のついでに利用できる場所
プログラム・運営による対応	▷ 講座等による家族以外の知り合いづくり支援	▷ 家族それぞれの要求に併せたサービス提供	▷ 付き添いだけでなく、親自身の要求を満める展示等	▷ 家族で取り組める催し・講座等の提供		▷ 機能複合による利便性の高さ
施設整備による対応	▷ サロン的空間の整備・充実		▷ フリースペースの整備	▷ サロン的空間の整備・充実	▷ 家庭的なしつらえによる安心感	▷ 生活必需施設との複合 ▷ フリースペースの整備

図 5-10　同伴形態別の余暇を過ごす場所への要求と整備要件（家族）

[余暇をグループで過ごす人の要求と整備要件]

余暇をグループで過ごす人の要求とそれに対する地域施設の整備要件を図 5-11 に示す。また、要求として大きい以下の４種を取り上げる。

○グループで目的に取り組む場所

（目的のみ）

グループで目的性の高い趣味活動を行うための場所の要求。その受け皿となる活動場所の提供と専門的な室・設備の整備が必要。活動場所である室の量的拡充・質的充実が当てはまる。

○気晴らしのできる場所

（目的×雰囲気）

特にグループの場合、目的性の高い趣味活動の合間に利用できるスペースを求める。休憩や飲食といった、グループの目的（趣味活動）以外の空間の使い分けの要求への要求であり、これもフリースペース整備のひとつといえる。

○仲間のつながりを維持・形成する場所

（人間関係×目的）

好きな活動を共に行う仲間と一緒に過ごすこと、また、新たな出会いへの要求。特に、グループ単位で利用できるサロン的空間（フリースペース）の共有、、グループ維持を支援する親睦・交流の場の整備が課題。また、仲間形成を誘発する講座・催しにも力を入れたい。

○グループで時間をつぶす場所

（人間関係×雰囲気）

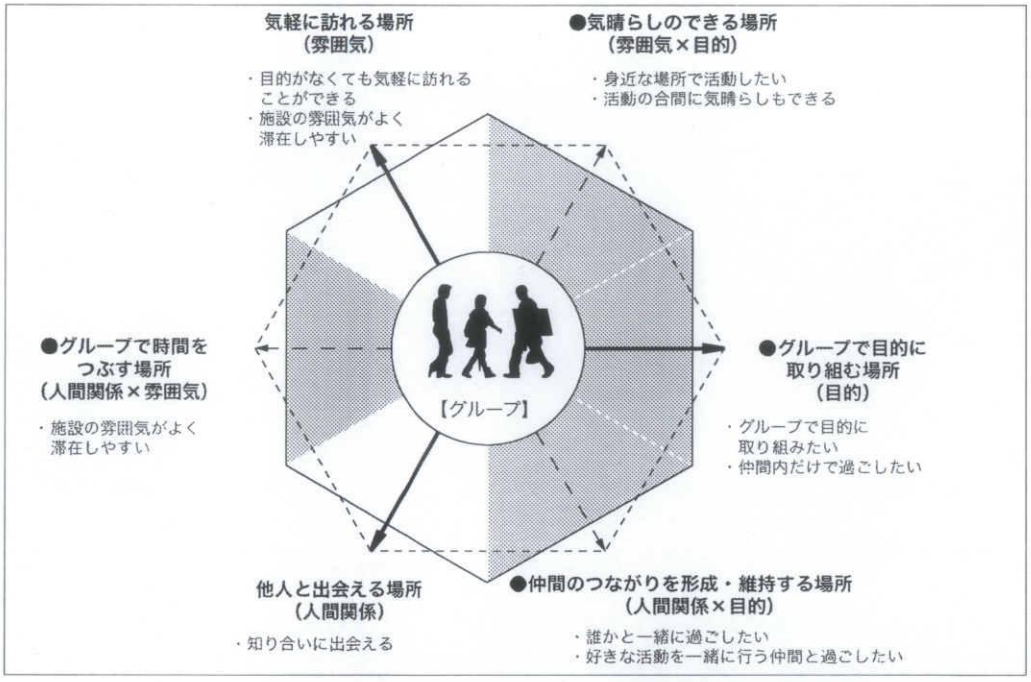
特定の目的をもって施設を利用するわけではないが、友人と一緒に過ごせる場所への要求。ある程度の人数で利用できるサロン的空間、滞在可能なしつらえの充実が望まれる。

グループで余暇を過ごす人は、ひとり、家族よりも幅広い要求を有している。これは、目的を共有したグループでの趣味活動、近隣住民の集まり、少人数の友人といった、幅広い集団が含まれていることにもよる部分もあるが、自分以外の他者と一緒に行う活動の幅広さと、それに伴う要求の幅広さを示している。

目的をもった活動を行う場合は、地域施設従来の機能的サービスの一環として、その活動場所となる室・設備への要求と、その合間に利用できる飲食スペースといったスペースの充実が求められる。また、他の同伴形態同様、目的外利用できるスペースへの要求も大きい。

一方、新たな友人形成、グループ間交流を期待する人も多く、それらを促進する講座等の充実、既成グループ内外の親睦・交流を行える企画、親睦のためのサロン的空間の充実と、合同発表会等を可能にする大規模な発表の場の整備も期待される。

今回の調査では、グループの人数を把握できていないが、その人数に応じた空間の規模への対応が大きな課題である。



グループで過ごす場所への要求 -個人的な余暇活動-	他人と出会える場所（人間関係）	グループで目的に取り組む場所（目的）	気軽に訪れる場所（雰囲気）	仲間のつながりを維持・形成する場所（人間関係×目的）	グループで時間をつぶす場所（人間関係×雰囲気）	気晴らしのできる場所（目的×雰囲気）
	◀ ・知人に会える	◀ ・好きな活動をする	◀ ・気分転換できる ・施設の雰囲気が良い	◀ ・知人に会える ・気分転換できる	◀ ・友人と過ごす ・気分転換できる	◀ ・好きな活動をする ・気分転換できる ・家や学校から近い
要求への対応	▷ 利用者同士のコミュニケーションの促進	▷ 集団活動の受け皿	▷ 目的がなくても訪れやすい場所としての整備	▷ グループの交流・親睦	▷ 目的がなくても訪れやすい場所としての整備	▷ 集団活動を行いながら、その合間の時間も充実させたい
対応の方向性	▷ 知り合いをつくる機会の提供	▷ 集団活動を行う場所の提供	▷ 施設の敷居の低さの演出	▷ グループ間の交流・親睦の機会提供	▷ グループ内の交流・親睦の機会提供	▷ 集団活動の合間の充実
プログラム・運営による対応	▷ 講座等による家族以外の知り合いづくり支援		▷ 滞在のしやすさ	▷ グループ間交流につながる、各団発表会等の企画		▷ 休憩・飲食を可能に（特に公共施設）
施設整備による対応	▷ サロン的空間の整備・充実	▷ 活動場所・設備の提供	▷ グループでいられるサロン的空間の整備・充実	▷ 各団発表等の企画ができるスペースの充実	▷ グループでいられるサロン的空間の整備・充実	▷ 活動場所に付加した休憩・飲食といった付加スペースの充実

図 5-11　同伴形態別の余暇を過ごす場所への要求と整備要件（グループ）

以上、同伴形態別の施設への要求と整備要件をみてきたが、いずれも目的性の高い場所への要求だけでなく、目的がなくても気軽に訪れやすいこと、気晴らしができることにも高い要求があることが明らかとなった。

ひとり、家族、グループと、同伴形態によって要求に対応するスペースの違いはあるが、いずれも目的外利用を許容するフリースペースを備えることが必要といえる。特に地域公共施設は、従来の機能的サービスの提供だけでなく、目的外利用に応え得るスペースを備える必要があると考える。

その際には、目的に取り組むためにひとりでいられる場所、家族でいられる場所、グループでいられる場所の住み分けを意識したスペース整備と、新たな人間関係を形成するためのサロン的空間といった、いずれの同伴形態の人をも内包できるスペース整備が求められる。

第6章　組織活動実態にみる地域施設の必要性

6-1　組織活動の参加実態
6-2　組織活動に対する活動意識
6-3　団体の結成と展開の過程
6-4　組織活動で利用する地域施設
6-5　活動場所としての地域施設の必要性

6-0　本章の目的

前章までは、地域住民が行う個人的な余暇活動について考察してきた。本章では、個人的な余暇活動と並ぶ、余暇活動のもう一つの枠組として、母体をもって集団で活動する『組織活動』を取り挙げ、その実態と地域施設との関わりを把握する。それらを通じて、組織活動を行う場所としての地域施設の課題と必要性を明らかにする。

また、本章で主に扱うデータは調査２による、組織活動団体と、それに参加する個人である。但し、必要に応じて調査１にて得られた組織活動への参加実態も掲載する（調査２では自治体及び地域の代表が統括する登録団体を対象とし、母体に名称のある団体を組織活動団体と定義しているが、調査１では地域で行われる活動（近隣住民の清掃活動等、名称が定まっていない活動を含める）を全て地域活動としている。若干の違いはあるが、ここでは地域活動も組織活動とみなす）。

参考のため、調査１と併せて表6-1、表6-2に組織活動への参加率と基本属性を載せる。調査１においては、参加者は比較的高齢・無職である傾向があり、活動参加者は退職後の人が多いことが窺える。活動参加者のみを対象にした調査２ではこの傾向は顕著であり、分析においてはその点を考慮する。

表6-1　組織活動への参加率（全体）

	調査１		調査２	
総数	3322		1120	
参加不明	110		0	
回答数	3212		1120	
団体数	-		212	
参加	1084	34%	1120	100%
不参加	2128	66%	-	-
総計	3212	100%	1120	100%

6-1　組織活動の参加実態

ここでは、組織活動の参加実態の概要として、本章で対象とする活動団体の現人数、活動内容といった基本情報を確認しておく（調査２）。また、参考として、調査１にて得られた組織活動への参加率及び参加内容を併せて載せる。

表6-2　参加者・不参加者の基本属性（調査１・２）

		調査１		調査２
		参加	不参加	参加
性別	総数	1084	2128	1120
	性別不明	14	39	49
	回答数	1070	2089	1071
	男性	45%	50%	26%
	女性	55%	50%	74%
	総計	100%	100%	100%
職業	総数	1084	2128	1120
	職業不明	139	251	33
	回答数	945	1877	1087
	学生	1%	7%	-
	勤労者	25%	36%	15%
	農林水産業	8%	5%	4%
	パート・アルバイト	10%	10%	11%
	自営業	9%	10%	-
	その他	1%	1%	5%
	有職率	53%	62%	34%
	専業主婦	17%	11%	27%
	無職	29%	20%	38%
	無職率	46%	31%	66%
	総計	100%	100%	100%
年齢層	総数	1084	2128	1120
	年齢不明	16	41	54
	回答数	1068	2087	1066
	10代	1%	5%	0%
	20代	4%	9%	1%
	30代	10%	12%	4%
	40代	16%	15%	8%
	50代	20%	24%	18%
	60代	28%	19%	33%
	70代	18%	12%	30%
	80代以上	3%	5%	6%
	総計	100%	100%	100%
LC	総数	1084	2128	1120
	LC不明	0	0	104
	回答数	1084	2128	1016
	学生期	1%	6%	0%
	独身期	5%	12%	2%
	新婚期	3%	4%	0%
	子ども幼少期	14%	12%	3%
	子ども成長期	6%	7%	6%
	子ども独立期	25%	27%	19%
	高齢期	46%	32%	70%
	総計	100%	100%	100%

＊　調査１におけるLCは、男性・有職女性・無職女性を足し合わせたもの。

6-1-1　組織活動団体の概要

ここでは、団体の概要として基本情報とメンバー構成比をみる（表6-3）。

[現人数] は「10-19人」を最大としながら、30人程度までの小・中規模な団体が多い。

[活動内容] は音楽や俳句といった、「室内の趣味活動」に取り組む場合が半数以上と多いが、古典学習などの「教養学習活動」、及び「スポーツ・健康活動」も少なくない。項目内はさらに多様であるので、地域住民が取り組むは多岐に渡っている。

[創設年] は「1980年代」以降で特に多い。ここ30余年の間に組織活動が活発化していることが窺え、需要の高まりが確認できる。

[活動頻度] は「月に2回程度」が最も多いが、大多数の団体が月に1回以上の活動を行っている。地域住民にとって、組織活動が身近なものとして行われていることが分かる。

次に、団体のメンバー構成比をみる。

[男女構成] は、地域に友人をつくりやすい女性が主となっている割合が半数以上である。とはいえ、男性が参加している割合も多く、性別に関係なく活動が行われている。

[年齢構成] は退職後の人が主の団体が半数以上であるが、多様な年代を含む団体も2割程度いる。それでも、若年層の参加は少ないと考えていいだろう。

[居住地] は、旧市町村内といった比較的狭い範囲に人で構成される団体が多い。それでも、旧市町村の域を超えた広がりもみられる（合併後津市の団体を対象にしている）。

[職業構成] は、どちらかといえば無職者が主となっている団体が多いが、有職者が半分以上いる団体も4割近くいる。時間的制約の多い有職者でも活動に参加している人は多い。

以上のことから、実態としては性別や年齢に若干の偏りはあるが、地域の幅広い層が多様な活動に取り組んでいることが分かった。また、団体の規模としては小・中規模が多いこと、殆どの団体が月1回以上と、身近なものとして活動に取り組んでいることが分かった。

表6-3　対象団体の基本情報とメンバー構成比

総数		212	
団体票なし		11	
現人数	団体数	201	
	現人数不明	1	
	回答団体数	200	
	-9名	39	20%
	10-19名	87	44%
	20-29名	34	17%
	30-49名	16	8%
	50-99名	8	4%
	100名以上	16	8%
	総計	200	100%
活動内容	団体数	201	
	活動内容不明	9	
	回答団体数	192	
	室内の趣味活動	106	55%
	教養学習活動	22	11%
	ボランティア活動	13	7%
	スポーツ・健康活動	31	16%
	育児・教育活動	3	2%
	その他	17	9%
	総計	192	100%
創設年	団体数	201	
	創設年不明	21	
	回答団体数	180	
	1949年以前	5	3%
	1950年代	6	3%
	1960年代	11	6%
	1970年代	19	11%
	1980年代	32	18%
	1990年代	59	33%
	2000年代	48	27%
	総計	180	100%
活動頻度	団体数	201	
	活動頻度不明	47	
	回答団体数	154	
	週1回以上	40	26%
	月に2回程度	61	40%
	月に1回程度	41	27%
	月に1回未満	12	8%
	総計	154	100%

総数		212	
団体票なし		11	
男女構成	団体数	201	
	男女構成不明	4	
	回答団体数	197	
	すべて男性	9	5%
	男性多め	25	13%
	男女半々	17	9%
	女性多め	74	38%
	全て女性	72	37%
	総計	197	100%
年齢構成	団体数	201	
	年齢層不明	4	
	回答団体数	197	
	独身が多め	1	1%
	子育て期多め	4	2%
	子育て後多め	34	17%
	退職後多め	119	60%
	多様な年代	39	20%
	総計	197	100%
居住地	団体数	201	
	居住地不明	3	
	回答団体数	198	
	小学校区内	19	10%
	旧市町村内	103	52%
	隣接旧市町村まで	17	9%
	合併津内	52	26%
	津より大	7	4%
	総計	198	100%
職業構成	団体数	201	
	職不明	7	
	回答団体数	194	
	すべて無職	26	13%
	ほとんど無職	98	51%
	有職・無職半々	44	23%
	ほとんど有職	23	12%
	すべて有職	3	2%
	総計	194	100%

6-1-2　LC・LSにみる参加実態

ここでは調査1にて得られた、組織活動への参加実態として、参加率と活動内容をLC・LS別に示す。表6-1にあるように、3000名を越える地域住民を対象とした調査1においては、組織活動への参加率は3割強であり、一般的な組織活動参加率はその程度と考えていいだろう。また、全体としての活動内容は調査2と比較すると（表6-5）、「ボランティア活動」「スポーツ・健康活動」が多くなっている。これは調査2では、高齢女性を多く含む為だと考えられる（LC側面参照）。

表6-5　参加者の活動内容

	調査1		調査2	
参加者総数	1084		212	
未回答	0		11	
内容不明	0		9	
回答数	1084		192	
室内趣味活動	322	30%	106	55%
教養学習活動	113	10%	22	11%
ボランティア活動	335	31%	13	7%
スポーツ・健康活動	414	38%	31	16%
育児・教育活動	113	10%	3	2%
その他	147	14%	17	9%
総計	1444	133%	192	100%

＊　調査1は個人が対象であり、複数の活動種に参加している場合、総計は100%を越える。調査2は、団体への調査のため、総計は100%。

[LCにみる参加率と活動内容]

LCの観点から、参加率と活動内容をみる（表6-6）

[参加率] 図6-1はLCの段階別の地域活動への参加率である。

男性は｛学生期｝では参加率は低く、加齢とともに徐々に参加率が上昇し、｛高齢期｝で参加率は最大となる。まず、結婚するまでは緩やかに参加率が上昇していく。この間、自動車を自由に使えるようになることと、結婚を機に居住する地域の人々との関係が強化されることが地域活動参加への促進要件となる。同時に、就職・結婚に伴う転居は阻害要因ともなり得る。また、結婚後しばらくは仕事による時間的拘束が大きいため、｛子ども独立期｝まで参加率が停滞する。退職後に参加率が急増することから、時間的拘束の影響が大きいことが分かる（[阻害要因] の項で後述する）。

女性は男性に比べ、LCの各段階とも総じて参加率は若干高い。基本的には男性と同様にLCの進展に伴い参加率は上昇するが、｛新婚期｝から｛子ども成長期｝の期間は職の有無により大きな相違がある。もちろん、｛高齢期｝は参加率が生涯で最も高い。

有職女性は結婚に伴う転居により、また、家事と仕事の両立の厳しさにより新たな活動参加は多くない。その後、子どもの誕生により参加率が跳ね上がるが、育児に関する内容に取り組むための（[参加内容] 参照）、必要に迫られての参加と考えられる。そのため、次の段階になると途端に参加率は下がる。

無職女性は結婚による転居の阻害よりも、居住する地域の人々との関係が強化による促進の方が強く、｛新婚期｝でも参加率は上昇する。｛子ども幼少期｝、｛子ども成長期｝でも参加率は上昇する。前者は有職女性と同じ理由で、後者は育児の為の活動に参加していた人が他の内容の活動に移行することにより参加率の減少が少ない。

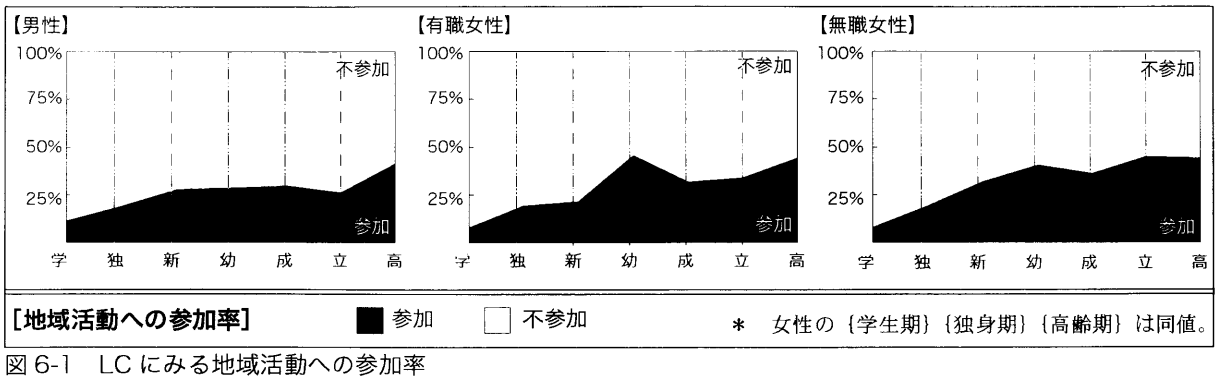


図 6-1　LC にみる地域活動への参加率

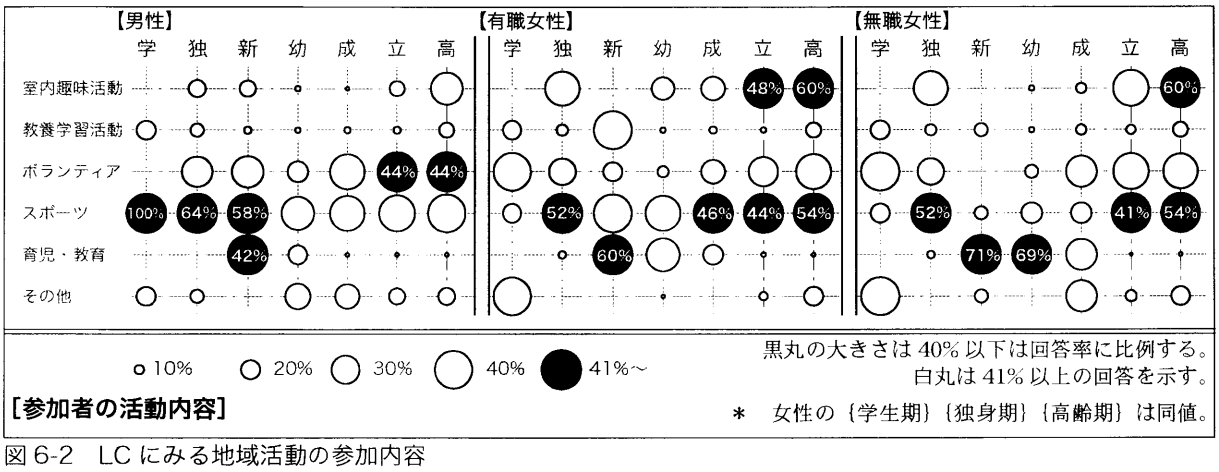


図 6-2　LC にみる地域活動の参加内容

表 6-6　LC にみる地域活動への参加実態

		男性							女性										
		学生期	独身期	新婚期	子ども幼少期	子ども成長期	子ども独立期	高齢期	学生期	独身期	有職・新婚期	無職・新婚期	有職・子ども幼少期	無職・子ども幼少期	有職・子ども成長期	無職・子ども成長期	有職・子ども独立期	無職・子ども独立期	高齢期
参加率	総数	64	147	48	172	91	370	617	77	137	29	22	112	89	80	25	253	160	558
	参加不明	2	5	1	0	0	6	35	1	1	1	0	0	0	1	0	4	2	42
	回答数	62	142	47	172	91	364	582	76	136	28	22	112	89	79	25	249	158	516
	参加	11%	19%	28%	28%	30%	26%	41%	8%	19%	21%	32%	46%	40%	32%	36%	34%	45%	44%
	不参加	89%	81%	72%	72%	70%	74%	59%	92%	81%	79%	68%	54%	60%	68%	64%	66%	55%	56%
	総数	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%	100%
参加内容	参加	7	27	13	49	27	95	240	6	26	6	7	51	36	25	9	84	71	228
	内容不明	2	5	1	0	0	6	35	1	1	1	0	0	0	1	0	4	2	42
	回答数	5	22	12	49	27	89	205	5	25	5	7	51	36	24	9	80	69	186
	室内趣味活動	0%	18%	17%	6%	4%	16%	34%	0%	36%	0%	0%	24%	6%	25%	11%	48%	38%	60%
	教養学習活動	20%	14%	8%	6%	7%	8%	16%	20%	12%	40%	14%	6%	6%	8%	11%	6%	10%	16%
	ボランティア活動	0%	32%	33%	22%	37%	44%	44%	40%	28%	20%	0%	12%	14%	25%	33%	31%	38%	37%
	スポーツ・健康活動	100%	64%	58%	35%	37%	38%	40%	20%	52%	40%	14%	37%	22%	46%	22%	44%	41%	54%
	育児・教育活動	0%	0%	42%	20%	4%	4%	3%	0%	8%	60%	71%	35%	69%	21%	33%	5%	3%	4%
	その他	20%	14%	8%	27%	26%	17%	18%	40%	0%	0%	14%	4%	0%	0%	33%	9%	12%	20%
	総計	140%	141%	167%	116%	115%	127%	155%	120%	136%	160%	114%	118%	117%	125%	144%	143%	141%	191%

[活動内容] 図6-2は地域活動への参加者が参加する活動内容である。活動内容が複数ある場合は制限なく回答している。

男女に共通する傾向として、{新婚期}{子ども幼少期}は「育児・教育活動」への参加が多く、特に無職女性の、教育への高い関心が窺える。また、「ボランティア活動」への参加はLCの後期から増え始める。女性では特に有職女性の参加が多い。

男女の参加内容の相違としては、男性は「スポーツ・健康活動」が、女性は「室内趣味活動」が多いといった特徴がある。

[LSにみる参加率と活動内容]

LSの観点から、参加率と活動内容をみる（表6-7）

[活動率] 図6-3はLCの段階別の地域活動への参加率である。

本項目はクラスター分析の指標の一つでもあり、前提条件として前述してきたことも多いので簡単に整理する。

【C1】は9割以上が地域活動に参加しており、地域との関わりに積極的な層といえる。

【C2】【C3】【C4】は参加率が3割程度であり、一般的な参加率と同程度といえる（調査1では3322名中、参加不明110名を除くと参加者は1084名、不参加者2128名であり、およそ34%が地域活動に参加している）。

【C5】【C6】は参加者が非常に少なく、地域との関わりに無頓着な人々といえる。言い換えると、地域の人々と一緒に組織的な活動をするよりも、個人で行う余暇活動に強い関心をもっているといえる。

また、職の有無による視点からみると、【C1】は働きながらも積極的に地域活動に参加する層といえる。一方、【C5】【C6】は職による時間的拘束により参加しない層ともみることができる。必ずしも職の有無が阻害とはならないが、やはり時間的拘束の影響は大きいといえるだろう。

[活動内容] 図6-4は地域活動への参加者が参加する活動内容である。活動内容が複数ある場合は制限なく回答している。タイプによって参加率に非常に大きな相違があるが、各タイプの趣向の傾向がみられると考える。

【C1】は男女半々で構成されているが、特に「スポーツ・健康活動」に強い関心を抱いている。その他「室内趣味活動」「ボランティア活動」への参加も多く、また、総計（平均参加数）も多く、多様な活動内容に取り組んでといえる。これは【C4】も同様である。

【C2】は最も平均参加数が多く、「室内趣味活動」をはじめ、多様な活動内容をもっている。一方、参加内容に偏りがみられるのが【C3】であり、このタイプの特徴でもある「育児・教育活動」への参加が目立つ。【C5】はサンプル数が少ないが、「ボランティア活動」にも興味があるようだ。

各タイプの趣向は、それぞれのタイプへの、企画充実による組織活動促進への手掛りになり得るだろう。

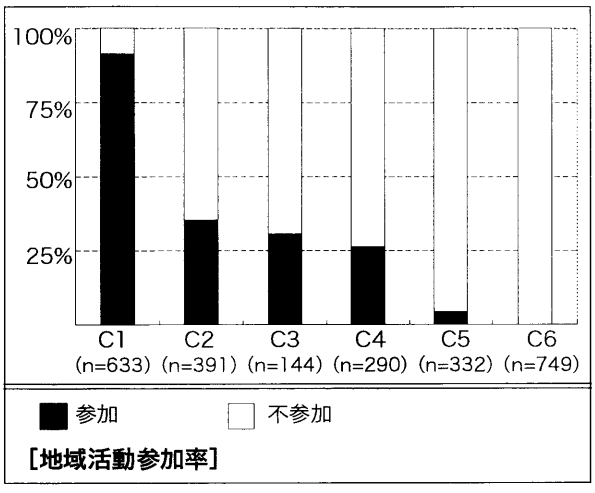


図6-3　LSタイプにみる地域活動への参加率

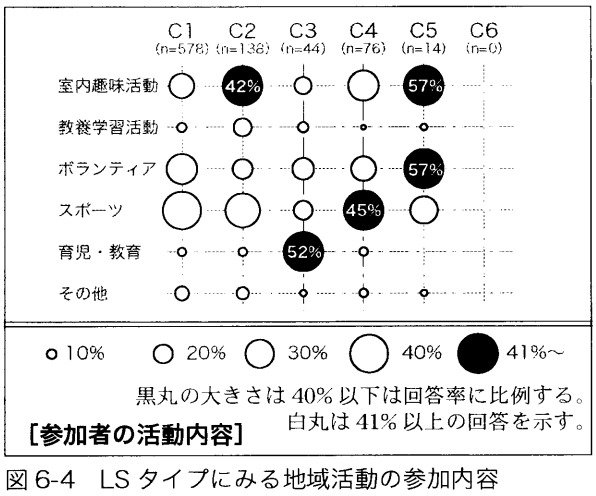


図6-4　LSタイプにみる地域活動の参加内容

表6-7　LSタイプにみる地域活動実態

		C1	C2	C3	C4	C5	C6
参加率	総数	633	391	144	290	332	749
	参加不明	0	0	0	0	0	0
	回答数	633	391	144	290	332	749
	参加	91%	35%	31%	26%	4%	0%
	不参加	9%	65%	69%	74%	96%	100%
	総数	100%	100%	100%	100%	100%	100%
参加内容	参加	578	138	44	76	14	0
	内容不明	0	0	0	0	0	0
	回答数	578	138	44	76	14	0
	室内趣味活動	26%	42%	18%	32%	57%	-
	教養学習活動	10%	19%	11%	5%	7%	-
	ボランティア活動	32%	21%	23%	26%	57%	-
	スポーツ・健康活動	40%	36%	20%	45%	29%	-
	育児・教育活動	9%	9%	52%	9%	0%	-
	その他	15%	13%	7%	9%	7%	-
	総計	133%	140%	132%	126%	157%	-

6-2　組織活動に対する活動意識

ここでは組織活動に対する活動意識として、団体として何を重視して取り組んでいるか、及び個人の活動に対する意識をみる。

6-2-1　団体として重視すること

団体として重視することをみると（最大2種選択、表6-8)、「団体内の交流・親睦」「能力・技術の向上」が多い。この回答は団体の代表者によるものであるが、団体の総意と捉える。

「団体内の交流・親睦」は人とのつながりを求めるものであり、余暇生活を誰かと一緒に過ごしたいという要求の現れとみることができる。また、同じく回答の多かった「能力・技術の向上」は活動を通して得られる自己実現要求といえ、このふたつが組織活動を行う際の主要な活動意識といえる。

次いで「地域への貢献」が多い。参加者が集まることで、自分たちの要求を満たすためだけでなく、地域社会への貢献といった2次的な意識・要求も生まれてくると考えられる。

以上の内容について、男女構成別・LC構成別にも比較してみる（表6-9)。

男女構成は「すべて男性」「男性多め」を併せて「男性主体」としており、女性も同様。男女構成によらず、「団体内の交流・親睦」と「能力・技術の向上」が多く、性別による違いはみられない。

LC構成別では、若い世代の母数が少ないため十分な比較ができないが、いずれも「団体内の交流・親睦」が最も多く、人とのつながりを身近に感じたいという意識が強いといえる。また、退職後の人は他に比べて「能力・技術の向上」が多い。他の世代より余暇時間が多くあるため、その時間を活用しての自己実現要求が強くなる為と考えられる。

以上みてきたように、多くの団体は活動を行うことで余暇生活を誰かと一緒に過ごしたいと感じていることが分かった。また、世代によって相違はあるが、自己実現要求も有していることが分かり、高齢者ほどその意識は高い。さらに、これら自分の為の要求だけでなく、活動のなかから地域社会への貢献を始めとする要求も芽生えることが分かり、組織活動を行うことが人々の生活を充実させるために重要な行動であるといえるだろう。

表6-8　活動するにあたって重視すること

総数	212	
未回答	11	
重視不明	13	
回答団体数	188	
団体内の交流・親睦	123	65%
他団体との交流・親睦	17	9%
能力・技術の向上	99	53%
技術の伝承・普及	18	10%
作品の創作・展示	31	16%
地域への貢献	46	24%
その他	12	6%
総計	346	184%

表6-9　活動するにあたって重視すること（性別・年齢別）

	男女構成別比較						LC構成別比較									
	男性主体		男女半々		女性主体		独身が多め		子育て期多め		子育て後多め		退職後多め		多様な年代	
各母数	34		17		146		1		4		34		119		39	
重視不明	1		0		11		0		0		3		7		2	
回答団体数	33		17		135		1		4		31		112		37	
団体内の交流・親睦	22	67%	10	59%	89	66%	1	100%	4	100%	19	61%	78	70%	19	51%
他団体との交流・親睦	4	12%	4	24%	9	7%	1	100%	1	25%	1	3%	9	8%	5	14%
能力・技術の向上	19	58%	9	53%	69	51%	0	0%	1	25%	15	48%	67	60%	14	38%
技術の伝承・普及	1	3%	1	6%	16	12%	0	0%	0	0%	1	3%	11	10%	6	16%
作品の創作・展示	5	15%	4	24%	22	16%	0	0%	0	0%	8	26%	18	16%	5	14%
地域への貢献	6	18%	2	12%	37	27%	0	0%	1	25%	12	39%	19	17%	13	35%
その他	3	9%	1	6%	7	5%	0	0%	1	25%	2	6%	5	4%	3	8%
総計	60	182%	31	182%	249	184%	2	200%	8	200%	58	187%	207	185%	65	176%

6-2-2　メンバーの活動意識

次に、団体としてではなく、個人の意識をみるため、組織活動参加者の［参加目的］［参加契機］［活動を通じての変化（参加の効果）］をみる（表6-10）。

［参加目的］

参加者が活動を始めた目的をみると（最大2種選択）、「交友関係の拡大」の選択が多い。団体として重視するものと同様、余暇を充実して過ごす為、人間関係をつくることを望んでいることが分かる。また、「新しいことを始めたい」も多く、とりあえず何らかの活動を始めたい、といった要求もみられる。一方、以前に行っていた活動の再開といった「活動の高度化」も全体の1/4程度おり、さらなる専門性を求める人も多い。この両者は、一方は純粋に余暇生活の充実のため、もう一方はさらなる専門性を備えるため、といったように、同じく活動に参加していても目指すところは異なると考えられ、それぞれが活動場所である施設・設備に求める要求にも相違が表れるだろう。

「新しいことを始める」に加え、「暇な時間の活用」「生活にメリハリ」といった目的本意ではない回答が少なくないことにみられるように、多くの生活者が条件さえ合えば、（明確な自己実現要求がなくとも、）何らかの組織活動に参加したいと考えていると捉えられる。

［参加契機］

前述した“条件が合えば”について、参加契機（最大2種選択）をみることで捉える。

参加契機のその他を除く10項目を内容に合わせて『時間』『情報』『人間関係』『趣向』『施設整備』『環境変化』に分類する。

参加契機としては『環境変化』『時間』が多く、退職や子育て終了に伴う時間的余裕が参加の為の主要な条件となっている。また、『人間関

表6-10　個人の活動意識

			調査2	
参加目的	総数		1120	
	参加目的不明		104	
	回答数		1016	
	新しいこと		482	47%
	活動の高度化		245	24%
	家事育児に必要		22	2%
	生活にメリハリ		166	16%
	交友関係の拡大		447	44%
	暇な時間の活用		221	22%
	その他		82	8%
	総計		1665	164%
参加契機	総数		1120	
	参加契機不明		119	
	回答数		1001	
	時間	時間に余裕	77	8%
		時間帯が合う	208	21%
		小計	285	28%
	情報	メディアで知る	35	3%
		展示会で知る	90	9%
		活動内容知っていた	76	8%
		小計	201	20%
	人間関係	家族友人の勧め	338	34%
	趣向	費用が安く手軽	150	15%
	施設整備	場所が近くて便利	280	28%
	環境変化	退職して余裕	283	28%
		子育て終了して余裕	100	10%
		小計	383	38%
	その他		94	9%
	総計		1731	173%
活動を通じての変化（参加の効果）	総数		1120	
	参加効果不明		72	
	回答数		1048	
	人間関係の充実	交友関係広がる	806	77%
		相談相手増える	145	14%
		人と接する機会	571	54%
		小計	1522	145%
	活動に伴う技能向上	新しい知識や情報	469	45%
		スキルの向上	207	20%
		小計	676	65%
	余暇の目的発見	やりたいこと	324	31%
		リラックス	143	14%
		暇な時間を活用	220	21%
		小計	687	66%
	余暇の場所開拓	他人を気にしない場所	43	4%
		自宅以外の場所	177	17%
		小計	220	21%
	その他		24	2%
	総計		3129	299%

係』も多く、知人が参加していて誘われたり、友人と一緒に加入したりといった、内輪的な人付き合いによる参加契機も少なくないようだ。

また、『施設整備』も多くみられるが、ここでは「場所が近くて便利」に対する回答であり、活動場所として身近な施設を望んでいることが分かる。言い換えれば、施設の（量的）充実が参加者を増やす要因となり得るといえる。

以上のことから、多くの生活者が参加しやすい余暇を充実させる為の組織活動は、身近な場所で気軽に開始できることができることが重要といえる。とはいえ、やはり時間的余裕のできることが大きな意識的契機となっており、子育てが終了した人や退職後の人といった層を的を絞った参加促進支援も有効であろう。

[活動を通じての変化（参加の効果）]

以上、参加時のきっかけをみてきたが、ここでは組織活動を行うことによる生活の変化をみる。『人間関係の充実』『活動に伴う技能向上』『余暇の目的発見』『余暇の場所開拓』に大分類する。

参加を通じての生活の変化としては『人間関係の充実』が非常に多い。共に活動に取り組む仲間を得ることで、人と関わる機会が増え、その延長として個人的な余暇活動もそれらの仲間と一緒に過ごすようになる。

次いで、『活動に伴う技能向上』『余暇の目的発見』が同程度、生活の変化として実感されており、参加者が余暇を目的をもった過ごし方をするようになることと一致する。

『余暇の場所開拓』は上記に比べて少ないが、自宅以外に余暇を過ごす場所を得ることができると感じる人もいる。この選択は、（高齢単身、高齢夫婦といった家族型をもつ）余暇を自宅で過ごさない人たちによるものではないかと推測され、組織活動によって彼らの余暇生活が充実したと考えていいのではないか。

組織活動への参加は、明確な活動目的をもった場合だけでなく、生活に変化を与える為であったり、暇な時間の活用のためといった、目的本意ではない場合も多い。専門性の高い活動だけでなく、初見でも始めやすい内容も充実すべきといえる。必然的に、それらの活動が必要とする施設・設備には相違が表れるため、幅広い供給側のフォローも必要である。

参加契機としては、やはり時間的余裕のできることが大きな意識的契機となっており、子育てが終了した人や退職後の人といった層を的を絞った参加促進支援も有効といえる。また、身近に活動場所があることが参加者を増やす要因ともなっており、施設の（量的）充実の成果が表れている。

また、契機にみられた課題もある。参加者の多くが内輪的な人間関係によって増加しており、元々それらの関わりを持たない人たちに、どのように参加契機を提供していくかを考える必要がある。

組織活動参加に伴う生活の変化としては、人間関係の充実が非常に大きい。共に活動に取り組む仲間を得ることで、人と関わる機会が増え、その延長として個人的な余暇活動もそれらの仲間と一緒に過ごすようになるだろう。

6-3　団体の結成と展開の過程

ここでは、団体が結成される契機から、メンバーの新規参入及び脱退を含めた活動の展開過程をみる。また、結成や参入といった過程において、何が契機となっているかを把握し、今後施設側が提供できる契機を明らかにする。

6-3-1　団体の結成契機

表6-11に団体の結成契機を示す。全体としては『講座』と『既存の人間関係』が殆どである。同じ意識や要求をもった人々の集まりにより団体が結成されているといえる。

また、創設時の団体規模を3分類した規模別結成契機をみると、中規模の団体は「自主講座」が多い。自主講座は公民館で行われる安価な講座への参加者がそのまま団体へと移行するものである。これは、ある程度の人数が集まらないと開催されない、また定員があるために参加できないといった課題もあるが(前者の方が顕著)、公民館という身近な施設が講座を開き、意識・要求を同じくする仲間の出会いの場を提供し、団体結成の一助となっている。

一方、小規模・大規模では「自主的な結成」が最も多く、メンバーが元々もっていた人間関係がもとになっている。但し、男性は（特に就業期間中は）人とのつながりを形成しにくいこともあり、既存の人間関係をもたない人に施設側が如何にして仲間づくりの契機を与えていけるかが重要な課題である。

表6-11　団体の結成契機

		創設時の団体規模							全体	
		小規模（-9人）		中規模（10-29人）		大規模（30人以上）		規模不明		
各母数		38		120		29		14	201	
経緯不明		1		1		1		1	4	
回答数		37		119		28		13	197	
講座	公民間講座からの独立（自主講座）	10	27%	53	45%	7	25%	3	73	37%
	公共講座（公民館以外）	0	0%	3	3%	2	7%	1	6	3%
	民間講座	3	8%	2	2%	1	4%	0	6	3%
	小計	13	35%	58	49%	10	36%	4	85	43%
既存の人間関係	職場・学校の活動から	1	3%	1	1%	0	0%	0	2	1%
	近隣住民の集まりから	3	8%	13	11%	0	0%	2	18	9%
	自主的な結成	14	38%	36	30%	11	39%	6	67	34%
	小計	18	49%	50	42%	11	39%	8	87	44%
-	既存団体からの分裂・変更	2	5%	3	3%	1	4%	1	7	4%
	その他	4	11%	8	7%	6	21%	0	18	9%
総計		68	184%	227	191%	49	175%	25	369	187%

6-3-2　団体のメンバー増減

次に創設時から現在にかけてのメンバーの増減をみる（表6-12）。

単純な人数の増減をみると、全体としては減少も増加も4割以上あり、メンバーが増加して規模が拡大する団体だけでなく、メンバーが脱退して規模が縮小するグループもあることが明らかである。

次に人数規模の変遷をみる。母数の関係から、ここでは5人以上の増加を「人数拡大」、5人以上の減少を「人数縮小」、それ以外を「人数維持」とする（表6-12の右端）。

団体創設時からの人数規模の経年変化を示したのが図6-5及び表6-13である。調査対象団体の創設がここ2、30年に多い影響もあり、結成10年程度が団体数が多く、それ以降は団体数は減少している。但し、これは団体の消滅がこの間に発生していると推測することもでき、団体の“寿命”といえなくもない。

その内訳としては、創設後10年までは人数が維持される団体が、15年までは増加する団体の割合が多いが、両者とも以降は減少していく。一方、人数が縮小する団体は結成10年を過ぎたあたりから徐々に増え始める（この間、団体の消滅も多数あるだろう）。この時期における縮小傾向の大きな理由は、メンバーの高齢化によるものと考えられる。また、結成30年を過ぎた団体では再び人数増加が主となる。ここまで継続された、いわゆる長寿団体は組織的運営がされ、拡大路線に乗っているといえる。以上をモデル化したのが図6-5の右図であり、団体は人数の維持・拡大・縮小を経ながら継続・展開していることが分かった。

6-3-3　メンバーの参入契機

次に、団体に新たな参加者が加入する場合のきっかけをみる(表6-14)。全体としては「参加者のつて」が圧倒的に多い。文字通り、元々の参加者との個人的なつながりによる参入であり、内輪的なグループ拡大がされていることが分かる。グループ内での交流を要求としてため自然なことではあるが、その場合、元々の人とのつながりをもち得ない人は参入が難しい。次に多い参入契機は「他グループからのつながり」によるものであるが、これも元々の人とにつながりによるものである。

[メンバー増減と参入契機]

団体の人数規模の変遷と参入契機についてもみる。各団体は規模によらず、多くが参加者を増やしたいと考えており、如何にして新たな参加者を参入させるかは団体運営においても重要な課題である。

規模変遷は創設時から現人数を前述の3分類で分類したものである（表6-15）。いずれも団体規模が維持される場合が多いが、小規模が中規模になるという拡大が多くみられる。一方、中規模が小規模になる場合（2割程度）、大規模が中規模になる場合（3割程度）といった縮小もみられる。母数の関係から経年変化はみられないため、それぞれの変遷時期は前述の図6-5を参考にしたい。

これらの分類でみると、規模が拡大している団体はいずれも「参加者のつて」が多く、やはり内輪的な拡大であることが確認される。また、規模が縮小する場合は参入が殆どない場合も多く、如何に展開を促していくかを考える必要がある。

このような実態のなかで、現在殆ど参入契機となっていないのが「ネットや会報からの情報」といった、もともとの接点のない人に向けての情報発信である。前述した、個人の

活動意識のなかで、参加契機に『情報』を挙げていた人も多く、この点の強化が必要といえる。ちなみに、現在行っている情報発信の状況を表6-17に示す。団体の規模変遷に関わらず、HP運営といった不特定多数に向けた情報発信は少なく、内輪的な口コミが殆どである。

以上のことから、団体への新規参入は殆どが内輪的な人間関係によるものであり、元々の人とのつながりをもっていない人々にとっては、参加に大きな阻害となっていると考えられる。

但し、多くの団体はメンバーを増やしたいと考えている為、現在のような内輪的展開だけでなく、関わりのなかった外部の人をも積極的に参入させる体質改善が必要となる。団体が不特定多数の人を対象とした情報発信を推進することはいうまでもないが、新規参入者のなかには、団体が成果発表を行う、展示会や講演会によって啓発される人もいる。

よって公の場である地域施設において、団体の情報発信や成果発表を行い、非活動参加者の参加を促すよう、積極的に外部を巻き込んだ展開が必要である。

表6-13　メンバーの増減

		創設時の団体規模									全体			人数規模の変遷		
		小規模（-9人）			中規模（10-29人）			大規模（30人以上）			不明					
母数		38			120			29			14	201			201	
増減不明		0			1			0			14	15			15	
回答数		38			119			29			0	186			186	
減少	20人以上の減少	0	0%	5%	0	0%	52%	6	21%	48%	0	6	3%	42%	人数縮小	48 26%
	10-19人の減少	0	0%		14	12%		6	21%		0	20	11%			
	5-9人の減少	0	0%		21	18%		1	3%		0	22	12%			
	1-4人の減少	2	5%		27	23%		1	3%		0	30	16%			
増減なし		5	13%		16	13%		0	0%		0	21	11%		人数維持	74 40%
増加	1-4人の増加	10	26%	82%	12	10%	34%	1	3%	52%	0	23	12%	47%	人数拡大	64 34%
	5-9人の増加	7	18%		14	12%		2	7%		0	23	12%			
	10-19人の増加	10	26%		8	7%		3	10%		0	21	11%			
	20人以上の増加	4	11%		7	6%		9	31%		0	20	11%			
総計		38	100%		119	100%		29	100%		0	186	100%		186	100%

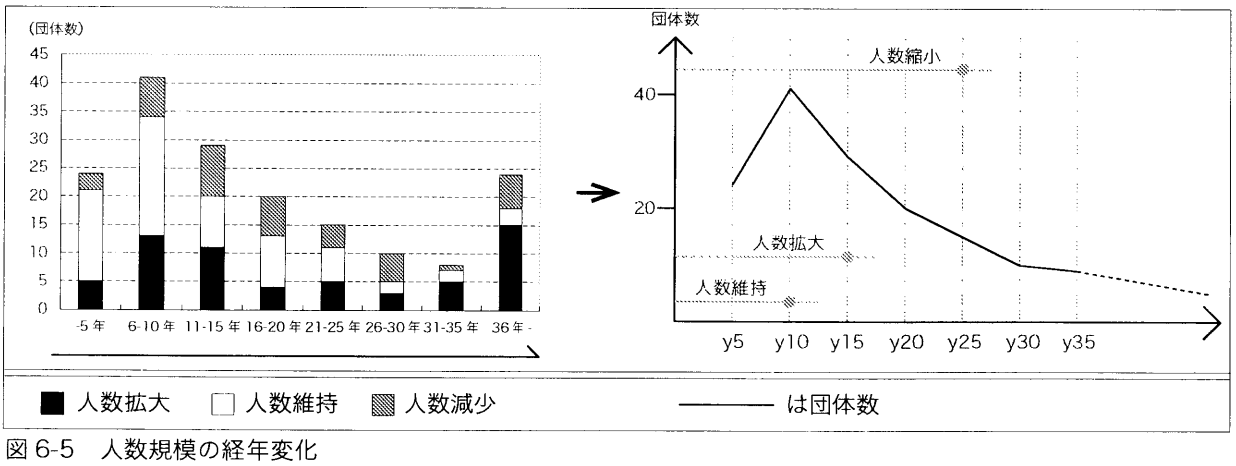


図6-5　人数規模の経年変化

表6-13　人数規模の経年変化

活動年数	5年以内	6-10年	11-15年	16-20年	21-25年	26-30年	31-35年	40年以上	不明	総計
人数拡大	5	13	11	4	5	3	5	15	3	64
人数維持	16	21	9	9	6	2	2	3	6	74
人数縮小	3	7	9	7	4	5	1	6	6	48
総計	24	41	29	20	15	10	8	24	15	186

表 6-14　人数規模の経年変化

	団体の規模変遷（創設時→現在）																		全体	
	小→小		小→中		小→大		中→小		中→中		中→大		大→中		大→大		不明			
母数	13		22		3		25		83		11		10		19		15		201	
不明	0		0		0		3		5		0		0		3		1		12	
回答数	13		22		3		22		78		11		10		16		14		189	
参加者のつて	5	38%	17	77%	3	100%	13	59%	50	64%	7	64%	8	80%	11	69%	9		123	65%
他グループとのつながり	2	15%	2	9%	0	0%	0	0%	3	4%	1	9%	2	20%	0	0%	3		13	7%
ネットや会報から情報	0	0%	0	0%	0	0%	0	0%	3	4%	0	0%	0	0%	1	6%	1		5	3%
参入は殆どない	5	38%	1	5%	0	0%	8	36%	17	22%	0	0%	0	0%	1	6%	0		32	17%
その他	1	8%	2	9%	0	0%	1	5%	5	6%	3	27%	0	0%	3	19%	1		16	8%
総計	13	100%	22	100%	3	100%	22	100%	78	100%	11	100%	10	100%	16	100%	14		189	100%

表 6-15　団体の規模変遷（創設時→現在）

創設時	小規模	38		中規模	120		大規模	29	
	小→小	13	34%	中→小	25	21%	大→小	0	0%
	小→中	22	58%	中→中	83	69%	大→中	10	34%
	小→大	3	8%	中→大	11	9%	大→大	19	66%
	不明	0	0%	不明	1	1%	不明	0	0%
	総計	38	100%		120	100%		29	100%

表 6-16　規模拡大への意見

現人数の規模	小規模		中規模		大規模		不明	全体	
各母数	39		121		40		1	201	
増やしたい	29	74%	88	73%	34	85%	1	152	76%
鑑賞者は増やしたい	5	13%	16	13%	3	8%	0	24	12%
増やしたくない	1	3%	8	7%	2	5%	0	11	5%
不明	4	10%	9	7%	1	3%	0	14	7%
総計	39	100%	121	100%	40	100%	1	201	100%

表 6-17　現在行っている情報発信

	団体の規模変更（創設時→現在）																			
	小→小		小→中		小→大		中→小		中→中		中→大		大→中		大→大		不明	全体		
母数	13		22		3		25		83		11		10		19		15	201		
不明	1		2		0		5		13		1		0		3		3	28		
回答数	12		20		3		22		78		10		10		16		12	183		
HP 運営	0	0%	1	5%	0	0%	0	0%	0	0%	1	10%	1	10%	1	6%	2	6	3%	
刊行物	4	33%	3	15%	1	33%	2	9%	20	26%	2	20%	0	0%	7	44%	3	42	23%	
ポスター・貼紙	1	8%	2	10%	1	33%	0	0%	3	4%	2	20%	0	0%	1	6%	3	13	7%	
電話勧誘	0	0%	2	10%	0	0%	2	9%	4	5%	1	10%	1	10%	0	0%	2	12	7%	
口コミ	9	75%	12	60%	3	100%	14	64%	54	69%	6	60%	8	80%	13	81%	9	128	70%	
その他	3	25%	5	25%	0	0%	4	18%	11	14%	5	50%	2	20%	5	31%	5	40	22%	
総計	17	142%	25	125%	5	167%	22	100%	92	118%	17	170%	12	120%	27	169%	24	241	132%	

6-3-4　団体の結成と展開

以上のことから得られた知見を以下に挙げる。

○団体の結成

団体の結成は大きく分けて、講座によるものと既存の人間関係によるものに大別されるが、いずれも意識・要求を同じくする仲間との出会いと、その際に集まれる場所が必要である。逆に言うと、それらの人々が集まれる場があるからこそ、団体の結成は促進される。地域施設は出会いの提供とそのための場として重宝される。

○団体の展開

団体の人数増減による拡大・維持・減少の経年変化モデルは図6-5に示した。多くのメンバー規模の拡大を望んでいるにもかかわらず、減少していく団体も多い。その理由は活動者の高齢化による脱退という理由だけでなく、新規参入への施策が不足している為といえる。現状での新規参入は既存の人間関係による内輪的な拡大に終始しており、団体の拡大の為にはそれまで関わりのなかった外部の人を巻き込むことが課題といえる。

活動者のなかには数は少ないが、会報やインターネット、団体が行う展示会や講演会によって意欲を駆り立てられ、参加を希望する人もいる。非活動者の参加を促すための情報発信や成果発表の場をより広く地域施設で発信する必要がある。

6-4　団体活動で利用する地域施設の実態

前節までに、団体の結成においては地域施設、特に講座を行う公共施設がきっかけとして有効であることが明らかになった。同時に、団体の展開においてはより充実した情報発信の場として、地域施設に更なる課題があることが明らかとなった。ここでは、それらの課題を生んでいる施設側の要因を探るため、実態として団体が活動するときに利用する施設の選択先及び選択理由を把握する。

本章では、これまでみてきた団体及び、その団体の活動数（各団体とも最大15回分の活動実績を回答）を分析する。活動実績に回答のあった157団体の、総計1916の活動実績を対象とする。

6-4-1　活動の目的と利用する施設

まず、活動の目的によって異なる利用する施設の実態と施設選択時に重視することを把握する。目的別割合は「練習」と「発表（とその準備）」が全体の9割以上を占める（表6-18）。

[利用する施設]

まず、活動目的に関係なく利用施設をみると（表6-19）、施設を利用しない活動は全体の3%とかなり少ない。活動を行うにはその場となる施設が必要であることが再確認された。また、利用する施設は公共施設が非常に多く、特に量的整備がなされている公的集会施設が多い。活動に身近さと気軽さを求めていると考えられ、活動の場としての公共施設の整備の必要性が見いだされた。

次に活動の目的別にみると、「練習」は（母数が相当に多いことも影響し）上記の通りである。「発表」も公共施設が多いが、こちらは地方文化施設といったホールなどの設備をもつ施設種の選択も多く、目的によって施設を使い分けていることが分かる。活動団体間の交流である「懇親会（練習はしない）」では民間施設の利用も多くなる。これは、多くの公共施設では親睦に伴う飲食の禁止がされていることも理由のひとつだろう。この場合は旅行等も含まれており、施設を利用しないことも多い。また、メンバー全員ではなく、幹部が主となる場合が多い「会議系」は普段利用している施設を変わらず利用することが推測される。

以上のことから、活動場所は殆どが公共施設に偏っており、公共施設整備の必要性が確認された。また、活動目的によってある程度利用する施設が異なることも確認された。

[施設選択時に重視すること]

次に個々の活動を行うに当って、施設を選択する際に重視している要因をみる（最大2種選択、表6-20)。利用目的によらない、全体の回答としては、「賃貸料の安さ」「室規模や設備が適当」に「施設の近さ」「予約が容易」が重視されている。活動意識でもみてきたように、活動の身近さ・気軽さを求めていることが分かる。また、活動を行う際の室規模・設備の適当さも強く意識している。

また、活動の目的別で利用する施設が異なることを考慮しながら、目的別の施設選択要因をみる。

「練習」は上記同様、「賃貸料の安さ」と「室規模や設備が適当」が多く、活動を行う施設の身近さ・気軽さを求めている。

「発表」は「立地環境」「賃貸料の安さ」が多く、「室規模・設備が適当」は少ない。多くの人に鑑賞してもらう為に、アクセスの良い施設を希望していることが分かるが、展示する空間自体に強い要求はみられず、設備整備が十分ではない可能性も高い。また、発表を行う場の規模・設備に対する意識が低いことから、そもそも選択肢が限られているという、発表の場の絶対量不足が考えられる。

「懇親会」では他に比べて重視する項目が少ないが、「室規模や設備が適当」が多い。「会議系」では全体傾向に加えて、施設へのアクセスを重視している。

以上から、施設選択の意識においても、身近で気軽に利用できる施設への要求が確認できた。但し、発表を行う場の絶対量の不足、専門的な設備等が十分でないことが課題としてみられる。この発表の場こそが、外部から新たな参加者を得るきっかけになり得る為、組織活動における課題が明らかとなった。

表 6-18　目的別の活動数割合

団体総数	212	
未回答	11	
活動実績未回答	44	
団体数	157	
総活動数	1916	
利用目的不明	37	
回答数	1879	
練習	1518	81%
発表とその準備	220	12%
懇親会	37	2%
会議系	67	4%
その他	37	2%
総計	1879	100%

表 6-19　利用する施設（目的別）

		練習			発表とその準備			懇親会			会議系			その他	不明	総計		
総活動数		1518			220			37			67			37	37	1916		
利用施設不明		2			2			2			0			1	9	16		
回答数		1516			218			35			67			36	28	1900		
公共施設	自治会集会所	29	2%	89%	2	1%	84%	0	0%	51%	0	0%	84%	0	1	32	2%	87%
	公的集会施設	1170	77%		124	57%		12	34%		37	55%		10	16	1369	72%	
	教育施設	35	2%		12	6%		0	0%		1	1%		2	0	50	3%	
	スポーツ施設	11	1%		3	1%		1	3%		9	13%		1	0	25	1%	
	地方文化施設	65	4%		32	15%		2	6%		8	12%		6	3	116	6%	
	図書館	28	2%		3	1%		0	0%		0	0%		2	0	33	2%	
	宗教施設	1	0%		1	0%		0	0%		0	0%		0	0	2	0%	
	福祉施設	14	1%		6	3%		3	9%		1	1%		4	0	28	1%	
民間施設	民間の貸し施設	21	1%	2%	12	6%	9%	3	9%	17%	9	13%	15%	1	0	46	2%	3%
	店舗	6	0%		7	3%		3	9%		1	1%		1	0	18	1%	
その他		1	0%		0	0%		0	0%		1	1%		0	0	2	0%	
ナシ地域	個人住宅	104	7%	9%	5	2%	7%	1	3%	31%	0	0%	0%	2	1	113	7%	9%
	施設は使用しない	31	2%		11	5%		10	29%		0	0%		7	7	66	2%	
総計		1516	100%		218	100%		35	100%		67	100%		36	28	1900	100%	

表 6-20　施設選択時に重視すること（目的別）

		練習			発表とその準備			懇親会			会議系			その他	不明	総計		
総活動数		1518			220			37			67			37	37	1916		
重視不明		98			35			14			0			4	18	169		
回答数		1420			185			23			67			33	19	1747		
立地	メンバー宅から近い	251	18%	44%	32	17%	49%	4	17%	39%	5	7%	67%	3	6	301	17%	45%
	立地環境	178	13%		38	21%		4	17%		17	25%		5	3	245	14%	
	交通の便	189	13%		20	11%		1	4%		23	34%		4	0	237	14%	
運営	予約が容易	280	20%	78%	16	9%	57%	1	4%	22%	1	1%	43%	2	4	304	17%	73%
	賃料が安い・無料	702	49%		84	45%		3	13%		28	42%		4	3	824	47%	
	利用時間帯	95	7%		0	0%		1	4%		0	0%		0	0	96	5%	
	回数制限	36	3%		5	3%		0	0%		0	0%		2	0	43	2%	
空間	室規模や設備	525	37%	43%	31	17%	32%	7	30%	39%	23	34%	39%	7	2	595	34%	41%
	付加スペースの充実	0	0%		2	1%		1	4%		0	0%		0	0	3	0%	
	施設が多機能	89	6%		27	15%		1	4%		3	4%		1	1	122	7%	
その他		118	8%		45	24%		9	39%		13	19%		20	9	214	12%	
総計		2463	173%		300	162%		32	139%		113	169%		48	28	2984	171%	

6-4-2　拠点施設の有無と利用する施設の実態

前項にて活動の目的によって異なる利用する施設の実態と施設選択時に重視することをみてきたが、ここでは活動実績から分類した、拠点施設の有無による施設利用実態をみる。

ここでは活動実績記入分より得られた拠点施設の有無を以下のように分類する。

①ある特定の施設のみを利用する「拠点のみ」
②複数の施設を利用するが、ある特定の施設を利用する場合が実績の半分以上である「拠点あり」
③ある特定の施設をもたない「拠点なし」

以上を施設の使い分けタイプとし、その活動実績をみていく（表6-21）。またこの分類により、ある特定の施設を使い続ける“常連”団体と、複数の施設を利用する（あるいは、施設を転々とせざるを得ない）団体といった、活動を行う施設との関わり方に団体の特徴があることが分かった。

表6-21　活動の拠点施設の有無による分類

タイプ	団体数	総活動数	備考
拠点のみ	74	845	活動実績の全てが、特定の活動場所
拠点あり	43	579	活動実績の半数以上が、特定の活動場所
拠点なし	34	440	特定の活動場所をもたない
施設不明	6	52	活動実績に利用施設の記載なし
実績なし	44	-	活動実績に記入なし
総計	201	1916	

[活動内容・目的と拠点施設の有無]

まず、活動内容に対する拠点の有無をみる（表6-22）。全体としては半数近くが「拠点のみ」であり、多くの団体が同じ施設で活動していることが分かる。これは、決められた予定で活動を行う団体が多く、通年で予約を取る場合にみられる。但し、拠点をもちながら別の施設（活動場所）をもつ「拠点あり」、活動場所が決まってなく複数の施設を転々とする「拠点なし」もそれぞれ2割以上いる。いずれの活動内容も概ね上記の通りであるが、ボランティア活動はその性質から特定の拠点をもたない。

また、各団体の活動目的を、活動実績から「練習のみ」「発表のみ」、両方を含む「練習＋発表」、それ以外の「その他」に分類したものとの対応をみる（表6-23）。全体としては練習しかしていない団体が半数あるが、それに加え発表も行っている団体も3割以上と多い。

特定の拠点でのみ活動を行う場合、練習ばかりしている団体が非常に多い。一方、複数の施設を使い分けている団体は発表にも積極的で、半数以上が何らかの発表行為を行っている。施設にとどまり、“常連”となるほど、外部と関わりがなくなることが危惧される。

表6-22　活動内容と活動拠点の有無

	室内の趣味活動		教養学習活動		ボランティア活動		スポーツ・健康活動		育児・教育活動		その他	内容不明	全体	
各母数	106		22		13		31		3		17	9	201	
実績未回答	17		7		1		11		0		6	2	44	
回答数	89		15		12		20		3		11	7	157	
拠点のみ	47	53%	7	47%	3	25%	10	50%	0	0%	4	3	74	47%
拠点あり	21	24%	4	27%	4	33%	6	30%	0	0%	5	2	42	27%
拠点なし	18	20%	3	20%	5	42%	3	15%	1	33%	2	1	33	21%
施設不明	3	3%	1	7%	0	0%	1	5%	2	67%	0	1	8	5%
総計	89	100%	15	100%	12	100%	20	100%	3	100%	12	7	158	100%

表6-23　活動拠点の有無と活動目的

	拠点のみ		拠点あり		拠点なし		施設不明	総計	
各母数	74		43		34		6	157	
目的不明	0		0		0		1	1	
回答数	74		43		34		5	156	
練習のみ	61	82%	12	28%	6	18%	4	83	53%
発表のみ	4	5%	1	2%	1	3%	0	6	4%
練習＋発表	4	5%	22	51%	23	68%	1	50	32%
その他	5	7%	8	19%	4	12%	0	17	11%
総計	74	100%	43	100%	34	100%	5	156	100%

＊　記入のあった活動実績により「練習のみ」「発表なし」、「練習」と「発表」両方含む「練習＋発表」、それ以外の「その他」に分類。

[利用する施設と施設選択時に重視すること]

次に拠点施設の有無と利用する施設、施設選択時に重視する要因（最大2種選択）をみる。

まず、利用する施設についてみると（表6-24）、活動の殆どが練習の「拠点のみ」では圧倒的に「公的集会施設」が多い。「拠点あり」は発表行為をすることもあり、他の公共施設の利用もみられる。「拠点なし」は民間施設の利用もみられる（但し、分類上含めた「個人の住宅」がその半数）。拠点として公民館などの身近な公的集会施設を利用する団体が常連となるため、他の団体が別の施設を使うことを余儀なくされている可能性がみられる。

この確認も含めて施設選択時に重視することをみる（表6-25）。全体の傾向は前述してあるので、ここでは拠点有無による相違のみを取り上げる。「拠点のみ」は予約の容易さを重視しているが、他は少ない。また、「拠点あり」「拠点なし」で選択の多いその他の内訳をみると、①他の施設が空いていなく、仕方なく、②発表の場として指定された、が多い。複数の施設を使い分ける場合、発表の場を使い分けるだけでなく、予約が取れなくて仕方なく他の活動場所を求める実態も確認された（特に表6-23の「練習のみ」がそれに当ると考えられる）。

一方、「拠点のみ」ほど「室規模や設備が適当」を選択しているが、陶芸サークルの『炉・釜戸』といった、活動に必須である設備との関係から利用する施設の選択肢が限られる場合もみられる。

以上のことから、拠点施設の有無は、予約の容易さと、活動に必須の設備による場合が多いと考えられる。v

[拠点の有無とメンバーの増減]

ここまでに、特定の拠点のみを活動場所とする団体は発表活動をあまり行わず、その為に外部と関わりにくくなることを指摘してきた。最後に、団体のメンバー増減との関係をみる（表6-26）。

図6-6は拠点の有無と団体の人数増減（現人数－創設時人数、表6-13参照）の関係を示したものである。単純なメンバー数の推移であるが、「拠点のみ」では人数が維持される場合も多いが、減少する場合も多い。一方、複数の施設を使い分ける（余儀なくされる場合も）「拠点なし」では大幅に人数が拡大する。

また、目的別の人数の増減（表6-27）は、発表を行うほどメンバーは増加することを示している。但し、その割合は「拠点なし」ほどではなく、発表を行うことだけでなく、複数の施設を使い分けることがメンバー増強に有効ということを示している。

以上から、施設の“常連”とされる団体の課題の確認、及び発表の場としての地域施設整備の必要性をみてきた。また、ある特定の施設を活動場所とするだけでなく、複数の施設を使い分けることが団体の成長につながるといえる。

表 6-24　利用する施設（拠点有無別）

		拠点のみ			拠点あり			拠点なし			施設不明	総計		
総活動数		845			579			440			52	1916		
利用施設不明		0			9			7			0	16		
回答数		845			570			433			52	1900		
公共施設	自治会集会所	0	0%	98%	32	6%	87%	0	0%	70%	0	32	2%	87%
	公的集会施設	761	90%		383	67%		197	45%		28	1369	72%	
	教育施設	0	0%		24	4%		26	6%		0	50	3%	
	スポーツ施設	0	0%		12	2%		13	3%		0	25	1%	
	地方文化施設	46	5%		27	5%		43	10%		0	116	6%	
	図書館	23	3%		2	0%		8	2%		0	33	2%	
	宗教施設	0	0%		1	0%		1	0%		0	2	0%	
	福祉施設	0	0%		15	3%		13	3%		0	28	1%	
民間施設	民間の貸し施設	0	0%	0%	21	4%	4%	25	6%	10%	0	46	2%	3%
	店舗	0	0%		1	0%		17	4%		0	18	1%	
その他		0	0%			0%		2	0%		0	2	0%	
地域ナシ	個人住宅	15	2%	2%	25	4%	9%	49	11%	20%	24	113	6%	9%
	施設は使用しない	0	0%		27	5%		39	9%		0	66	3%	
総計		845	100%		570	100%		433	100%		52	1900	100%	

表 6-25　施設選択時に重視すること（拠点有無別）

		拠点のみ			拠点あり			拠点なし			施設不明	総計		
総活動数		845			579			440			52	1916		
重視不明		26			72			71			0	169		
回答数		819			507			369			52	1747		
立地	メンバー宅から近い	124	15%	46%	124	24%	49%	52	14%	41%	1	301	17%	45%
	立地環境	137	17%		47	9%		52	14%		9	245	14%	
	交通の便	114	14%		76	15%		47	13%		0	237	14%	
運営	予約が容易	222	27%	87%	50	10%	60%	20	5%	48%	12	304	17%	73%
	賃料が安い・無料	448	55%		220	43%		113	31%		43	824	47%	
	利用時間帯	30	4%		33	7%		18	5%		15	96	5%	
	回数制限	15	2%		1	0%		27	7%		0	43	2%	
空間	室規模や設備	355	43%	52%	161	32%	35%	79	21%	33%	0	595	34%	41%
	付加スペースの充実	0	0%		0	0%		3	1%		0	3	0%	
	施設が多機能	67	8%		15	3%		40	11%		0	122	7%	
その他		32	4%		86	17%		96	26%		0	214	12%	
総計		1544	189%		813	160%		547	148%		80	2984	171%	

その他の内訳	具体的な意見	該当数
①他の施設が空いていなく、仕方なく	「ここしかなかった」「他に予約が取れなかった」他	11
②発表の場として指定された	「指定された会場」「要請を受け」他	24

表 6-26　拠点有無と団体人数の変遷

	拠点のみ		拠点あり		拠点なし		施設不明	全体	
各母数	74		43		34		6	157	
増減不明	4		2		3		1	10	
回答数	70		41		31		5	147	
人数拡大	16	23%	13	32%	21	68%	0	50	34%
人数維持	33	47%	19	46%	4	13%	2	58	39%
人数縮小	21	30%	9	22%	6	19%	3	39	27%
総計	70	100%	41	100%	31	100%	5	147	100%

表 6-27　利用目的と団体人数の変遷（参考）

	利用目的									
	練習のみ		発表のみ		練習＋発表		他	不明	全体	
各母数	83		6		50		17	1	157	
増減不明	3		1		4		1	1	10	
回答数	80		5		46		16	0	147	
人数拡大	18	23%	1	20%	24	52%	7	0	50	34%
人数維持	36	45%	4	80%	15	33%	3	0	58	39%
人数縮小	26	33%	0	0%	7	15%	6	0	39	27%
総計	80	100%	5	100%	46	100%	16	0	147	100%

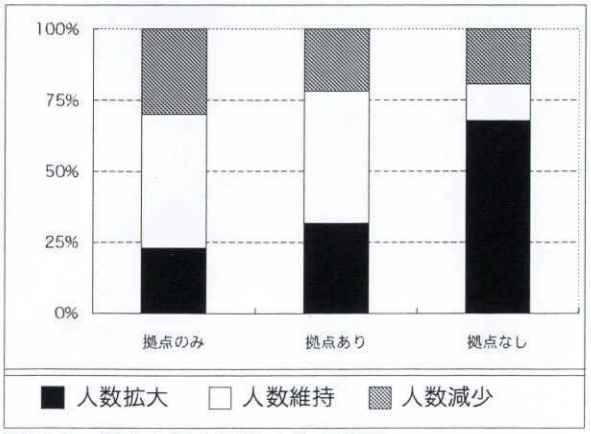


図 6-6　拠点有無と団体人数の変遷

6-4-3　施設に対する不満と要望

ここでは、フリーアンサーから得られた施設に対する不満と要望を代表的意見を挙げながら整理し、以下の２側面で団体が行う活動の展開を阻害している要因を抽出する。

［施設の整備状況］に関する不満と要望を図6-7のように整理した。

施設の絶対数・拡充に対する要望も多く、集会関連施設は量的には整備されつつあるとはいえ、未だ施設を求める声は多い。特に、日常的な活動の場というよりも、外部を巻き込んでの発表の場の拡大に対する要求が多くみられ、利用者側にも発表の場の不足が意識されている。

また、施設の老朽化や利用者の高齢化の問題から、単に活動の場を提供するだけでなく、活動に必要な設備の充実、交流に必要な機能の充実といった、施設の質的改善を求める声も多い。駐車場の不足を含めた施設へのアクセスに対する不満が多いことも特徴である。

［施設の運営方策］に関する不満と要望を図6-8のように整理した。

活動場所の確保に関しての不満と要望が非常に多い。まず、予約システムについては（改善されている施設もあるが）、利用予定日の３ヶ月前といったかなり早い時期に施設に出向き、その都度予約を取らなくてはならない。その際の手続きの複雑さ、行政的な対応が大きな不満となっている。また、施設の利用には月に何回といった制限がつく場合もあり、活動場所の確保が難しくなることが、活動の展開に阻害を与えている。さらに、施設の常連が優先され、活動場所を確保できない団体もみられる。

また、施設の賃貸料に対する要望も多い。参加者に収入の少ない高齢者が多いことも鑑みての運営を利用者は求めている。

以上から、施設側の、団体が行う活動の展開を阻害している要因を抽出し、以下に示す。

○活動場所を確保できない

その要因として、身近で気軽に活動できる施設の絶対数・室の不足もあるが、それ以上に予約の取りにくさが挙げられる。改善がみられる例もあるが、施設の空き情報は各施設に直接で向かねば知ることはできず、他の活動場所を探すのにも利用者は苦心している。活動場所の横断的・体系的な場所提供が求められる。

○施設の常連化の課題

上記に付随して、施設の常連が存在することにより、そうでない団体は特に活動場所を確保しにくい。

○活動内容の多様化への対応

常連化が起こる要因としては、活動に必要な設備が特定の施設にしか整備されていないことによるものも多い。また、活動に適した室・設備が不足していることへの不満もみられ、今後さらに活動者が増えた場合、それらに対応した場所提供が必要となる。

○発表の場の不足

外部に向けた情報発信を行いたい・参加者を増やしたいという要求をもつ団体は多いが、常設の展示や多くの観客を集めることのできる施設は少ない。参加者を増やすためにも、発表の場の充実・拡大は大きな課題である。

○利用者の高齢化

高齢者に対した金銭的支援を始め、階段を使わないこと、道具搬入の便利化といった、施設側の配慮も求められている。施設へのアクセス面の改善も含めて、これらは活動団体からの高齢参加者の脱退を抑制することにもつながる可能性がある。

[施設の整備状況に対する不満と要望]

1. 施設の絶対量の不足に関して　計９意見
・津中心部（旧津市）に県総文のような、津市民が自由に使える立派な施設がない。
・現在会合は近くの集会所を借りていますが、作品発表の機会が少ない。
道の駅や地域の文化発表会程度で、人の集まりやすい場所（機会）がほしい。
・養生地区には地域で使用できる施設がなく、中央公民館をお借りしています。
しかし、津市全体の施設である為、厳しいことを言われます。
もっと気楽に利用できる施設があればと期待します。
・体操（健康体操、リズム体操）を実施するのに適する施設が少ない。
・津市体育館は古く、他の体育館は観客席が少ない。1000 人規模が集まれる発表の場を希望する。

2. 施設の拡充（規模・室数の増加）に関して　計６意見
・活動される団体の増加により、（３０名以上の）大きな大会をしたいときは、小会議室等の会場の確保が難しく苦慮している。
・老年になってくるので、できる限り階上の部屋の利用はさけたいと思っているが、部屋数が少ないので困る。（施設の拡張を望む）
・大集合の活動のとき、折りたたみ椅子 200 ～ 300 を並べなくても、必要時使用できる、音響その他の設備が整った大ホールがほしい。

3. 施設の機能・設備に関して　計 22 意見
□活動に必要な設備　計７意見
・ダンスは床ばりの方が踊りやすいので、それを望む。
・大きな楽器を搬入するので EV のある施設が望ましい
・備品となる窯の修理をお願いすることがあるが、予算や業者との関係でスムーズに修理ができない。
□交流の為の機能　計２意見
・現在飲食は禁止だが、親睦のため、また一息入れるためお茶、お菓子程度は許可してほしい。
□利用者の安全性　計３意見
・会員の方々はご年輩の方が多いので、階段を使わない室がいい。
□施設の老朽化・耐震性に関して　計３意見
・老朽化に対するメンテナンスをきちんとしてほしい。
・公民館そのものについては耐震性、便所等に問題があり、改築してもらえればと思います。

4. 施設へのアクセスに関して　計 16 意見
□施設の近さ　計３意見
・もう少しメンバーの中心的なところ（施設の配置？）がいいが、今のところない。
□交通の便　計３意見
・公共交通の便の良いところは古い施設が多い。
・施設よりも公共交通の整備を。
□駐車場の問題　計 11 意見
・駐車場のスペースが少ない。
・駐車場が有料。

図 6-7　施設の整備状況に関する不満と要望

[施設の運営方策に対する不満と要望]

1. 施設の予約・確保に関して　計21意見

□予約のシステムが複雑・面倒　計10意見

・窓口に行かなければ申し込みはしてもらえないし、時間にも制限がある。

・書類提出の煩わしさ。

・同日に複数の利用者があり抽選になることがある。
その為に申し込み可能なのか3ヶ月前から日時の決定をしないといけないので、会場の確保が大変。

□施設の利用制限に関して　計4意見

・同一の施設が月2回の使用制限で、あちこちの施設を使い分けなくてはならない。

・利用回数に制限があるため、自宅を使っているので考えてほしい。

□他団体との折り合いに関して　計6意見

・会議やリハーサルに公民館を予約しようとしても貸してもらえないことがよくある。先まで予約が入っていたり、「きっと、いつも使っている団体が入ってくるだろうから」と言われ、空いているにもかかわらず貸してもらえなかった。

・公共施設は予約制ですが、常連が確保しているため、申し込んでもなかなか予約が取れない。

2. 施設の開館時間に関して　計2意見

・夜間（夜7:40~9:00の活動）が不安、危険に思うことがある。

3. 冷暖房等の設備の扱いに関して　計5意見

・公民館を利用しているが、冷房が7月～9月の末までで、暑くて汗の出るような日でも冷房が入らない。

・公共施設を主に利用しているが、冷暖房の期間も決まっている。
しかし、気候も変化しているので、室温などを参考に、入れるか入れないかを決めてほしい。

4. 利用料金に関して　計10意見

・河芸町のときは施設の利用が無料だったのに、津市に合併してから有料になった。

・参加者は収入の少ない老人が多く、賃貸料の安いことが大切です。

5. 職員の対応　計3意見

・公民館勤務者との交流が深まり、ソフトに接してくださるのでありがたいと感謝している。

図6-8　施設の運営方策に関する不満と要望

6-5　活動場所としての地域施設の必要性

前節までで、組織活動実態として多様な活動が行われているが、既存の人間関係にしろ、施設が行う講座にしろ、施設が団体結成の一助となっていることが分かった。また、人々が集まることでメンバー各自の自己実現要求だけでなく、地域社会への貢献といった意識も芽生え、組織活動を行うことが人々の生活を充実したものとする為に重要な行動であることが確認できた。

但し、現状では団体の結成も新規参入といった展開過程も、内輪的な既存の人間関係による場合が多い。よって、団体の結成については、地域施設には同志が出会い、活動する場の提供することが、新規参入といった展開については団体を拡大・成長させるために、より多くの外部の人を巻き込むこと、脱退者を抑制することが求められる。

実態としての施設利用は、施設の常連といえる団体が多く、拠点と呼べる施設を有する団体が多いことが明らかとなった。

但し、特定の施設でのみ活動することは、必ずしも団体へのメンバーの新規参入を支持するものではないといえるだろう。特定の拠点施設で練習だけでなく発表を行う団体もいるが、それも限られた範囲に向けたものにしかなっていない懸念もある。一方、メンバー数の拡大している団体は、多くの施設を使い分け、発表を行うことにより外部に情報を発信している団体に多いことも明らかとなった。

さらに、常連化する団体のあおりを受けて、活動場所を確保できない他の団体も存在する。

これらの課題が発生する要因のひとつとして、現状ではそれぞれの団体が利用している施設が個別に（バラバラに）整備され、他の施設と連携がとれていないことが挙げられる。そのため、活動場所の確保に躍起になる団体が存在する一方、成果発表の場を普段通りの拠点で行い、内輪にしか情報発信しない団体も存在する。成果発表の場の絶対的な不足の解消も含めて、組織活動への参加者増のための定期的な発表の場と機会を提供するシステムをつくることが新たな課題となる。また、団体同士の連携を補強することで、活動場所確保のための折り合いを付けることも可能になってくる部分もあるのではないだろうか。そのためには、団体間の交流・親睦を促進する仕掛けが必要である。場としては純粋な交流・親睦のために複数グループで利用できる場と、合同発表会等といった協働による交流を促進する場が考えられる。

以上の課題に取り組み、団体の結成を促し、非活動者を巻き込んだ団体の展開を促進することが、活動者にとっても利用しやすい活動場所としての地域施設の整備につながると考える。

第７章　組織活動への参加促進要件

7-1　参加有無にみる余暇を過ごす場所の相違
7-2　公共施設利用と組織活動間のS.B.現象
7-3　組織活動への参加を促す方策

7-0　本章の目的

前章までに、個人的な余暇活動と組織活動の両面を考察してきた。但し、個人的余暇活動と組織活動は相互独立ではなく、両立することが地域施設の利用促進、ひいては地域住民の余暇生活の更なる充実につながると考える。ここでは、両立による施設利用の影響をみる（但し、個人的な余暇活動参加者がベースであるが）。また、組織活動への参加を阻害する要因を整理し、組織活動参加の為の方策を示す。

本章では、調査１のデータを用い、地域活動を組織活動とみなす（参加者・不参加者の属性は表 6-2 参照）。両立（組織活動参加）の程度を同伴形態との関係でみると（表 7-1、表 7-2）、［ひとり］［家族］に比べて、［グループ］で余暇を過ごす人は組織活動への参加率が高い。逆にいうと、なんらかの母体をもつ人は［グループ］で過ごしやすく、母体をもたない人は［ひとり］あるいは［家族］で余暇を過ごしやすい。母体をもつということは、地域に知り合いを増やすことでもあるので、この結果は道理である。

表 7-1　同伴形態別の組織活動への参加率

	ひとり	家族	グループ
総数	559	661	699
参加不明	2	3	12
回答数	557	658	687
母体あり（参加）	31%	30%	59%
母体なし（不参加）	69%	70%	41%
総計	100%	100%	100%

表 7-2　参加有無と余暇の同伴者

	参加	不参加
総数	1064	2076
未回答	256	903
同伴形態不明	36	43
回答数	772	1130
ひとり	22%	34%
家族	25%	41%
グループ	52%	25%
総計	100%	100%

7-1　参加有無にみる余暇を過ごす場所の相違

まず、組織活動への参加有無と同伴形態別に、余暇を過ごす場所（最大４件選択）の相違をみる（表 7-3）。

参加者ほど「自宅」の選択が少ないことは特筆に値する。ちなみに、第３章の同様の考察によると、高齢者にこの傾向がみられた。それを考慮すると、組織活動に参加する高齢者は、自宅で過ごすことに充実できない為に、地域に出て組織活動を行うとも考えられる。

また、不参加者のうち、余暇を［グループ］で過ごす人は「友人・知人宅」の選択割合が半数と非常に高い。半面、「地域施設」の選択割合は低い。仲間内での集まり程度と推測され、彼らに余暇を過ごす場所として地域施設を如何に開拓させていくかも課題といえる。

図 7-1 は「地域施設」を取り挙げ、模式的に示したものである。

まず、「社会教育系（公共施設）」「商業娯楽系（民間施設）」「自然系」の大分類でみる。参加者は総じて「社会教育系」が、不参加者は「商業娯楽系」が多く、「自然系」は同程度である。組織活動へ参加するほど公共施設の利用が促進されることが分かる。さらにその影響もあってか、参加者の方が「地域施設」全体としての利用も多い。組織活動を行うことが地域施設全体の利用促進につながると考えて良さそうだ。

次に施設種別の詳細をみる。［ひとり］は〈図書館〉が多いが、参加者の方が若干多い。〈スポーツ施設〉も同様に参加者の方が多く、こちらは［ひとり］［グループ］両方の選択が多い。また、〈コミュニティ施設〉は不参加者は殆どないが、［グループ］では少なからず利用されている。

また、やはり［家族］での利用の場合は公共施設の選択は総じて低い。特に、不参加者は非常に少ない。［ひとり］でも［家族］でも〈商業施設〉は参加有無にかかわらず多いが、［グループ］は対照的に少ない。

本研究は地域公共施設を余暇を過ごす場所として整備する為の整備要件を得ることなので、公共施設に着目する。公共施設の選択は参加者が不参加者の倍程度と大きな相違がある。つまり、公共施設を余暇を過ごす場所として使いこなしているという点では、何らかの組織活動に参加している人の方が圧倒的に多いのだ。

これは、（第６章で考察したように、）組織活動に参加している人はその活動のなかで普段から、それに伴う地域（公共）施設を利用しており、そのため、さらなる公共施設の利用にも積極的になることによると推察できる。次項にてそれを確認する。

表 7-3　同伴形態と参加有無にみる余暇を過ごす場所

			参加			不参加		
			ひとり	家族	グループ	ひとり	家族	グループ
総数			173	196	403	384	462	284
未回答			2	0	3	0	1	0
回答数			171	196	400	384	461	284
自宅			87%	90%	78%	92%	96%	88%
職場・学校			8%	11%	9%	17%	12%	22%
友人・知人宅			25%	32%	30%	27%	35%	52%
地域施設	社会教育系（公的）	図書館	44%	16%	11%	31%	12%	8%
		コミュニティ施設	22%	17%	55%	2%	1%	13%
		地方文化施設	9%	7%	17%	3%	3%	5%
		美術館・博物館	6%	2%	8%	4%	3%	2%
		スポーツ施設	24%	13%	36%	15%	7%	23%
		教育施設	2%	1%	5%	1%	1%	2%
		小計	108%	56%	130%	56%	27%	54%
	商業娯楽系（民的）	商業施設	55%	73%	22%	59%	80%	36%
		娯楽施設	18%	23%	10%	25%	21%	31%
		飲食店	16%	29%	17%	27%	36%	36%
		小計	88%	126%	49%	111%	137%	104%
	自然系	公園	5%	16%	9%	7%	17%	7%
		自然	19%	19%	18%	22%	20%	14%
		小計	23%	35%	27%	28%	37%	21%
	その他		14%	13%	12%	14%	16%	9%
	地域施設		233%	229%	217%	209%	217%	187%
総計			353%	362%	333%	345%	361%	349%

＊　図中の▭は5%、▫ は1%～4%を示し、例えば7%は▭▫と表現している。

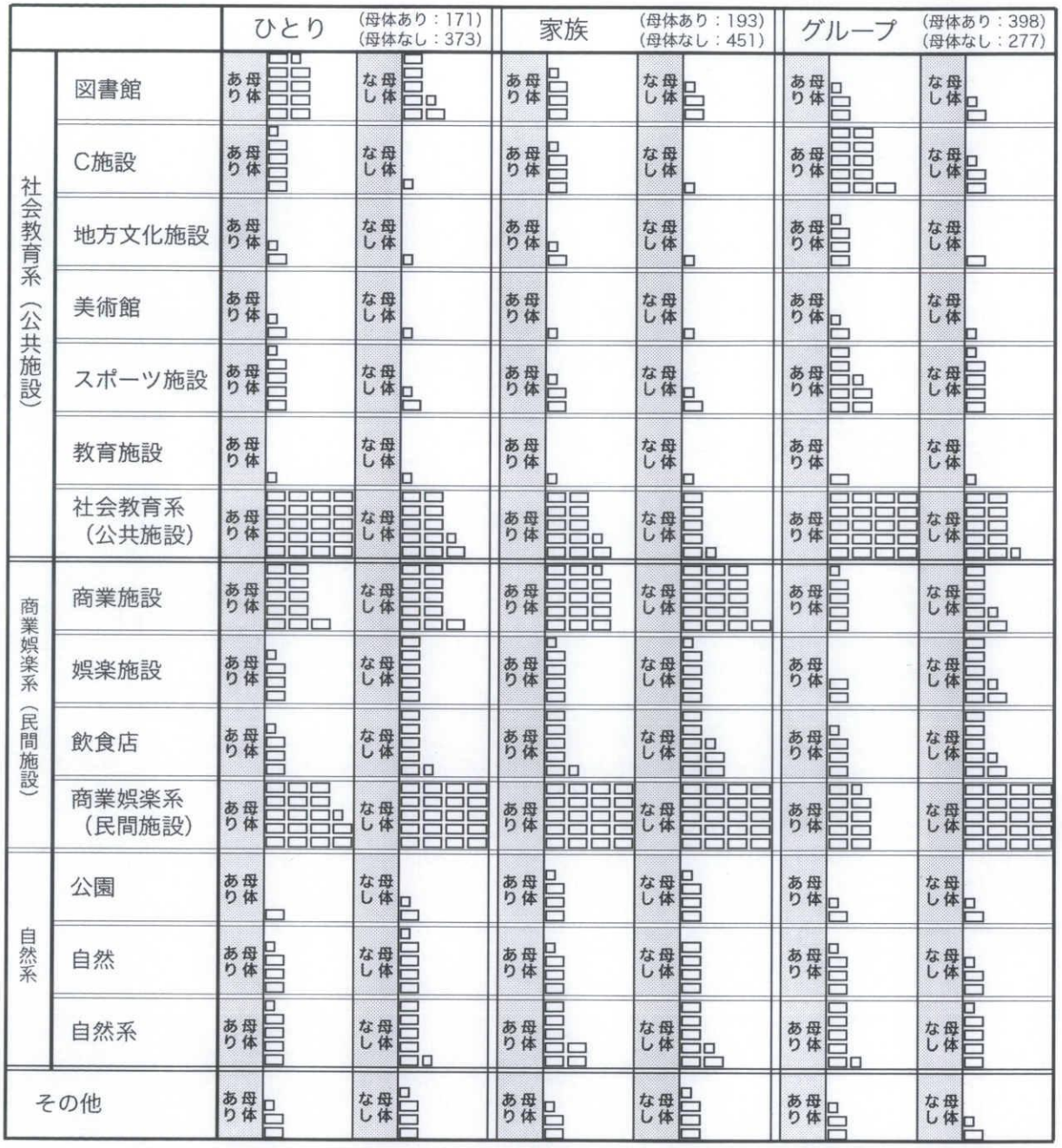


図 7-1　同伴形態と母体有無にみる余暇を過ごす場所

7-2　公共施設利用と組織活動にみる S.B. 現象

前節にて、組織活動を行う人の方が公共施設、ひいては地域施設の利用が多いことが確認された。前章にて、組織活動は多くの場合公共施設を活動場所としていることが確認された。組織活動に参加している人は定期的（9割以上の団体が月１回以上の活動頻度）に施設を訪れるため、個人として余暇を過ごす場所にも公共施設を選択すると推測される。

よって、ここでは【組織活動への参加・不参加】と、【余暇を過ごす場所（最大４件選択）に公共施設を含んでいるか否か】の２軸４分類にて、組織活動と公共施設利用の関連を確認する（表 7-4）。

図 7-2 は同伴形態別に組織活動への参加有無と公共施設を含んでいるか否かによって、以下に示した４分類の円グラフである。

○［参加・公共あり］
：組織活動に参加することで、公共施設に身近さを感じ、余暇を過ごす場所に公共施設を選択する。

○［不参加・公共なし］
：組織活動に不参加な為、公共施設に身近さを感じず、余暇を過ごす場所に公共施設を選択しない。

○［参加・公共なし］
：組織活動に参加しているが、公共施設に身近さを感じず、余暇を過ごす場所に公共施設を選択しない。

○［不参加・公共あり］
：組織活動に参加していないが、公共施設に身近さを感じ、余暇を過ごす場所に公共施設を選択する。

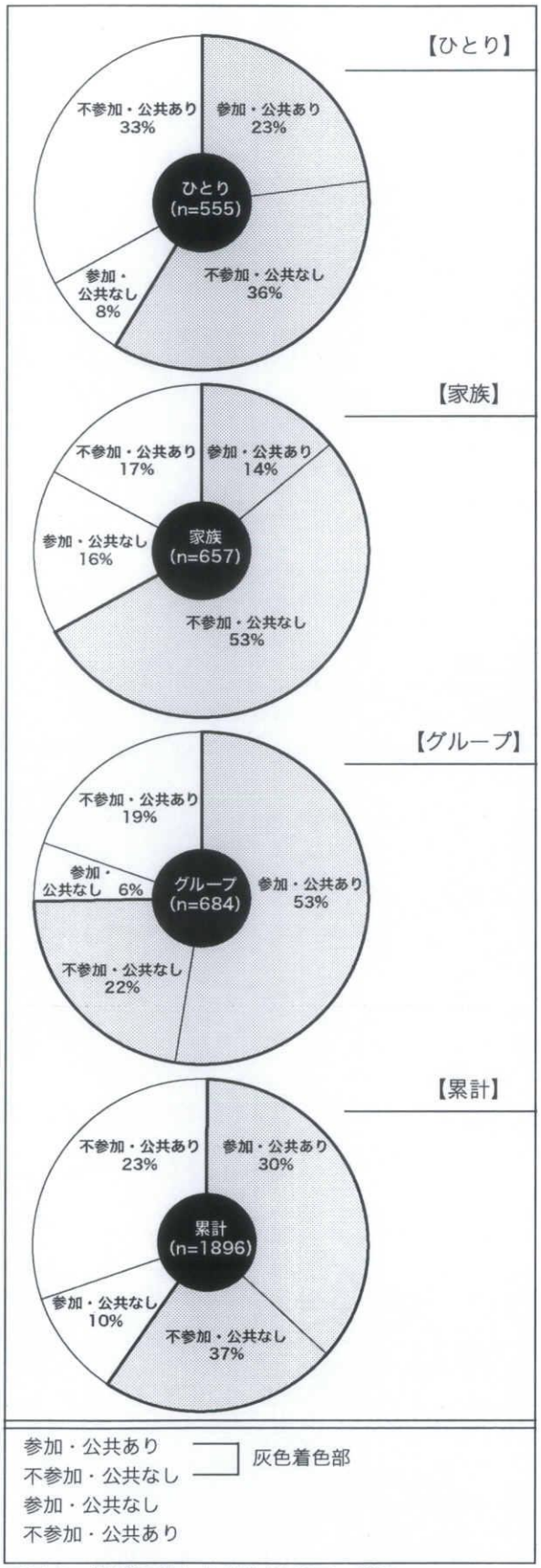


図 7-2　組織活動と公共施設利用の関連

組織活動に参加することで、公共施設に身近さを感じ、余暇を過ごす場所に公共施設を選択する［参加・公共あり］についてみる。これは家族で余暇を過ごす人では少ないが（家族で過ごす者はそもそも公共施設の選択が少ない）、グループで過ごす人は半数以上と非常に多い。

次に、組織活動に不参加な為、公共施設に身近さを感じず、余暇を過ごす場所に公共施設を選択しない［不参加・公共なし］についてみる。これは家族で過ごす人では半数以上の割合であり、非常に高い。［家族］で余暇を過ごす場所に公共施設が少ないのは、子育て期の利用に適した整備がなされていないことはLC観点の分析で明らかになったが、この側面からの示唆も考慮すべきといえる。

組織活動と公共施設利用の関連のみられない［参加・公共なし］は同伴形態によらず多くない。同様の［不参加・公共あり］もいずれも多いとはいえないが、［ひとり］についてのみ、その割合は高いといえる（［ひとり］では33%）。［ひとり］で公共施設を利用する人は、組織活動に参加していなくてもひとりで過ごせる場所を求めて、それに適した公共施設を選んでいることが窺える。

以上から、同伴形態別・累計のいずれも、半数以上に組織活動と公共施設利用の関連がみられる（図の灰色着色部）。つまり、冒頭の仮説がある程度当てはまるといえ、組織活動への参加を促すことが公共施設の利用促進につながるといえる。とはいえ、特に［ひとり］で過ごす人にみられるが、組織活動への参加有無にかかわらず、公共施設で余暇を過ごす人も少なくない。

表 7-4　組織活動と公共施設利用の関連

		ひとり	家族	グループ
総数		559	661	699
参加不明		2	3	12
未回答		2	1	3
回答数		555	657	684
関連あり	参加・公共あり	23%	14%	53%
	不参加・公共なし	36%	53%	22%
	小計	59%	67%	75%
関連なし	参加・公共なし	8%	16%	6%
	不参加・公共あり	33%	17%	19%
	小計	41%	33%	25%
総計		100%	100%	100%

7-3　組織活動の参加を阻害する要因

ここまで、組織活動への参加が余暇を過ごす場所に影響することをみてきた。組織活動の活動場所は公共施設であることが多く、その影響もあって、活動参加者は余暇を過ごす場所として公共施設を選択する傾向がある。一方、活動に不参加の人は公共施設を余暇を過ごす場所としてあまり選択していない傾向があることを発見できた。よって、公共施設ひいては地域施設の利用促進に組織活動への参加を促すことが有用であることが明らかとなった。

また、社会学的見解になるが、地域社会の有機性を形成・発展させるには地域貢献にも結びつく組織活動の促進は重要な課題といえよう。このような視点からも、組織活動へのを促す方策を得ることは重要である。

表 7-5　参加阻害要因

不参加者総数		2128	
不参加理由不明		90	
回答数		2038	
『時間』	時間合わない	531	26%
	時間がない	857	42%
	小計	1388	68%
『情報』	団体知らない	312	15%
	場所知らない	115	6%
	小計	427	21%
『人間関係』	地域に友人少ない	171	8%
	人間関係煩わしい	236	12%
	小計	407	20%
『趣向』	興味のある内容なし	533	26%
『施設整備』	場所不便	72	4%
	施設サービス不十分	24	1%
	小計	96	5%
その他		228	11%
総計		3079	151%

7-3-1　活動参加を阻害する要因

以降は、第３・４章にて分析した［潜在的活動要求］から、人々の要求として、大部分の人が余暇を自宅以外で、目的意識をもって活動したいという要求を有していることを考慮し、不参加者には活動参加を阻害する要因があるという見地に立って、阻害を克服するモデルを提示する。

不参加者の活動に参加しない理由をみると(= 阻害要因：最大２種選択、表 7-5)、『時間』の不足を７割近くの人が挙げており、最も大きな阻害となっている。次いで自分の行いたい活動と、施設が提供する内容が異なっている『趣向』が３割近くと続く。また、『情報』の不足と『人間関係』の課題が２割近くみられるが、『施設整備』は１割にも満たない。

これらの阻害要因を、利用者である地域住民（需要側）と、提供する施設側（供給側）の責任の所在によって、図 7-3 のように図化する。需要側⇔供給側の責任は、『時間の不足』＞『情報の不足』＞『人間関係の課題』＞『趣向の課題』＞『施設整備の課題』とし、さらに組織活動の参加までに組織活動の参加までに必要なハードルを３段階に整理したものである。

『時間の不足』『情報の不足』からなる第１ハードルは、生活者個人が乗り越えなくては物理的に組織活動への参加が難しく、個人（つまり需要側）の責任が大きい。

それを乗り越えた次の段階は『人間関係の課題』『趣向の課題』による第２ハードルとする。これは物理的に参加できる状態は脱しているが、活動内容とそれに伴う人間関係に不満があり参加に至っていない。そのため、個人（需要側）と活動参加の機会を提供する施設等（供給側）の歩み寄りが必要である。

最後のハードルは施設の立地や内部環境に

不満がある『施設整備の課題』であり、供給側の責任が大きい。

以上は組織活動参加へ至る為に個人が阻害を克服すべき順番でもあり、参加阻害要因モデルである。

同図のハードルの高さは、回答者の属性によらず、不参加者の回答総数でみたものである。組織活動に参加するのに大きな阻害となっているのは、個人の課題である第１ハードルが大きく、特に『時間』の阻害が大きい。この阻害は特に個人の課題であるが、活動を行う場所である施設の時間拡張による改善の余地はありそうである。

さらに『情報』も多く、人々に情報を与え、参加の契機を提供することが組織活動への参加を促すことも確認できた。

『人間関係』『趣向』も少なからず阻害要因となっており、提供側が仲間づくりの担保と活動内容の多様化を考える必要も出てきている。

ちなみに、第３ハードルである『施設整備』は回答としては少ないが、その段階に至っていない人々が多数いる為であり、安易に十分な施設整備がなされていると考えるのは早計である。

次項に参考として、LC・LS別の参加阻害要因モデルをそれぞれ提示する。LC・LSの組織活動への参加率は前章参照。

それらから、結論（次章）に先んじて、組織活動への参加を促す施設側の方策を提案する。

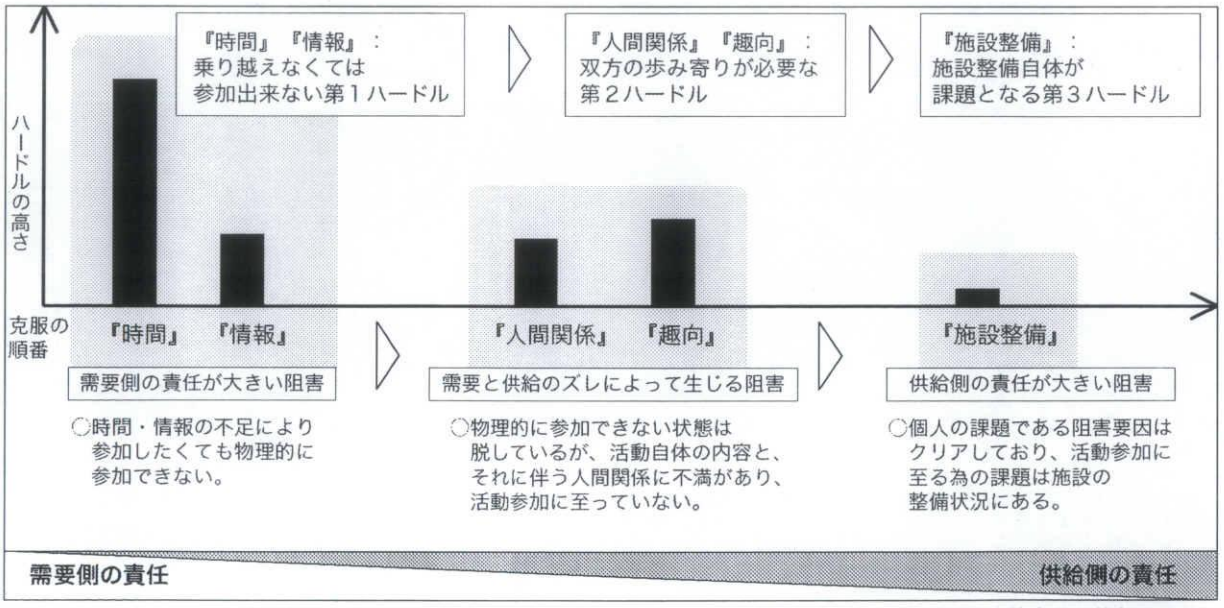


図 7-3　組織活動への参加阻害要因モデル　　＊　各ハードルの高さは全回答者の回答割合より。

7-3-2　LC・LS にみる参加阻害要因

[LC の側面から]

図 7-4 は LC の各段階ごとの参加阻害要因モデルである（表 7-7）。

男性と有職女性は｛独身期｝から｛子ども独立期｝まで総じて『時間』が大きな阻害要因となっている。一方、｛学生期｝｛高齢期｝と無職女性は比較的『時間』の阻害は小さく、生活背景による違いが明確に表れている。

また、生涯を通じて『情報』の阻害は徐々に小さくなっており着実に情報を得ている様子が確認できるが、より早い段階でこの阻害をクリアできることが望まれる。特に転居して間もなく、新たに情報収集の必要がある｛新婚期｝のうち、仕事と家事を両立する有職女性には重大な阻害要因となっている（この段階は育児・家事活動への関心が高く、必要に迫られているため、早急な改善が求められる）。

『人間関係』が大きな阻害となっているのはある程度第１ハードルをクリアできた段階であるが、時間に余裕のできた｛高齢期｝と子育てが一段落した無職女性に多い。

『趣向』は施設が提供する活動内容の多様化により改善の余地がある阻害であるが、図中に点線で囲った段階で多い。これらの段階の人々は活動内容の充実により参加を促せる可能性があり、現段階では参加者の有力な予備軍といえる。

以上みてきたように、各段階にはそれぞれ固有の阻害要因があるため、新たな参加者を開拓するには各段階の阻害要因をクリアした供給側の受け入れ準備が必要である。

施設側ができる改善として、活動内容の充実と情報周知も相応の成果が見込まれる。

[LS の側面から]

図 7-5 は LS の各タイプごとの参加阻害要因モデルである（表 7-8）。

【C1】の不参加者は、不参加理由の選択数が６タイプ中最も多い。多くの阻害を感じていることは、活動参加を望んでいることの裏返しともとれる。このタイプでは『時間』に阻害を感じているものが多い。

【C2】【C4】の不参加者は、無職者が多いこともあり、『時間』への阻害は他のタイプに比べて多くない。この両タイプは第２ハードルである『人間関係』と『趣向』を主な阻害と感じている。両者の歩み寄りが必要なステップであるが、前項でみた各タイプの趣向（参加内容）を参考に、施設側が企画を充実することで参加を促せる可能性はある。

【C3】【C5】【C6】も『時間』が大きな阻害要因となっているが、それ以外の阻害要因に特徴がある。有職者が殆どの【C5】【C6】は時間的制約に加え、『趣向』への不満が大きい。両タイプとも参加者が少ないため、彼らの求める趣向を窺い知ることは困難であるが、需要側と供給側がそれぞれ意見を出し合い、文字通り“歩み寄り”を行う必要がある。一方、【C3】は「人間関係」に不満が大きい。育児教育に強い関心を示すタイプであり、その活動に伴う意見の不一致がありそうである。

それぞれのタイプに対し、施設側の努力により改善の余地があるのは、やはり『趣向』であろう。前項の参加者の活動内容を考慮しながら、講座等の充実を図り、参加を促したい。

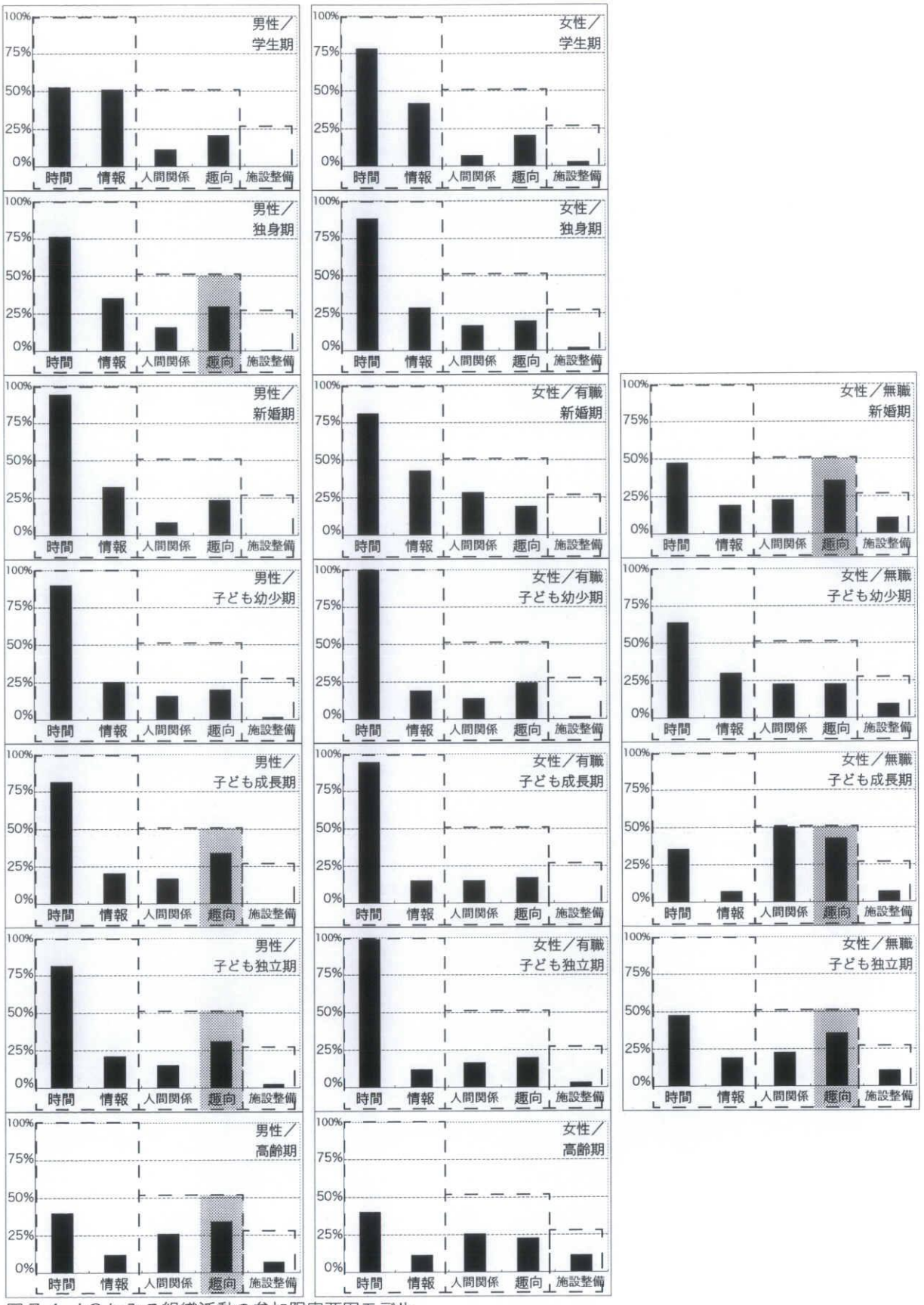


図 7-4　LC にみる組織活動の参加阻害要因モデル

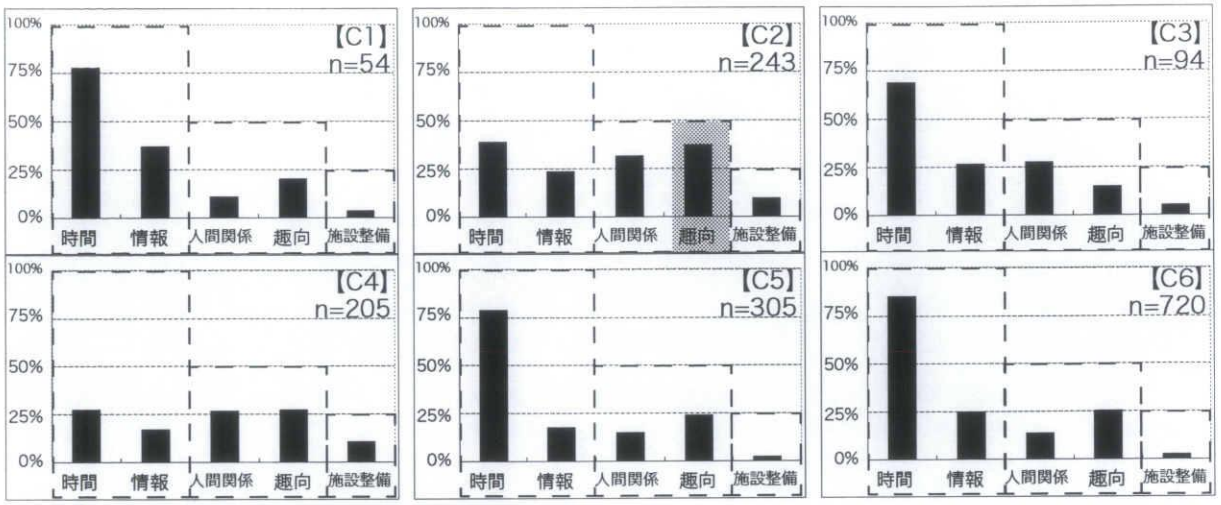


図 7-5　LS タイプにみる組織活動の参加阻害要因モデル

表 7-7　LC にみる組織活動の不参加要因

			男性							女性										
			学生期	独身期	新婚期	子ども幼少期	子ども成長期	子ども独立期	高齢期	学生期	独身期	有職・新婚期	無職・新婚期	有職・子ども幼少期	無職・子ども幼少期	有職・子ども成長期	無職・子ども成長期	有職・子ども独立期	無職・子ども独立期	高齢期
	不参加者数		55	115	34	123	64	269	342	70	110	22	15	61	53	54	16	165	87	288
	内容不明		2	1	0	4	5	13	15	1	9	1	2	3	0	2	2	9	3	15
	回答数		53	114	34	119	59	256	327	69	101	21	13	58	53	52	14	156	84	273
阻害要因	時間	時間合わない	11%	31%	38%	30%	32%	28%	14%	28%	38%	29%	31%	38%	19%	38%	7%	44%	19%	16%
		時間がない	42%	46%	56%	60%	49%	54%	25%	51%	50%	52%	38%	64%	45%	56%	29%	55%	29%	24%
		小計	53%	76%	94%	90%	81%	82%	40%	78%	88%	81%	69%	102%	64%	94%	36%	99%	48%	40%
	情報	団体知らない	32%	27%	29%	18%	17%	15%	9%	30%	24%	33%	31%	16%	23%	13%	7%	9%	12%	7%
		場所知らない	19%	8%	3%	7%	3%	6%	3%	12%	5%	10%	23%	3%	8%	2%	0%	3%	7%	5%
		小計	51%	35%	32%	25%	20%	21%	12%	42%	29%	43%	54%	19%	30%	15%	7%	12%	19%	11%
	人間関係	地域に友人少ない	4%	7%	3%	4%	8%	5%	9%	3%	10%	14%	0%	7%	9%	6%	21%	6%	10%	14%
		人間関係煩わしい	8%	9%	6%	12%	8%	11%	17%	4%	7%	14%	8%	7%	13%	10%	29%	11%	13%	12%
		小計	11%	16%	9%	16%	17%	15%	26%	7%	17%	29%	8%	14%	23%	15%	50%	17%	23%	26%
	趣向	興味のある内容なし	21%	30%	24%	20%	34%	31%	34%	20%	20%	19%	31%	24%	23%	17%	43%	20%	36%	23%
	施設整備	場所不便	0%	1%	0%	2%	0%	1%	4%	3%	2%	0%	0%	0%	8%	0%	7%	3%	10%	10%
		サービス不十分	0%	0%	0%	0%	0%	2%	3%	0%	0%	0%	0%	2%	2%	0%	0%	1%	1%	2%
		小計	0%	1%	0%	2%	0%	3%	7%	3%	2%	0%	0%	2%	9%	0%	7%	3%	11%	11%
	その他		11%	3%	3%	5%	5%	4%	21%	10%	6%	0%	8%	5%	9%	8%	7%	6%	17%	25%
	総計		147%	161%	162%	158%	158%	155%	140%	161%	161%	171%	169%	166%	158%	150%	150%	157%	152%	136%

表 7-8　LS タイプにみる組織活動の不参加要因

			C1	C2	C3	C4	C5	C6
	総数		55	253	100	214	318	749
	参加不明		1	10	6	9	13	29
	回答数		54	243	94	205	305	720
阻害要因	時間	時間合わない	31%	20%	22%	7%	30%	31%
		時間がない	46%	19%	47%	20%	49%	54%
		小計	78%	39%	69%	27%	79%	85%
	情報	団体知らない	26%	17%	21%	11%	12%	19%
		場所知らない	11%	7%	5%	6%	6%	6%
		小計	37%	24%	27%	17%	18%	25%
	人間関係	地域に友人少ない	9%	15%	11%	12%	4%	6%
		人間関係煩わしい	2%	16%	17%	15%	11%	8%
		小計	11%	32%	28%	27%	15%	14%
	趣向	興味のある内容なし	20%	37%	15%	27%	24%	26%
	施設整備	場所不便	2%	5%	5%	10%	2%	2%
		施設サービス不十分	2%	5%	0%	1%	1%	0%
		小計	4%	10%	5%	11%	2%	3%
	その他		11%	15%	11%	28%	8%	6%
	総計		161%	157%	154%	137%	146%	158%

7-4　組織活動への参加を促す施設側の要件

以上から、施設側が施せる参加促進要件をまとめる（図 7-6）。

『時間』の阻害は、個人の課題である側面が強いが、施設の開館時間延長といった措置をとることはできるだろう。

『情報』の阻害は当然、情報発信によるフォローが必要であるが、どのように、が肝要である。現状、組織活動の多くは公共施設を中心として行われ、故に情報発信も同様の施設を中心で行われるだろう。但し、組織活動の不参加者はそれらの公共施設の利用が多くない。不参加者が多く利用する施設にて情報発信を行うことで成果が期待される（本件については、次章にてもう少し掘り下げる）。

『人間関係』の阻害は、不参加者の意識以上に大きい阻害となることが推測される。前章にて考察したように、現状での組織活動への参加の多くは既存の人間関係による場合が多いためである。不参加者と既存の団体との、または不参加者同士のコミュニケーションを促進させるようなプログラムをくむ必要がある。後者については特に、講座等の充実により、既存の人間関係をもたない人（有職男性に多い）でも参加できる契機を創出することも課題である。

『趣向』の阻害は、LC・LS の各段階・タイプの趣向の相違を意識し、ある程度狙いを定めて企画を展開することが考えられる。

『施設整備』の阻害は、現状では回答が少なく、意識されていないが、実際に活動を始める際に、身近な活動の場の整備が強く意識されるだろう。公共施設だけでなく、不参加層が多く利用している、民間施設を含めた地域施設全般を活動の場として整備することが望まれる。

とはいえ、未だ個人の責任である第１ハードルの段階で滞っている人が非常に多い。より地域住民に密着した施策も考えるべきであろう。個人的な余暇活動と組織活動の連続的整備にもつながるため、次章にて改めて提案する。

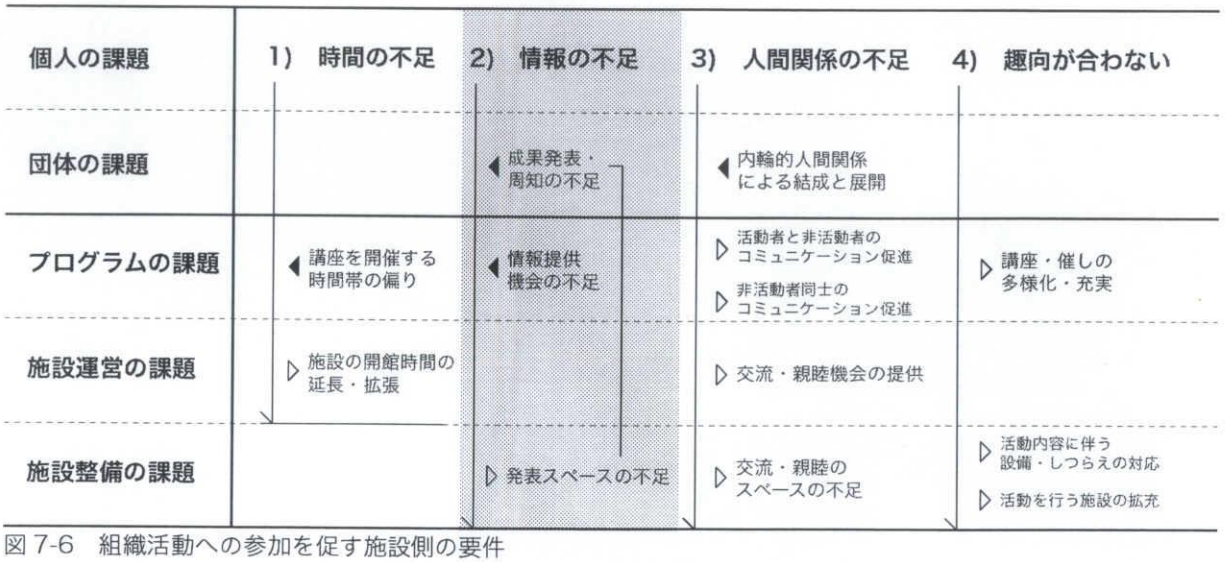


図 7-6　組織活動への参加を促す施設側の要件

第８章　余暇を過ごす場所としての地域施設

8-1　前章までのまとめ
8-2　余暇を過ごす場所としての
　　地域施設の必要性
8-3　地域施設の整備方針
8-4　余暇を過ごす場所としての
　　地域公共施設整備
8-5　今後の課題

8-1　前章までのまとめ

本章を始める前に各章の概要を以下に示す。

第１・２章では、研究の背景・目的として、近年みられる余暇時間の増大により、人々が自宅や学校・職場だけでなく、地域に存在する様々な地域施設でその時間を過ごしていることを示した。但し、余暇活動を行う人々はそれぞれが異なる属性をもち、地域施設の使い方、及びニーズも一様ではない。本研究は、生涯を通じての余暇活動の変化と、生活様式の相違による余暇活動の変化の視点から、幅広い層の存在する地域住民に向けた、地域公共施設の整備要件を得ることを目的に始まった。

また、余暇活動には、個人が自由に行う活動と、母体をもって組織化した活動（組織活動）があるため、その両面を対象とする。

第３・４章では、個人的な余暇活動として、それぞれLC、LSの視点から、余暇を過ごす場所の選択特性と地域施設の利用形態をみてきた。その結果、各段階･タイプに特有の課題･特徴を得ることができたが、そのなかでもとりわけ、『余暇を一緒に過ごす相手』と『施設に抱くイメージ（施設像）』に大きな特徴がみられた。

特に、LCでは生涯を通じて、余暇をひとりで過ごす人はどの段階にも共通してみられるが、一方では、学校の友達＞夫婦及び幼い子ども連れの家族（子育ての場として）＞趣味友達、といったように一緒に過ごす相手は推移することも明らかとなった。但し、男性のLC後期は女性に比べてグループでの利用が少なく（代わりにひとりが多い）、地域に友人をつくりやすい女性と、それが難しい男性といった特徴もみられた。

第５章では、前章までに得られた『余暇を一緒に過ごす相手』に着目し、[ひとり] [家族] [グループ] を切り口に、余暇を過ごす場所の選択特性と地域施設の利用形態をみてきた。特に、家族で過ごせる場所として、公共施設の利用は乏しく、家族単位で利用できる施設整備が不足している課題が明らかとなった。

また、LC・LSでも特徴のみられた施設像をさらに詳細に分析した結果、同伴形態別に施設に抱く要求を整理することができた。特に、特定の目的がなくても気軽に訪れることのできる場に対する要求が多い。とりわけ公共施設には、従来の機能的サービスによる、個人の目的達成の場としての整備だけでなく、目的外利用を許容する、新たなサービス展開が求められる。

第６章では、組織活動の実態について施設との関係を中心に考察した。団体の結成・展開には地域施設が、その促進にも阻害にも影響していることが明らかとなった。但し、現状では結成・展開ともに内輪的な既存の人間関係による場合が多く、如何に外部（非活動者）を巻き込んで組織活動を展開していくかが課題となる。

第７章では、個人的な余暇活動と組織活動の両立の程度と、それによる施設利用の相違をみてきた。組織活動への参加と公共施設の利用には強い関連があり、組織活動への参加が公共施設の利用促進につながる可能性があることを示した。また、不参加者の参加を阻害する要因を５つの段階に整理した。現状では［時間］［情報］が大きく（前者は個人の問題の面が非常に強いが）、施設側（供給側）から情報を与え、参加の機会を提供することが参加促進につながることを指摘した。

以上の内容を踏まえ、本章では、余暇を過ごす場所としての地域施設の必要性、課題を整理し、施設整備指針を提案する。それらを踏まえて、今後行うべき地域公共施設の整備指針を提案する。

8-2　余暇を過ごす場所としての地域施設の必要性

地域住民の充実感から類型化した、潜在的な余暇活動要求を捉えることで、人々は余暇時間に選択性（自己裁量性）のある行動、さらに自宅以外の場所で行うことが多い、目的意識の高い選択行動を行うことに充実を感じていることが分かった。つまり、余暇活動を行うことが余暇時間を充実させることにつながるといえる。

地域住民が余暇を過ごす場所の選択特性をみると、自宅以外で余暇活動を行う場所として、多くの人が地域施設を利用している。しかし、高い余暇活動要求をもちながら、その場所を確保できていない人々もいる。個人の課題として子育てのための利用から自分のための利用への意識転換が遅れること、施設整備上の課題として施設に抱く要求と整備状況が合致していないこと等が要因として挙げられるが、彼らが過ごす場の作り方の改善により施設利用を促進できる可能性がある。

一方、組織活動の活動実績をみても、活動場所として地域施設、とりわけ公共施設を利用している（１割程度は施設利用がないが)。また、団体の結成・展開においても地域施設が仲間形成の場、あるいは活動拠点として団体が継続する一助となっている。

従って、個人的余暇活動にとっても、組織活動にとっても、余暇を過ごす場所としての地域施設が、地域住民の充実した余暇生活を支えるために必要である。

8-3　地域施設の整備指針

次に、余暇活動を行いやすい施設整備指針を提案する。まず、個人的な余暇活動を行う施設と、組織活動を行う施設のそれぞれについてまとめ、それらを連続的に整備するための提案を行う。また、それらを踏まえて地域公共施設が行うべき整備指針を示唆する。

8-3-1　余暇活動を行う地域施設

個人的な余暇活動は生涯を通じて、また、生活様式に応じて異なる展開がある。本研究では“誰と一緒に過ごすか”に着目し、施設に対する要求をみてきた。それらの要求に応じた施設整備指針を示す。また、組織活動についても併せてみる。

1）ひとりで過ごす場所としての施設整備

ひとりで余暇を過ごす人は、殆ど全ての層でみられるが、特にLCでは男性の子育て期の前後（独身期、子ども成長期、子ども独立期）、LSでは有職層に多い。

その要求をみると、純粋に自宅以外の場所で、個人の目的に取り組むためのひとりで過ごす場所を欲している人と、地域に友人をつくってこれなかったため、余暇生活の拠り所として施設を利用する人がみられる。

よって、他者を気にせず自分の活動に集中して取り組めるスペースのほか、目的がなくても滞在できるスペースも備える必要がある。後者については、個人の自己実現要求を喚起させるための目的性の高い活動の展示、情報提供のスペースを備えることで、利用者に目的をもった活動への転換を促すことも考えられる。また、要求としては少ないが、飲食や雑談を許容するサロン的空間を備えることで、新たな人間関係を形成することも期待される。

2）家族で過ごす場所としての施設整備

家族で余暇を過ごす人は、LCでは特に子ども幼少期、LSでは育児に強い関心のある層に多い。幼い子どもを伴い、自宅以外の子育ての場として地域施設を利用していることが窺える。

その要求をみると、用事のついでや気分転換を意図しており、特定の目的に取り組むのではなく、家族で共に過ごせる「場」を求めている。家族で過ごす場所として、家族で取

り組め、子どもに魅力のあるイベント・催しといった施設側の提供も重要ではあろうが、一方で、親を子どもの付き添いだけにさせない工夫が必要となる。

よって、子どもを介して親同士の交流を促進させる交流の場を、また、子どもの付き添いだけでなく個人の要求の転換を促し、子育て後に取り組みたい活動を発見する場を備えることが個人の余暇生活の充実につながると考えられる。

3）グループで過ごす場所としての施設整備

グループで余暇を過ごす人は、LCでは特に高齢期（女性の方が男性より多い）、LSでは組織活動に積極的に参加している層に多い。組織活動に取り組むことで、余暇を過ごす相手の選択肢が広がり、気の合う友人と一緒に過ごしていることが窺える。

その要求をみると、目的に取り組む場所の要求が高く、活動の受け皿を求めている。しかしそれだけでなく、目的外利用できるスペースも求めるし、更なる人間関係の形成にも強い関心がある。

よって、活動の合間に休憩する飲食可能なスペースや、グループ内、あるいは他グループとの交流・親睦を促進するためのスペースを備える必要がある。

以上、個人的な余暇活動を行う地域施設指針を“誰と一緒に過ごすか”に着目してみてきたが、それぞれが単独で個別に求めるスペースと他の利用者と共有できるスペースがある。新たな人間関係を形成するサロン的空間を共有しながら、同伴形態に対応した個別に利用できるスペースをもった施設機能の再構築が必要となる。

4）組織活動を行うための施設整備

グループでの余暇活動に関連して、組織活動を行うための施設整備をみる。

団体の結成については、大きく分けて、施設が開催する講座と既存の人間関係といった2つの契機がみられた。前者による促進には、講座内容の充実、及びそれを開催する施設の充実が必要となる。後者による促進には、既存の人のつながりを補強し、組織化する支援が必要となる。また、新たな人間関係の形成を促進するための、出会いの場としての整備が求められる。

加えて、現状では拠点となる施設を有し活動する団体が多数存在するが、それが新たな参入者の獲得につながっていない。成果発表の場が少ないといった不満もあり、かつ、それぞれの団体が個別に活動を展開しているため、自身の団体の情報を外部に周知する手段が不足しているのだ。団体が定期的・常設的に成果発表を行う場を整備し、情報提供支援する仕組みが必要となる。このことは非活動者により多くの情報を提供することが、組織活動への参加を促す契機となり得るだろう。

8-3-2　組織活動を促進するための施設整備

第７章にて、個人的余暇活動と組織活動の両立の程度をみたが、地域施設（特に公共施設）の利用促進の観点から、また、特に高齢期の生活を充実するために、組織活動への参加を促すことは重要と考える。個人的な余暇活動から組織活動への転換を促し、両者を両立した余暇生活を支援するため、組織活動を促進する施設整備を行う必要がある。

現状では、組織活動は内輪的な人間関係による結成・参入が多く、既存の人間関係をもたない人にとって、講座以外による参加が困難であるという課題がある。非活動者を巻き込むため、団体が定期的・常設的に成果発表を行う場所を整備し、非活動者により多くの情報を提供することが、組織活動への参加を促す契機となり得るだろう。

加えて、組織活動を行う場としては公的集会施設を始めとした公共施設、個人的な余暇活動を行う場としては民間施設が多く利用される傾向にある。団体提供する情報を、受手である非活動者が享受できないのでは、参加要求も起こりえない。よって、情報提供をする際には、地域住民が利用している施設にて行わなくてはならない。その際、それぞれが余暇を過ごす場所の選択特性をみて、どの層を新たな参加者として狙っていくか、といった戦略も立てられるだろう。

一方で、個人的な余暇活動を行える場として公共施設を整備することも考えなくてはならない。次節にて課題的展望を示す。

以上みてきたように、余暇を過ごす場所としての地域施設の整備においては、いずれの過ごし方についても、既存の施設機能の再構築が必要である。地域施設を計画する際、如何にして利用者である地域住民の声を反映するかといった課題は常に存在するだろう。利用者である地域住民の声・ニーズを地域住民の視点からチェックする仕組みづくりも、地域施設整備の重要な課題である。

8-4　余暇を過ごす場所としての地域公共施設整備

以上を踏まえて、余暇を過ごす場所としての地域公共施設の整備指針についての展望を示す。地域住民は個人的な余暇活動を行う場所として、身近な地域で目的外利用もできる施設を求めていることが明らかとなった。但し、とりわけ地域公共施設は、制度に基づき、特定の目的利用を行うための場所として計画整備されてきた背景から、そのような利用に対する配慮はされていない場合が多い。そのため、地域住民の多くは、無料で滞在できる商業施設（大型 SC など）にその場所を求める傾向にある。

しかし、三重県のような地方都市においては、民間施設が全ての需要をカバーすることは困難である。実際、自動車の利用を控える高齢者は商業施設の利用が減り、近場の公共施設の利用する実態もみられる。また、家族で過ごせる公的な場が地域に殆ど整備されていない現状を考えると、地域密着型の公共施設が余暇を過ごす場所としての役割を担っていく必要があると考える。今後、組織活動の活動場所、ひいては成果発表の場との連続的整備を視野に入れた、より柔軟なプログラム・運営が地域公共施設には求められる。

これまでの分析を踏まえ、やや飛躍的ではあるが、地域公共施設が余暇を過ごす場所となるための施設整備・運営の課題的展望を示し、本研究の結論としたい。

1）施設機能の再構築

第５章で述べたように、既存の施設種の枠組みを超えた機能の再構築による、目的外利用を許容するスペースを備える必要がある。前述したように、地域住民は施設を必ずしも目的意識をもって利用しているだけではなく、個人の目的に取り組む傍らに気分転換や他者との交流・親睦など目的外利用をも期待している。さらには、目的外利用だけを意図している人も少なくない。そのような要求への対応を考える必要がある。

このような要求に、これまで地域公共施設は応えてこなかったといえるが、地域住民の余暇充実のため、これらを考慮した施設づくりが求められる。特定の個人的目的の有無にかかわらず、施設で過ごす傍らに休憩や啓発、あるいは出会いの場として滞在できる、目的外利用を許容するスペースを地域公共施設は備える必要があると考える。

例えば、平日の図書館には退職後と思しき高齢者が単身、ブラウジングコーナーで新聞や雑誌を読んでいる姿をかなりの頻度で見かけるが、その多くは、地域のなかで友人をつくってこれなかった人と推測され、ひとりで過ごすことを余儀なくされていると懸念される。それでも飲食・私語が禁止されている図書館の性格上、知り合いをつくることには課題がある。室内に組み入れるのは困難であろうが、室外に付随する形で他者との交流・親睦のきっかけとなるサロン的スペースを与えることは必要だろう。これは、家族で過ごす人が、新たな人間関係を形成する際にも活用されるだろう。その際生まれる交流から、目的をもった活動への参加・意識転換が図られることも期待できる。

また、組織活動に取り組む人のなかには、趣味活動の合間に（親睦も意図して）飲食できるスペースを求める声もあり、実際、公民

館等のなかにはこれらのスペースが設けられている施設もみられる。しかし実際には、これらのスペースをそういった活動をしていない人が利用することは現状では殆ど見られない。

とりわけ地域密着型の施設は、非活動者の組織活動参加を促すため、小規模でも、活動成果を常設的・定期的に発信できるギャラリー・ホール空間を備えた複合施設として整備することが有効と考える。一方、大規模な発表行為や合同発表会の利用要求に対応するよう、大規模な専門施設はサービス水準を維持することが望まれる。これらの役割分担を考慮し、地域全体で施設整備する必要がある。

2）施設間連携の促進

第6章で述べたように、現在は個別の施設がバラバラに整備され、施設運営を行っている。活動場所の代わりの施設を紹介する予約システムの体系化・団体の活動情報を受け取る情報システムを備え、施設間連携を促進する必要がある。

施設間連携の促進により、既成のグループ間（グループ内と複数のグループ同士）の交流はもとより、既存の人間関係をもたない人たちへの団体の情報発信を手助けできる余地がある。

さらに、上記の施設機能の再構築に関連して、活動場所予約や行政関連の証明書交付といった、従来特定の施設で行われていた施設サービスを既存の地域密着型施設が担保することも考えられよう。これらは小規模ブースを備えることで対応可能であるし、距離的な制約を受ける人々の不具合を緩和する可能性も秘めている。

3）利用機会の提供

地域住民が目的外利用できる場を求めていることが分析の結果明らかとなったが、単に場だけを整備すれば十分というほど単純ではなさそうである。つまり、個人の意識の上では、気軽に立ち寄れる場所を要求しているにもかかわらず、場所を知らない、あるいは知っていても、なんとなく気後れして利用できない人がいることが想像に難くない。情報周知、施設が開催するイベントや催し等により、施設の敷居の低さを演出し、利用機会を提供することが、地域住民の余暇生活の受け皿となる地域公共施設の課題となってくる。
目的外利用できるスペースの整備も含めて、こういった課題に対応するための地域公共施設の拡大運営を考える必要がある。

現状みられる場の周知の手段として、地域密着型の公共施設の施設内、あるいは敷地内に地域住民の健康相談・生活相談のため、「まちの保健室」「いきいきサロン」といったサービス・事業がみられる。徐々にではあるが、このような試みをきっかけに場の存在が周知されているといった例もある。

また、地域住民に場のあることを認識してもらうため、学生には学校教育のなかで、地域住民には自治体活動等の（半強制的であっても）地域との関わりのなかで、施設を利用した活動を組み入れることも検討したい。

とりわけ、地域密着型施設の中には、近年導入が進む指定管理者制度等を用いて、民間企業ではなく、当該地域に住む住民の集まり（地縁的な共同体：community）に運営・管理を委託する例がみられる。その利点の一つに、行政・施設職員が行う以上に様々な催し・企画が生まれ、地域住民を施設に呼び込み、場の存在を周知する機会を提供できる期待がある。公民館展やサークル発表会、個人の趣

□指定管理者制度とは

指定管理者制度は、2003年、多様化する住民ニーズにより効果的、効率的に対応するため、公の施設の管理に民間の能力を活用しつつ、住民サービスの向上を図るとともに経費の節約等を図ることを目的に導入された（総務省）。

地方自治法第244条「公の施設」に関連する制度であり、2003年6月6日に改訂され、9月から施行された。それ以前も、公の施設については、自治体が直営で管理しない限りは、地方自治法第244条の2の第3項、および地方自治法第173条の3により限定された団体に管理委託することができた。

今回の改訂により、その団体についての制限がなくなったことで、民間の営利を追求する団体や組織を指定管理者に選定することも可能となった。「公の施設」とは、地方自治法第244条の「普通地方公共団体は、住民の福祉を増進する目的をもって、その利用に供するための施設（これを公の施設という。）を設けるものとする。」の規定に基づいて設置される施設である。具体的には、公立学校、幼稚園、保育所、コミュニティセンター、公民館、図書館、博物館、市民会館、文化施設、プール、体育館、公園、広場、病院、等々があり、各自治体によって対象は異なっている。

味活動の成果発表を利用機会提供の媒介とするよう、企画段階から施設利用者を巻き込むことも考えられる。施設の敷居の低さを演出する期待も込めて、利用者に施設運営・企画の一部を委譲する方策を模索する必要がある。

以上のように、地域公共施設は従来の機能的サービス提供だけでなく、目的外利用を許容するスペースを整備することを含めた機能再構築を考える必要がある。また、施設間連携の促進、施設利用者・地域住民を巻き込んだ利用機会の提供を含め、柔軟な運営が課題となる。

さらに、地域公共施設と民間施設の連携により、その効果は相当に高まると考えられ、地域全体での整備が望まれる。

これらを通じて、人々が更なる余暇生活の充実を得ることを期待する。

8-5　今後の課題

[施設整備実態の把握]

本研究では、個人的余暇活動と組織活動の連続的整備を訴え、それを達成する為の目的外利用できるスペースの充実と施設機能の再構築を提案した。しかし、施設実態調査を行っていないので、現状の施設群を利用した改善方法の提案ができていない。

地域住民アンケートや団体の活動実績調査から、地域住民が余暇を過ごす場所が相当に広がっていることは把握できたが、既存の施設が許容できる人数、活動のキャパシティがどの程度であるかは明らかにできなかった。組織活動の主な場所ともなっている公的集会施設のなかでも、地区集会所レベルの小規模施設の実態、及び民間で行われる活動等の把握は困難であるが、それらの使用されている実態を捉えることで、既存施設を活用した施設整備指針を得ることができるだろう。

[施設の空間構成との関係]

個人的余暇活動の場と組織活動の場を連続的に整備するには、個別の施設においてそれらの場所の規模・配列を含めた空間構成から、その有効性の検証を行わなくてはならないが、それが明らかになっていない。そのため、本研究の提案は余暇を過ごす場所としての施設計画の指針・提言に留まっている。これらがスムーズに行われている施設にて、個人的活動（特に、同伴形態によって個人が過ごす場所にも相違がみられるだろう）、及び組織活動の実態調査を行い、空間構成との関係をみることが課題として残る。

[施設運営制度の検証]

本研究では課題的展望として、地域密着型公共施設の住民運営について提案を行った。但し、今回例示した指定管理者制度については施行されて間もなく、その効果や課題についてはまだまだ明らかとなっていない部分が多い。それが検証されるのはまだまだ先のことかもしれないが、特に地域密着型の公共施設の運営については、地域ガバナンスとも称される市民による「公の担い手」の台頭が期待される。本制度が浸透した暁には、本提案の検証も含めて、公共施設の柔軟な運営の在り方が示唆できるだろう。

以上の課題を残してしまったが、目的外利用できる地域施設の必要性と、個人的余暇活動と組織活動の連続的整備の可能性を示すことができ、地域全体で誰もが充実して余暇を過ごせる整備計画につながることを期待する。

付録

おわりに
謝辞
参考文献
アンケート原票

おわりに

本研究は、今井研究室・高井研究室・三重県建設技術センターが合同で行った『市町村合併に伴う公共施設の有効利用に関する研究』の一環として、地域住民の生活構造と施設利用の関係をみるべく取り組み始めました。そのなかで、「余暇を過ごす場所」を修士論文のテーマとして取り上げたのは、図書館のブラウジングコーナーでひとりで新聞・雑誌を読む高齢者の姿に、理由の分からない違和感を覚えたことだったような気がします。そのような違和感を抱き、充実した生活とはどのようなものかを考えながら研究に取り組んできました。

研究を進める中で、施設利用者・団体活動の参加者の方々と様々にお話しする機会をもつことができ、施設を積極的に利用している人の姿をみることができました。そこでは、建築が余暇を充実して過ごすための一助となっていました。一方、研究のなかで、余暇生活の拠り所を確保できない人が相当数いることが明らかとなり、このような人々の過ごす場所の整備が地域社会において急務といえます。

本研究では地域公共施設の整備指針として３つの展望を提案しました。自分の力不足から、ハードとしての建築の空間像に落とし込めなかったことが心残りですが、余暇生活の充実のため、また、既存の施設ストックの活用のため、一層のソフト面の整備充実の必要性を訴えることはできたと考えます。

以上のように、社会学的アプローチによる現象論の色の強い研究ですが、地域社会の実態を捉え、さらなる余暇生活の充実につながることを期待しています。

謝辞

研究を進めるにあたり、退任後も変わらず、終止ご指導いただいた今井正次名誉教授に心より深く感謝致します。先生とのお話は研究の議論から雑談まで、建築という人の生活を支えるものに対する姿勢、確認された現象をどう捉えるかといった考え方を醸成する機会であったように感じます。本当にありがとうございました。

高井宏之准教授には、ゼミでのご指導を含め、様々お世話になりました。コントロールしにくい学生であったと思いますが、高井研究室に参加できたことで自分自身の視野が広がったと思います。ここに深くお礼申し上げます。

副査を務めていただいた浦山益郎、加藤彰一両教授には、研究室の違う筆者に対しても異なる視点からのご指摘・アドバイスをいただきました。ここに深くお礼申し上げます。

木下誠一助教には、ゼミ以外においても度重なる相談に乗っていただきました。ここに深くお礼申し上げます。現在進めている研究の完成を心待ちにしていますので、完成したら教えてください！

博士後期課程を修了される西本雅人氏には、筆者がB4の頃から大変お世話になりました。ありがとうございました。将来教授になられた暁には、講義を見に行くかも…！

共に論文を書き上げた高井研究室の伊藤良君、神崎直人君、小松正人君、若林康夫君、白金さんとは公私ともにお付き合いいただきました。ありがとうございました。

特に、小松正人君と若林康夫君は6年間同じマンションに住み、長く付き合っていただきました。執筆真っ最中のサニヨム焼肉は忘れません！

ともに三重大学大学院に進学した飯島誠之君、安形昌文君、福田力大君をはじめとする同期の皆様には、心よりお礼申し上げます。大学の日々を楽しく過ごせたのは皆様のお陰です。三重県で過ごした6年間は今後も大きな財産になると思います。

ここに挙げた以外にも、松田慎也氏・池谷辰仁氏をはじめとした、三重大学を卒業された諸先輩方にはお世話になりました。ここに深くお礼申し上げます。

また、大学院は離れてしまいましたが、豊橋技術科学大学に進学した小松潤矢君、柴田洋希君には公私ともにお付き合いいただきました。社会に出てもお互い頑張りましょう！

快く調査にご協力いただいた地域住民の皆様、団体活動参加者の皆様には、心よりお礼申し上げます。貴重な研究データを提供していただき、また、多くの励ましの言葉を頂きました。ありがとうございました。

最後に、静岡から6年間見守ってくれた両親には心より深く感謝致します。経済的援助に加え、家族の励ましがあったからこそ、ここまでやってこれたと思います。

社会に出てからは、皆様に頂いたご恩を社会に還元していけるように真摯に努めていきたいと思います。

2007年3月

参考文献一覧

[一般書籍]

1. 一番ヶ瀬康子、薗田碩哉、牧野暢男：『余暇生活論』、有斐閣、1994 年
2. 渡邊益男：『生活の構造的把握の理論 新しい生活構造論の構築をめざして』、川島書店、1996 年
3. 河野重男、伊藤俊夫　編：『社会教育講座 第四巻 社会教育の施設』、第一法規出版株式会社、1979 年
4. 樺俊雄　編：『社会学読本（第 2 版）』、東洋経済新報社、1980 年
5. 見田宗介：『社会学入門－人間と社会の未来』、岩波新書、2006 年
6. 三浦典子、森岡志、佐々木衛：『リーディング 日本の社会学 5 生活構造』、東京大学出版会、1986 年
7. 鈴木隆男、平山諭　編：『発達心理学の基礎 I ライフサイクル』、ミネルヴァ書房、1993 年

[調査報告書]

1. 三重大学工学部建築学科今井研究室、津市市民生活部市民交流課：『津市コミュニティ施設整備計画調査研究報告書』、1998 年 3 月
2. 三重大学工学部建築学科今井研究室、津地区広域行政事務組合：『津地区広域圏における公共施設等の利活用に関する研究報告書』、2000 年 3 月
3. 三重大学工学部建築学科今井研究室、芸濃町：『「芸濃町まちづくり調査研究」報告書』、2002 年 3 月
4. 三重大学大学院工学研究科今井研究室・高井研究室、（財）三重県建設技術センター：『市町村合併に伴う公共施設の有効利用に関する研究』、2006 年 9 月

[参考論文 1：三重大学の修士論文]

1. 高木直子：『利用者意識からみた図書館機能の再構築に関する研究』、1998 年度修士論文
2. 山田剛：『高齢者の生活構造の地域差からみた地域施設整備に関する研究』、1999 年度修士論文
3. 三輪恭子：『生活における居場所としての地域施設一疎住地において住民の利用を促す施設計画に関する研究』、2001 年度修士論文
4. 池谷辰仁：『中高生の居場所としての地域施設に関する研究』、2005 年度修士論文

[参考論文２：日本建築学会計画系論文集]

1. 渡辺光雄：『地域計画における公共施設の設置計画に関する研究「S.B. 現象」についてその１、その２』、論文報告集 no.326 P.126 1983 年４月、 同 no.334 P.148 1983 年 12 月
2. 桜井康宏：『余暇生活のグループ化傾向からみた集会関連施設需要の構造－集会関連施設の設置計画に関する研究その１－』、論文報告集 no.334 P.128 1983 年 12 月
3. 桜井康宏：『生活時間と階層的視点からみた余暇性向とグループ活動参加の動向－集会関連施設の設置計画に関する研究その２－』、計画系論文報告集 no.349 P.32 1985 年３月
4. 桜井康宏：『階層構成の類似性からみたグループ活動の類型化とその動向－集会関連施設の設置計画に関する研究その３－』、計画系論文報告集 no.356 P.41 1985 年 10 月
5. 桜井 康宏：『集会関連施設の段階構成と室構成－集会関連施設の施設供給論に関する基礎的研究・その１-』、計画系論文報告集 no.398 P.75 1989 年４月
6. 桜井 康宏：『集会関連施設の面積構成－集会関連施設の施設供給論に関する基礎的研究・その２-』、計画系論文報告集 no.404 P.59 1989 年 10 月
7. 桜井 康宏：『集会関連施設の空間構成－集会関連施設の施設供給論に関する基礎的研究・その３-』、計画系論文報告集 no.411 P.57 1990 年５月
8. 川岸梅和，北野幸樹：『時間的・空間的側面からみた余暇活動の動向と特性について　近隣余暇関連施設に関する研究その１』、計画系論文集　no.487 P.167 1996 年９月
9. 川岸梅和，北野幸樹：『近隣空間における余暇活動の動向と特性について　近隣余暇関連施設に関する研究その１』、計画系論文集 no.498 P.153 1997 年８月
10. 藍澤　宏，鈴木麻衣子，斎尾直子：『住民の地域社会活動の形成とその展開方法に関する研究』、計画系論文集 no.533 P.89 2000 年７月
11. 藍澤　宏，鈴木直子，林　宏規：『市町村における地域生涯学習活動支援の整備水準とその誘導要件に関する研究』、計画系論文集 no.498 P.139 1997 年８月
12. 斎尾直子，藍澤　宏，西口有紀：『市町村の生涯学習推進におけるネットワーク形成とその効果に関する研究』、計画系論文集 no.520 P.173 1999 年６月
13. 斎尾直子，藍澤　宏，川崎佳代子，東條敦子、『居住地域における住民の生涯学習活動状況と地域施設の活動機会提供に関する研究』、計画系論文集 no.530 P.127 2000 年４月

[参考論文３：口頭発表]

1. 矢部亮、今井正次、木下誠一、西本雅人、松田慎也、吉岡大輔：『世代差からみる時間消費の場としての地域施設の利用：広域社会における地域施設の有効利用に関する基礎的研究 その2』、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1分冊、pp.383-384、2006年9月
2. 矢部亮、今井正次、木下誠一、西本雅人『施設利用の推移にライフサイクルが与える影響に関する研究－図書館とコミュニティ施設の比較を通じて－』、日本建築学会東海支部研究報告集、第45号、pp.589-592、2007年2月
3. 矢部亮、今井正次、木下誠一、西本雅人：『ライフサイクルとライフスタイルにみる生涯学習施設の利用者特性 生活構造からみる地域施設の有効利用に関する基礎的研究』、日本建築学会大会学術講演梗概集、E-1分冊、pp.373-374、2007年8月
4. 矢部亮、今井正次、木下誠一、西本雅人、高井宏之：『生涯学習団体の活動場所選択と参加契機の要因－集団的な組織活動を促す為の施設整備に関する研究－』、日本建築学会東海支部研究報告集、第46号、pp.549-552、2008年2月
5. 矢部亮、今井正次、木下誠一、西本雅人：『余暇を過ごす場所としての地域公共施設の整備要件－生涯を通じての同伴形態の変化に着目して－』、第26回地域施設計画シンポジウム、2008年7月（投稿中）

アンケート調査票

【調査１:地域住民アンケート】

・世帯票

・個人票

【調査２：組織活動実績調査】

・団体用

・個人用

地域施設の利用に関するアンケート

調査協力のお願い

●調査の目的

私たちは、モータリゼーションの拡大、生活スタイルの多様化、及び近年の市町村合併に対応し、公共施設整備のあり方についての研究に取り組んでおります。

今回はその研究の一貫として、三重県の地域性をふまえた提案を行うことを目的とし、地域の方々の公共施設・民間施設の利用実態・要望や、施設利用に関わる生活スタイル・意識を調査させて頂くことを企画致しました。大変面倒なお願いではありますが、是非ともご協力をお願い致します。

●調査対象地域・対象世帯抽出方法

調査地域は、次の３つで計約5000世帯を対象としています。

・三重県最大の都市であり名古屋と近い四日市地区（四日市市・朝日町・川越町）

・県庁所在地で大合併を控えた新・津市地区

・大都市圏と離れ独自の地域づくりのため合併をした志摩市・大紀町

調査対象者は無作為に選定しました。選定の方法は、地図上に等間隔で東西南北に線を引き、その交点の地区から無作為に調査対象地区を選び、各地区で交点近辺の10世帯を抽出させて頂きました。

●調査結果の扱いについて

調査の内容は、「個人情報保護法」等の趣旨を尊重し、個人を特定するものではありません。また、ご協力頂いた調査結果は、地域の諸事情と合わせて、分析を進めていきますが、統計的に処理を行い、調査にご協力頂いた方々や地域には決してご迷惑をかけません。また、調査結果は決して他の目的には利用しません。

以上の趣旨をご理解いただき、なにとぞご協力をお願い致します。

平成17年盛夏

三重大学工学部建築学科　今井・高井研究室
財団法人　三重県建設技術センター

代　表　三重大学工学部建築学科　教授　今井正次
連絡先　一助教授　高井宏之　059-231-9439
　　一助　手　木下誠一　059-231-9451

記入上の注意

・世帯調査シートと個人調査シートがあります。

・個人調査シートは平成17年4月1日現在で**15歳以上**の方を対象としています。

・ご記入頂いたら、世帯分（世帯票と世帯人数分の個人票）を一緒に返信用封筒でご返送ください。**8月15日までに**ご投函ください。郵便切手を貼る必要はありません。

■世帯調査シート■

津広域	地区

○あなたの世帯についてお尋ねします。ご家族の代表者の方がお書き下さい。

問１．一緒に住んでいる家族の構成と、続柄・性別・年齢・職業・通勤（通学）地をお書き下さい。
（**職業**は下の枠内から**該当する番号を一つ**選び、**通勤（通学）地は旧市町村名**でお答え下さい）

続柄	性別	年齢	職業	通勤（通学）地
記入例	(男)・女	満［ 45 ］歳	1	［ 津 ］(市)・町・村
世帯主	男・女	満［ ］歳		［ ］市・町・村
	男・女	満［ ］歳		［ ］市・町・村
	男・女	満［ ］歳		［ ］市・町・村
	男・女	満［ ］歳		［ ］市・町・村
	男・女	満［ ］歳		［ ］市・町・村
	男・女	満［ ］歳		［ ］市・町・村
	男・女	満［ ］歳		［ ］市・町・村
	男・女	満［ ］歳		［ ］市・町・村

1．勤労者（会社員・公務員など）
2．自営業・自由業
3．農林業・水産業
4．パート・アルバイト
5．学生・生徒
6．専業主婦
7．無職
8．その他（　　）

問２．現在お住まいのお宅の所有関係は以下のどれに該当しますか。（**1つ**に○）

1．持家
2．借家（公営住宅を含む）
3．社宅・官舎
4．間借り・下宿・寮
5．その他（　　）

問３．現在お住まいのお宅の形式は以下のどれに該当しますか。（**1つ**に○）

1．一戸建住宅
2．二戸以上の連続住宅（長屋・テラスハウスなど）
3．二階建共同住宅（文化住宅・アパートなど）
4．三～五階建共同住宅
5．六階建以上の共同住宅
6．その他（　　）

問４．あなたの家では車を何台所有していますか。（**1つ**に○）
また、所有している方は何台所有しているかをお書き下さい。

1．所有している　　2．所有していない

［　　］台

津広域	地区

地域施設の利用に関するアンケート

－個人調査シート－

三重大学工学部建築学科　今井・高井研究室
財団法人　三重県建設技術センター

代　表　三重大学工学部建築学科　教授　今井正次
連絡先　一助教授　高井宏之　059-231-9439
　　一助　手　木下誠一　059-231-9451

○あなたが普段利用する施設についてお尋ねします。

問１．下の各公共施設に関して、あなたの満足度をお答え下さい。（それぞれ**１つ**に○）
また、**やや不満・不満に○をした方**は、その理由を下の枠内から選んで**番号をお書き下さい。**

	満足	やや満足	やや不満	不満	わからない	理由（いくつでも）
記入例			○			６，１３（建物が古くて使いにくい）
幼稚園・保育園（児童の利用）						
小・中学校（児童の利用）						
小・中学校（周辺住民の利用）						
公民館・集会所・市民センター						
図書館						
老人福祉施設						
市町村役場・支所						
郵便局						

１．自宅から遠い
２．学校や職場から遠い
３．交通の便が悪い
４．駐車場が少ない
５．施設の数が少ない
６．規模が小さい
７．施設内容や設備が不十分
８．サービスの内容に不満
９．職員の対応が悪い
１０．利用手続きが複雑
１１．開館時間が短い
１２．利用料金が高い
１３．その他（　　）

「不満」「やや不満」を選んだ理由

問２．下の各公共交通機関に関して、あなたの満足度をお答え下さい。（それぞれ**１つ**に○）
また、**やや不満・不満に○をした方**は、その理由を下の枠内から選んで**番号をお書き下さい。**

	満足	やや満足	やや不満	不満	わからない	理由（いくつでも）
鉄　道						
民間企業が運営するバス						
市町村等が運営するバス						

１．本数が少ない
２．駅やバス停が遠い
３．運行ルートが良くない
４．乗り継ぎが良くない
５．運行終了時間が早い
６．利用料金が高い
７．その他（　　）

「不満」「やや不満」を選んだ理由

○あなたが行っている地域活動についてお尋ねします。

問３．あなたは現在地域の活動に参加していますか。またその活動はどの様な活動ですか。
（**当てはまるもの全て**に○）

１．室内の趣味活動（音楽、囲碁、生け花など）	５．育児や教育に関する活動
２．教養学習活動（英会話、郷土史など）	６．その他（　　）
３．ボランティアに関する活動	７．特に参加していない　**→問６へ**
４．スポーツや健康活動（健康法、ジョギングなど）	

問４．問３で**１～６を選んだ方**だけにお聞きします。
あなたが活動に参加したきっかけは以下のどれですか。（**当てはまるもの全て**に○）

１．学校など（ＰＴＡ等も含む）の講座・活動	４．職場の団体や学校のクラブ活動
２．学校以外の公共施設の講座・活動	５．自主的なグループ活動
３．民間施設で開講されている講座・活動	６．その他（　　）

問５．問３で**１～６を選んだ方**だけにお聞きします。
あなたが参加している活動の主な活動場所はどこですか（**当てはまるもの全て**に○）

１．小・中学校	５．図書館	９．商業施設
２．公民館・集会所・市民センター	６．スポーツ施設（体育館など）	１０．個人の住宅
３．民間施設等の貸し室・会議室	７．宗教施設（寺社・教会など）	１１．その他
４．地方文化施設（ホール等）	８．福祉施設	（　　）

問６．問３で**［７．特に参加していない］を選んだ方**だけにお聞きします。
地域活動に参加されない理由は何ですか。（**２つ以内**に○）

１．活動団体やグループを知らない	６．活動する時間がない
２．活動する場所を知らない	７．興味のあるものがない
３．活動する場所が不便	８．地域に友人が少ない
４．設備等の施設サービスが不十分	９．人間関係がわずらわしい
５．時間が合わない	１０．その他（　　）

問７．あなたは小学校を地域活動の主要な場として期待していますか。（**１つ**に○）
また、その様に思った理由も答えて下さい。（**当てはまるもの全て**に○）

１．地域活動の場所として期待している　　２．地域活動の場所として期待していない

期待している理由

１．自宅や職場から近い
２．設備や施設水準が高い
３．最も身近な地域施設だから
４．小学生の教育に関わりたい
５．他に利用できる施設がない
６．その他（　　）

期待していない理由

１．自宅や職場から遠い
２．設備や施設水準が不十分
３．敷居が高くて使いづらい
４．子供の教育の邪魔になる
５．他にもっと良い施設がある
６．その他（　　）

○あなたが、日頃どの様な施設を利用しているかについてお尋ねします。

問８．あなたの公共施設利用について伺います。以下の表に挙げた各種公共施設を**３ヶ月以内**に利用したことがありますか。**３ヶ月以内に利用した施設については**、その利用施設・利用頻度・交通手段・所要時間・選択理由について当てはまる項目を選び、○をつけて下さい。
（それぞれ**１つ**に○）

（同じ施設種で複数の場所を利用した場合は、それぞれの施設種で最近のものについてお答え下さい。）

施設種 ＼ 質問		利用の有無		利用施設			頻度				
		三ヶ月以内に利用した	三ヶ月以内に利用していない	自市町村内（旧市町村）	他市町村（旧市町村名）	具体的な施設名	週に一回以上行く	月に二、三回程度行く	月に一回程度行く	二、三ヶ月に一回程度行く	ほとんど行かない
記入例	図書館	○		○	（　　）				○		
	博物館		○		（　　）						
	美術館	○			（　　）		○				
	⋮										
社会教育・文化施設	図書館				（　　）						
	博物館				（　　）						
	美術館				（　　）						
	公民館・集会所・市民センター				（　　）						
	地方文化施設（ホール等）				（　　）						
スポーツ施設	体育館・武道場				（　　）						
	テニスコート				（　　）						
	プール				（　　）						
	野外活動施設				（　　）						
福祉施設	福祉センター				（　　）						
	保健センター				（　　）						
	子育て支援センター				（　　）						
	デイサービスセンター				（　　）						
行政施設	市町村役場・支所				（　　）						
	郵便局				（　　）						

問９．以下の表に挙げた全ての施設について、あなたは

１「家から遠く施設数が少なくても、一つの施設の規模は大きい」

２「規模は小さいが施設数が多くて、家からも近い」

のどちらの方が利用しやすくなると思いますか。（1つに○）

交通手段						所要時間					選択理由								設置に対する要望	
徒歩	自転車	バイク	バス・鉄道	タクシー	自家用車	15分未満	15～30分	30～45分	45～60分	60分以上	家に近い	通勤・通学の途中	交通の便がよい	駐車場が大きい	設備や内容が充実している	他によい施設がない	興味ある催し物があった	その他	家から遠く数も少ないが一つの施設の規模は大きい	規模は小さいが数が多くて家からも近い
	○						○						○							○
																			○	
					○				○									○		○

問10. あなたの商業施設・医療施設の利用について伺います。以下に挙げた各項目について**半年以内**に行ったことがありますか。**半年以内に行った項目については**、その利用施設・利用頻度・交通手段・所要時間・選択理由について当てはまる項目を選び、○をつけて下さい。
（それぞれ**1つ**に○）

（同じ項目で複数の場所を利用した場合は、それぞれの項目で最近のものについてお答え下さい。）

質問 ＼ 項目	購入・診療の有無		利用施設			頻度				
	半年以内に行った	半年以内に行っていない	自市町村内（旧市町村）	他市町村（旧市町村名）	具体的な医療施設名 商業施設名（又は商店街名）	月に一回以上行く	月に一回程度行く	二、三ヶ月に一回程度行く	半年に一回程度行く	ほとんど行かない
下着・肌着の購入				（　　）						
靴・鞄の購入				（　　）						
家庭電化製品の購入				（　　）						
贈答品の購入				（　　）						
診療（通院）				（　　）						
診療（入院）				（　　）						

交通手段						所要時間					選択理由												
自家用車	タクシー	バス・鉄道	バイク	自転車	徒歩	15分未満	15～30分	30～45分	45～60分	60分以上	家に近い	通勤・通学の途中にある	交通の便がよい	駐車場が大きい	施設設備がよい	品揃えが豊富である	品質がよい	価格が安い	評判がよい	他に良い所がない	診療科目がそろっている	医師を信頼できる	その他

○あなたの生活についてお尋ねします。

問11. あなたが現在の生活の中で充実感を感じるのはどんな時ですか。（**2つ**に○）

1．仕事や勉強をしている時	6．趣味に時間を費やしている時
2．育児や家事をしている時	7．習い事をしている時
3．家族と団らんや旅行をしている時	8．グループ・団体活動に参加している時
4．友人と雑談や旅行をしている時	9．自主的な学習をしている時
5．一人で休養している時	10．その他（　　）

問12. あなたは生活の中で自由な時間をどのような場所で過ごしていますか。その場所を下の枠内から選んで数字を記入し、**4カ所挙げて下さい。**

※4～13を選んだ場合は横に具体的な施設名をお書き下さい。

※同じ施設種で複数の場所がある場合は、記入例にならい各欄に全てお書き下さい。

	施設種（記号で記入）	施設名（具体的な名称を記入）
例	4	三重県立図書館、津市図書館
①		
②		
③		
④		

1．自宅	9．教育施設
2．職場・学校	10．商業施設
3．知人・友人宅	11．娯楽施設
4．図書館	12．飲食店
5．公民館・集会所・市民センター	13．公園
6．地方文化施設（ホール等）	14．山や海
7．美術館・博物館	15．その他
8．スポーツ施設	（　　）

問13. 問12で**あなたが記入した4～12の施設の中で最もよく利用する**施設はどこですか（枠内に記入）

具体的な施設名→ [　　]

ここから先の質問は、問13であなたが書いた施設について答えて下さい。

問14. あなたはその場所をどの程度利用していますか。（**1つ**に○）

1．ほぼ毎日	4．月に2回程度
2．週に3回以上	5．月に1回程度
3．週に1回程度	6．月に1回未満

問15. あなたがその場所を利用する理由は次の内どれですか。（**2つ**に○）

1．サービス内容が充実している	7．交通の便がよい
2．職員（店員）の対応がよい	8．施設の周辺環境がよい
3．家族や友人と一緒に利用できる	9．施設の雰囲気がよい
4．誰にも邪魔されず利用できる	10．施設内がにぎやかでよい
5．家や学校や職場から近い	11．施設内が静かでよい
6．ついでに利用できる施設がある	12．その他（　　）

問16. その場所へ行く際の交通手段は以下のどれですか。（**1つ**に○）

1．徒歩	5．タクシー
2．自転車	6．自家用車
3．バイク	7．その他（　　）
4．公共交通機関（鉄道やバスなど）	

問17. その場所では誰と一緒に過ごしますか。（**1つ**に○）

1．家族	5．趣味を通しての友人
2．隣近所の人	6．職場や学校の人
3．学生時代の友人	7．ひとりで
4．家族を通じての友人	8．その他（　　）

問18. あなたにとってその場所はどんなところですか。（**2つ**に○）

1．人の集まりに身を預けるところ	9．居心地の良いところ
2．家族や友人と過ごすところ	10．遊ぶところ
3．知人に会えるところ	11．自分の好きな活動をするところ
4．自分の時間を過ごせるところ	12．暇をつぶすところ
5．用事や仕事を済ませるところ	13．気分転換をするところ
6．新しいことを発見するところ	14．休憩するところ
7．習慣的に行くところ	15．その他
8．ふらっと立ち寄れるところ	（　　）

○あなたが利用している各地域の商業施設についてお尋ねします。

問19. 地元の商店・商店街（近くのコンビニも含む）について不満に思っていることはありますか。
（**当てはまるもの全て**に○）

1．特に不満はない	7．駐車場が少ない
2．品揃えが悪い	8．自転車置き場が少ない
3．買い物が楽しめない雰囲気がある	9．店舗が少ない
4．店員の知識不足や態度の悪さが目立つ	10．店舗以外に楽しめる施設が少ない
5．値段が高い	→例えばどんな施設が必要ですか（　　）
6．閉店時間が早すぎる	11．その他（　　）

問20. 中心地の商店・商店街（津駅近辺・大門地区・津新町駅近辺にまたがる地域）について不満に思っていることはありますか。（**当てはまるもの全て**に○）

1．特に不満はない	7．駐車場が少ない
2．品揃えが悪い	8．自転車置き場が少ない
3．買い物が楽しめない雰囲気がある	9．店舗が少ない
4．店員の知識不足や態度の悪さが目立つ	10．店舗以外に楽しめる施設が少ない
5．値段が高い	→例えばどんな施設が必要ですか（　　）
6．閉店時間が早すぎる	11．その他（　　）

問21. 他の地区（市町村）の商業施設や郊外にあるショッピングセンターについて不満に思っていることはありますか。（**当てはまるもの全て**に○）

1．特に不満はない	7．駐車場が少ない
2．品揃えが悪い	8．自転車置き場が少ない
3．買い物が楽しめない雰囲気がある	9．店舗が少ない
4．店員の知識不足や態度の悪さが目立つ	10．店舗以外に楽しめる施設が少ない
5．値段が高い	→例えばどんな施設が必要ですか（　　）
6．閉店時間が早すぎる	11．その他（　　）

問22. あなたは問19から問21でお聞きした各商業施設をどの程度利用されていますか。下の枠内より該当するものをそれぞれ１つずつ選び、**番号をお書き下さい**。

地元の商店・商店街（近くのコンビニも含む）

津駅近辺・大門地区・津新町駅近辺にまたがる地域

他の地区（市町村）の商業施設や郊外にあるショッピングセンター

1．ほぼ毎日	4．月に２回程度	7．ほとんど利用しない
2．週に３回以上	5．月に１回程度	8．全く利用しない
3．週に１回程度	6．２～３ヶ月に１回程度	

○あなたの市町村合併に関する考えについてお尋ねします。

問23．あなたが市町村合併の結果として期待することは何ですか。（**当てはまるもの全て**に○）

1．広範囲に渡って公共施設を利用できる	6．合併すると今より財政状況が良くなる
2．高度で多様な行政サービスを受けられる	7．市町村のイメージや知名度が上がる
3．大規模な事業を行える様になる	8．その他
4．人件費などの削減で財政が効率化される	（　　）
5．行政サービス料金が安くなる	

問24．あなたが市町村合併の結果として不安に思うことは何ですか。（**当てはまるもの全て**に○）

1．庁舎・役場などの公共機関が遠くなって不便	6．合併すると今より財政状況が悪くなる
2．中心部と周辺部の地域格差が大きくなる	7．町の歴史や文化が失われる
3．新庁舎の建設などで余計な経費がかかる	8．合併のメリットや効果がよくわからない
4．議員数が減って住民の声が伝わりにくくなる	9．その他
5．行政サービス料金が高くなる	（　　）

問25．近年の市町村再編に伴って公共施設に空き（ゆとり）が発生することがあります。あなたの身近にこの様な事が起きた場合、どの様な施設やサービスを設けたらよいと思いますか。

（ご自由にお書き下さい）

問26．ＩＴ化・情報化によって市役所や支所以外（コンビニ、郵便局など）で住民票の発行などの各種行政サービスが利用できるようになることについてあなたはどの様に思いますか。（**1つ**に○）
また、その様に思った理由も答えて下さい。（**当てはまるもの全て**に○）

1．賛成　　2．反対

賛成の理由

1．土日祝日も利用できる
2．窓口がたくさんある
3．夜間も利用できる
4．買い物などのついでに利用できる
5．その他（　　）

反対の理由

1．情報漏洩の危険がある
2．設備投資費用がかかる
3．あまり利用しないと思う
4．役場や支所が自宅・職場の近くにある
5．その他（　　）

○あなたご自身についてお尋ねします。

問27．あなたの年齢と性別をお答え下さい。

性別：男・女　　年齢：満 ＿＿＿ 歳

問28．あなたは現在の住居に通算して何年お住まいですか。（**1つ**に○）

1．1年未満	5．10～15年未満
2．1～3年未満	6．15～20年未満
3．3～5年未満	7．20年以上
4．5～10年未満	

問29．あなたの現在の通勤・通学の交通手段は以下のどれですか。（**1つ**に○）

1．徒歩	5．タクシー
2．自転車	6．自家用車
3．バイク	7．その他（　　）
4．公共交通機関（鉄道やバスなど）	8．通勤・通学をしていない

問30．あなたの現在の通勤・通学時間はどのくらいですか。（**1つ**に○）

1．10分未満	4．60～120分未満
2．10～30分未満	5．120分以上
3．30～60分未満	6．通勤・通学をしていない

問31．あなたは現在、**普通自動車運転免許**をお持ちですか。（**1つ**に○）

1．持っており、よく運転している
2．持っているが、ほとんど運転していない（ペーパードライバー）
3．持っていない（以前は持っていた場合も含む）

問32．あなたは現在の生活の中で、自家用車をどのぐらい利用していますか。（**1つ**に○）

1．ほぼ毎日	4．ほとんど利用しない
2．週に5日程度	5．全く利用しない
3．週に2日程度	

問33．地域施設・公共交通の在り方や市町村合併についてご意見のある方は、下の枠内に**ご自由にお書き下さい。**

（ご自由にお書き下さい）

お疲れ様でした、以上でアンケートは終了です。
ご協力ありがとうございました。

グループ・団体の代表者様

生涯学習活動に関する意識調査のお願い

私たちは、市民生活に身近な地域公共施設のあり方を明らかにするため、施設利用や生活圏の広がりについて調査・研究を進めています。

近年、余暇時間の増大に加え、少子高齢化、地域社会における人間関係の希薄化など様々な社会的背景から、仕事や子育て以外の時間をいかに充実して過ごすかが重要なテーマとなっています。そのような時間の過ごし方の中でも、生涯学習活動は自らの生活の豊かさを実感するために欠かすことが出来ないもののひとつであると考えています。より多くの人々に生涯学習活動への参加を促すため、現在活発な活動をされている方々に参加のきっかけや生活上の工夫をお伺いし、施設が提供すべき環境整備を提案したいと考えています。

また、生涯学習活動は固定的な活動形態ではなく、発展を伴う活動であるため、発展段階に対応する活動状況とそれらに影響を及ぼす諸条件との関係を求め、各段階における施設のあり方を明らかにする必要があります。量的には施設整備が整いつつありますが、多種多様な活動内容と活動状況にはそれぞれ異なるニーズが存在すると考えられます。より充実した活動を補助するため、活動の場としての施設を見直す必要があります。

そこで本調査は、活動を行っているグループ・団体の方々に、現在の活動状況などをお聞きし、今後の施設整備計画に役立てるために実施するものです。
グループ・団体の代表者の方の氏名・住所は『津市生涯学習バンク』及び旧市町村の『文化協会』の登録団体名簿を調査目的で閲覧し、郵送させていただきました。

調査票はグループ・団体の概要・意識及び施設使用実績をお聞きする**『団体用アンケート』1枚**と、本活動以外の、余暇時間における施設利用と意識に関する**『個人用アンケート』を10部づつ**同封しております。『団体用アンケート』はグループ・団体の代表者の方が、『個人用アンケート』はメンバーの方を無作為に選んでいただき、無記名で記入いただくようお願いいたします。
(個人用は、回収期間までに配布・回収できた分だけ返信してください。)
記入いただいた調査票は同封した返信用封筒にいれ、**10月31日までに**ご投函ください。

なお、調査の内容は『個人情報保護法』等の趣旨を尊重します。調査の結果は統計的に処理し、調査協力で皆様にご迷惑をおかけすることは、一切ありませんので、よろしくご協力お願いいたします。

平成19年10月

三重大学大学院工学研究科　建築学専攻　高井研究室
三重大学名誉教授・三重短期大学教授　今井　正次
三重大学准教授　高井　宏之
三重大学助教　木下　誠一
三重大学大学院2年　矢部　亮

連絡先　〒514-8507　津市栗真町屋町1577　(建築学科)
TEL　090-4465-9270（携帯）　(矢部)
E-MAIL　yabe@p.arch.mie-u.ac.jp　(矢部)
FAX　059-231-9452　(建築学科)

(協力先　津市教育委員会　生涯学習スポーツ課)

生涯学習活動に関する意識調査：団体用アンケート

問 1. あなた方のグループ・団体の**正式名称**と**登録人数**を記入し、**活動内容**として当てはまるもの**1つ**に○をつけてください。

名称：	登録人数：　　人

1. 室内の趣味活動（音楽、囲碁、生け花など）
2. 教養学習活動（英会話、郷土史など）
3. ボランティアに関する活動
4. スポーツや健康活動（健康法、ジョギングなど）
5. 育児や教育に関する活動
6. その他（　　）

問 2. あなた方のグループ・団体の**創設年**と**創設時の人数**をお書きください。

年創設	創設時人数：　　人

問 3. あなた方のグループ・団体の創設された経緯を教えてください。（**1つ**に○印）

1. 公民館講座からの独立（自主講座）
2. 公民館講座以外の公共施設の講座・活動から
3. 民間施設で開講される講座・活動から
4. 職場や学校の活動から
5. 近隣住民の集まりから
6. 自主的なグループ活動
7. その他（　　）

さらに詳しい内容を、出来れば枠内に記入ください。

（記入例）公民館の講座に参加していたメンバーが意気投合し、講座修了後、自分たちで新たに団体を結成した。その後、活動に感化された人々が加わり、現在に至る。

問 4. あなた方のグループ・団体内の**連絡方法・会費**を教えてください。また、**ホームページ**はおもちですか。

【連絡方法】
1. 電子メール
2. 電話（連絡網）
3. 手紙
4. 口コミ
5. その他 →［　　］

【会費】　　円／月

【HP】
1. もっている
2. もっているが不活用
3. もっていない

ホームページのアドレス：

問 5. あなた方のグループ・団体の参加者について、質問ごとにあてはまるもの**1つに**○をつけてください。

①あなた方のグループ・団体の参加者の男女構成比は？

1. すべて男性　2. 男性が多め　3. 男女半々　4. 女性が多め　5. すべて女性

②あなた方のグループ・団体の参加者の主な年齢層は？

1. 独身の人が多め　2. 子育て期の人が多め　3. 子育てが終わった人が多め　4. 退職後の人が多め　5. 幅広い層の人がいる

③あなた方のグループ・団体の参加者の居住地は？（左側から優先して選んでください）

1. 小学校区内の人が多め　2. 旧市町村内の人が多め　3. 隣接する旧市町村までの人が多め　4. （合併後の）津市内の人が多め　5. 津市以外の人が多め

④あなた方のグループ・団体の参加者の有職率（仕事をしている人の割合）は？

1. すべて無職（専業主婦含む）　2. ほとんど無職　3. 無職・有職が半々　4. ほとんど有職（パート含む）　5. すべて有職（パート含む）

⑤グループ活動に新たに参入してくる人のきっかけとして多いものは何ですか？

1. 参加者である友人・知人のつてで　2. 以前から他のグループに参加していた人がグループ同士のつながりで　3. インターネットや会報から情報を得て加入を希望する　4. ほとんど創設時のメンバー　5. その他［　　］

れるので、**最近のものを [1] とし、15 回分の活動実績を順番**に記入してください。

（様々な事情があると思われますので、以下に記入いただく日付と異なっていてもかまいません）。

	活動を行う場所を選んだ理由は何ですか。（あてはまるもの２つまでに○）											参加したメンバー数				利用料金 貸室の料金
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	1	2	3	4	（円）
施設名称　室名称	メンバー宅や職場に近い	立地環境がよい（街中にある・自然が近い）	交通の便がよい（駅やバス停から近い）	施設が比較的空いていて、予約がとりやすい	賃貸料が安い・無料	利用時間帯の幅が広い（夜遅くても使える）	普段利用している施設に回数制限があるため	利用する室の規模や設備が適当	休憩やおしゃべりをするスペースが充実している	施設が多機能（ホールや会議室など多くの室がある）	その他	～9名	10～19名	20～29名	30名～	
[津中央公民館] [研修室]	1	2	3	(4)	5	6	7	(8)	9	10	11 [ ]	1	(2)	3	4	無料
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	
[ ] [ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11 [ ]	1	2	3	4	

２つまでを○で囲んでください。

１つを○で囲んでください。

問 6. あなた方のグループ・団体の活動実績を教えてください。日々の活動は様々な場所を利用していることが考えら
(各質問の回答は**当てはまるものを○で囲み、【施設名称】と【室名称】を記入**ください)
また、活動自体は平均して**どの程度の頻度**で行っていますか、枠内のふさわしい番号**1つ**を○で囲んでください

1. 週に1回以上	2. 月に2回程度	3. 月に1回程度	4. 月に1回未満

	日付				時間帯				利用目的						活動を行う場所はどこですか。(各番号ごとに、利用した施設1つについて)											
	年	月	日	曜日	1 ～12:00	2 12:00～17:00	3 17:00～20:00	4 20:00～	1 日々の学習活動	2 学習の成果発表	3 成果発表の為のリハーサル	4 親睦会(練習はしない)	5 その他		1 自治会集会所	2 公的集会施設(公民館・市民センターなど)	3 小中学校(体育館含む)	4 小中学校以外のスポーツ施設	5 地方文化施設(ホールなど)	6 図書館	7 宗教施設(神社・教会など)	8 福祉施設	9 民間施設の貸し施設	10 店舗(手芸店・喫茶店など)	11 個人の住宅	12 施設は利用しない
例	07	9	28	金	1	(2)	3	4	(1)	2	3	4	5	[ ]	1	(2)	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[1]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[2]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[3]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[4]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[5]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[6]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[7]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[8]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[9]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[10]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[11]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[12]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[13]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[14]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
[15]					1	2	3	4	1	2	3	4	5	[ ]	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12

最近のものから順に記入ください。

各問、1つを○で囲んでください。

1つを○で囲んでください。
また、利用する施設が1～9のいずれかの場合【施設名称】と【室名称】を記入ください。

問 7. あなた方のグループ・団体が活動するに当って重要視していることは何ですか。
（当てはまるものの番号**2つ**に○印）

1. グループ・団体内の人々との交流・親睦	5. 作品の創作・展示
2. 他グループ・団体の人々との交流・親睦	6. 地域社会・文化への貢献
3. メンバーの能力・技術の向上	7. その他
4. 技術の伝承・普及	→[　　]

問 8-1. あなた方のグループ・団体の新規メンバー加入に対する考えを教えてください。（**1つ**に○印）

1. メンバーを増やしたい
2. メンバーは増やしたくないが、成果発表の鑑賞者は増やしたい
3. メンバーも鑑賞者も増やしたくない

問 8-2. 前問で1か2と答えた方のみお聞きします。メンバー増強の手段として、現在なにを行っていますか。
（**当てはまるもの全て**に○）

1. HP 運営	4. 電話勧誘
2. 市の広報や会報などの刊行物	5. 口コミ
3. ポスター・貼紙	6. その他　→[　　]

問 9. 今後活動を行っていくにあたり、利用する施設を選択する上で、重要視する点は何ですか。
（当てはまるもの**2つ**に○）

1. メンバー宅や職場への近さ	7. 会場の規模の適当さ・設備の良さ
2. 立地環境の良さ	8. 休憩などをするスペースの充実度
3. 交通の便の良さ	9. 施設の多機能性
4. 施設利用の予約のとりやすさ	10. その他
5. 賃貸料の安さ	→[　　]
6. 利用時間帯の幅の広さ	

問 10. 現在の施設整備に対し不満に思っていることや今後の希望を下の枠内にご自由にお書きください。

問 11-1. 本アンケートの後に、さらに詳しいことを聞くために調査員からの電話や訪問をすることをお願いできますか。

1. 是非聞きに来てほしい
2. 聞きに来たら、ある程度のことについては答える
3. 時間があれば対応してもよい
4. 絶対にやめてほしい

問 11-2 にお答えください

問 11-2. 前問で1、2、3と答えた方のみお聞きします。現在の代表者の氏名・電話番号（またはEメールアドレス）・住所を下の枠内にお書きください。

氏名：	TEL ／ mail：

住所：

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

生涯学習活動に関する意識調査：個人用アンケート

このアンケートは、生涯学習活動に参加しているメンバーの皆様が、日常の余暇時間（自由時間）に利用する地域施設へのニーズやそこでの過ごし方を把握するために行います。
皆様が参加している生涯学習活動については代表者の方にお聞きしていますので、あなた個人の、**グループ・団体活動以外の地域施設の利用**についてお答えください。
調査の内容は「個人情報保護法」等の趣旨を尊重し、皆様のご迷惑とならないよう細心の注意を払いますので、ご協力いただけますよう何卒よろしくお願い申し上げます。

三重大学大学院工学研究科建築学専攻　高井研究室　担当　矢部亮

○あなたの余暇時間（自由時間）の地域施設の利用についてお尋ねします

問１．あなたは生活の中で、代表者の方にお聞きした**グループ・団体活動以外で**自由な時間をどのような場所で過ごしていますか。その場所を下の枠内から選んで数字を記入し、**４カ所**挙げて下さい。
※４～１３を選んだ場合は、横に**具体的な施設名**をお書き下さい。
※同じ施設種で複数の場所がある場合は、記入例にならい、一つの欄に全てお書き下さい。

	施設種（記号で記入）	施設名（具体的な施設名称を記入）	利用内容（記号で記入）
例	4	津市図書館、三重県立図書館	A，D，N
①			
②			
③			
④			

1. 自宅
2. 職場・学校
3. 知人・友人宅
4. 図書館
5. 公民館・集会所・市民センター
6. 地方文化施設（ホール等）
7. 美術館・博物館
8. スポーツ施設
9. 教育施設
10. 商業施設
11. 娯楽施設
12. 飲食店
13. 公園
14. 山や海
15. その他

A. 会話
B. 勉強・仕事・調べもの
C 読書・新聞雑誌の閲覧
D. 食事
E. 遊び
F. 本の貸出
G. 入浴
H. 情報の取得
I. 打ち合わせ
J. 待ち合わせ
K. 付き添い
L. イベント・催し物
M. 休憩
N. 時間潰し
O. 特に何もしない
P. その他

問２．問１で記入した施設のうち、４～１３の施設の中で、**最もよく利用する施設**はどこですか。
枠内に**番号と具体的な施設名**を記入してください。

「番号」と「具体的な施設名」→ | | |

○問３から問１４の質問は問２で記入した施設についてお答えください。

問３．その施設を主に何をするために利用していますか。（**当てはまるもの全て**に○印）

1. 会話　2. 勉強・仕事・調べもの　3. 読書・新聞雑誌の閲覧　4. 食事
5. 遊び　6. 本の貸出　7. 入浴　8. 情報の取得
9. 打ち合わせ　10. 待ち合わせ　11. 付き添い　12. イベント・催し物
13. 休憩　14. 時間潰し　15. 特に何もしない　16. その他（　　）

問４．この施設を利用するのは主にどのような時ですか。（**当てはまるもの１つ**に○印）

1. いつもの習慣
2. 何かのついでがある時（散歩・買い物など）
→（　　）
3. ふと、そこに行きたいと思い立った時
4. 行事や催し物がある時
5. 休みの時

問５．どのくらいの頻度でその施設を利用していますか。（**当てはまるもの１つ**に○印）

1. ほとんど毎日　2. １週間に2,3回　3. １週間に１回
4. ２週間に１回　5. 月に１回　6. 2,3ヶ月に１回
7. 半年に１回　8. 年に１回

問 5. その施設への交通手段をお答え下さい。（**当てはまるもの１つに**○印）

1. 徒歩
2. 自転車
3. バイク
4. 自家用車（自分が運転）
5. 自家用車（家族が運転）
6. 自家用車（友人・知人が運転）
7. 公共交通（電車・バス等）
8. その他（　　）

問 6. その施設では主に誰と一緒に過ごしますか。（**当てはまるもの１つに**○印）

1. 家族
2. 職場の人
3. 学生時代の友人
4. 隣近所の人
5. 家族を通しての友人
6. 趣味を通しての友人
7. その施設で知り合った人
8. 他の施設で知り合った人
9. ひとり
10. その他（　　）

問 7. その施設を利用する時間帯は主にいつですか。（**当てはまるもの１つに**○印）

1. 午前中
2. 昼休み（午後 12 時から 1 時）
3. 午後 1 時から 3 時
4. 午後 3 時から 5 時
5. 午後 5 時以降

問 8. その施設には、どのくらいの時間、いますか。（**当てはまるもの１つに**○印）

1. 30 分未満
2. 30 分から 1 時間未満
3. 1 時間から 2 時間未満
4. 2 時間以上（時間数：　　）

問 9. その施設を利用するようになったのはいつからですか。（**当てはまるもの１つに**○印）

1. 学生時代から
2. 就職してから
3. 結婚してから
4. 子どもが誕生してから
5. 子育てから解放されてから
6. 退職してから

問 10. その施設の職員（スタッフ）とあなたとの関わりはどの程度ですか。（**当てはまるもの１つに**○印）

1. 色んな身の上話や相談事をする
2. 世間話をする程度
3. 施設の利用方法等について相談する程度
4. 来訪時に挨拶をする程度
5. 職員とはほとんど関わりをもたない

問 11. その施設を選択する理由をお答え下さい。（**当てはまるもの全てに**○印）

1. 家族や友人と一緒に過ごせるから
2. 一人になれるから
3. 自分を知っている人が少ないから
4. 人と知り合う機会が得られるから
5. ついで利用できる施設があるから
6. 気分転換できるから
7. やりたいことができるから
8. 他に行く場所がないから
9. 時間がつぶせるから
10. いろいろな滞在場所があるから
11. 施設の設備やサービスが充実しているから
12. 施設が入りやすい雰囲気だから
13. 施設内の雰囲気が良いから
14. 施設が行っている講座等が気に入っているから
15. 職員の対応が良いから（話を聞いてくれる、など）
16, 冷暖房が効いているから
17. 開館時間が自分に合っているから
18. 長時間利用できるから
19. 無料で利用できるから
20. 家や職場・学校から近いから
21. 交通の便が良いから
22. 施設周辺の環境が良いから
23. その他（　　）

問 12. その施設に対する要望をお答え下さい。（**当てはまるもの全てに**○印）

1. 誰にも干渉されずに一人で過ごせる場所をつくって欲しい
2. 家族や友人と気軽に過ごせるような場所をつくって欲しい
3. いろいろな人と知り合え、交流できるようなきっかけをつくって欲しい
4. 自分たちの活動の場を提供して欲しい
5. より多くの滞在場所を用意して欲しい
6. 食事や喫茶のスペースが欲しい
7. 施設の内装や設備などを良くして欲しい
8. 興味がもてるイベントや催し物・講座などを行って欲しい
9. 新しい知識や情報などを提供して欲しい
10. 健康づくりの支援を行って欲しい
11. 悩みや相談事を聞いて欲しい
12. 長時間、自由に居られるようにして欲しい
13. 開館時間を長くして欲しい
14. 無料にして欲しい
15. その他（　　）

問 13. その施設を利用するようになったきっかけをお答え下さい。（**当てはまるもの全て**に○印）

1. 交友関係を広めたいため
2. 外出して生活にメリハリをつけたいため
3. 施設のイベント等に興味があったため
4. 何か趣味を見つけたいと思ったため
5. 時間に余裕が出来たため
6. 単身となったため
7. 健康に不安を感じるようになったため
8. 自動車が利用できなくなったため
9. 家に居づらくなったため
10. 団体活動で施設を利用しているため
11. 広報や HP などメディアで知ったため
12. 家族や友人から紹介・薦められたため
15. その他（　　）

問 14. その施設を利用することで変わったなと思うことをお答え下さい。（**当てはまるもの全て**に○印）

1. 交友関係が広がった
2. 相談できる人が増えた
3. 人と接する機会が増えた
4. やりたいことを見つけることができた
5. リラックスできるようになった
6. 新しい知識や情報が得られるようになった
7. 誰の目も気にせずいられる場所ができた
8. ひまな時間を活用できるようになった
9. 自宅以外に過ごせる場所ができた
10. その他（　　）

○問 15 から問 19 の質問はあなたが所属する活動団体・グループについてお答えください。

問 15. あなたは活動団体に参加して、**何年目**ですか。　［　　］年目

問 16. あなたはグループ・団体の活動（普段の学習活動）に参加する際、どのような交通手段を用いますか。（**1 つ**に○印）

1. 徒歩
2. 自転車
3. バイク
4. 自家用車（自分が運転）
5. 自家用車（家族が運転）
6. 自家用車（友人・知人が運転）
7. 公共交通（電車・バス等）
8. その他（　　）

問 17. あなたが現在の活動団体に参加した目的は何ですか。（**2 つ**に○印）

1. 新しいことを始めてみたかったため
2. 今までやってきた活動を高度化・専門化したかったため
3. 家事や育児に必要だったため
4. 外出して生活にメリハリをつけたいため
5. 交友関係を広めたいため
6. 暇な時間でなにかしたかったため
7. その他（　　）

問 18. あなたが現在の活動団体に参加したきっかけは何ですか。（**2 つ**に○印）

1. 退職して時間に余裕ができた
2. 子育てが終わって余裕ができた
3. 1・2 以外の理由で時間に余裕ができた
4. 時間帯が自分に合っていた
5. 広報や HP などメディアで知った
6. 家族や友人から紹介・薦められた
7. 展示会などをみて意欲がわいた
8. 活動場所が近くて便利だった
9. 普段から施設を利用していて、活動内容を知っていた
10. 参加費用が安くて手軽だった
11. その他（　　）

問 19. 活動に参加することで変わったなと思うことをお答え下さい。（**当てはまるもの全て**に○印）

1. 交友関係が広がった
2. 相談できる人が増えた
3. 人と接する機会が増えた
4. やりたいことを見つけることができた
5. リラックスできるようになった
6. 新しい知識や情報が得られるようになった
7. 誰の目も気にせずいられる場所ができた
8. ひまな時間を活用できるようになった
9. 自宅以外に過ごせる場所ができた
10. スキルがあがり、余暇時間を充実して過ごせるようになった
11. その他（　　）

○ここからの質問はあなた自身についてお答えください。

問 20. あなたの**性別**と**年齢**をお答え下さい。

性別：［男　女］　**年齢：**満［　　］歳

（質問は裏面に続きます）

問 20. あなたの現在の職業をお答え下さい。（1つに○印）

1. 勤労者（会社員、公務員など）	2. パート・アルバイト	3. 農林業・水産業
4. 専業主婦	5. 無職	6. その他（　　）

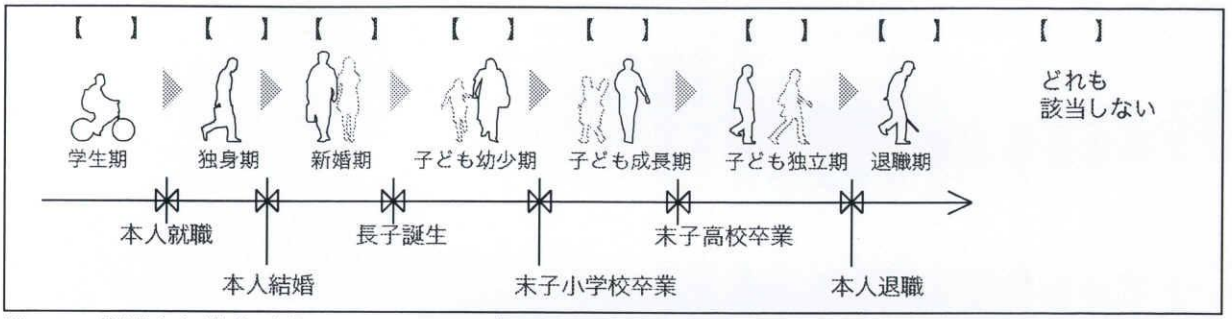
問 21. 問 20 で［5. 無職］と回答された方は、以前の職業をお答え下さい。（1つに○印）

1. 勤労者（会社員、公務員など）	2. パート・アルバイト	3. 農林業・水産業
4. 専業主婦	5. その他（　　）	

問 22. あなたの家族構成をお答え下さい。（1つに○印）

1. ひとり暮らし	2. 夫婦のみ	3. 子どもと一緒（二世代）
4. 親と一緒（二世代）	5. 親と子どもと一緒（三世代）	6. その他（　　）

問 23. あなたは現在、下図のうち生涯のどの段階に属しますか。（当てはまるものの【　】1つに○印）



問 24. **住所**をお答え下さい。
（**番地は不要**。例：津市上浜町）

問 25. あなたは現在の生活の中で、余暇時間に（仕事や通院等は除く）どのくらい外出しますか。（1つに○印）

1. ほぼ毎日	2. 週に 5 日程度	3. 週に 2 日程度
4. 週に 1 日程度	5. 全く外出しない	

問 26. あなたは現在、普通自動車免許をお持ちですか。（1つに○印）

1. 持っており、よく運転している。	2. 持っているが、ほとんど運転していない（ペーパードライバー）	3. 持っていない（以前は持っていた場合も含む）

問 27. 現在お住まいのお宅の形式をお答え下さい。（1つに○印）

1. 持ち家（一戸建て）	3. 公団・公社・公営の賃貸住宅	5. その他
2. 持ち家（分譲マンション）	4. 民間の賃貸住宅（借家・アパート）	（　　）

問 28. あなたは現在の住居にどれくらいお住まいですか。（1つに○）

1. 1 年未満	3. 3 ～ 5 年未満	5. 10 ～ 15 年未満	7. 20 年以上
2. 1 ～ 3 年未満	4. 5 ～ 10 年未満	6. 15 ～ 20 年未満	

問 29. あなたは、自治会、子ども会、婦人会、老人クラブなどの「町内活動」にどの程度参加していますか。（1つに○印）

1. 積極的に参加している（組織：　　）	3. あまり参加していない
2. 義務的に参加している（組織：　　）	4. 参加していない

問 30. あなたはどの程度、向こう 3 軒両隣と「近所づきあい」をしていますか。（1つに○印）

1. いつも行き来をしている	2. 世間話をする程度	3. 顔を合わせば挨拶する程度
4. ほとんど付き合いがない	5. その他（　　）	

問 31. あなたが現在の生活の中で充実感を感じるのはどんな時ですか。（2つに○印）

1. 仕事や勉強をしている時	6. 趣味に時間を費やしている時
2. 育児や家事をしている時	7. 習い事をしている時
3. 家族と団らんや旅行をしている時	8. グループ・団体活動に参加している時
4. 友人と雑談や旅行をしている時	9. 自主的な学習をしている時
5. 一人で休養している時	10. その他（　　）

以上で質問は終わりです。ご協力ありがとうございました。

平成19年度修士論文梗概

生活構造からみる地域施設の利用構造に関する研究
-余暇を過ごす場所に着目して-

三重大学大学院　工学研究科　建築学専攻　矢部亮

1. 序論

1-1　研究の背景

近年、様々な社会的変化により余暇時間[註1)]が増大している。それに伴い、人々は自宅や職場・学校だけでなく、地域に存在する様々な施設で余暇時間を過ごしている。余暇活動[註2)]を行う地域施設[註3)]に関しては、個別の活動に対し、個々の施設がどうあるべきかという研究が多くなされてきた。一方、余暇活動を行う人々はそれぞれが異なる属性をもち、施設の使い方、要求も一様ではない。そのため、利用者である地域住民側から、余暇を過ごす場所の選択特性[註4)]、地域施設の利用形態といった、地域施設の利用構造を捉える必要がある（その観点として、ライフサイクル（LC）及びライフスタイル（LS）でみる）。

今後、地域の幅広い層に対して、自宅や学校・職場以外で過ごせる場所を地域全体で提供していく必要があるといえるが、特に、地域公共施設は従来の施設固有の機能的サービスによる整備だけでなく、地域住民が安心して余暇を過ごせる場所としても整備する必要があると考える。

1-2　研究の目的

本研究では、民間施設を含む地域施設を横断的に考察し、地域施設の利用構造や余暇を過ごす場所への要求を捉える。それらから、余暇を過ごす場所としての地域公共施設の整備指針を得ることを目的とする。

1-3　研究の方法

余暇活動には個人的な余暇活動と母体をもった組織活動があるため、その2つを対象とし、以下の方法で研究を進める（図1）。

①人々の充実感から、余暇活動の要求を明らかにする。

[個人的な余暇活動について]

③LC・LSの観点から、各々の生活背景を踏まえ、地域施設の利用構造を捉える。

③以上から、属性によって余暇を共に過ごす相手に相違がみられた。相違は大きいと考えられるため、同伴形態に着目し、地域施設の利用構造を捉える。また、地域住民が施設に対して抱くイメージ（施設像）から利用者の要求を捉える。

[組織活動について]

④組織活動を行う団体の結成・展開における地域施設との関わりを捉える。

⑤組織活動への参加が地域公共施設の利用促進につながるという観点から、参加を阻害する要因を捉える。

⑥以上の分析を踏まえ、利用促進の観点から、余暇活動を行う地域施設の必要性と施設整備指針を見出す。

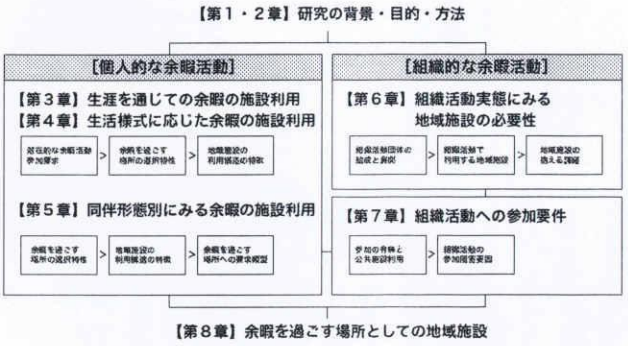


図1　研究のフロー

1-4　調査概要

以下の2つの調査を行った[註5)]（表1・表2）。

表1　調査概要

調査1：地域住民アンケート	
調査期間	H17年7月～8月
調査対象	四日市市・朝日町・川越町、津市、志摩市、大紀町に住む15歳以上の住民
調査概要	地域住民の生活実態、施設利用実態に関するアンケートを、メッシュサンプリングで抽出した世帯ごとに直接配布・郵送回収にて行った。
質問項目	世帯票：家族形態など、個人票：各種施設の3ヶ月以内利用実態、地域活動、余暇に利用する地域施設の利用形態など
回収率	世帯票：1,736/4,179=42%、個人票：3,322/10,269=32%
調査2：組織活動実績調査	
調査期間	H19年9月～11月
調査対象	『津市生涯学習バンク』及び文化協会の登録団体
調査概要	組織活動実態を捉えるアンケートを、上記の登録団体に対し、郵送配布・郵送回収にて行った。
質問項目	団体票：団体の活動実績など、個人票：メンバーの参加契機、活動意識など（個人票は各団体当り最大10名分）
回収率	団体票：212/358=59%（有効数）、個人票：1,120名

表2　調査対象地区の概要（調査1）

調査対象地区			津	四日市	志摩	大紀
地域情報		総人数［人］	286,521	320,600	61,628	11,334
		総面積［k㎡］	711	220	180	234
		人口密度［人／k㎡］	403	1,458	343	49
		総世帯数［戸］	102,795	113,523	20,950	4,141
		15歳～64歳人口比	66.1%	68.2%	62.0%	57.2%
		65歳以上人口比	19.2%	16.0%	23.4%	30.7%
		男性比	48.6%	49.3%	46.6%	47.3%
		女性比	51.4%	50.7%	53.4%	52.7%
施設数	公共	図書館	12	5	3	0
		公民館類似施設	40	34	17	6
		体育館	5	6	1	0
	民間	大規模店舗	5	6	1	0
		小売業・飲食店数	3,593	4,214	1,100	227

地域情報はH12年度国勢調査、
小売業・飲食店数は市町村累年統計表（三重県）H16年度データによる。

2. 余暇活動要求

まず、生活における余暇活動の必要性をみる。生活を充実していると感じる行動の回答パターン（最大2種選択）を整理し（図2）、余暇時間に行う行動である「選択行動」の有無、さらに選択行動における「目的意識の高低」にて分類する。

これをみると、居住地によらず、9割以上の人が余暇時間に行う選択行動を回答し、さらに6割以上の人が目的意識の高い選択行動を選択している（表3）。逆に言うと、これらを行うことが人が生活を充実するために必要といえる。特に、目的意識の高い選択行動は、自宅以外で行う場合が多く、顕在化された余暇活動要求と潜在的な余暇活動要求を含む行動である。従って、余暇に選択行動（余暇活動）を行うことが生活を充実するために必要といえる。

行動の種類	目的意識	充実を感じるとき	生活の充実感の回答パターン	
非選択行動	-	1. 仕事・勉強	①非選択重視	1+2
		2. 家事・育児	②非選択必要	1or2(+10)
選択行動	低い	3. 休養	③両方必要 / 低	1,2+3,4
		4. 家族と過ごす	④両方必要 / 高	1,2+5~9
	高い	5. 友人と過ごす	⑤選択必要 / 低	3or4(+10)
		6. 趣味	⑥選択重視 / 低	3+4
		7. 習い事	⑦選択重視 / 高 + 低	3,4+5~9
		8. 団体活動	⑧選択必要 / 高	5~9(+10)
		9. 自主学習	⑨選択重視 / 高	5~9+5~9
10. その他			⑩その他	10

図2　充実感の回答による活動要求の類型化

「充実を感じるとき」の選択肢は「国民生活に関する世論調査」（内閣府）を参考。

表3　余暇活動要求　（最大2種回答、調査1）

		津		四日市		志摩		大紀		総計	
総数		1245		1148		579		350		3322	
活動要求不明		105		78		39		28		250	
回答数		1140		1070		540		322		3072	
非選択行動のみ（①②）		4%		3%		3%		4%		4%	
目的意識低のみ（③⑤⑥）		21%		25%		22%		23%		23%	
目的高必要	高 + 低（⑦）	34%	74%	35%	70%	33%	74%	24%	70%	33%	72%
	高のみ（④⑧⑨）	39%		36%		41%		46%		39%	
選択行動あり		95%		95%		96%		93%		95%	
その他のみ		1%		1%		1%		3%		1%	
総計		100%		100%		100%		100%		100%	

3. ライフサイクルにみる個人的な余暇活動実態

個人的な余暇活動について、LCの観点から選択特性、地域施設の利用形態を把握する。LCは年齢・性別・家族構成（子どもの年齢）等から男女とも7つの段階に分類し、女性は結婚後から子どもが独立するまでの期間を、職の有無によってさらに分類する。

3-1　各段階の生活背景

余暇活動は生活の一部であるため、各段階の生活背景を把握する必要がある。梗概では、余暇時間の総量と余暇活動要求を比較する。

1）余暇時間の総量

まず、余暇時間の総量をみると（図3）、男女とも30代・40代が最も少ないが、その後加齢とともに増加する。但し、男性が60代以降（つまり、退職に伴って）急激に余暇時間が増加することに対し、女性は徐々に余暇時間が増加する。これは職の有無によらず女性に共通してみられるが、特に無職女性は子育てが一段落ついた30代から40代にかけて急激に増加する。

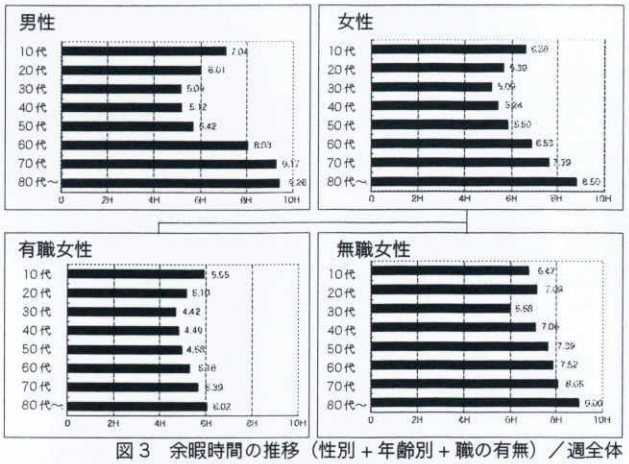


図3　余暇時間の推移（性別＋年齢別＋職の有無）／週全体

社会生活基本調査（2006年）より筆者作成。

男性は総数のまま、女性は有職・無職に分け、年齢別の平均より作成している。

2）各段階の余暇活動要求

次に、段階別の余暇活動要求をみる（図4）。図の横軸はLCであり、左端から｛学生期｝、｛独身期｝と段階が進んでいく（以降の図も同様）。男女とも余暇時間に行う選択行動の要求は常に高く、生涯を通じて余暇活動への高い要求をみることができる。

但し、高い目的意識をもった選択行動に限定すると、男女とも特に、結婚後から子育て期にかけて一旦減少する。男性と有職女性は仕事に加え、家庭をもち、家族との時間を優先するため、このような傾向が表れるといえる。これは子育てが一段落した無職女性の｛子ども成長期｝において、同項目が急増していることからも裏打ちされる。そのため、それらの負担が軽減された｛子ども独立期｝以降は男女とも高い余暇活動要求をもつ。

以上のことから、LCの各段階とも余暇活動への高い要求はもっているが、様々な個人的背景によって要求の質が異なることが明らかとなった。

3-2　各段階の余暇を過ごす場所の選択特性

次に、各段階の余暇を過ごす場所の特性を捉える。

1）地域施設選択の有無

まず、地域住民の余暇を過ごす場所の選択パターン（図5）より、［地域施設の有無］と［自宅の有無］を抽出する（図6）。地域施設の選択箇所数については、男女とも概ね｛新婚期｝が最多で、以降減少する。一方、自宅で過ごさない人は加齢とともに増加する。特

に、高齢期を始めとして、高い活動要求をもちながら、自宅が余暇生活の拠り所にならず（高齢単身・高齢夫婦が多いことも理由のひとつであろう）、地域施設の選択も少ない人がいることが明らかとなった。このように、余暇を過ごす場所がなく、要求を持て余している人がいることが懸念される。

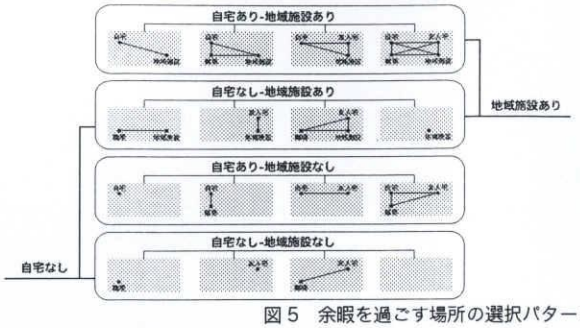


図５　余暇を過ごす場所の選択パターン

個人が余暇を過ごす場所の選択（最大４件選択）より回答の仕方を分類。「自宅」「職場・学校」「友人・知人宅」「地域施設」の選択により、４つの大分類パターンがある。それらから「地域施設あり」と「自宅なし」を抽出。

2）地域施設の選択割合

次に地域施設を取り上げ、施設選択の大枠をみる（図7）。どの段階も『民間施設』の選択が多く、具体的には大型 SC を含む商業施設が選ばれている。特に子育て期は顕著であり、その選択割合は『公共施設』を遥かにしのいでいる。時間的拘束の多い段階の人々が公共施設を敬遠し、開館時間の長い施設を選択するため、施設選択に偏りが生じると考えられる。但し、無職女性は子育て後に再度選択箇所数が増加する（後述）。

この傾向は加齢とともに減少し、{高齢期} では『公共施設』の選択割合が『民間施設』を逆転する（コミュニティ施設が多い）。加齢によって自動車の運転も控え、遠出できなくなる高齢者にとって、身近な公共施設が貴重な余暇を過ごす場所となっている。

3-3　各段階の地域施設の利用形態

以上から、多くの段階が地域施設で余暇を過ごしている一方、高い余暇活動要求をもちながら、その受け皿を確保できていない人がいることが明らかとなった。地域住民が余暇を過ごす場所として地域施設を選択する際の要因を捉えるため、最もよく利用する地域施設について、利用形態を把握する。最もよく利用する地域施設の内訳は表４の通りであるが、ここでは地域施設として一括して分析する。梗概では、特に特徴のみられた『一緒に過ごす相手』と『施設像』を捉える。

表４　最もよく利用する地域施設（LC）

	公共施設						民間施設			その他	総計
	図書館	コミュニティ施設	地方文化施設	博物館・美術館	スポーツ施設	教育施設	商業施設	娯楽施設	飲食店		
回答数	163	231	45	11	205	39	754	132	108	160	1848
	694						994				

1）一緒に過ごす相手

施設で一緒に過ごす相手をみると（図8）、{学生期} では「グループ（学校の友人）」が多いが、就職に伴う転居の影響もあり {独身期} では「ひとり」が増える。結婚してから子どもが幼い期間は「家族」が増え、{子ども成長期}（子育てが一段落つく）以降では、「ひとり」と「グループ（趣味の友人）」が増え始める。特に無職女性は子育て後に「グループ（趣味の友人）」が急増する（この際、地域施設の選択箇所数も増加する：図7）。一方、男性は {高齢期} では女性よりも「ひとり」が多い。地域に友人をつくれず、ひとりで過ごすことを余儀なくされていることが懸念される。

2）施設像（施設に抱くイメージ）

施設像をみると（表5、図9）、家族での利用が多い子育て期では、気分転換のためといった、『雰囲気を享受する場所』として利用している。子育て期が過ぎた後、無職女性は『目的に取り組む場所』が増える（『一緒に過ごす相手』が変化する時期と重なる）。これは、幼い子どもの付き添いとしての施設利用から、自己実現のための場へと利用意識が変化するためと捉えられる。一方、仕事による阻害もあり、男性と有職女性は意識の転換が遅れる。

表５　地域施設の施設像（施設に抱くイメージ）

人間関係を形成する場所			目的に取り組む場所				雰囲気を享受する場所				
人の集まりに身を預ける所	家族・友人と過ごす所	知人に会える所	自分の時間を過ごす所	用事仕事を済ませる所	新しい発見をする所	遊ぶ所	好きな活動をする所	習慣的に行く所	立ち寄る所	居心地よい所	暇をつぶす所	気分転換する所	休憩する所

3-4　LC にみる地域施設の利用構造

○LC の進展に伴い、選択する場所の幅（選択箇所数）は減少するが、公共施設の選択は増加する（加齢に伴い、身近な公共施設への需要が高まる）。

○LC の進展に伴い、[グループ（学校の友人）→ひとり→家族（子どもの付き添い）→ひとり・グループ（趣味の友人）] と主に一緒に過ごす相手は変化する。この際、施設像や選択する地域施設等も変化する為、同伴者を切口に再度分析する（→第５章で分析）。

○上記に伴い、特に、子育て後の親自身の要求を促すことで、地域施設の利用が促進される。子育て後の継続した施設利用のため、親自身の要求を高め、早期の利用意識の転換を促すことが重要である。意識の転換後はグループでの利用が増えるため、子どもを見守りやすい位置に、サークル活動等の情報を掲示するなど、親自身の自己実現要求を喚起する仕組みを組み入れることが有効であろう。

＊　いずれの図も左端を［学生期］とし、次が［独身期］と、LC の段階が進展していく。
また、女性は職の有無で分類しているが、［学生期］［独身期］［高齢期］は分類しておらず、同値を用いている。

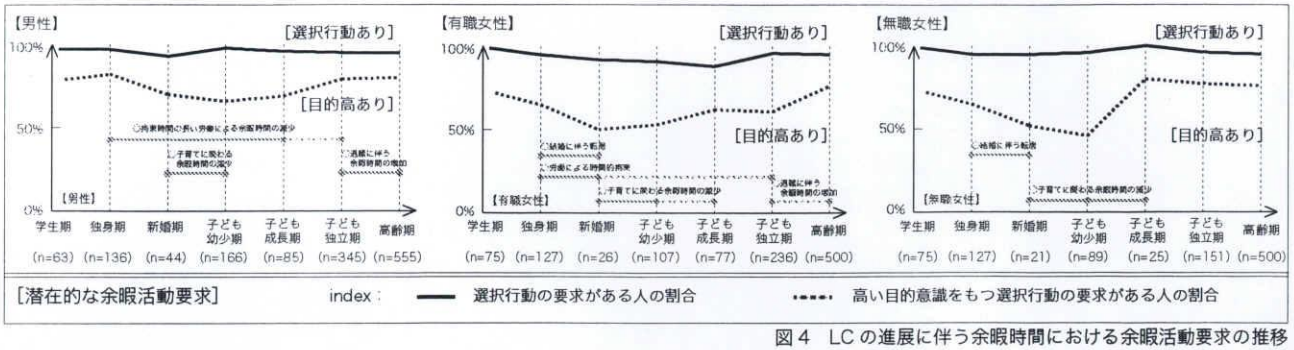


図４　LC の進展に伴う余暇時間における余暇活動要求の推移

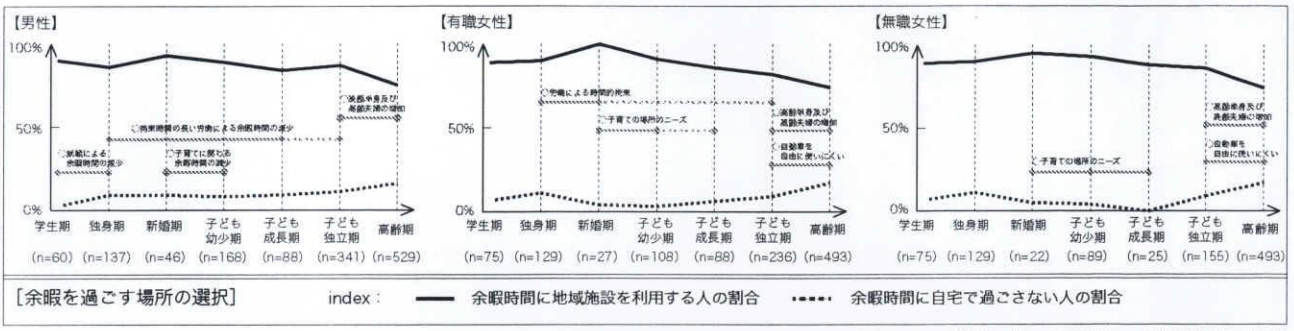


図６　LC の進展に伴う余暇を過ごす場所選択の推移

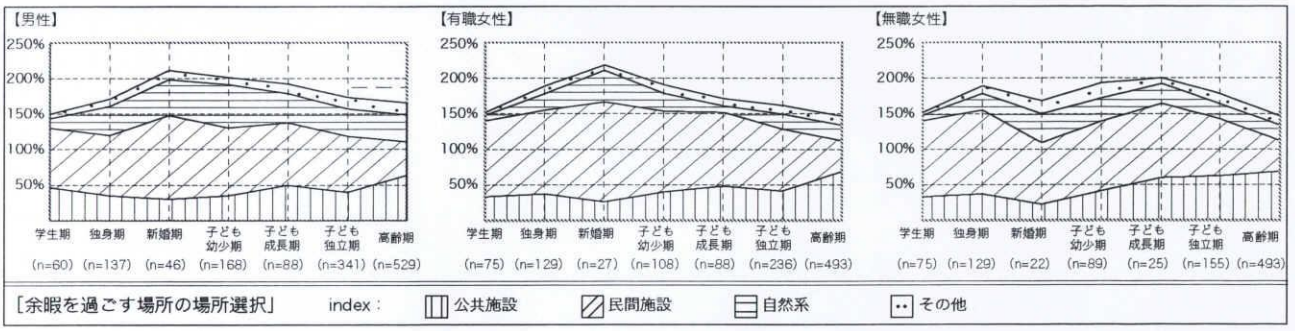


図７　LC の進展に伴う利用する地域施設の選択割合

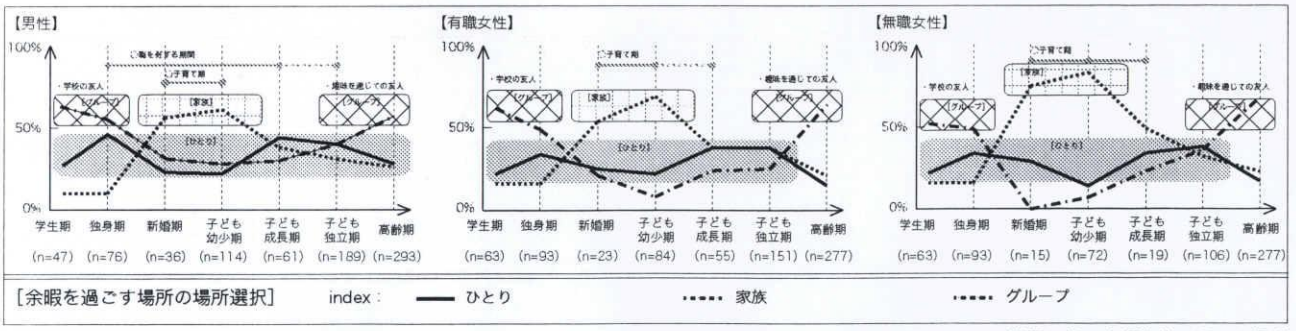


図８　LC の進展に伴う余暇を共に過ごす相手

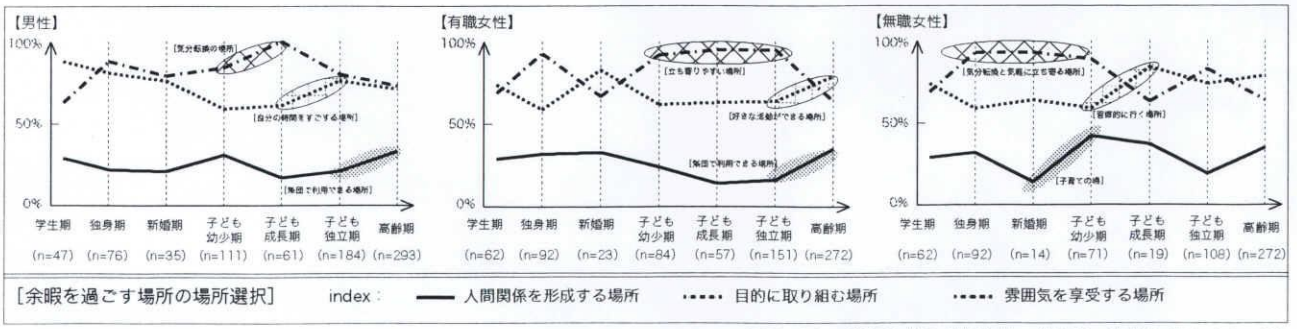


図９　LC の進展に伴う地域施設の施設像（施設に抱くイメージ）

4. ライフスタイルにみる個人的な余暇活動実態

前章ではLCの視点から余暇の施設利用を考察したが、同じ段階でも異なる過ごし方がみられたことから、ここではLSの視点から余暇の施設利用をみる。梗概では、余暇活動要求と余暇を過ごす場所の選択特性を取り上げる。

4-1 ライフスタイルの類型化

まず、地域住民のLSを類型化する。類型化の指標には、余暇の施設利用に影響すると考えられる4つの指標を用いる（①余暇時間の総量に影響する「職の有無（2項目）」、②地域との関わりを示す「地域活動の参加有無（2項目）」、③生活上の価値観を反映する「充実感（9項目）」、④外出の積極性を示す「選択箇所数の多寡（2項目）」）。これら4指標15項目を用いて、数量化Ⅲ類及びクラスター分析（Ward法）を行い、地域住民を6タイプに類型化した（図10、表6）。

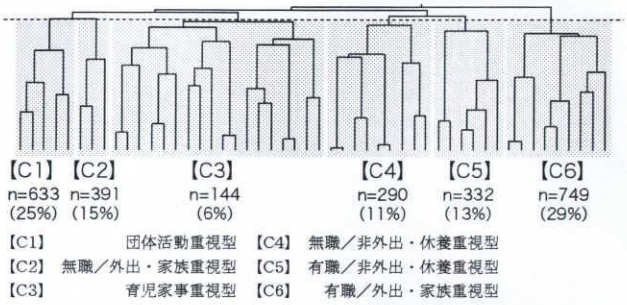


図10 LSの類型化（クラスター分析樹形図）
＊ 上図のnは該当者数、(%)は全体に対する割合。

表6 タイプ別の構成人数割合と指標別割合

	職の有無		地域活動		充実感									場所選択	
	有職	無職	参加	不参加	仕事	家事	家族	友人	休養	趣味	習い事	団体活動	自主学習	外出少	外出多
C1	73%	27%	91%	9%	33%	0%	30%	23%	8%	52%	5%	34%	3%	23%	77%
C2	9%	91%	35%	65%	7%	1%	55%	22%	21%	55%	8%	0%	16%	1%	99%
C3	47%	53%	31%	69%	15%	100%	43%	4%	10%	17%	0%	2%	2%	19%	81%
C4	1%	99%	26%	74%	0%	0%	29%	22%	47%	47%	2%	1%	10%	91%	9%
C5	96%	4%	4%	96%	35%	0%	26%	20%	46%	38%	0%	0%	1%	100%	0%
C6	100%	0%	0%	100%	39%	0%	47%	29%	26%	46%	0%	0%	0%	5%	95%
累計	65%	35%	33%	67%	26%	6%	39%	23%	25%	46%	3%	9%	5%	32%	68%

4-2 各タイプの余暇活動要求

前章と同様、各タイプの余暇活動要求をみる（図11）。【C3】は子育て期が多くを占めるが、高い目的意識をもった選択行動の要求は高くない。育児家事への関心が高いため、そちらに個人の志向がシフトし、個人としての余暇活動要求は抑えられるといえる。

一方、それ以外のタイプは目的意識の高い選択行動の要求が高く、余暇活動の要求を有しているといえる。

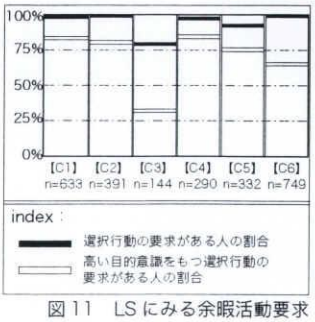


図11 LSにみる余暇活動要求

4-3 各タイプの余暇を過ごす場所の選択特性

地域施設の選択については、外出に消極的で休養を重視する【C4】【C5】は少ない（図12）。但し、彼らは休養以外にも趣味や家族と一緒にいることなど、自宅以外で行う場合が多い、高い目的意識をもった選択行動を行うことにも充実を感じている。にも関わらず、余暇を過ごす場所に地域施設を多用しないのは、彼らが自宅での休養を重視していることのほかに、地域施設の整備状況と彼らの要求が合致していないためと考えられる。

一方、自宅で過ごさない人が多いながら、地域施設の利用も多い【C1】をみると、公共施設の選択が多く（図13）、それらの施設を自宅の代替としていると捉えられる。また、公共施設を利用するのは趣味活動を行うことに充実を感じ、特定の目的をもって余暇活動を行っているタイプ（C1、C2）が多い。

また、【C4】【C5】には自宅で休養することを重視し、外出自体を望まない人も存在する。但し、そのなかでも自宅で過ごさない人には、前述と同様、自宅の代替として利用できる場所を提供する必要があるだろう。

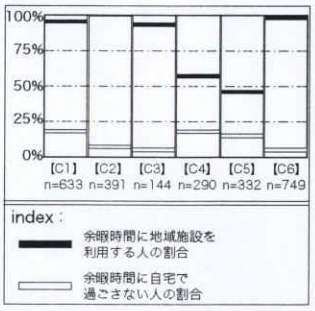


図12 LSにみる余暇を過ごす場所の選択

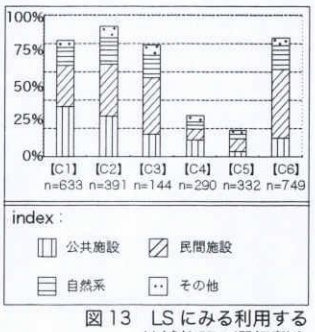


図13 LSにみる利用する地域施設の選択割合

4-4 LSにみる地域施設の利用構造

○ 地域住民は地域施設の利用の多いタイプ（C1、C2、C3、C6）と少ないタイプ（C4、C5）に明確に分かれる。

○ 但し、地域施設の利用が少ないタイプ（C4、C5）も、自宅以外で行う場合が多い、高い余暇活動要求を有しており、彼らの要求と地域施設整備が合致していないと考えられる。

○ 公共施設の利用が多いのは、地域との関わりが深いタイプ（C1、C2）であり、地域との関わりが希薄な人々は少ない。これらの人々に対して、如何に公共施設が余暇生活の受け皿となるかが課題である。

○ 利用者の地域施設への要求と地域施設の整備状況が合致していない（→第5章で要求を分析）。

5. 同伴形態に着目した個人的な余暇活動実態

第３・４章を受けて、余暇を一緒に過ごす相手の相違によって、地域施設の利用構造が相当に異なると推測される。ここでは、基本的な同伴形態として［ひとり］［家族］［グループ］に分類し、それぞれの余暇を過ごす場所の選択特性と地域施設への要求の相違をみる。

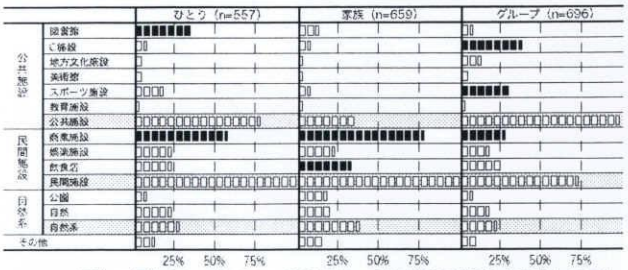
5-1　余暇を過ごす場所の選択特性

まず、同伴形態別の余暇を過ごす場所をみると（表7）、「自宅」「職場・学校」「友人・知人宅」の選択には大きな差がみられない。地域施設の選択状況をみると、家族では公共施設の選択が少ない（LC の子育て期も同様）。公共施設が子育ての場、ひいては家族で過ごす場所としての整備が不十分であることを示している。一方、グループでは公共施設が多用されている。

次に施設種別の選択割合をみる（図 14）。ひとりで過ごす場所としては図書館が多く選択される一方、それ以外の公共施設はあまり利用されていない。これは、地域のなかでひとりで過ごせる公的な場が図書館くらいしか整備されていないといえる。家族で過ごす場所としては、前述したように公共施設は殆ど選択されず、専ら民間施設、特に大型 SC を始めとした商業施設が選択されている。グループで過ごす場所は、公共施設が多く、特にコミュニティ施設やスポーツ施設といった、特定の目的をもって活動する場所が多く選択されている。

表７　同伴形態別の余暇を過ごす場所　（最大４件回答、調査１）

		ひとり		家族		グループ		総計	
総数		559		661		699		1919	
未回答		2		2		3		7	
回答数		557		659		696		1912	
自宅		90%		94%		82%		89%	
職場・学校		15%	131%	12%	140%	14%	135%	13%	136%
友人・知人宅		26%		34%		39%		34%	
地域施設	公共施設	72%		35%		99%		69%	
	民間施設	104%	216%	133%	220%	71%	205%	74%	213%
	自然系	27%		36%		24%		28%	
	その他	14%		15%		10%		13%	
総計		347%		361%		339%		349%	



＊　図中の □は 5%、▯は 1%～4% を示し、例えば 7% は □▯ と表現している。

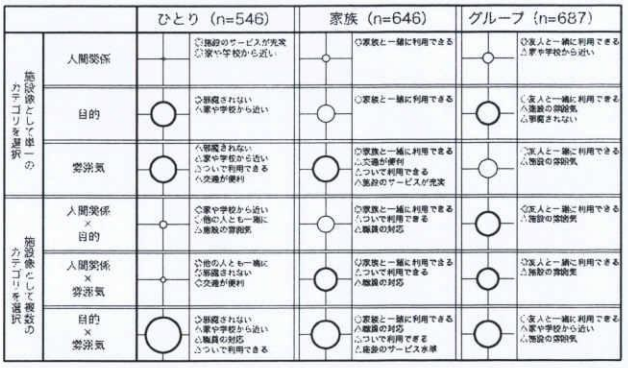
図 14　同伴形態別の余暇を過ごす場所（施設種）
（最大４件回答、調査１）

5-2　地域施設への要求

同伴形態によって、利用する施設種は偏りがあることが分かった。これらの偏りが生まれるのは、利用する施設がそれぞれの要求にある程度応えている為とも考えられる。ここでは利用者の意識から施設への要求を捉える。

最もよく利用する地域施設の施設像（施設に抱くイメージ、最大２種回答）の回答パターンから、大分類カテゴリの組合せにより要求体系を６つに整理し、利用者個人の回答割合を図中の円の大きさで示し（図 15）。15% 以上の回答を抜き出したものが図 16 である。

ひとりで過ごす人の要求をみると、特定の活動目的をもった利用だけでなく、気軽に立ち寄り滞在できる、目的外利用できる場所を求める向きもある。家族で過ごす人の要求としてはこの要求がさらに顕著である一方、グループで過ごす人の要求はその多くが特定の活動目的を果たせる場所への要求である。公共施設の選択状況を鑑みると、公共施設は目的外利用のできるスペースを備えることが、地域住民の余暇生活の受け皿となるために必要といえる。



円の大きさは回答割合に比例。縦軸で 100% とし、15% 以上の回答は外周部が太い。各セルの右側は施設の選択理由。◎ 40% 以上、○ 30% ～ 39%、△ 20% ～ 29% の回答。

図 15　個人的な余暇活動を行う地域施設への要求
（最大２種選択の回答パターンの組合せ、調査１）

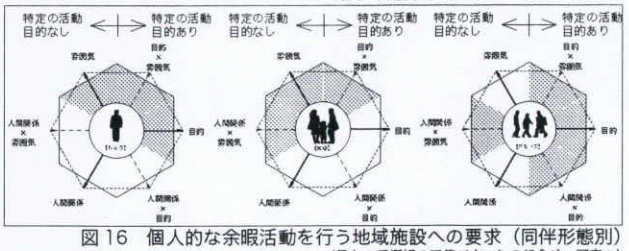


図 16　個人的な余暇活動を行う地域施設への要求（同伴形態別）
（最大２種選択の回答パターンの組合せ、調査１）

5-3　個人的な余暇活動を行う公共施設の機能再構築

公共施設は従来、機能的サービスを提供する施設として整備されてきたが、地域住民の施設への要求から、個人的な余暇活動を行うための、目的外利用できるスペースを備えること必要がある。

その例として、ひとりで過ごす場所として重宝されている図書館を挙げる。そこでは、退職後と思しき高齢者が単身、ブラウジングコーナーで新聞や雑誌を読んでいる姿をかなりの頻度で見かけるが、その多くは、地域のなかで友人をつくってこれなかった人と推測さ

れ、ひとりで過ごすことを余儀なくされていると懸念される。それでも飲食・私語が禁止されている図書館の性格上、知り合いをつくることには課題がある。室内に組み入れるのは困難であろうが、室外に付随する形で他者との交流・親睦のきっかけとなるサロン的スペースを与えることは必要だろう。これは、家族で過ごす人が、新たな人間関係を形成する際にも活用されるだろう。その際生まれる交流から、目的をもった活動への参加・意識転換が図られることも期待できる。

このような目的外利用できるスペースを組み込んだ、公共施設の機能の再構築が必要と考える。

6. 組織活動実態にみる地域施設の必要性

次に、個人的な余暇活動ではなく、組織活動を行う団体の活動実態を把握する。

6-1　団体の活動実態

1）対象団体の概要（表 8、表 9）

［現人数］は 30 人程度までの小・中規模な団体が多い。［活動内容］は音楽や俳句といった室内の趣味活動が半数以上と多いが、それ以外もみられ、取り組む活動は多岐に渡っているといえる。［創設年］は 1980 年代以降で多く、近年の需要の高まりが確認できる。［活動頻度］は大多数の団体が月に 1 回以上の活動を行っており、組織活動が身近なものとなっている。

メンバー構成比をみると、女性・高齢者・無職の属性に若干の偏りがみられるが、幅広い人々が多様な活動に取り組んでいる。また、［居住地］は旧市町村内までの範囲の集まりが多いが、旧市町村の域を超えた広がりもみられる。

2）メンバーの活動意識（表 10）

性別・年齢によらず、メンバーは団体内の交流、能力・技術の向上を重視している。つまり、他者との交流・自己実現要求を満たすことにより、メンバー自身の生活を充実させているといえる。また、地域への貢献といった、自己の為ではない要求を抱く団体もみられる。

6-2　団体の結成と新たな加入

1）団体の結成契機（表 11）

団体の結成契機は大きく分けて、［講座］によるものと［既存の人間関係］によるものがみられる。前者は施設が開催する講座に参加することで同志をみつけ、団体結成に至っており、施設整備により促進できる可能性が高い。特に、安価で参加でき、誰もが気軽に利用できる公共施設（特に公民館）が行う講座が契機となる場合が多い。よって、更なる団体の結成を促す為

表 8　対象団体の基礎情報

総数		212	
団体票なし		11	
現人数	団体数	201	
	現人数不明	1	
	回答団体数	200	
	-9 名	39	20%
	10-19 名	87	44%
	20-29 名	34	17%
	30-49 名	16	8%
	50-99 名	8	4%
	100 名以上	16	8%
	総計	200	100%
活動内容	団体数	201	
	活動内容不明	9	
	回答団体数	192	
	室内の趣味活動	106	55%
	教養学習活動	22	11%
	ボランティア活動	13	7%
	スポーツ・健康活動	31	16%
	育児・教育活動	3	2%
	その他	17	9%
	総計	192	100%
創設年	団体数	201	
	創設年不明	21	
	回答団体数	180	
	1949 年以前	5	3%
	1950 年代	6	3%
	1960 年代	11	6%
	1970 年代	19	11%
	1980 年代	32	18%
	1990 年代	59	33%
	2000 年代	48	27%
	総計	180	100%
活動頻度	団体数	201	
	活動頻度不明	47	
	回答団体数	154	
	週 1 回以上	40	26%
	月に 2 回程度	61	40%
	月に 1 回程度	41	27%
	月に 1 回未満	12	8%
	総計	154	100%

表 9　対象団体のメンバー構成

総数		212	
団体票なし		11	
男女構成	団体数	201	
	男女構成不明	4	
	回答団体数	197	
	すべて男性	9	5%
	男性多め	25	13%
	男女半々	17	9%
	女性多め	74	38%
	全て女性	72	37%
	総計	197	100%
年齢構成	団体数	201	
	年齢層不明	4	
	回答団体数	197	
	独身が多め	1	1%
	子育て期多め	4	2%
	子育て後多め	34	17%
	退職後多め	119	60%
	多様な年代	39	20%
	総計	197	100%
居住地	団体数	201	
	居住地不明	3	
	回答団体数	198	
	小学校区内	19	10%
	旧市町村内	103	52%
	隣接旧市町村まで	17	9%
	合併津内	52	26%
	津より大	7	4%
	総計	198	100%
職業構成	団体数	201	
	職不明	7	
	回答団体数	194	
	すべて無職	26	13%
	ほとんど無職	98	51%
	有職・無職半々	44	23%
	ほとんど有職	23	12%
	すべて有職	3	2%
	総計	194	100%

（単一回答、調査 2）

＊　以降の分析は回答のあった 201 団体に対して行う。

表 10　団体の活動意識

（最大 2 種回答、調査 2）

	男女構成別比較			LC 構成別比較				全体	
	男性主体	男女半々	女性主体	子育中まで	子育て後多め	退職後多め	多様な年代	総計	
各母数	34	17	146	5	34	119	39	201	
重視不明	1	0	11	0	3	7	2	13	
回答団体数	33	17	135	5	31	112	37	188	
団体内の交流・親睦	67%	59%	66%	100%	61%	70%	51%	123	65%
他団体との交流・親睦	12%	24%	7%	40%	3%	8%	14%	17	9%
能力・技術の向上	58%	53%	51%	20%	48%	60%	38%	99	53%
技術の伝承・普及	3%	6%	12%	0%	3%	10%	16%	18	10%
作品の創作・展示	15%	24%	16%	0%	26%	16%	14%	31	16%
地域への貢献	18%	12%	27%	20%	39%	17%	35%	46	24%
その他	9%	6%	5%	20%	6%	4%	8%	12	6%
総計	182%	182%	184%	200%	187%	185%	176%	346	184%

男女構成では表 7 の「すべて男性」「男性多め」を、「男性主体」とする。女性も同様。

表 11　団体の結成契機

総数		201		
経緯不明		4		
回答数		197		
講座	公民館講座からの独立	73	37%	43%
	公共講座（公民館以外）	6	3%	
	民間講座	6	3%	
既存の人間関係	職場・学校の活動から	2	1%	44%
	近隣住民の集まりから	18	9%	
	自主的な結成	67	34%	
-	既存団体からの分裂・変更	7	4%	
	その他	18	9%	
総計		197	100%	

表 12　メンバーの増減

総数		201		
増減不明		15		
回答数		186		
減少	20 人以上減少	6	3%	42%
	10-19 人減少	20	11%	
	5-9 人減少	22	12%	
	1-4 人減少	30	16%	
増減なし		21	11%	
増加	1-4 人増加	23	12%	47%
	5-9 人増加	23	12%	
	10-19 人増加	21	11%	
	20 人以上増加	20	11%	
総計		186	100%	

表 13　新規参入者の参加契機

総数	201	
不明	12	
回答数	189	
参加者のつて	123	65%
他グループとのつながり	13	7%
ネットや会報から情報	5	3%
参入は殆どない	32	17%
その他	16	8%
総計	189	100%

表 14　新規参入に対する意見

総数	201	
不明	14	
回答数	187	
増やしたい	152	81%
慎重者は増やしたい	24	13%
増やしたくない	11	6%
総計	187	100%

（表 10-14 はいずれも単一回答、表 11 のメンバー増減は現人数と創設時人数の差、調査 2）

には、講座を開催する公共施設の充実が必要といえる。

2）新たな加入者の参加契機（表 12–14）

メンバーの増減をみると、半数近い団体は増加しているが、減少している団体も 4 割程度と、相当の増減がみられる。減少については、メンバーの高齢化による脱退が多いと考えられる。

また、多くの団体は新たな加入者を増やしたいと考えているが、現状での参入契機の多くは、参加者のつてという、既存の人間関係による場合が多い。前述した団体の結成契機も既存の人間関係によるものが多く、内輪的な人間関係による展開が多いといえる。逆に言うと、既存の人間関係をもたない人が団体に参加するのは困難な状況である。一方、内輪的な人間関係によらない参加契機は、少数ではあるが会報やインターネット、さらには団体が行う成果発表である講演会や展示会から情報を得る加入に至る場合が多い。つまり、既存の人間関係をもたない人に参加契機を与えるには、情報提供の場を広く与える必要がある。

6-3　活動実績にみる施設利用の実態

1）活動拠点の有無（表 15）

各団体の活動実績（最大 15 回分の過去実績）から施設の使い分けタイプを設定したところ、7 割以上の団体が活動の拠点施設を有していることが明らかとなった。ここでは、タイプによる施設利用実態をみる。

表 15　施設の使い分けタイプ　（各団体の活動実績より分類、調査 2）

タイプ	団体数	割合	総活動数	備考
拠点のみ	74	47%	845	活動実績の全てが、特定の活動場所
拠点あり	43	27%	579	活動実績の半数以上が、特定の活動場所
拠点なし	34	22%	440	特定の活動場所をもたない
施設不明	6	4%	52	活動実績に利用施設の記載なし
実績なし	44	-	-	活動実績に記入なし
総計	201	100%	1916	

割合は「実績なし」を除いた総計に対するもの。

2）利用する施設とメンバーの増減（表 16、図 17）

活動場所として利用する施設は公共施設、特に公的集会施設が多い。活動が生活に身近なものとなっているため、低料金かつ近くに整備されている公共施設が選ばれる。その傾向は拠点施設をもっているほど強い。一方、拠点施設がない場合は地域施設を利用しない場合もある。また、公的集会施設もその内訳は様々であり、要は貸し館事業を行っている施設を選択している。

拠点施設を有する団体ほどメンバーの増加は少ないが、これは各団体がそれぞれ別個の施設で活動を行っているため、その情報が活動団体の身内以外には伝わらないためと考えられる。前述同様、既存の人間関係をもたない人への情報提供が不足がしているのだ。

表 16　施設の使い分けタイプにみる利用する施設　（活動実績との対応、調査 2）

		拠点のみ		拠点あり		拠点なし		不明	総計		
総活動数		845		579		440		52	1916		
利用施設不明		0		9		7		0	16		
回答数		845		570		433		52	1900		
公共施設	自治会集会所	0%	98%	6%	87%	0%	70%	0	32	2%	87%
	公的集会施設	90%		67%		45%		28	1369	72%	
	教育施設	0%		4%		6%		0	50	3%	
	スポーツ施設	0%		2%		3%		0	25	1%	
	地方文化施設	5%		5%		10%		0	116	6%	
	図書館	3%		0%		2%		0	33	2%	
	宗教施設	0%		0%		0%		0	2	0%	
	福祉施設	0%		3%		3%		0	28	1%	
民間施設	民間の貸し施設	0%	0%	4%	4%	6%	10%	0	46	2%	3%
	店舗	0%		0%		4%		0	18	1%	
その他		0%		0%		0%		0	2	0%	
地域ナシ	個人住宅	2%	2%	4%	9%	11%	20%	24	113	6%	9%
	施設は使用しない	0%		5%		9%		0	66	3%	
総計		100%		100%		100%		52	1900	100%	

（人数増減は現人数と創設時人数の差、調査 2）

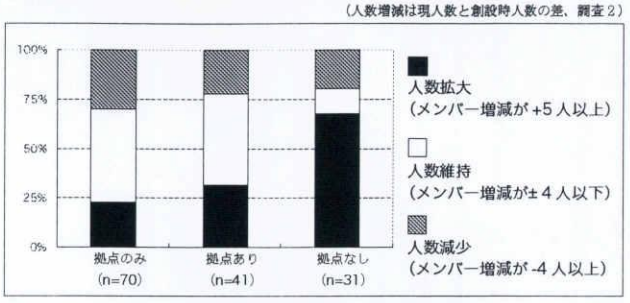


図 17　施設の使い分けタイプにみるメンバー増減

3）施設整備・運営への不満と要望にみる施設整備の課題と可能性

活動団体にフリーアンサー形式で記入してもらった施設整備・運営への不満と要望を整理した。梗概では、大きな課題である以下の 3 点を挙げ、施設整備の可能性を探る。

［活動場所の確保］組織活動を行う団体の増加に伴い、活動を行う施設の絶対数・室の不足が問題となっている。しかし、それ以上に予約の取りにくさが挙げられる。改善がみられる例もあるが、施設の空き情報は各施設を直接訪れなくては知ることはできず、活動場所を確保するのに利用者は苦心している。活動場所の横断的・体系的な場所提供が求められる。

［施設の常連化の課題］拠点施設をもって活動する団体が多数存在することが明らかになったが、それに伴う課題。“常連”の団体が場所を確保しており、施設側もそれらの団体の予約を優先するため、拠点施設をもたない団体は活動場所を確保しにくい（表 15 にて拠点のない団体が施設の利用が少ない一因である）。

［発表の場の不足］外部に向けた情報発信を行いたい・参加者を増やしたいという要求をもつ団体は多いが、常設の展示や多くの観客（1000 名規模収容施設を求める声もある）を集めることのできる施設は少ない。

これらは各団体が活動を行う施設がそれぞれ個別に整備・運営されていることに起因するといえよう。各

施設間の相互調整を行うことで、予約が取れない団体に代わりの活動場所となる施設を紹介したり、他団体の活動情報を周知することが必要といえよう。また、既存の人間関係をもたない人たちの参加を促す可能性が高い発表を行う場、ひいては情報提供の場の不足は、組織活動の展開において深刻な課題である。従って、発表の場の補完を含め、組織活動を行う施設はもちろん、個人的な余暇活動で利用する施設との、相互調整による連続的整備を行う必要がある。

7. 組織活動への参加促進要件

前章にて組織活動への参加が生活を充実する為に有用であることを言及したが、さらに公共施設の利用促進の観点から、組織活動への参加を促す要件を探る。ここでは、非活動者の意識から参加を阻害する要因を明らかにする。

7-1 組織活動と公共施設利用の関連

前章でみたように、組織活動では活動場所として公共施設を多用することから、参加者は個人として余暇を過ごす場所にも公共施設を選択すると推測される。それを【組織活動への参加・不参加】と、【余暇を過ごす場所（最大4件選択）に公共施設を含んでいるか否か】の2軸4分類にて確認したのが図18である。同伴形態別・累計のいずれも、半数以上に組織活動と公共施設利用の関連がみられる（図の灰色着色部）。つまり、前述の仮説がある程度当てはまるといえ、組織活動への参加を促すことが公共施設の利用促進につながるといえる。そのための施設整備を考える必要がある。

（余暇を過ごす場所の選択状況と組織活動への参加有無の回答組合せ、調査1）

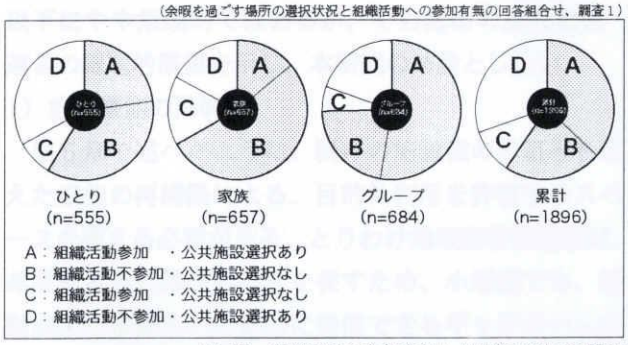


図18　組織活動の参加有無と公共施設利用の関連

7-2 組織活動への参加を阻害する要因

非活動者が活動に参加しない理由をみると（阻害要因：最大2種選択、表17）、『時間』の不足を7割近くの人が挙げており、最も大きな阻害となっている。次いで自分の行いたい活動と、施設が提供する内容が異なっている『趣向』が3割近くと続く。また、『情報』の不足と『人間関係』の課題が2割近くみられるが、『施設整備』は1割にも満たない。但し、『施設整備』が少ないのは現状の整備が十分な為ではなく、それ以前の阻害で停滞している人が殆どであり、施設整備状況を意識する段階にない為と考えるのが妥当であろう。

図19は、これらの阻害要因を、利用者である地域住民（需要側）と、提供する施設側（供給側）の責任の所在によって、整理・図化したものである。同時に、個人が各段階の阻害をクリアし、組織活動参加へ至る為に克服すべき順番でもある。

（最大2種選択、調査1）

表17　非活動者の参加を阻害する要因

不参加者総数		2128		
不参加理由不明		90		
回答数		2038		
『時間』	時間合わない	531	26%	68%
	時間がない	857	42%	
『情報』	団体知らない	312	15%	21%
	場所知らない	115	6%	
『人間関係』	地域に友人少ない	171	8%	20%
	人間関係煩わしい	236	12%	
『趣向』	興味のある内容なし	533	26%	
『施設整備』	場所不便	72	4%	5%
	施設サービス不十分	24	1%	
その他		228	11%	
総計		3079	151%	

（最大2種選択、調査1）

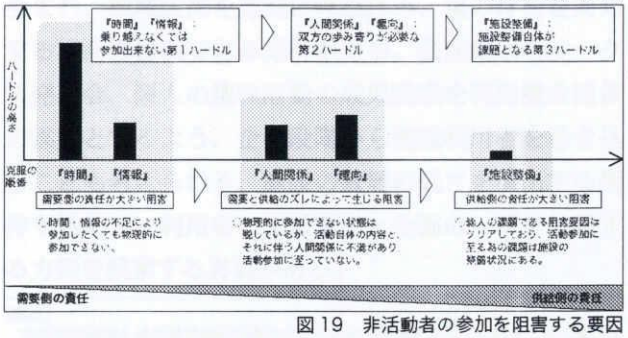


図19　非活動者の参加を阻害する要因

7-3 組織活動を促す施設整備要件

図20に施設側が施せる参加促進要件を示す（『施設整備』の課題は前章にて言及）。

①施設の開館時間の延長、②人々に情報を与え参加の契機を与える、③非活動者の新たな人間関係の形成、④利用者のニーズにあった企画を充実させる、といった要件を如何に施設整備に反映するかが課題である。

また、未だ個人の責任である第1ハードルの段階で滞っている人が非常に多い。より地域住民に密着した施策として、前述したように、公共施設だけでなく、個人的な余暇活動を行う場所として、非活動者も多く利用している、民間施設を含めた地域施設全般を活動の場として連続的に整備する必要がある。

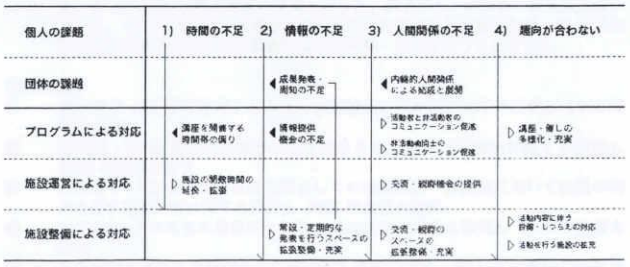


図20　組織活動参加を促す施設整備要件

8. 余暇を過ごす場所としての地域施設

8-1　余暇を過ごす場所としての地域施設の必要性

自宅以外で余暇活動を行う場所として、多くの人が地域施設を利用しているが、高い余暇活動要求をもちながら、その場所を確保できていない人々もいる。余暇の過ごし方の転換の遅れ、施設に抱く要求と現在の施設整備状況が合致していないこと等が要因として挙げられるが、場の作り方によって改善できる可能性がある。余暇を自宅で過ごさない人もおり、地域全体で生活の受け皿となる地域施設を整備する必要がある。

8-2　余暇を過ごす場所としての地域公共施設整備

以上を踏まえて、余暇を過ごす場所としての地域公共施設の整備指針についての課題的展望を示す。地域住民は個人的な余暇活動を行う場所として、身近な地域で目的外利用もできる施設を求めていることが明らかとなった。但し、とりわけ地域公共施設は、制度に基づき、特定の目的利用を行うための場所として計画整備されてきた背景から、そのような利用に対する整備はされていない場合が多い。そのため、地域住民の多くは、無料で滞在できる商業施設（大型SCなど）にその場所を求める傾向にある。

しかし、三重県のような地方都市においては、民間施設が全ての需要をカバーすることは困難といえ、地域密着型の公共施設がこれらの役割を担っていく必要があるといえる。今後組織活動の活動場所、ひいては成果発表の場との連続的整備を視野に入れた、より柔軟なプログラム・運営が地域公共施設には求められる。以下にやや飛躍的ではあるが、そのための施設整備・運営の課題的展望を示し、本研究の結論としたい。

1）施設機能の再構築

第5章で述べたように、既存の施設種の枠組みを超えた機能の再構築による、目的外利用を許容するスペースを備える必要がある。とりわけ地域密着型施設は、非活動者の組織活動参加を促すため、小規模でも、活動成果を常設的・定期的に発信できるギャラリー・ホール空間を備えた複合施設として整備することが有効と考える。一方、大規模な発表行為や合同発表会の利用要求に対応するよう、大規模な専門施設はサービス水準を維持することが望まれる。これらの役割分担を考慮し、地域全体で施設整備する必要がある。

2）施設間連携

第6章で述べたように、現在は個別の施設がバラバラに整備され、施設運営を行っている。活動場所の代わりの施設を紹介する予約システムの体系化・団体の活動情報を受け取る情報システムを備え、施設間連携を促進する必要がある。さらに、上記の施設機能の再構築に関連して、活動場所予約や行政関連の証明書交付といった、従来特定の施設で行われていた施設サービスを既存の地域密着型施設が担保することも考えられよう。これらは小規模ブースを備えることで対応可能であるし、距離的な制約を受ける人々の不具合を緩和する可能性も秘めている。

3）利用機会の提供

地域密着型施設の中には、近年導入が進む指定管理者制度等を用いて、民間企業ではなく、当該地域に住む住民の集まり（地縁的な共同態：community）に運営・管理を委託する例がみられる。その利点の一つに、行政・施設職員が行う以上に様々な催し・企画が生まれ、地域住民を施設に呼び込み、場の存在を周知する機会を提供できる期待がある。公民館展やサークル発表会、個人の趣味活動の成果発表を利用機会提供の媒介とするよう、企画段階から施設利用者を巻き込むことも考えられる。施設の敷居の低さを演出する期待も込めて、利用者に施設運営・企画の一部を委譲する方策を模索する必要がある。

[謝辞]
本研究の調査1は三重県建設技術センターとの共同研究として、調査2は三重県津市で活発に活動されている団体を対象に行いました。
快く調査にご協力いただいた地域住民の皆様、及び津市内の活動団体の皆様・職員の皆様に深く感謝致します。

[註]

註1）余暇時間とは、休養（睡眠・食事等）や労働（仕事・通勤等）の時間を除く、自己裁量性の高い生活行為をする時間を指す。

註2）自宅での休養・団らん、及び自宅でひとりで行う趣味活動を除く、地域住民が余暇時間に行う活動全て。

註3）地域住民が生活上利用する、「自宅」「職場・学校」「友人・知人宅」以外の建築的空間を含む場所。本研究では、居住地域に立地する、余暇生活に関連深い施設として、以下の施設種を対象としている。但し、地域施設の利用形態の分析においては自然系は除いている。
［公共施設］：図書館、コミュニティ施設（公民館・集会所・市民センター）、地方文化施設、美術館（博物館含む）、スポーツ施設、教育施設。
［民間施設］：商業施設、娯楽施設、飲食店。
［自然系］：公園、海や山。

註4）調査1のアンケートでは、自由な時間を過ごす場所として、「自宅」「職場・学校」「友人・知人宅」「図書館」「コミュニティ施設（公民館・集会所・市民センター）」「地方文化施設」「美術館（博物館含む）」「スポーツ施設」「教育施設」「商業施設」「娯楽施設」「飲食店」「公園」「海や山」「その他」の15項目から最大4件の選択としている。

註5）調査1のアンケート回収率は約3割であるため、サンプリングの代表性を検証するため国勢調査（H12年度）との比較を行った。
各地区とも男女構成比については3%以上の差はみられなかった。但し、年齢構成比をみると（調査1は15歳以上が対象なので、15～64歳と65歳以上の2分類で比較）、調査1の回答者は、津地区で最大11%、回答者全体でも9%程度、65歳以上の回答者が多い結果となった。以上から、両調査の結果は近似しており、サンプリングの代表性は概ね担保されていると判断したが、65歳以上の回答者が若干多いことに留意しながら考察・分析を行うこととした。

[参考文献]

1）高木直子：『利用者意識からみた図書館機能の再構築に関する研究』、1998年度修士論文
2）山田剛：『高齢者の生活構造の地域差からみた地域施設整備に関する研究』、1999年度修士論文
3）三輪恭子：『生活における居場所としての地域施設―疎住地において住民の利用を促す施設計画に関する研究』、2001年度修士論文
4）池谷辰仁：『中高生の居場所としての地域施設に関する研究』、2005年度修士論文
5）三重大学大学院工学研究科今井研究室・高井研究室、（財）三重県建設技術センター：『市町村合併に伴う公共施設の有効利用に関する研究』、2006年9月